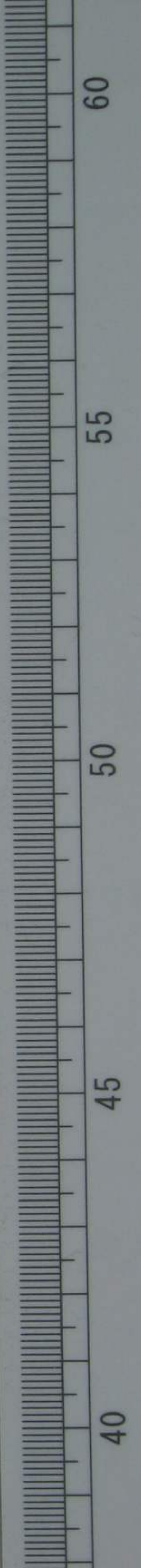


市島春城著

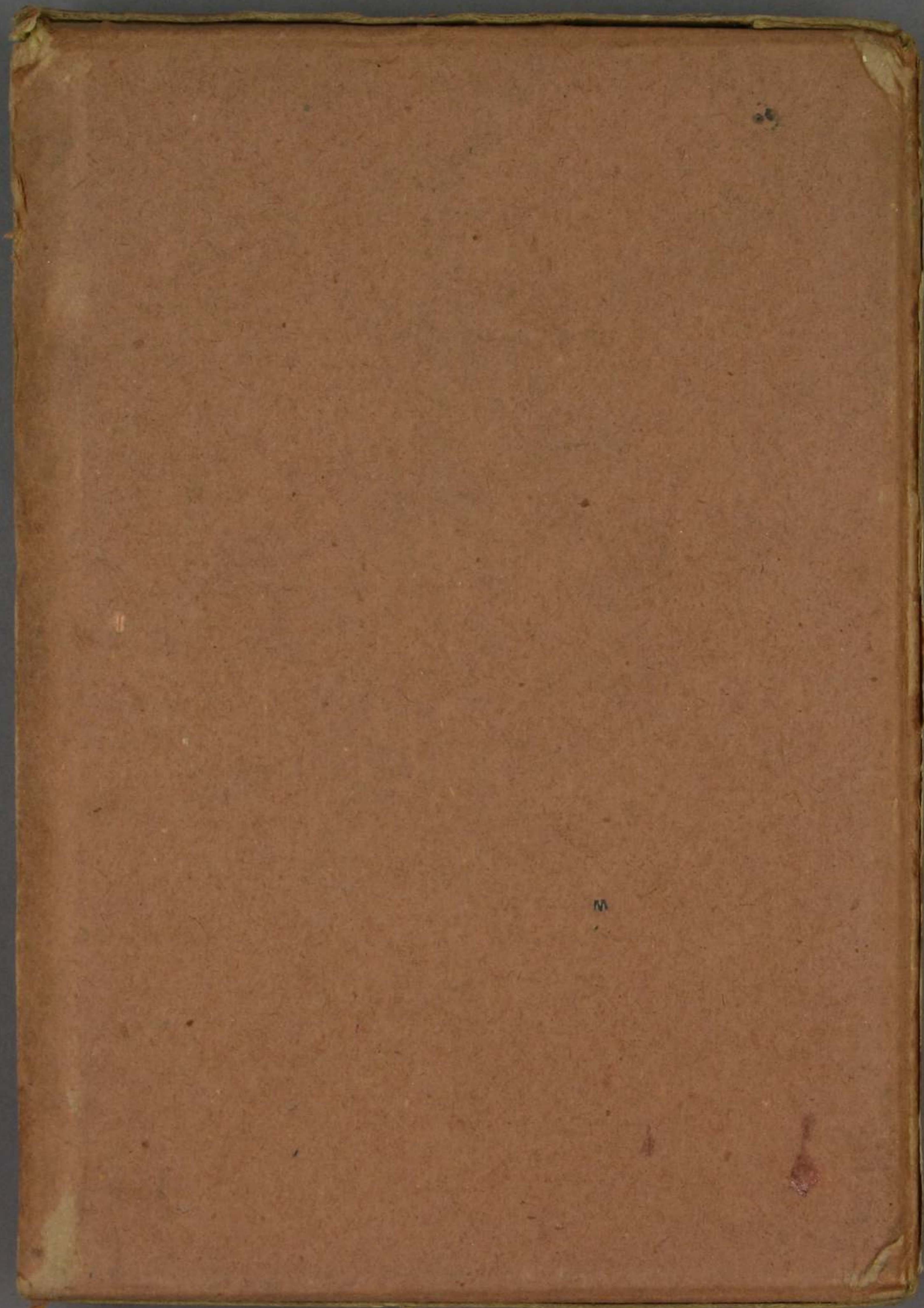
春城草海

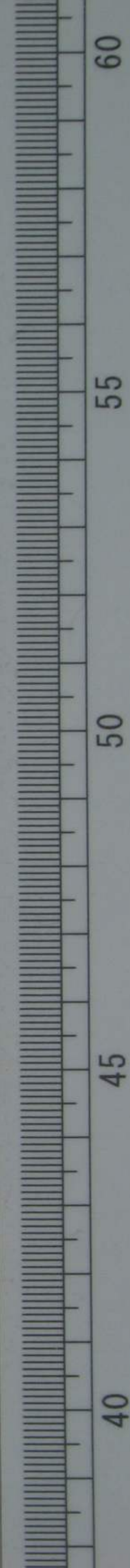
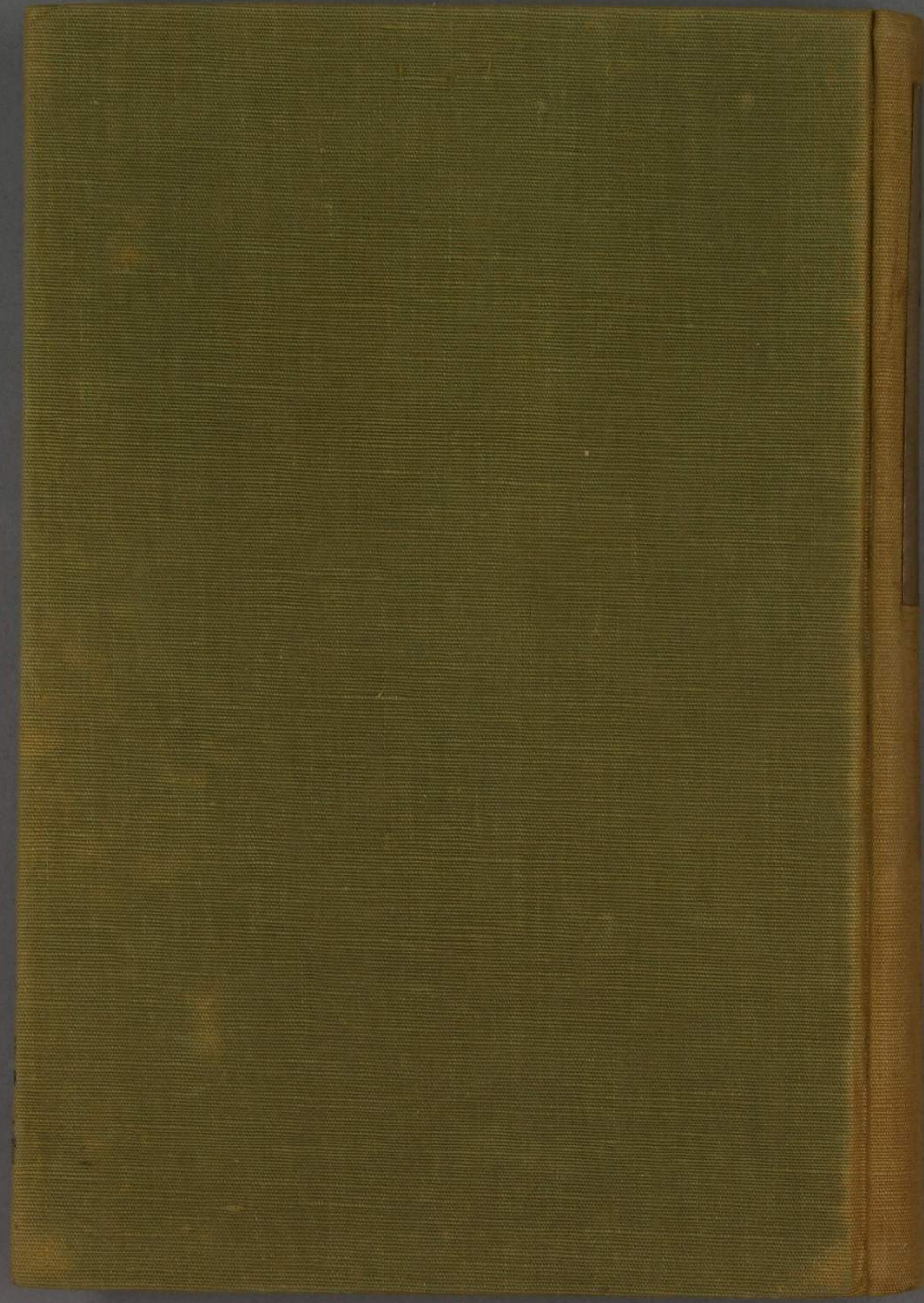
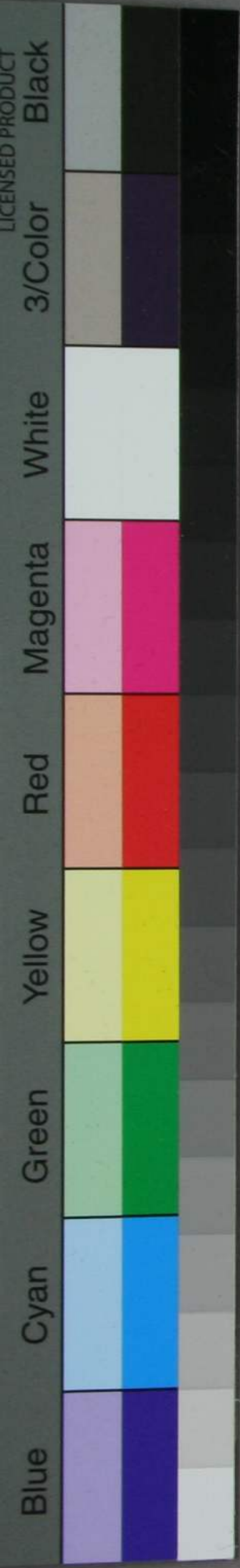
早稻田大學出版部發行



春城筆語

市島春城著



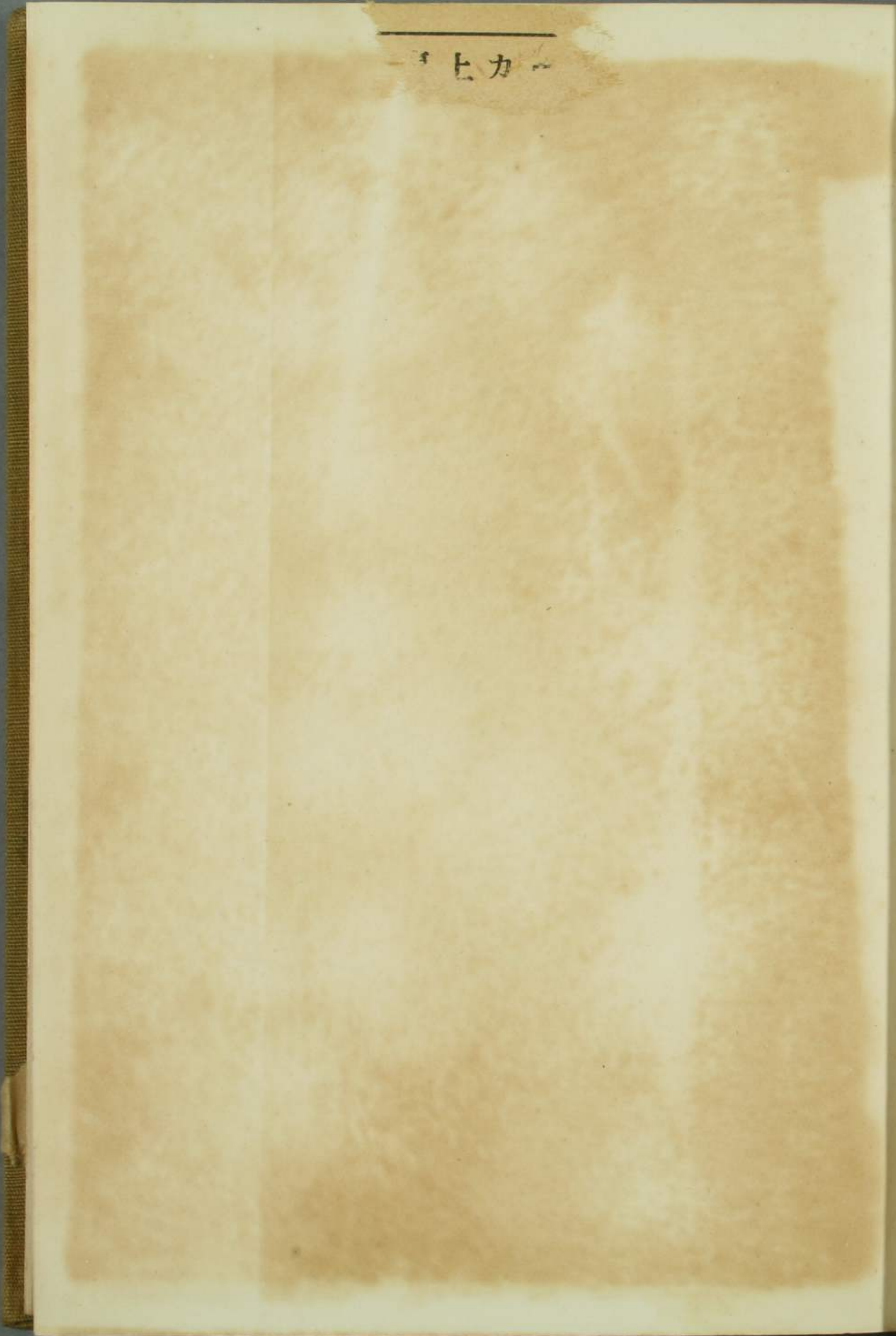


春城筆語

市島春城著



七カ



春城草泐







春城草韻



はしがき

漫興に驅られて時に閒筆を弄し、雜録を作ることが多年私の習癖で、毎年、六七冊の隨筆が出来る。無益の事と思ふが、習癖は容易に悛まらぬ。時には獨り自ら嘲けることもあり、午睡を貪るに比すれば優る、と強ひて理窟をつけて見たりもする。私の平生を知つてゐる友人に、いつぞや、折角書いたものを還魂紙料にするのも惜しいではないか、取捨して版にしてはどうかと勧められたので、先づ上版を試みたのが「隨筆頼山陽」で、「春城隨筆」、「隨筆春城六種」と相踵ぎ、毎年、一冊の隨筆を出

すのが幾んど近年の例となつてゐる。實は、勉めて作るのではなく、日々の偶録がおのづから之を作すのだから、一向纏まりのつかない、お恥かしいものである。今度のも、偶然前と同じく、六篇から成り立つてゐる。則ち「人物雜觀」「明治初頭文壇の回顧」「烟霞游記」「漫興偶録」「車上縦談」「百道樂」が篇目で、前のと別つ爲めに「春城筆語」の書名を命じた。實は、記事の七八分は、昨年、震災に壞れた家を改造するとして、半歳餘り假寓に在つた折の執筆に係るから、私としては、弊屋復興の記念にしたいと思ふ。

昭和三年戊辰七月牛込の僑居に於て  
春城識す

# 春城筆語 目次

## 第一 人物雜觀

〇 一 趣味の人田中青山伯……………一

〇 二 忘れられた一人物名和緩氏……………一四

〇 三 幕末の犠牲靜寛院宮……………二〇

〇 四 遁竄中の木戸侯……………四〇

〇 五 吉田東伍博士を憶ふ……………四九

〇 六 杏林の明星野口英世博士……………五七

〇 七 畫家渡邊省亭の起身談……………六四

〇 八 隠れた畫家長井雲坪の事蹟……………七六

〇 九 頼山陽は何故に人氣があるか……………八六

目次

附 山陽の逸事數則……………101

第二 明治初頭文壇の回顧……………109

- 一 坪内逍遙氏……………109
- 二 尾崎紅葉氏……………111
- 三 撫松思軒櫻痴露伴諸家……………117

第三 烟霞游記……………117

- 一 烈風と戦ひつゝ、富士に登るの記……………117
- 二 淺間山跋涉の記……………115
- 三 白雲金洞探検の記……………116
- 四 白帝城と木曾川の奇勝……………116
- 五 十和田湖と溪流美……………118

- 六 大隈老侯に随つて三谿園を訪ふの記……………116
- 七 加治川堤上觀櫻の記……………101

第四 漫興偶錄……………115

- 一 讀書八境……………115
- 二 今……………111
- 三 田園の趣味……………116
- 四 僧房生活……………114
- 五 露地生活……………117
- 六 流行と女装……………113
- 七 扇子……………111
- 八 雪の思ひ出……………119
- 九 醫藥としての水……………110

目次

目次

四

- 一〇 繪はがき禮讚……………三六七
- 一一 牧野子爵家の犬……………三七九
- 一二 印人の習癖……………三八三
- 一三 古本屋……………三六六
- 一四 日本料理に就て……………三九〇
- 一五 山 葵……………二九九
- 一六 愛玉子……………三〇三
- 一七 鍵と錠……………三〇四
- 一八 得月樓の追憶……………三二四
- 一九 藝妓の垢すり……………三三〇
- 二〇 赤十字……………三三三
- 二一 遼東半嶋還附立會の挿話……………三五五

第五 車 上 縦 談

三七

- 一 侯爵朴泳孝の贈詩……………三三八
- 二 日本のレニン……………三三〇
- 三 大量趣味……………三三三
- 四 長田秋濤……………三三七
- 五 赤龍子……………三四〇
- 六 酒と下物……………三四一
- 七 節分の豆料理……………三四六
- 八 容貌毀傷の損害……………三四八
- 九 いびきと睡眠……………三五〇
- 一〇 俳客雪人……………三五四
- 一一 俳味ある放翁の詩……………三五五

目次

五

第六 百道樂

一	土木	三二	一二	紙	三六	二三	古瓦	三九
二	寺社	三三	一三	印	三六	二四	古鏡	三九
三	慈善	三三	一四	書畫	三九	二五	古錢	三五
四	任俠	三三	一五	古筆	三〇	二六	貨幣	三五
五	茶器	三三	一六	古文書	三一	二七	札	三五
六	陶瓷器	三四	一七	曆	三一	二八	寶石	三五
七	香	三五	一八	古簡	三一	二九	古銅器	三七
八	書物	三五	一九	反故	三一	三〇	佛像	三七
九	經卷	三五	二〇	短冊	三一	三一	佛器	三八
一〇	硯	三五	二一	法帖	三一	三二	古鈴	三八
一一	筆	三五	二二	拓本	三一	三三	刀劍	三八

三四	時計	三九	四七	切支丹物	三六	六〇	納札	三九
三五	量器	三〇	四八	江戸趣味	三六	六一	繪葉書	三九
三六	古裂	三〇	四九	古材	三六	六二	宮	三九
三七	革	三一	五〇	竹器	三七	六三	墨斗	三九
三八	下げ物	三一	五一	石	三七	六四	瓢	三九
三九	袋物	三二	五二	石燈籠	三七	六五	盃	三九
四〇	衣類	三三	五三	籠	三八	六六	扇	三五
四一	手拭履物	三三	五四	烟火戲	三八	六七	團扇	三五
四二	雛	三四	五五	スポーツ	三九	六八	發掘物	三五
四三	玩具	三四	五六	電氣	三九	六九	博物本艸	三五
四四	小品	三五	五七	寫真	三九	七〇	烟草	三六
四五	記念品	三五	五八	ボスター	三九	七一	菓子	三六
四六	阿蘭陀物	三五	五九	郵便切手	三九	七二	珍奇	三九

目次

七三	冒險	四〇	八六	手工	四六	九九	寄席見世物	四三
七四	探奇	四二	八七	十二支	四六	一〇〇	病的道樂	四三
七五	登山	四三	八八	福神	四七			
七六	探勝	四三	八九	生殖研究	四八			
七七	掃墓	四三	九〇	遊里物	四八			(了)
七八	漁撈	四三	九一	春畫	四八			
七九	狩獵	四三	九二	浮世繪	四九			
八〇	相撲	四三	九三	勝負事	四九			
八一	劇	四四	九四	惡喰ひ	四九			
八二	音曲	四四	九五	飲料	四〇			
八三	假面	四五	九六	飼禽	四二			
八四	出版	四五	九七	園藝	四三			
八五	番附	四六	九八	盆栽	四三			

# 春城筆語

市島春城著

## 第一 人物雜觀

### 一 趣味の人 田中青山伯

田中光顯伯の詳傳も出てゐるのに、蛇足を加へる必要はないやうだが、私は趣味家としての伯を特に書いて見たくなつた。伯は人も知ることく武弁の出身で、軍人として多くの閱歷を有つて居らるゝ。軍人氣質の人に趣味性が無いとは云はぬが、伯のごとく多趣味である人は少ないやうに思ふ。

私が伯の交を辱うした發端は彼是二十年以前にも溯らねばならないが、未だ聲歎に接しない前にコンナことがあつた。私が早稻田大學の圖書館長であつた時、伯の珍藏の六朝寫本、皇侃ワウカンの禮記の義疏のコピーが作られてあると聞き、校長の名でその寄贈を請うた。その頃伯は小石川の邸に居られて、學校からは田圃を隔て、の附近であつた。館僕に手紙を持たせてやると、間もなく歸つて來た。その齋らして來たのはコピーではなく、一巻の原本で、それに添へられた伯の書状を見ると、自分の珍藏ではあるが、自分の處に置くよりも、貴校の圖書館に置く方が處を得て居ると思ふから寄贈するとあつたので、私は意外のことに驚き且つ喜んで、伯の襟度が如何にも寛で、物に執着の無いのに敬服した。驚喜といふ言葉はあるにしても、誇張でなくこれを用ゐる場合は極めて稀なものであるが、私はこの時ばかりは眞に驚喜したのである。これが今早稻田の寶物となつてゐる。これは六朝時代の皇侃の高足鄭灼の自著自筆で、曾で光明皇后のお手許本であつたことは「内家私印」の印記が卷末に押してあるので分る。勿論國寶に値するものである。

此事があつて幾年か後に、私は伊豆の長岡に高田博士が其頃構へてゐた別莊を訪れた。丁度其頃伯は博士の別莊から二三軒隔つた處に別業——もと久保扶桑氏の有であつた——を有つて居られて、博士方へ訪ねて來られたから、私は伯に始めてお目に懸り、先年寄贈の禮を陳べ、こゝに端なく圖書の趣味談が始まつて、高田博士を傍聽人として、二人の間に二時間許り圖書談を交換したが、伯は圖書にも造詣が深いことを知つた。此談話中に、伯は、嘗て天平以降各時代の古文書を集めたことがある。それは今猶ほ家に在るが、これも早稻田へ寄贈すると云はれたので、私は重ねての厚意を感謝し、早大には斯様なものが一切ないから、欲しいと思ひながら得る手段が無かつたのに、誠に仕合せであるといふた。此文書は二十通からあつて、これも亦國寶に値するものである。私は再度の賜物を得て頗る満足し、決して此上欲望を抱いたのでなかつたが、フト伯の藏本に六朝の原本玉篇のあることを思ひ浮べて、あれは何うなりましてと問ふと、伯は言下に、成る程、あれも早稻田に寄贈すべきものだと言はれたので、餘りの意外に亦驚喜の二字を繰り返さざるを得無かつた。これが圖書界の至寶であることは言ふ迄もない。伯が物惜しみをされないことが愈々分つた。そして一旦約された事は直ちに實行される。この寄贈を約された二點は岩淵の別莊にあるから、後日送ると云はれたが、私が兩三日の後東



京へ戻ると、間もなく到達した。伯が如何に約束を守るに嚴であるかにも亦敬服せざるを得無かつた。

伯に面した翌日、招かれて博士と共に伯の別荘を訪問した。前日の禮を陳べて歸る積であつたのだが、午餐の饗を受けたので、種々の談を聽聞するの機會を得た。談話の内には、伯が維新の當初戸籍頭コセキカドであつた際の事などは興味を感じたが、爰には専ら伯の刀劍談を録する。伯は斯道の鑑賞家として人も許す一大權威である。

伯の刀劍談の起首は正宗論テマナであつた。相州物では人は多く正宗を稱するけれども、確かなものが甚だ少ないので、其作品を月旦することが出来ない。要するに相州物は切れるが特徴で、士官以下の佩用に適するが、將に將たる人の佩刀は、切れるばかりでよいとは言はれぬ。どうしても名刀の製作は上國ジヤウコクにある。そして時代は一條帝の昔に溯らねばならぬ。即ち源平時代である。源平兩家の寶刀に就ては、俗間でも其名を知つてゐる位だが、事實名刀であつて、將に將たる人の佩用に足る名刀は、あの時代上國に最も多く作られた。全體將に將たる人は馬上の人であるから、刀は長尺ならざるを得ぬ。長尺には重量が伴ふ不便がある。それを避けて軽くす

ると折れ易いから、鍛錬は極度の精を極めねばならぬ。その上よく切れねばならぬが、尙ほ其上にヤキやニホヒも上品であらねば、將に將たる人の佩用に適する名刀と云へないから、歩卒の用ゐるものとは大いに趣を異にする、と語られた。

品位を鑑賞の奥意とすることは、書畫や骨董などでも同一で、窮極これに歸着する。私は刀劍趣味には全くの門外漢であるけれども、伯の一場の談話を傾聽して大いに領かざるを得なかつた。

伯の刀劍趣味は若い頃から既にあつて、鑑識も早く堂に入つてゐたと思はる。其譯は、浪人時代既に名刀を佩用してゐて、始めて高杉晋作に面會した時、その所望する所となり、割愛を餘儀なくされたといふ伯の挿話に徴しても分る。明治大帝には二度まで名刀を獻じて、その二振とも御常用の光榮に浴したことや、岩崎彌之助氏を同趣味の友に引き入れん爲め、第一の愛重の刀を割愛したことなど、伯の刀劍に關する經歷は少なからずあるが、今はその要を擧げるとに止める。

伯の古書に對する趣味に就ては、既に冒頭にも云うたが、尙ほこゝに一二の言ふべきことが

ある。伯は洪海のごとき内府本の徒らに埋没してゐるのを慨し、嘗て希観の本の識語を収録して、「古芸餘香」と題する十數冊の寫本を作られたことがある。其轉寫の本がいくばく流布もしてゐるが、頗る好書家の参考となるものである。伯は又古寫經の鑑賞に没頭されたことがあつた。それが他人の手に移ると聞いたから、是非一覽したいと思つて岩淵の別荘に伯をお訪ねした時、拜觀を請うて許された。伯は其時に、私の處へいろ／＼の人が來るが、古經を見たい、と所望したものは君の外に無い、と云はれて二十巻ばかり持出されたのを見ると、流石に逸品揃で古經の尤も粹を抜いたもので、紺紙や地模様のあるやうなものは好まないであつて、どれを見ても高雅なもので、同じ聖武帝、光明皇后の願經でも、普通あるものとは選を異にしてゐた。和銅經もあれば白鳳經も見受けた。桓武帝の皇女の願經などは珍らしいものとして今も猶ほ記憶に存してゐる。伯は又長い間古版本をも蒐集され、此部類にも富んで居られたが、其中に天草版アマクサの太平記のやうな希観のものもあつた。

尙ほ圖書關係の事項で逸す可からざることは、書肆に命じて明治大帝の御集數卷を出版されたことがある。又正倉院の御物を限なく版にして「東瀛珠光」と名づけて、今も流布してゐる。

此等のものを出版することは今自由になつてゐるけれども、伯の企は早い頃であつて、この道を拓いた人として伯を忘れてはならぬ。要するに此等も皆伯の趣味の發露と云はねばならぬ。伯は又和歌に長じ、書を能くし、兼ねて漢詩に達して居る。なか／＼謙遜の人で、歌書を請うても容易に諾されない。是非人に寄せねばならぬ時は、電信に依つてせらるゝが常例となつてゐる。私に寄せられた和歌は、私が早稻田の圖書館長を罷めて隠退したと聽かれた時の作で、それは左の通りである。

愛で、守る人しあらねば千代の書フミ

しみのすみかとなりやはてなむ

それが自筆であるから、私は記念の爲め幅として珍藏してゐる。

私が最後に且つ多少委しく述べて見たいと思ふのは伯の作庭に就ての趣味である。伯は此點に深い趣味を有たれ、亦巧者であらるゝ。曾て本邸であつた、小石川の芭蕉庵の舊址を始めとし、東海道に於ける二莊、岩淵と蒲原の、その何れもが大經營であつて、共に天下の名園とするに足るものである。

小石川の、本邸であつた處へは終に往つたことはないが、其庭園の或る部分は外部から窺ひ得らる、やうになつてゐたので、誰れも知る通り、茂林修竹、幽雅の趣が漲り、古くから名所の一に數へられてゐた。建築も御殿を以て稱するほどの壯大のものであつた。

岩淵の別墅は山を背にして邸宅を築き、二萬坪に垂んとする大地域を庭園とし又果樹園として、それが富士川に臨んでゐる。果樹栽培の園丁の爲めに三々五々農舎が點綴されてゐるので、宛然一大部落の觀がある。

山より鐵管で水を引き、それが先づ伯の書齋の前の池に落ち、淙々聲を發してうづまいてゐるのも心地がよい。その水が庭の一隅の勾配の急な所に導かれて、段々に流れて行くのであるが、巧みに樹木があしらはれてゐるので、外部からは唯鬱蒼たる林を見るのみで中の様子は皆目想像もつかないが、それに入つて見ると、さながら仙境に遊ぶの思があつて、勾配を利用して幾つかの瀧があり、亭舎があつて、飛石の外には縦横に水が流れてゐたり、水車があつて米を搗いたりしてゐて、作庭の秘術は幾んどこゝに悉されてゐるかに思はれた。外面からは何も見えず、入つて見ると内容の豊富に驚くのは恐らく伯の意匠の在る所で、又伯の性格もほのめく

やうに思はれた。

水の利用はこれに止まらず、玄關から通用門に至るまで、約半町ばかりの、勾配ある歩道に沿ふ溝へ此水が導かれて、潺湲聲を放つて奔つてゐる。自分は玄關に入るに方り、この趣味ある歩道を通して、先づ水の利用の妙に驚かされた。

平地に於ける庭園は満目松樹で、それが在來松林であつた處に宅を建てたかの如く、自然そのまゝで、どうしても畑地に松を移し植ゑたと思はれぬ程である。林間には雜草が一杯に茂つて、雅趣ある塔などがあしらはれてゐるが、それも故ららしくなく如何にも折合つてゐる。そして叢をなす秋草が縁を壓する許りに座敷近く茂つてゐて、野趣横溢、黄金の氣はどこを尋ねても微塵もないのに少なからず感服した。

伯は案内しながら語られた。自分は茶人の心得がないから我流の作庭で、茶人の式にはなかなつてゐないであらう、と云はれたに對し、私は、普通茶人の作る庭は猫額大のもので、趣向を凝らしたと云うても高の知れたこと、この大庭園を人爲と思へぬやうに自然そのまゝに作られた伎倆は、到底茶人輩の及ぶ所でないと言つた。伯は莞爾として、拙宅へ訪ひ來る人は、普請

を褒めそやすが、庭を見てくれる人はない。實は普請を褒めらるゝのは本意でないのだ。この庭の野趣ある處に君の目の留まつたのは自分の仕合せだなど、云はれて、果樹園をも限なく案内された。

蒲原の莊は近年營まれたものである。此處は岩淵に隣る停車場所在の地で、前面海で背後に一帶の山がある。その山から水が流れて、寶珠澤、狸澤などの溪をなしてゐる。伯の地を相されたのはこの二澤のある所で、地域は水源の瀧の落下する山上にまで迫んでゐる。およそ作庭に要するものは水であるから、先づ水を捜してそれを作庭の基本とするのが常である。伯が此地を相さるゝに就ても、恐らく先づ瀧を捜し溪流を見出されたので、こゝだと決せられたのであらう。如何にも自然の溪流は此莊の重なる風致をなしてゐる。溪流に沿うて帯のごとき細徑が迤邐として山にまで迫んで、瀧のある所は山が劈けてゐて、狭い山の間から飛瀑が見える。多分此の飛泉の侵蝕作用でこの山が劈けたのであらう。この處に水を一應湊合して濾過する處がある。それは地下に伏せられて、其上に八聲敷フシヤの四阿フシヤが立つてゐる。伯は笑ひながら、狸の擧丸の廣さに因んでこれを作つたと言はれ、それに入つて休憩をした。すべて園内は鬱樹で滿

ち充ちてゐるので、深山幽谷の趣きがある。殊に地形のおもしろさに感じたのは、溪流の通ずる平地ばかりでなく、一方に高い丘陵のあることだ。こゝは海を見晴らす勝區であるから、是非丘陵があらねばならぬ。流石に伯の相地は届いたもので、最も複雑な地形を選ばれた。丘陵に登つて見ると、地形が如何にも面白く、要衝々々には風致ある亭榭がいくつとなく設けられ、すべて海面の風光を見晴らすやうに出來てゐる。その亭榭も數寄を極めたもので、何れも小家族の住み得るやうに何もかも備つて居り、決して粗略のものでないが、それが五六棟を數へる程あつて、それらに庭も附帶し、小石川の舊邸にあつたと同式の茶室のあるのも認められた。

此地は海濱であるから、海の眺めは勿論よいのだが、三保の松原を横手に望む地形であるから、申し分のない處である。此莊の地積は三千餘坪で、岩淵のに較べると規模は小であるが、山海の風趣は寧ろこゝが優つてゐるかに思はれた。

伯が地區を選ぶの妙は、莊に隣つて古い神社のあるのを利用されたことである。此神社の境内には天を摩する大樹が幾十本もあつて、晝も物凄いやうであるが、それが背後の山と共に此邸に大なる風致を添へてゐることも、蒲原の莊の一勝に數へねばならぬ。

以上庭園の略記は萬が一も髣髴し得ないけれども、伯が往くとして可ならざるなき趣味才を有つてゐらるゝことを見るには此略叙でも足りるであらう。

全體宮内省には一種の作庭式であつて、多くの華族が宮内省の技師に頼んで作つた庭は、一目して分る。その式が強ちわるいでもないが、何となく型に嵌つて面白くない。伯は宮内省に長い間奉仕もされ、これ等の技師も多分伯の恩顧を蒙つてゐるを思ふけれども、伯の作庭は全く伯の方寸から出たので、全く獨創で、些しもコダハリの無い處に私は最も敬服を拂ふものである。

伯は八秩を越えた高齢であらるゝけれども、六十臺に見えるほど嬰鑠として、庭園を案内して高い處へ登らるゝ時は、私など跟いて行けぬほど達者な歩武である。伯は人に接するに禮儀が正しく、私などが訪問しても袴羽織で必らず玄關に迎へらるゝ。又訪問の時刻が分つて居れば、必らず柝車を停車場まで出して迎へらるゝが例である。伯は又直截の人で、何でもバキバキ思ふことは語りもし行ひもされる。それは確かに伯の美德であるのだが、混濁の世の中には、それが動もすると誤解を醸して、伯が迷惑されることも往々にしてあるのは、全くお氣の毒に堪へない。併しそれ等は勿論伯を軽重するに足らぬ。

私は伯の政治經歷、殊に君側に奉仕された長い間の經歷について知つてゐることも少なくないが、私は今趣味家としての伯を談するに過ぎないのであるから、それ等には言及しない。最後に閣筆に臨み、漏らし難い一事がある。伯は晩年維新前後國難に當つた多くの志士の墨蹟を集められた。其數は恐らく千餘に達したであらう。それを裝潢したり箱を作つたりされた勞と費も決して少なくないと思ふが、例の、處を選んで置くの主義で、宮内省へも獻ぜられ、又吾が早稻田大學にも寄贈された。其數は實に三百通の多きに達し、番外には高貴の御宸翰があり、陛下御料の御衣などもあつて、毎々の伯の厚意に對し、吾々は眞に謝するの辭なきに困んでゐる。併しこれ等の墨蹟は教化の大資料であるから、吾々は其志士の忌辰毎にこれを一室に掲げて、恭しく香華を獻じ、闔校のものに閱覽せしめて、伯の厚志を空しうせないやうに力めて、せめてもの謝恩としたいと思つてゐる。

## 二 忘れられた一人物名和緩氏

維新前後國事に鞅掌して功勞あり、不幸にして早く病歿し、今では其名が埋もれて、幾んど知る人もないやうな氣の毒な人は少なからずある。私の郷里越後の水原ミナハラといふ所には、最初越後府が置かれ、後に水原縣が置かれた。(新潟縣の置かれたのはその後である)越後府の長官として前原一誠の來た事は拙著「春城隨筆六種」に録して置いたが、水原縣の長官としては名和緩ユルムといふ人が來た。確か官名は縣參事であつたやうに思ふ。此人などは、若死をせなんだら無論臺閣に列した人であらうと思ふのに、三十六歳で米國に客死した。此人は長州の人であるから、長州では知つてゐる人もあらうが、一般からは忘れられてゐる人物である。私は此人に多少の緣故があるから時々思ひ出すが、其人の經歷が一向わからず、つい此頃に至つた。然るに或る人が毛利家に就て略歴を調べてくれたので始めてその事蹟を知ることが出來、私は骨肉の履歴を知り得たかのやうに喜んだ。實は此人と私は師弟の關係があるのである。私は當時七八

歳の小兒であつたが、名和氏が私の宅へ來られた時に、父から見習ひに私を毎日長官の寓所に通はせたいと依頼があつた爲めか、長官から求められたのか、そこらの處はよくわからんが、兎に角毎日通つたものである。名和氏は舊陣屋に寓して居られ、毎朝縣廳へ出勤され、午後歸らるゝと、私に本を教へられた。其頃私は「四書」の素讀が濟んで、「五經」に手をかけ、「詩經」の素讀を受けた様に記憶する。見習ひといつても給仕などをするでもなく、唯教はる計りで、菓子などを頂戴して夕刻家に歸るのが常であつた。私の外に誰れも本を教はりに來るものも無かつたことを思ふと、全く特別の事であつたと思はれる。名和氏は其頃二十臺位と見受けたが、三十を聊か越してゐたことが今度分つた。優方ヤサガタの白哲ハクセツの美男子で、如何にも溫厚に見える人であつた。素讀を受ける時は物やさしく懇切に教へられ、嘗て叱られたことなどは無かつた。小兒が時めく役人に對坐するのだから、いくら無心でも多少畏怖の情があるべきだが、些しもそんな氣が起らず、毎日楽しんで出かけた。今考へて見ると、可なり愛されたものと見える。幾十年の間、時に此人を想ひ起すのも、畢竟其故であるかとも思ふ。何にしても幼少の時であるから、直覺したことの外は記憶になく、深いことは一切分らないのであるが、氏の居室は十疊は

かりで、それに四疊ばかりの隣室があつた。氏は此十疊を書齋とも寢室ともされてゐた。床には妙な幅が常に掲げられてゐた。それは多分氏の所藏品で、何か意味のあるものであらうと思ふが、繪は甲冑を着けた武將が生首ナマクビを腰に下けて馬に騎り長鎗を手にしてゐる圖で、生首からは鮮血が滴り、如何にも悽慘の氣の漲るものであつた。何故か他の幅とかけかへられたことはなく、いつも素讀を受ける時には此幅を一瞥したものである。長官の處へは餘り多くの來客も無かつたので、時々紙を展べて詩などを書かれ、後には蘭竹の書を學ばれて、しきりに書かれた。其畫の手ほどきをした者は私の家に仕へた高橋耕雲といふ書家であつた。此頃越後に來た大官連は多く妾などを蓄へたり、娼樓などへ通つたりするのが例であつたのに、此人にはそんなことは無かつたやうである。併し幼少の自分が斯く見たのは僻目ヒガメであつたかも知れんが、自分自分は此點に於て感心な人だと信じてゐる。畢竟酒色を斥けた爲めに書畫で無聊を慰したのではあるまいか。非常に簡單な生活で、執事が一人、炊事の爲め老婆が一人ゐるに過ぎない。執事は二十歳位の藤井といふ人であつた。毎朝縣廳へ出勤さるゝ時には、此執事が桐の用箱を携へてお供をした。辨當持參であつたと思ふが、それも甚だ質素のもので、今時の大官の日常生活

とは雲泥の差があつた。縣廳といふは私の宗家の舊址で、その地形が城地のごとく高く築き上げられてある爲めに戊辰の戦に兵燹に罹つた。亂平いでこゝに越後府の役所が建設されたが、それが即ち後の水原縣廳で、名和氏はこゝへ日勤して政務を見たのである。自分は毎日名和氏の寓所の玄關に屢々跪いて送迎したことを想ひ起す。

今度手に入つた略歴に據ると、氏は毛利家の老臣毛利出雲いづもの家來とあつて、毛利家の陪臣である。幼少から聰敏人に過ぎ、篤く道に志して四方に遊び、常に氣節を尙んで國事を慨した。文久二年には屢々京師に上つて主モウら力を王事に盡し、同三年には藩の冤を雪がんと有志の徒を激勵し、大義の爲め死するは此時であると意氣大いに振ひ、其主出雲に請うて一小團を組織し、宣徳隊と號した。これが長藩唱義の嚆矢である。又國老と謀つて文武を講習するため尙義場をも設けた。此頃長藩には正俗二脈の議論があつて、俗論派は君側を圍み、その爲す所往々勤王の大義に悖り、藩主をして不臣の譏りあらしめたので、元治元年、藩老益田右衛門介等は之を憂ひ、君側を清めて君冤を雪ぎ、王室に干城たらんことを期し、尙義場、宣徳隊の人々を率ゐて京師に入つた。名和氏は言ふまでもなく、隊伍を率ゐた一人であつた。然るに反對派の氣焰

がなか／＼熾んで、遂に事が敗れたので、益々俗論黨は勢を得て正義の士を陥れた。名和氏も亦連坐して終身禁錮に處せられたのである。然るに時運到來、慶應元年には正論黨大いに起り、高杉晋作が崛起して遊撃軍を率る吉敷に陣を張つた時に、氏の禁錮を解いて軍の參謀たらしめた。名和氏に緩の名のあるのは之を記念する爲めであつて、略歴には繩緩と改稱したとある。藩主より若干の俸を賜つたのも此年である。翌年幕兵が藩の四境を侵した時も、氏は遊撃軍の參謀として、小瀬川口に防戦して功があつた。明治の初頭には京師に入つて岩倉公に寓仕し、公を助けて王事に鞅掌し、終に維新政府に出仕することになり、明治二年八月、前原の後を承けて、水原縣の參事となつた。略歴には新潟縣參事となつてゐるけれども、新潟縣を置いたのは其後であつて誤つてゐる。氏は一年職に在つて、辭して四年米國に渡航し、専ら民法の學を修めたが、六年空しく志を齎らしてポストンで客死した。氏は晩年名を道一と改めた。享年僅かに三十六歳である。

私は以上の略歴に據り氏が長藩正義派の旗頭であることを知り、氏が高杉晋作、岩倉相公の帷幕の人であつたことを知り、又戎事を以て身を起した人であることをも知つた。併し氏は其

體格相貌から見ても武人ではなく、寧ろ爲政家たるべき人と思はれた。氏が早く渡米して民法の學に志したのも、爲政家の素養を積まんとしたのであらう。或る書に米國に於ける我が公使館の書記官として渡米したとあつたが、多分書記官名義での遊學であつたのであらう。氏の地位は内地に於ては既に書記官以上であつたのだ。縣の參事と云へば、今の知事のやうなものであるけれども、其頃の參事は今の知事などよりも遙かに大なる人物であらねばならなかつた。幾んど大臣に次ぐ程のものであつた様に思ふ。私が大隈侯の薨後其家に藏する多くの書簡を調べた折に、圖らずも名和氏が侯に寄せた一簡を發見して少なからず興味を覺えた。其手簡は侯の訪問を謝したものであつて、越後へ赴任の期が迫つてゐることを云ひ、又當面の國事に對して多少の意見が陳べてあつた。この遺簡から推測しても參事の人物と位地が重かつたことが窺はる。若し壽を保つたならば、歸朝後必然臺閣に列したであらうに、惜しいことであつた。私が幼少の目で見た氏の體格と相貌は、長壽を保つには餘りにキヤシヤであつたやうに思はれた。私は六十年間謎のやうに此人の經歷を臆測した、それが始めてハッキリ分つて見ると、如何にも立派な經歷であるのに、一層追慕惋惜の情に堪へない。



## 三 幕末の犠牲靜寛院宮

古今の歴史に珍らしくないことであるが、政略結婚といふ一種の結婚が、東西何れの國に於ても往々にして行はるゝ。この結婚は愛を基礎としての結合ではなく、多くの場合愛を犠牲とするの結合であり、一種の悲劇である。國際的にも此の政略結婚は無論しばしば繰返された。歐羅巴あたりの國々では、甲の國と乙の國の和親を圖る爲めに此の結婚が度々行はれた。日本の皇室と外國の主権者の間にはかゝることの行はれた例はないが、しかし封建時代に於ては、藩と藩の間に於て政略結婚が度々行はれた。戰國時代には人質の意味で嫁した場合も少なくない。そして近世著明の例は、幕末に皇妹和宮が將軍家茂へ降嫁されたことである。

全體皇室から皇女の將軍へ降嫁された先例は絶対に無い譯ではない。乃ち正徳五年に靈元上皇の皇女八十宮が、七代將軍家繼の御臺所と御治定になつたことがある。是が皇女の將軍へ降嫁された唯一の先例であらう。然る處この七代將軍は翌年に薨去された爲に、遂にこの結婚は

成立たずに終つた。さういふ譯だから、皇室と將軍家の結婚は、全く和宮を以て始めとするのである。

和宮は仁孝天皇の第八の皇女にあらせられて、弘化三年五月に誕生になり、孝明天皇とは異腹の兄妹であらせらるゝ。父帝は和宮の誕生に先だち三ヶ月前に崩御になつたので、和宮は御父君を御存じないのである。御姉妹も多かつたが、段々御亡くなりになつた方々が多かつたので、孝明天皇の御妹としては此方計りお残りになつたので、殊に御親しみが深かつた。

此方が六歳の時に、有栖川家へ御縁付になる豫約が成立つて、有栖川家とは許婚の御間柄であつたのに、それが振り變つて、徳川將軍にお嫁きにならねばならぬ事になつた。それは當時の事情に於て已むを得ない政治上の意味から起つたのであるが、併し孝明天皇はさすがに妹君に對して、それをお求めになりかねた。又和宮も關東に降嫁のことが御心にそまなかつた。然るに到頭餘儀なくされて、所謂政略結婚の犠牲になられたのである。

この政略結婚は、所謂公武合體の爲めであつた。當時幕府の末期に當つて頗る世の中が紛糾した。幕府は追々衰運に傾き、一方に於ては、外國より種々の壓迫があり、國內には幕府を倒

す計畫が盛んに起り、尊王或は攘夷などといふ叫びが頻りに起つて、何時戦争が始まるか知れぬといふ危急の場合、之を救ふ事は何うしても公武合體を要するといふ一種の議論が起つて、その権略の犠牲となられたのが和宮である。女性としての進退、これほど辛いことはないので、全く悲惨の極である。當時和宮は、御年十六歳であらせられた。そしてその良人家茂將軍も同齡であつた。

元來關東と上方は、風俗習慣ともに種々異つてゐた。ことに禁裏御所の風儀と、武家の風儀とは、甚しく異つて居るわけである。單にその異つた風俗習慣の所へ縁付くといふことだけでも、なか／＼の苦痛であらねばならぬ。前にも云うた通り、當時は外國の壓迫もあつて、京都邊から考へると、關東には色々な毛唐人が横行して、や、もすると迫害を受けるかの如き感じもあつた位だ。其處へ織弱い女性、殊に宮中深く立籠つてお育ちになつた金枝玉葉の女性が行かる、といふに就ては、女の情としても恐ろしかつたに相違なく、聖上も、その點を深く御軫念あらせられ、現にその事に就て左の如く仰せられてゐる。

外國人の横行する所へ、織弱い女性はやりかねる。

と云はれ、それを以て徳川家へ對して、結婚を拒むの理由と爲された位である。

尙ほ當然のことではあるが、將軍家へ嫁がれては、その當時未亡人となつてゐた、先代將軍の奥方天璋院に對しては、母として御仕へにならねばならない。この天璋院は評判のやかましやであつたのである。故に普通の縁談の場合でも、なか／＼面倒なわけである。然るに、この公武合體の政略は徳川家を維持する權略であつたから、決して勤王家連には喜ばれなかつた。勿論當時の志士達は盛んに反對し、物情騒然、危険な状態であつた。かゝる面倒な場合において、和宮は降嫁を餘儀なくされた。人生かほどな悲哀は無いとも云ひ得るのである。

公武合體の政略結婚の行はる、迄の経緯を爰に委しく語ることは出来ないが、大體幕末當時の事情は、一時の安定を得る爲めに、己むを得なかつたのである。勿論之に就ては反對論もあり、賛成論もあつて、頗る紛々たるものがあつた。皇上も和宮も、關東からのこの希望を最初は御採用がなかつた。結局岩倉公が具體的の建議をされて、國家の爲めに己むを得ないといふ奏上が始めて皇上を動かし奉つた。この建議から、始めて宮中の問題となつたのである。

併し、和宮は猶ほ御同意がなかつた。皇上も和宮には頗る御遠慮があつたので、不同意なも

のを達<sup>た</sup>とも仰せかねて、或る時は僅かに二歳にならせらる、皇女を、和宮の代りに降嫁とまで御決意があつた位である。かくまでに皇上はいろくくの御心配があつたので、和宮も流石に兄君の一通りでない御軫念を思ひやられ、結局國の爲めに犠牲となるの大なる覺悟を爲されたのである。

かやうに大體は定まつたが、いよく御降嫁といふ迄にはなかく種々なる面倒があつた。帝室におかせられては、此の御降嫁の條件として、

幕府の求めには應ずるが、併し是非とも攘夷を實行せよ。

といふ、面倒な御注文が起つた。

又何時降嫁さる、といふ、その期日に就てもなかく面倒があつて、和宮の念願としては、どうか父帝の十七回忌を濟してから關東へ行きたい。

と仰せられた。即ち一年後に關東に下向ありたいといふ御申出があつた。これは御無理もない事である。前にも申したやうに、和宮は御父帝の崩御後に御生れになつたわけであるから、殊にこの十七回忌を重く御考へになつてゐた。

どうしても京を去るに就ては、遠くもないこの大切な忌辰を経てからでなければ、孝道が立たぬ。

といふ考で、之を御申出になつたのである。

併し當時の形勢はなかく一年を待つことは到底出来ない事情であつて、幕府側では色々懇請をして時期を早めることに力めた。勿論懇請をするに就ては、朝廷からの御要求の攘夷は勅命通りに必らず爲るとの誓ひを立て、さて早く御降嫁を願ひたいと切に願ひ出た。そこで皇上も、一方に於ては、妹君の懇請を已むを得ずとされながら、一方に於ては、關東の切なる希望を已むを得ずとせられて、そこで御仲裁があつて、その御仲裁には和宮も強ひて御反對もなかりかねて、従ひになつた結果として幕府の希望が始めて届いたのである。

さて御降嫁といふ事が愈々決して、その京都御發程は十月廿一日、(文久元年)さうして十一月十五日に江戸着といふ旅程が定まつた。普通ならば東海道筋を經過さるべき筈であるが、東海道筋は頗る物騒で、勤王家が動もすれば道に宮を擁するといふが如き危険もあつたので、それを避ける爲めに、木曾街道を道筋とすることに定まつた。この木曾街道二十五日間といふ長い

旅程、はじめての旅で殊に御不本意である此高貴の女性の御旅情は、まことにお察し申上げるも愚かである。旅中に詠ませられた宮の御歌が三四残つてゐる。それを見ても、如何にこの羈旅の間に、屢々涙を催されたか、推し得らるゝのである。その歌は、

すみなれし都路出で、今日いく日急ぐもつらき東路のたび

思ひきや雲井の袂ぬぎかへてうき旅衣袖しぼるとは

旅衣ぬれまさりけりわたりゆく心も細き木曾のかけはし

落ちて行く身としりながら紅葉モミヂバの人なつかしく焦れこそすれ

かくて豫定の通りに、無事江戸へ着された。

江戸着後の事を云ふ前に、其夫と定められた家茂將軍の事に就ても、聊か申さねばならぬ。

將軍家茂は徳川家の大切な親類紀州家の生れで、十三代將軍家定の後を繼がれたのである。前の將軍家定公は早く歿歿なられて、其夫人は未亡人となつてゐられたが、是が前に申した天璋院である。此夫人は名は篤子アツコと云うて島津家の一族島津忠剛の息女で、それが近衛家の養女となつて將軍家へ嫁がれたが、間もなく將軍は歿歿なられたのである。和宮が降嫁されて後僅

かに五年にしてその配偶を失はれた境遇とよく似てゐる。さうしてこの天璋院の性格も、なかなか男勝りの剛氣な女性で、頗る聰明でもあつた。それらの點に就ても、和宮とよく似た處があつた。此二人の女傑が、幕末の舞臺に、内面に大なる働きをなした。それらの事はこれから縷述する。

和宮が降嫁された時分の大奥には、種々なる衝突があつた。それはさもありさうな事である。第一、前にも云うた通りに、上方風と江戸風が異つてゐる計りでなく、武家の風俗と禁廷の風俗も甚だ異つて居る。そこで和宮の降嫁の一條件として、京都から求められたのは、

いかにも風俗が異つてゐるから、どうか上方風の生活をさせる様にしてほしい。

といふことで、皇上からも特にお求めになつたわけであるが、なか／＼それが實際に行はれなかつた。その爲めに和宮は御輿入當時、いろ／＼な事について御苦心が多く、又御不自由が多かつた。

最初和宮が母として仕へるべき天璋院にお會ひになつた時、天璋院は廣い座敷の上座に三重の座布團を敷いて、傲然として其上に坐し、遙か下席に布團もなしに、和宮が坐られて、こゝ

に始めて姑に目見えをされた。是は普通の身分では當然の禮であるが、皇家の息女としては、泣かんばかりの辛さであつたに違ひない。別してこの皇女に隨從して關東に下向した多數の侍女などとしては、如何にもそれが辛かつたに相違ない。又それが事實であつたと傳へられてゐる。そこでその様子が京都へ傳はると聖上は逆鱗があつて、一時はこの結婚が破綻にならんとする迄に至つたと云はれてゐる。當時皇室から幕府の未亡人を見れば、云はゞ臣下の如きものであつて、何でもないもの、如くに宮中では考へられてゐたのである。であるから、和宮が贈物として持参された品の如きも、書付には「天璋院へ」としてあつて、少しも敬語等はないといふ譯で、謂はゞ母たるべき人に對して、禮を缺いてゐた譯である。斯様な事は、幕府側から見ても快くなかつたらうが、京都の幕府に對する觀方は、因襲的にかくあつたのである。

その當時大奥にはいろ／＼な暗闘があつた。其暗闘は紀州派の女中と水戸派の女中との間に行はれた。元來家茂將軍は紀州出の方であるから、それに屬する女中は、どうか和宮に御懷妊があつて欲しいと祈つたが、それに反して水戸派に於ては、どうか慶喜公を後の將軍にしたいといふ腹があるから、暗に和宮の御懷妊はなくて欲しいと祈つた。かやうな軋轢が自然に和宮

と天璋院の間を疎隔したり、又紛糾せしめたりしたに相違ない。併し聰明な和宮は、何處迄も天璋院を母として尊敬せられ、夫の將軍に對しては勿論貞節を盡されて、琴瑟相和したと傳へられてゐる。

和宮は、初めの中こそ武家の風にならなかつたのであるが、後にはすつかり慣れて、何事も自ら制して質素を旨とし、錦や綾の着物を斥けて、粗末なる木綿の着物を常に着用されたと迄傳へられてゐる位で、追々と天璋院とも隔てのない間となられた。是も全く宮の御聰明によることである。

和宮と天璋院の間柄に就ては、いろ／＼なエピソードが傳はつてゐる。その中に可笑しい事の一つ、勝海舟翁が自ら筆録したものによつて、こゝに語らう。翁の筆録によると、初めは御間柄が悪かつた。其後翁の宅へ御兩所を御招きした時に、御膳を出した處が、兩方とも互に譲り合つておあがりにならぬ。給仕に出た者が、

大變で御座います。

と退いて來た。そこで翁が行つて見ると、互に給仕を仕合ふといふことの争ひが生じてゐる。

そこで翁は笑つて、

貴女方は何をなさつてゐるのです。そんな詰らない讓合をなさるよりも、かうなさる方が宜しいでせう。つまり御櫃が一つだからそんな御争ひが出来るのだから、も一つ御櫃を差上げませう。そこで一つづつ、側に御置きになつて、御互に、天璋院様は和宮様のを御盛りになり、和宮様は天璋院様のを御盛りになるといふことになされば、争ひがなくて済むでは御座いませんか。

と云つて、別に一つ御櫃を供へた。この裁きで御兩人とも、

安房は利口者だ。

と大笑をなされて、それから御間柄がよくなり、勝の家を御退出の時も、一つ馬車で仲善く御歸りになり、以後は萬端打解けて、御相談になつたと云はれてゐる。

和宮の徳操に就てはいろいろ傳はつてゐる。是も海舟翁の書いた一節であるが、或る時天璋院、將軍、和宮の三方が、瀝御殿へ御成りになつた事がある。その時どうした事か、踏石にチヤンと天璋院と和宮の草履が並べてあつて、將軍のだけが踏石の下に置いてあつた。是は非常

な不敬とされた大失態で、かゝる事は當時なか／＼八釜しかつたので、その失態の調べ沙汰でも起らうものなら罪人が出る程のことである。それを和宮が早くも見てとつて、自分の草履を下へ跳ね退けて其處を飛降り、御自身將軍の草履を取上げ、將軍に對し御辭儀を爲されたので、何事もなくて済んだ。斯様な取計ひを臨機に爲された事は、全く賢徳と聰明による事と云はねばならぬ。

又家茂將軍が大阪で亡くなられた時の事に就ても、海舟翁の記録がある。その遺骸を棺の中に納めるについて、いろ／＼の手廻の品物を調べて見ると、フト出て來たものは、和宮からの手紙であつた。何が書いてあるかと開いて見ると、これには附添つてゐた侍臣たちも皆吃驚した。その手紙の文面によつて和宮の御精神のいかにも凛乎たるものがあるには、何人も感嘆せざるを得なかつたのである。それは、

わらはも一旦徳川家に嫁した上は、徳川家の爲に生命を賭する覺悟。御歸りの早きを望むは一日千秋の思ひをなしますけれども、國の爲には凱旋を冀ひます。

といふ事が細々と書いてあつて、夫婦の間柄、並に和宮が、衷心徳川家の爲めに犠牲となるを

辭せぬといふ精神は、この手紙によつて始めて明かに幕臣に分つたものと見える。

尙又將軍が亡くなられて後、色々政局が紛糾して來て、或は勤王家達が和宮を奉じて、一騷動起さうと計畫した者もあり、頗る危い事だったが、和宮は泰然として居られ、少しもかゝる事に耳を御傾けにならぬ爲め、一向心配がなかつた。後に和宮が御隠れになる時も、

私の遺骸は、決して京都に葬つて貰ひたくない。是非徳川家の墓所に葬つてくれ。といふ遺言であつた事も、海舟翁の記録にとゞめてある。

將軍の薨去は今言うた通りだが、和宮と將軍の永訣の端は、慶應元年五月十六日であつた。將軍は長州征伐の爲めに江戸を發して大阪へ赴かれた。その江戸を發せらるゝ當日が永訣の端緒であつた。大阪へ赴かれてから、遂に江戸へ歸られず。翌慶應二年の夏、不幸旅行中に病にかゝられ、七月二日遂に薨せられたのである。和宮は夫君の病に一方ならず心を痛められ、増上寺クロホシノ黒木尊に願をかけ、毎日御百度を踏んで平癒を祈られた。さて愈々重態といふ事を聞かれました、斷斷ちをして、身を以て代りたいといふ祈願をかけられたが、天壽如何ともする能はず、薨去の報傳はると、宮は悲しみの餘り、直ちに緑なす黒髪を切り、弔歌と共にその髪を大阪に

送つて、棺中に納められたと傳へられてゐる。その時の御歌が二三残つてゐるが、如何にも夫婦間の愛情をあらはし、一讀斷腸の思ひあらしめる。

昭徳院殿御うせ給ひつるとき

三つせ川世の柵のなかりせば君もろともに渡らましものを

世の中の憂さてふ憂さを身一つに取り集めたる心地こそすれ

同じ頃帝より賜りたる御衣を召させ給ひて

着るとてもかひなかりけり唐衣錦も綾も君ありてこそ

將軍の亡くなられた其年が二十一歳、即ち和宮は同年であらるゝから、二十一の年に寡婦とされたのである。僅かに降嫁になつて五年間といふ短い生涯、殊に其間一年有餘は同棲でなかつた。

是は和宮にとつては如何にも御不幸な事であつたのであるが、其御不幸は唯最愛の良人を失はれた事計りでなく、四ヶ月を隔て、宮が杖とも柱とも頼まれた、唯一の御兄君孝明天皇は十二月二十五日を以て登遐あらせられた。さうして和宮が其身を託された徳川幕府は、それか

ら後一年を隔てた明治元年正月に遂に瓦解に及んだ。即ちその年の三月には、官軍が江戸に迫り、四月に及んで江戸城明渡しとなつたのである。

公武合體といふ一時の權略から、攻略結婚が行はれた譯であるが、大勢がかやうな姑息のことでは、どうする事も出来なかつた。實を言へば、この政策の實施は餘りに遅かつた。併しながら和宮の御降嫁は、大勢を如何ともする事は出来なかつたけれども、徳川家の末路を飾つたと云へる。又徳川家の滅亡を救ふことも出来たのである。その滅亡を救つたのは、公武合體の政策の結果といふよりも、寧ろ和宮の非凡の性格に依つたものと自分は思ふ。若し凡庸の婦人であつたならば、如何に朝廷に脈絡があつたにしても、あの混亂の場合、恐らく何事も成し得なかつたであらう。良人たる將軍が薨去になつた上は、普通の女性ならば必ず尼となつて、菩提三昧ダイサイツマイに目を暮して高い波風を避けたであらう。又さうしたからとて、何人も非難するものもなかつたであらう。

然るに和宮に於ては、その大混亂の場合に處して、飽く迄も徳川家の滅亡を救はんと身を挺して努力され、其爲めに非常な心勞をされた。そこに徳川家の末路にあつて、内面ではある

が一つの輝きがある。

幕末の歴史は如何にも悲哀の歴史である。天子、將軍、皆春秋に富まるゝのに相踵いで世を去られた。それは天壽とは云ひながら、何れも時勢に過勞であられた結果と見るのが當然であらう。和宮に於かれても亦若くて世を去られたが、やはり同一原因に由るもので、皆國家の犠牲となられたのである。とかく勤王志士の犠牲となつたのは後世まで高唱されるが、時の天子、將軍、尙又將軍の内方の犠牲になられた事をいふ者が甚だ少ない。幕末の歴史は、戰亂の血腥い事は誰にもわかつてゐるが、内面の軟かい方が一向分つてゐない。和宮が、自分の嫁した家の爲めに如何に苦心し、如何に努力されたかの事實は、吾々も多少は知つてもゐるが、近來幸ひに、その自ら書かれた日誌が世に現れて、委曲の事がはつきりと分るやうになつて來た。それを追々讀んで見ると、その内面の御働きは、吾々の想像したよりも、遙かに以上のものであつた。繊弱なる一女性があればほどの働きをよくもされたものである、と實に恐入るほど御苦心が深かつたのである。私共が和宮を以て空前の女性であると考へるのは此故である。

將軍が薨去されてから、政局が益々紛糾して來た。その結果徳川家がいよいよ滅亡に瀕し、



慶喜もいゝんな行違ひから朝敵となつた。この幕府の皇家に對して朝敵となつたことは、皇室から出て居られる和宮に對して如何に打撃であつたか、それは想像に餘りある。その際に當つて和宮が、いかに朝廷に對し辯疏し哀訴せられたかの委しい経緯は、到底簡単に言ひあらはすことが出来ぬ程、それほど苦心の経緯がある。明治大帝は、和宮とは叔姪の御間柄であらせらるゝ。であるから大帝は和宮に御同情があつたに相違ないが、併し御同情があつたとしても、あの混亂の場合、罷り間違へば、徳川家は一家滅亡といふ悲運に遭遇したに相違ない。徳川家は實に俎上の魚であつたのだ。和宮の誠意の徹したといふわけは、朝廷との脈絡があるなどといふ簡単なわけでなくて、和宮が自身で書かれた日誌で見ると、その経緯がはつきり分るが、いかにも朝廷に對せられて謹慎の態度であり、一つも輕率の事がなく、必らず大事の上に大事を取り、如何なる場合にも自身を犠牲にさるゝ精神が現はれ、その誠意が朝廷を動かしたのに外ならぬ。

將軍が亡くなられた後に、京都からは、切に和宮に京へ歸らるゝやうにとの御勧めがあつた。併しながら一旦嫁した家は我家と飽く迄も考へられ、その京都の懇切なる御勧めを御断りにな

り、あの面倒なる政局に自ら投じて、極力徳川家を救ふことに一念を籠められた。その委細を文書に依つて拜見すると、なか／＼政治家と雖も成し得ない御才略のほどを染々と感じ、眞に敬服に堪へないものがある。

日本では、昔から婦人の行跡が歴史家に閑却され勝である。實は婦人の事蹟が餘り明かでないといふ事や、又賢婦人が少ないからでもあらうけれども、一つには歴史家の慣習によるので、歴史家は餘りにこの方面を穿鑿しないからである。この和宮の如きは、その行跡が天下の大勢に重大な關係をもつてゐるのみならず、宮は其舞臺に活動さるゝだけの能力を十分有されてゐた。この政治的女性は、殆んど既往の歴史には前例がないとも云ひ得るのである。西洋では國柄が違ふからでもあるが、歴史家は政治的婦人を頗る重要視してゐる。實は婦人の涙ある優しい行爲ほど、局面を制するものはないのであつて、和宮は日本に於て殆んど例のない、大なる徳操能力兼備の高貴の女性と謂はねばならぬ。

幕末の歴史は前にも言つた通り、大體に於ては大なる悲劇である。この幕府の倒壊は無論種種な原因より來てゐる。けれども、何と云うてもペルリが遙々日本の關門を叩き、こゝに世界

の新らしい潮流が日本に流れ来り、遂に三百年の桃源の夢を破つたことが、幕府の運命を縮めた第一の原因である。併し私を以て云はしめれば、原因はそればかりではない、隠れた原因がさまざまある。天璋院の幕府に嫁せられたことや、和宮が降嫁されたことの如き、一面から見れば幕府の滅亡を救うた様でもあるが、一面から見れば幕府の滅亡を早めた原因ともなつたのである。幕府の衰運に乗じて強藩の島津が暗庸の將軍の配として、特に聰明剛毅の女性を選んで簾中に入れたなどは、何と云うても島津に野心があつたからの事で、天璋院は實に恐るべき黒船であつた。そしてこの黒船は深く大奥へ喰ひ込んで入つたのである。

又和宮にしても、徳川家を救はれたのは被ふべからずだが、一面からいふと、此宮の、公武合體の犠牲となつて降嫁されたことが勤王家の憤怒を買ひ、これから勤王家たちが刺戟されて奮起した反動が、一層徳川家の運命を早く衰へさせたといふ事にもなるので、この點から云ふと、此兩女性が、大奥にまで喰ひ込んだ黒船とも云ひ得るであらう。

天璋院の事は前に委しく云はなかつたが、剛毅で聰明なるその性格が、和宮と協同して、徳川家を救つた事にもなるのである。世に傳へる所によると、江戸の開城と決した時、何といふ

ても明渡しを天璋院が承知せず、結局スカシだまして漸く他に移し、辛うじて明渡した程であつたといふ。その頑張りやうが餘りにひどいので、幕府の重臣が説諭のため、拜謁を乞うて行つて見ると、廣い座敷の中に多數の侍女が控へて居り、遙か彼方の高い處に褥が重ねて置いてあるが、天璋院の姿が見えない。不審に思つてゐると、暫らくして侍女の中から天璋院が現れて座に就かれたので、重臣も是には驚いたといふ事である。此の天璋院の行爲は、言ふまでもなく重臣がいかなる風かを先づ見て、物情を察したのである。天璋院がなか／＼の女傑であつたことが、コンナ挿話に據つておよそが窺はる。

私は幕末の歴史中殊に内面の歴史、即ち和宮といふ一女性の事蹟を知りたいと考へ、折にふれて多少書きとめておいたが、近頃幸ひに徳川家に因縁深い増上寺の桑原隨旭氏が「和宮御事蹟」といふ書を出版されたので、それを見るに及び、始めて委しく事實を確かめることを得た。それから、宮の日誌が公刊されたので一層便利を得たことを一言しておく。

#### 四 遁竄中の木戸侯

維新の前後には、種々の隠れたロマンスがあつて、あの大革命に華やかな色彩を添へてゐる。一體あの頃の舞臺に働いた所謂志士といふ志士は、悉く明日の命のはかられない人々であつて、始終身邊に危険が迫つてゐた。しかし、さうした死活の間にも、自ら異性との情交があつて、そこに幾多のロマンスが生れたのである。

昔から扶持に離れた浪人には自然同情が集つて、浪人ものと意外の女性とが戀愛關係を結ぶことは珍らしくない。幕末の志士に就ても同様で、彼等はいづれも各藩屈指の人物であり、一度成功すれば忽ちにして臺閣に列するといふ程の人々であつた。それが死活の間に國事に奔走して居るのであるから、之に對して異性の同情が起るのも、蓋し無理ならぬ事である。

嘗て或る大官人——その人もやはり今いふ浪人境遇にあつて、大いに國事に奔走された人である——から聞いた話であるが、正直に白狀するが、維新當時、吾々は生死の間にありながら、

到る處に、異性とのロマンスがあつたものだ。これは何も自分一人だけではなく、誰しもさうで、それは單に野卑な目的からではなく、さうする事が事實危険な空氣の中に立つ吾々には身を匿す上に必要であつたのだ。つまり、異性との情交が慰安と保護に役立つたものだ。」との事であつた。成程、さう聞いて見ると如何にもと思はる。

よく聞こえてゐる話だが、土佐の坂本龍馬が、幕府の捕吏につけ狙はれてゐた頃、ある宿屋の娘と情交關係があつて、その宿に泊つてゐた。或日のこと、その娘が入浴してゐると、四邊が急に物騒がしくなつて來たので、風呂場の窓からのぞいて見ると、こはそも如何に、多數の捕吏が押しかけて來るところである。驚いた彼女は、身に一物を纏ふ暇もなく、裸體のまま、龍馬の室に馳せつけ、急を告げたので、龍馬は辛うじて危地を脱することが出來たといふ話の如きは、或る大官人の云うた事を裏書してゐる。

こゝに木戸孝允、當時は桂小五郎といつた——維新の三傑と迄云はる、元勳に就ても、面白いロマンスがある。此木戸侯には松菊といふ雅號がある。是は木戸侯の愛人の名を二つ——即ちお松、お菊を合せたものだとの説もある。さう云へば、のろけ交りのやうに聞こえるが、

併し、其情交を記念するために、かゝる意味を以て自らの號とする例は必らずしも珍らしくはない。私はその出處を委しく調べたわけではないから分らぬが、或は傳へる如き説が事實であるかも知れない。

お菊といふ婦人との關係は私は知らないが、お松に就ては、木戸侯と頗る因縁のふかい物語がある。幕末に木戸侯が頼りと國事に奔走中のこと、京のある家に匿れ、久しく其處を匿れ家としてゐる間に、其處の若い娘と戀愛に落ちた。その娘が即ちお松といふのである。當時お松といふ婦人の年輩はわからぬが、木戸侯とても血氣盛りの頃だから、何れ二十ハッテかれこれの若い女で、且つそれが頗る容貌の優秀な女であつたといふ事は蓋し想像し難くはない。

世間傳へる所によれば、この婦人こそ、木戸侯のために、あらゆる危険と戦つて、遂に候をして身を完うせしめたと言はれてゐる。美人にして且つそれだけの氣概があるとすれば、實に是は見上げたものである。當時の物騒な世に於ては、婦人と雖も男に勝る氣概を有つた者が決して少なくなかつた。これは江戸に於て最も其事實が多い。たとひ刀を以て脅かされても敢て恐れず、情人の爲めには一身を犠牲にする事をも辭せぬ者が多かつた。殊に江戸深川邊の藝者

に、かうした性格の女の多かつたことは何人も知つて居る所であるから、お松が木戸侯に一身を捧げ、暗に危険を保護したのも、決して不思議なことではない。

併し、私の聞いた所によると、それは寧ろお松を偉くし過ぎた話で、事實は、お松よりも其親なる者が、京都の或る宮の神主で、それが何れ勤王の志あつて、木戸侯の勤王の志に感じ、其家に宿泊せしめたのみならず、我が娘を侯との情交に任せ、且つ極力その危険を保護する事に努めたとの事である。

其人は勿論京都人で、何でもやはり賀茂河畔に家があつたと聞いてゐるが、一時幕府の警戒が志士に對して非常に峻嚴で、殊に志士中最も幕府の目の上の瘤であつた桂小五郎は、草を分けても探さねばならぬといふ意氣で、百方搜索した。それ迄は候も四方に奔走したが、餘り警戒の嚴な爲めに、殆んど身を寄せる所がなく、お松の家に蟄居したのみで、苟且にも外出などは思ひもよらなかつた。

殆んど日々探偵が其家に付き纏ひ、捕吏が毎日搜索に来るといふ有様で、狭いその家には匿れ場もなくなり、遂には天井に身を潜め、三度の食事は下から運び、夜と雖も下に降りる事も

出來ず、殆んど十數日間天井住ひを續けた。終には捕吏も探しあぐんで、結局多數の者に槍を持たせ、何と云うても此家の外に匿れ場はない、何處かに潜んでゐるだらう、と縁の下は勿論、穴倉、物置等も限なく探索した。終には天井までもといふ事になつたが、若し天井を壊されたら最後、恐らく木戸侯の運命はそれまで、あつたらう。

實に此の時こそは、侯にとつて危急存亡の刹那であつたが、天は遂に彼を棄てなかつた。捕吏は、幸ひにも天井を剥ぐことをなさず、其代り、十數人が槍を以て天井のあらん限り下から之を突いて廻つた。侯は床の間の天井に匿れてゐたが、槍は此處にも及んだ。今や彼の一命は風前の燈火も同様であつた。が、幸ひにも捕吏の槍先を免れ、九死に一生を得たことは、木戸侯にとつても、又日本國家にとつても極めて仕合せな事であつた。

幸ひかうして無難に濟んだので、此上此處にゐるのは宜しくない、ひとり此家に迷惑をかける計りでなく、復どんな危険が迫らぬとも限らぬと思つて、侯は一夜飄然として京を離れた。そして何處へ誰を頼つて行つたのか、暫くその消息は分らなかつたが、そのうち妙な噂が京の花柳界に起つた。それは、近頃見かけぬ乞食がやつてくる。縲縷を身に纏ひ、缺けた椀一つ持

つたきりの見る影もない乞食だが、かつぶくのい、肥満した男で、頗る愛嬌があつて、可笑しな歌を唄つたり、踊つたりする態が、誠に興味を感じさせるといふ。で、木屋町邊の藝者は、其乞食を毎日心待ちに待つ様になり、來ると踊りを所望して、いくらかの錢をくれてやるといふわけで、花柳界の珍とせられた。勿論木戸といふ大人物も、若氣に乗じて頻りに花柳界に入した事もあるわけで、自分の煩悶を遣るために、又傍ら物情を偵察するために、かやうな行態をなしたものに相違ない。

さてその乞食状態である人の匿れ家を洗つて見ると、丹波の某方面であつた。それがお松竝にお松の家族には知れてゐたのであらう。或る時お松が悲しみに堪へずして、その隠れ家を訪ねたことがある。云ふ迄もなく丹波は京には極めて近い所で、汽車がなくても毎日往復出来る位の間であるから、京へ乞食に出かけるには恰好の處であつたらう。お松は漸くその家を探しあて、入つて見ると、如何にも乞食の住處らしい假造りの小舎で、そこに蓆を敷いて、汚いみすばらしい姿をして、自分の愛人が坐つてゐた。一目見ると流石のお松も胸一杯になつて、暫はし河もいふ事が出来なかつた。かねて自分の居所へ訪ねて來てはならぬと深く諭しておいた

のに、かうして訪ねて来たのには、木戸侯も頗る驚きもし、又憐れみもしたであらうが、そこは如何に乞食境遇でも洒落な彼は、深く憂へる色も見せず、もうこんな事をしてゐる間も永くはあるまいからと優しく宥めて、泣きの涙の愛人を歸したといふ事である。

かゝる事あつて數ヶ月の後である。忽ちにして維新の大業は大成せられ、その乞食境遇の人が先づ擧げられて臺閣に列するに至り、岩倉、大久保等と並んで最も權威ある地位に坐る事となつた。芝居に仕組んでも人が信ぜぬ程、いかにも急激な變り様だが、それが事實だから面白い。

かくて臺閣に列した木戸侯は、勿論お松を東京に呼んで、彼女を正式の妻とした。そして京都戀しやで、その重い身分で眞先に出かけて行つた所が京都であつた。久振りに天下晴れて乗りこんだのであるから、磊落な侯は、夫婦揃つて或る大きな酒樓に、昔馴染の藝者を始め懇意な女將や自分が身を匿してゐた時分の古馴染など呼んで、盛んな宴會を開いた。その席に臨んだ者の中に、私の知合の京都の宿屋の女主人が交つてゐた。私はその女主人から「木戸さんが上座に坐つて、お松さんがその隣りに坐つて居られた。それを見ると、前に見たお松さんと

は事變り、成程、飾り立てると、かうも品位があるものかと思ふほど立派な態度で、これならば天下に時めく木戸侯の夫人として決して羞かしからぬと思はれた。木戸さんは例の通り磊落で、頻りと戯談を云つて居られたが、その時私の側にある四五人の若い藝者の中の一番年少な雛妓が、私の袖を引き、耳に口をつけて、あの旦那は何時ぞや其處らをふらつてゐた乞食によう似て居ると私語いた。その私語が忽ち木戸さんの耳に入つて、うむ、それは俺だよ、と云はれたのでそれから又座が大變賑はつた。」と聞かされた事があつた。

この女主人は今多分故人になつたらうと思ふが、京都賀茂河畔三本木に信樂シガラキといふ料理屋兼業の宿屋をしてゐたもので、私が行つたのは二十數年前の事で、その頃彼女は四十七八と思ふ位の年輩であつた。

その附近は昔から極めて風流な地で、大抵文人墨客は其邊に居を構へたものである。丁度信樂の西隣りが小さな家で、物干に出るとその家の欄干が見える位置にあつたが、それが有名な梁川星巖の家で、その頃はすっかり頽廢して、少數の學生を置く下宿屋になつてゐた。又東隣りは貴名海屋の妾宅で、その頃はたしか料理屋になつてゐたと思ふ。そんなわけで、木戸侯も

信樂には時々遊びに來たりして、深い因縁があつたものと見える。

私は信樂に度々泊つて、いろいろその女將から生きた話を聞いたが、今猶ほ忘れられぬのが木戸侯の話で、前に擧げた話は全部此女將から聞いた事實で、それをそつくり、少しも潤色なしに叙したのである。

大隈侯が生存中、大久保、木戸、其他の人々の平生の服装に就て話されたことがあるが、木戸侯の服装は頗る凝つた粹なもので、武士といふよりも鴻池あたりの金持といった風な、極めて垢抜けたものを喜ばれたものださうだ。國事に奔走する間に種々の境遇を経てゐるから、所謂苦勞人で、服装の好みもそれから來たものかと考へらる。

大隈侯の話を述べたからも一つ附け加へるが、大隈侯にあつた木戸侯の手紙が澤山ある。何れを見ても國事に就て周到の案が書かれてあり、悲憤慷慨の氣に満ちたものが多い。その手紙を見ても、木戸侯は別して神経質の人だつたかと思はる、所があり、それだけ國事に對して熱心だつた事が窺はる。或る一つの手紙に、同じく悲憤慷慨して、大隈侯に種々困難な事件を依頼する向きのものがあるが、その終りに「大隈様」を「大苦満様」として自分の名前を「鬼

怒」とかいてある。この氏名の書き方はその手紙の内容をよく表はしたもので、鬼怒とした所に如何にも國事を憤慨する意氣が表はれ、大苦満とした所に込み入つた難儀を託する心持を示したものと思はる。

## 五 吉田東伍博士を憶ふ

吉田東伍博士が逝いて既に十年になる。氏は其の死ぬる年五六ヶ月氣が引立たず、沈鬱に日を送つてゐた。どうも病が潜んでゐるらしいから、醫者に診て貰つてはと勧めても、どうしても診て貰はなかつた。自分では、胃癌などであるまいか、と暗に思つて醫師の診察を避けたのであつたかも知れない。何分様子がわるいから私が切に轉地保養を勧め、漸くそれを容れて、行く先を銚子に選んで行くと、二日目に客舎で歿した、といふ知らせを受けて驚いた。實は何の病症であつたかわからぬ。私とは親族關係もあり、大切な友人であつたので、私は特に悲んだ。遺骸を東京へ引き取り喪を發すると、島田三郎氏から私に電話がか、つて來た。氏は、前年田

口卯吉氏を喪つたことに言ひ及び、自分の田口氏に於ける關係はあなた、吉田氏に於けると同じである。御痛みの程洵に同感に堪へぬ、と悔みを申越された。私は島田三郎氏とは長い間交はつたが、電話を交へたのは、後にも先にもコレ切りであつた。成るほど、島田氏はよく私と吉田氏との關係を知つて居られた。政治家としての島田氏は學者肌の田口氏を此上なき友人とされた。それと同じ様に、政治經歷のある私に學者たる吉田氏のあるのは丁度似た趣があるので、さてこそ島田氏が田口氏を喪つた哀傷の情を以て私に同情を寄せられたのであつた。

思ひ起せば吉田氏とは長い關係がある。私が新潟に新聞記者をしてゐた頃、君は小學教員であつた。時々私を訪ねて來ては、文稿や詩篇を示されたものを見ると、私はいつもコンナ人を小學教員にして置くのは惜しいと思つた。氏の得意は國史にあつたが、私は其頃まだそれを知らず、尤も畏敬したのは其非凡の文藻にあつた。追々交はるに連れて君の長所は文藻にあらずして史的の學殖に在る事を知り、いつも對酌の時に、君は東京に出よ、自分は不肖ながら三年を出でず必らず博士にして見せると言つた。私が郷里を去つて東京へ來ると、君も養家を脱して東京へ來て私の食客となつた。氏の名著として學界に名の高い「日韓古史斷」は、實は食客時

代に出來たものである。當時私は「讀賣新聞」の編輯を主宰してゐた。氏は、落後生の名を以て田口卯吉氏の「史海」の評を讀賣紙上に載せて、史家を驚かした。「徳川政教考」なども當時私の薄暗い書生部屋から産れた著述である。氏は、私の豫言のごとく東都へ來ると間もなく時の博士連を壓倒する才學を現はしたが、文學博士を贏ち得るには私の豫言より十年後れた。君は日清戦争に強ひて記者として従軍を思ひ立ち、軍艦「橋立」に乗つて威海衛の戦闘を見、生還の後始めて「大日本地名辭典」の編纂を思ひ立つた。それが十三年の星霜を経て完成し、君はそれを以て文學博士會滿場一致の投票で博士に推されたのである。

地名辭典の編纂は大事業であつた。今考へて見て滑稽に感ずるのは、吉田氏は私の力を頼みに此業を企てたのである。當時頗る振はなかつた私が、力を揃はず、よろしい、やり給へ、と云うたのは大膽であり無謀であつた。最初は物を典して迄も助けた。後は親族から資金を出させたり、又親族が學資を供してゐる三四の學生をして筆寫の手傳をさせたこともある。吉田氏は身を奉ずることが極めて薄く、且つ勤勉で、仕事はズン／＼進み、割合に經費もかゝらなかつたが、何分私では遣り切れず、遂に富山房に移して、それが成功したのである。この大著の



完成した時は、私も實に感激に堪へなかつた。私は自分の誇りの如く、吉田を誇つたものである。吉田氏は一ト通り中學程度の教育を受けたばかりで、實は獨學自習の人で、家學と天分が偉大の助けをした。當時學閥に重きを置かれた頃でもあり、吉田氏の如き無名の人がこの大著を出さうとは誰れしも思はなかつたのである。併し、事實ほど力強いものはない。これを見るものは、如何なる學者もその該博の識と才に驚いた。此編纂は日清戦争を終つてから始まり日露の戦争を経て成つたのであるから、この二大戦役に、世界の大家と云はれてゐた支那と露國が、小家として輕んぜられてゐた日本に打負けたのは、世界の驚異だとすれば、此の著述が世界の所謂大家を壓倒して顔色無からしめたのも、亦學界の驚異と云はざるを得ぬ。併し、實は驚異とするに足らぬ。力づくの世の中には當然の事である。これを望めば鬱然たる大家も、實は案外のものであることに氣附かねばならぬ、と私の云うたことが地名辭典の跋となつてゐる。此出版の成つた時、私は吉田氏を伴うて大隈侯に引會はした。その際は皮肉のことを云はれた。「これは學者では出來ぬことだ。吉田君は學者でないから遣り遂げた。」と云はれた。この言は、つまり、世の所謂大家が、己れの名聞に顧慮し、學界の批判を虞れて、折角案はあり

ながら、それをあらはし得ずして墓に入ることを一笑されたのである事は申す迄もない。此名著が帝大教授坪井九馬三博士により文學博士會に提出され、一議に及ばず吉田氏は博士に推薦されたが、その橋渡しをしたのは私であつた。私は、十六七年前に言つたことが、こゝに實現したので、私は自分が博士に推薦されたよりも喜ばしかつた。併し、當の本人は卻つて冷然たるものがあつたのを、私は寧ろ偉として嬉しかつた。吉田氏が地名辭典の執筆中私が氏を早稻田の學苑に紹介して、歿するまで教鞭を取り、名教授と呼ばれた。氏は早稻田に在る間に、「倒叙日本史」を著はし、傍ら「世阿彌十六部集」「宴曲全集」の如きものを著はし、その學才は往く所として可ならざるなきを示した。氏は要するに非凡の天分を以て恵まれた人であつた。そして天分に恵まれた人は往々怠慢であるのに、氏は如何にも勤勉の人であつた。その地名辭典の成つた時、「幾百萬字酒中成」の語を印に刻せしめたものを見て、それを事實であるかの如く思ふ人もあるけれども、決してさうではない。酒は好きであつたけれども、飲酒三昧で書いたものでない。若し飲酒三昧の生活であつたなら、あんなに早く死にはしなかつたらうに、と私は常に辯護するのである。

氏は折に觸れて私に新井白石の非凡の學者であることを説いた。氏は恐らく白石に私淑してゐたと思はれる。氏の處女作とも云ふべき「日韓古史斷」などは白石の「古史通」を受けて斷じたものであるから、私淑はコンナ處にもほのめくが、私は氏と白石との間に甚だ似寄りの點があるやうに思ふ。第一、史學が本領であること、第二、紙背に透る史眼を有したこと、第三、創見に富むこと、第四、他人の説に雷同せざる識見のあつたこと、第五、言語の學に通じた事、第六、考證の的確であつたこと、第七、政治經濟に通じた事、第八、常識に富んでゐたこと、この八點は白石の特色とする所で、亦實に氏の特色とする所であつた。白石は種々の學問に長じたけれども史學に尤も卓見を觀ることは人の許す所で、「讀史餘論」でも「古史通」でも「藩翰譜」でも皆不朽の書とされてゐる、氏が史學に専らなるは言ふまでもない。第二、白石の偉いのは其眼光紙背に透る鑑識であつたのだ、史學にはこれが尤も大切である、氏も看破力が非凡であつて、大部の書を少しばかり展開すると、熟覽者よりも急所をよく知つてゐた。第三、創見は殊に白石の特徴である、史論でも考證でも語學でも皆後世學者の範を爲してゐる、氏に於ても創見の天分が甚だ多く、千古未決の問題が氏により解決されたことの如何にも澤山あるこ

とは、地名辭典や「日本歴史地理の研究」に就て見ても何人も異議がない所である。第四、創見のあるものは他人の説に附和雷同するを要せぬ、白石も氏も此點に於ては同じであつて、着眼が常に高く、且つ議論が偏僻に陥らず、穩健で公平である處がよく似てゐる。第五、史學に必要な語學である、白石は「東雅」を著はした程の言語學者である、氏も亦難解の足利時代の言葉を解して従前學者の指を染め得なかつた「世阿彌十六部集」を注した。第六、考證家の弊は牽強附會の説を立て、船を山下に押し上す風あることだが、白石も氏も考證は常に實際である、例へば、漢字に泥むを非として必らず古語に溯つて判するから直ちに眞諦に觸れた、牽強附會の考證家から見ると甚だアツケないやうであるが、實は眞理は邇きにあるものである。第七、史家の病は政治經濟に通ぜざることにある、この大切な要件を度外に置いて歴史がわかる筈はない、白石は自から經世家を以て任じ、時の將軍のために頻りに策を建てた人である、氏も亦衆議院の豫算を提けて歴史の講壇に上つた人である。第八、學者の病は理論に通じて世態の實際に暗いことにある、史家に於て常識の缺乏は尤も大患であるが、白石も氏も共に常識に富んでゐたから、歴史の批評でも考證でも實際であり、何人も領かる、のは此故である。コ

ンナやうに列學的に較べて見ると似寄りの點が甚だ多い。勿論その優劣などは論外であるが、近世の學者で白石を以て比すべきものは恐らく此人であらう。

白石はあの古い時代に早く西洋趣味があつて「采覽異言」を書いた。氏は西洋風の教育を受けながら西洋歴史を涉獵しなかつた。若し原書で西洋の歴史に目をさらしたならば、更に發明する所があつたであらう。私は之を遺憾とするものである。尙ほ他に遺憾とする一事がある。氏は晩年に歴史辭典の編纂を企てたが、それが成らずして逝いたのは、氏も遺憾としたであらうが、吾等も亦遺憾とするものである。この事業に就て氏は材料の取纏めに二三年の時を費し漸く筆を執らんとするに至つて病を得た。若しこの辭典が完成したならば、地名辭典と雙璧とせられ、長く學界の珍とせられたであらうに、材料は累々として存してゐるが、肝心の氏の頭腦にあるものが全然闕如してゐるから、寄せ集めの材料は精神の無いもので、奈何ともしやうが無い。

## 六 杏林の明星野口英世博士

醫學界の一明星、それは日本人であるが亞米利加に於て世界を昭耀してゐる。その人が餘りに偉いので、亞米利加人は餘所の人となすを欲せず、亞米利加人だといつてゐるのをかしい。此人即ち野口英世博士は、福島縣の猪苗代湖畔オホナジマの貧家に生れ、窮苦の間に學を修め、小學時代から早く麒麟兒として認められた。其三歳の時に誤つて火爐に左手を入れ大怪我をやり、五指が糜爛して不具となつたのを、某醫が折解して救うた。それが多分動機で終に醫學に志を立て、東京に出でからは専ら杏林に身を寄せ、貧苦と戦ひつゝ、醫師の免狀を得た。偶々他日の恩師なるフレキシナー氏が日本へ來遊の際、その通譯を擔當したことが機縁となり、同氏の助手たる約束が出来、爰に渡米の機會を得た。渡米後も幾多困難の曲折があつて、フレキシナー氏が紐育のロツクフェラー研究所を擔任するに迫んで、博士はその助手となり、後には氏を繼いで出藍の名を博し、毒蛇の研究に梅毒の研究に先づ産聲ウツゴエを揚げて先輩を驚かし、後には矢繼

早に細菌に血精に多くの發見をなし、米國の醫界に發見王の名を博するに至つた。此人が米國で如何に名聲が高く人氣があるかに就ては、或る人から聞いた一挿話がある。大統領が外出中遽かに雨に出會つても、途上の人は之を顧みないのに、野口博士が雨に遇つた時、途上の男女は争うて傘を與へたといふが、博士の人氣は是に由つても推測し得らるゝ。

大正四年の九月、博士が十五年振りで歸朝した時、三十日間ほど内地にゐるたが、あらゆる方面から迎へられて非常な人氣であつた。醫界の大家が打揃うて博士を歓迎した時、博士の窮困時代大なる援助を與へた血脇守之助氏が發起人中の會幹であつて、私が博士と妙な縁故があることを知り、私をも其席に加へた。三十幾名の杏林大家の内、私のみが非醫であつた。主賓の左側に北里博士が坐し、其隣りに、昔し私の學生時代に治療を受けた、併しそれからトント遇つたことの無い、齒科の先輩高山紀齋氏がゐた。高山氏も北里氏も博士の微時に少からぬ縁のある人である。その中間に醫者でない私が一人介在したのは私自身にも妙に感ぜられた。他の人々も同じやうに感じたであらうと思つてゐると、血脇氏は如才なく私が特に加はつてゐる縁因を陳べたので始めて私の氣が落着いた。此會の内容はこゝに省略するが、兎に角此會が博

士に取つて最も意味の深いものであつたと思ふ。

博士は滞在中毎夕各所の招待を受け寧日が無かつた。其間に故郷翁島に歸省して久方振に母堂や郷黨に逢つたりした。斯様に多忙でもあつたから、私もシミ／＼談話を交へることが出来なかつたが、博士は内實各所の宴會に招かれて疲れ果て、私に向つて御馳走は迷惑だといふたこともある。それも其苦、博士の如き學究肌の人物を、見せ物扱ひをしてゐる氣味もあつたからだ。私は博士に云ふには、君も折角歸朝したのだから、歸米迄に大隈侯に遇つてはどうか。若し遇ふ積りなら、自分が案内する。決して多くの時をかけぬと云ふと、博士は喜んで、それは何寄りも望む所だと云ふので、一日伴つて早稲田に行つた。侯はいつものやうに快濶に應接され、博士の功勳を激賞された。果ては博士から侯と寫眞を同寫したいと求め、博士は親しみのある態度で侯に靠れつ、同行の博士の友人石塚三郎氏に依つて撮影された。侯の邸に在る一時間許にして、私は博士と石塚氏を拉し、自動車を驅つて私の落合村に於ける小莊に伴うた。博士は落着いてから云ふには、歸朝していろ／＼の會に招かれたが、今日大隈侯に親炙が出来たことほど愉快のことは無かつた。今日が三十日中の眼目であつたと喜びを述べられた。

私が博士の百忙中特に私の田舎家に伴つた譯は、郊外の景色や農圃の風物を味はせて、彼れをして故郷を偲ばせたいと思つたのと、毎夜形式的の佳肴に攻められてゐるのを救ひ出し、彼れを書生時代の境遇に置いて見たいと考へたからであつた。此日饗應にと供したものは、僅かに三種に過ぎなかつた。第一は釜から取り出した計りの焼芋を大皿に満載して出し、吾家の菓子はこの物であるのに、連日連夜高等の饗應は續いたが、何人もこの種のものに思ひ到るものは無かつた。實は博士の性來の嗜好を知らないから、工夫もそこに及ばなかつたのである。博士は私の意外の饗應を心から喜び、日本滞在の最終の日は單に偉人に會した満足のみでないといふは別れに臨んで、旅行用の日本の筆研と、かねて博士の氏名を刻させて置いた、印三顆を祖道として贈つた。博士は日本の書道にも天分があつて、席上美事に揮毫されたものが今も存してゐる。私は博士に云ふに、君は書に趣味がある。ペンばかりを遣はずに、たまには本國の筆研を用ゐて故國を偲び給へと云うたが、米國に戻つてから私の注文通り日本の筆で書いた禮狀が到來した。

右の原稿を作つて十日ばかり経つと、新聞紙は一大悲報を傳へて吾等を驚駭せしめた。その報道は、黃熱研究の爲め阿弗利加に出張中であつた、野口博士は疫毒の侵す所となつて客死したとある。吾等は世界の醫學界のため一明星の殞ちたことを深く悲まざるを得ない。發病の動機などに就ては未だ委曲を知ることが得ないが、或は云ふ、博士は自家の身體を實驗用に供した爲めに此不幸が起つたと。斯様の事は研究家に往々あることである。殊に自家の發明に確信ある博士であるから、多分事實であらうと思はれる。果して然りとすれば、實驗のため身を犠牲に供した、高い精神を崇敬せねばならぬが、それだけ此人を喪つた事を哀惜せねばならぬ。私は博士の訃に接して感慨に打たれてゐる間に、往年博士が私の別荘で揮毫した額面のことに思ひ到つたが、その書かれた文字は何であつたか、既に忘却した。急にそれが見たくなつて、一年に一回も行かない別荘に出かけて、やつと捜し出して見ると、幸ひ汚損も蠹喰も受けずにあつたが、その文字はと見ると「過如不及」とあるので、私は沈思した。成る程私の性格を識る博士が此語を撰んだのは、これを座右の箴とせよとの意であつたに相違ない。併し此語は私の爲めの箴であるのみでなく、亦博

士の箴とすべきものであつたと思つた。一身を學界に捧げるを本分としてゐる博士としては、自ら實驗の犠牲となるのに不思議はないやうであるけれども、吾等より考へれば、過ぎたるは及ばざるごとき感なきを得ない。博士はまだ老境に達して居らぬ。今少しく自重したら、更に人類を益する幾多の發明もあつたらうと思ふと、額面に對して黯然たらざるを得なかつた。

博士が如何に研究に熱心であつたかに就ては、これを目前に見た阪上弘藏博士の談を爰に附記するの必要がある。阪上氏が前年米國で野口博士を訪はんとした時、電車の中で日本人がゐるから、野口博士の事を問うて見ると、其人が即ち博士であつたので、幸の事と連れ立つて研究所に出かけると、野口博士は自家の研究室の前に立止まり、何か默考してゐるが、失禮だが爰に暫時待つてゐてくれと云うて、博士はひとり室に入り、自分は廊下に佇立して博士の出て来るのを待つた。此間約一時間、博士は漸く出で來り、失禮をしたと云うて、始めて室内に導いた。實は博士は何か研究上考へ出したことがあつたので、打措かず、實驗に取りかかり、それが爲め一時間待ちぼけを喰はされたのであつた。併し自

分(阪上氏)はまだ仕合せの方で、一時間待つて室に入ることを得たが、或る人の如きは、幾時間も戶外に待たされ、終に空しく歸つた例もある。これは博士が實驗に熱中の餘り、人を待たせてあることを全く失念した爲めで、斯くの如きは博士に珍らしくないことである。

阪上氏は親しく博士の實驗の模様を目撃して、驚嘆を禁じ得なかつたと云うて語らるゝには、あんなに氣根のよい人は西洋人にも無い。單調を破る、別々の實驗ならば、終日若しくは數日に互つても、持續の出来るものであるが、博士は一つ事を幾十回も繰返しても、少しも倦んだ氣色がない。自分が目前に見た實驗も一つ事を幾十回も繰返されたが、尙ほ數日同じ事を繰返さねばならぬと云はれたのは驚いたが、如何にも研究家は斯くあらねばならぬと語られた。博士に澤山の發明のあるのは偏へに斯かる努力の結果であると思ふと、醫學に門外漢である、私などでも滿腔の敬意を捧げざるを得ないのである。

## 七 畫家渡邊省亭の起身談

明治の時代に名聲の高かつた畫家の中で、菊池容齋派の畫家として知られた者が二人ある。一人は松本楓湖、一人は渡邊省亭で、世に並び稱せられた。この渡邊省亭に就て、立身談ともいふべき多少の話がある。

彼は幼少の時分或る質屋に預けられて、丁稚奉公をして居つた。まだ十二三歳の小僧であつたが、天稟畫が描けるので閑さへあれば人形を描いたりなぞしてゐる。質屋の店先でかやうな事をして居つては邪魔になるので、時々朋輩に叱られたりして、遂には押入の中に隠れて筆を執るやうなことも屢々あつた。

處が或る時、その描いたものが主人の眼にとまつた。

「別に師匠もなくて是だけ描けるのは感心だ。是は質屋奉公をさせるよりも、やはり其道の人に就て教へを受けさせたなら、他日は相當の繪師になるかも知れない。」

いたく感心した主人はかう考へて、その親許に次のやうに勸告した。

「自分は別に此の子の世話をしたくないといふのではないが、質屋の丁稚をさせておくのは惜しいものだ。是程の天分のある者をその道に育てないといふことは此の子の爲にも損であり、お宅の爲にも損だと思ふから、何とかして相當の師匠に就かせ、好きな道を習はせられたがよいでせう。」

そこで親達も、この子のために然るべき師匠を探すことになつた。其時分名高かつた畫家はいろ／＼あつたらうが、菊池容齋の名が喧傳されてゐた。この人は「前賢故實」といふ本を著したことがあり、古今の人物の風采竝に其時代々々の服装を摸寫するに非常な苦心をしたもので、その本は今日も名高いものになつて居る。省亭は傳ツツを求めて、その容齋の門に入ることゝなつた。

昨日迄は質屋の小僧として、人目を避けながら筆を執つてゐた少年が、今は名高い畫家の家庭に入つたことであるから心中非常な喜びで、誰に遠慮氣兼ねいらず、天下晴れて思ひのまゝに描きつゝけた。

併し、先生の容齋は一向手本も出してくれなければ、描き方を教へようともしてくれない。たまに描いたものを持つて行つて見せると、たゞ眼を通すばかりで何も云はない。或るとき椿の花を描いて、少年畫家は内心非常な得意であつたが、先生は例によつて、冷然としたま、批評もせず、善いとも悪いとも一言も云つてくれなかつた。

先生の態度はいつもこんな風で、折角弟子になつたのに何も教へてくれないから、まア普通の弟子ならば、失望する所であらうが、省亭は敢て失望することもなく、毎日心任せに遊戯半分で描いてゐた。勿論多くもない門人中殊に少年でもあるから、家の掃除とか、走り使ひなどにも使はれたのである。

處が容齋は時折散歩がてら戶外へ出かけることがあつて、その時はきつとこの少年を連れて行つた。その頃容齋は七十位の老人であつたが、餘程達者だつたと見えて、細君が「杖をお持ちなさい」と云つて特に持たせると、家の前だけは杖をついて出るが、家を離れるとすぐ少年に之を持たせ、自分は何の助けもなく、ドン／＼歩いて行くといふ風であつたが、その散歩してゐる間が實は偶然なのでなく、この少年が何等かの教訓を得るのはかやうな場合であつたの

だ。勿論散歩中も、別に畫の描きやうを教へるではなく、たゞ黙々として歩くだけである。

或る時、上野の山に花が咲き始めたといふので、先生の足はその方に向つた。丁度山の入口につくと、そこに石があるので、先生は茲で一休みしようといつて、少年も共に腰かけながら四邊を眺めてゐた。丁度その時である。下谷の藝者が何處かの席へでも呼ばれて行くらしい風で、盛装して二人の前を過ぎ去つた。先生は見るともなしに見てゐるが、別にそれに就て何事も云はなかつた。が、家へ歸ると少年は先生の前に呼び出されて、いきなり次の様な問をかけられた。

「今日上野で休んで居つた時、藝者が前を通つたらう。」

「え、通りました。」

「あの女はどんな色の半衿を懸けてゐるか、帯の模様はどうだつたか、云つて御らん。」

「……………」

まだ少年ではあるし、色氣も何もない時分だから、藝者が通つた位の記憶はあるが、その服装などは更に氣にもとめなかつた。まして半衿の色とか、帯の模様とか、そんな細かな點を注



意しよう筈もない。それなのに、こんな意外な質問なので、少年はすつかり答へに窮して了つて、たいモジ／＼してゐると、先生は頗る不興けな顔をしてブツ／＼口で云つてゐたが、たうとう、

「い、から彼方へ行つてろ。」

と如何にも腹立たしさうに叱りとばして、そして晚餐の時もやはり機嫌が悪く、不味さうに食べて了ふといふ有様であつた。これはほんの一例に過ぎないが、實はかやうな事が容齋の一種の教育法であつたのである。其後もかうした事が切々起つた。が、何時も／＼餘りに注意を拂はぬ方面の事ばかり尋ねらるゝので、多くの場合はつきり答へる事が出来ず、その都度先生の不興を買ふばかりであつた。

或る時また同じ寸法で散歩に出かけた。今度は谷中の天王寺に向つたが、彼處には五重塔ゴヂユウノタが建つてゐる。先生はまたこの塔の近邊に腰かけてながめ出した。少年は、先生がまた塔を見て居るから油斷がならぬぞと思つて、自分も頻りに見て居つた。併し別に何事も感じない。歸つたらまた先生から質問が出るだらう。一體どんな質問だらうかと考へてみるが、豫想がつかぬ。

あれかこれかと考へながら歸つて來たが、家につくと案の定また呼出された。

「今日見た塔についてお前はどうか考へる。屋根が幾つも重つてゐるが、一つも違つてゐなかつたかどうだ。何か氣についたことはなかつたか。」

さア、またやつて來たが、今度こそ巧く答へねばならぬと思つて、いろ／＼思ひ起して見ることが、先生の見た所には一向氣がつかなかつた。どうしても思ひ當らぬので、また仕方なく、

「どうも分りません。」

「馬鹿ッ。」

例の通りまた叱られて、スゴ／＼と席を起上つた。その頃迄には多少月日を重ねてゐたわけであるから、描き散らしたものは誰が見ても進歩の迹があり、容齋もこれはモノになると内心考へてゐたには相違ない。併し、いくら試みても急所にはまる答へをしないので、何時も／＼叱られるのが落ちであつた。それを容齋の妻が側から見てゐて氣の毒に感じ、或る日容齋の不在の時少年をよんで、

「今日はお前に一日暇をあけるから、も一度天王寺に行つてよく塔を見ておいで。先生の云は

れた所を注意して見たら、きつと何か気がつくだらうから。」

と優しく勵ましてくれたので、彼は早速天王寺に出かけて一生懸命に塔を観察した。すると先生の云つた通り、どの屋根だか變つた所があるので、「成程是だな」と今更先生の眼力の非凡なるに驚き、物を寫すには非常な注意が必要な事を感じた。そこでいそ／＼と歸宅して、

「先生、今迄は寔にウツカリしてゐて注意がとゞきませんで済みませんでした。實は今日塔を注意してみました。斯く／＼の通りでした。」

と自分の研究した所をぶちまけて話すと、流石に自分の思つた壺にはまつた事を云ひ出したので、何年この方笑顔を見せなかつた容齋が嫣然笑つて、

「其處だ、其處だ。」

と大層よろこび、折節何處からか到來した菓子箱のまゝ、與へて、その晩の食事も大層愉快さうであつた。

かねて内實は頗るこの少年に期待する所があつたと見えて、今の事があつてから俄かに容齋の態度が變つて、その翌日は、態々先生自ら五重塔をいろ／＼に寫した粉本を取出し、

「お前が塔に就て多少工夫をしたそれに愛で、之を與へるから、尙ほ之に就て一層研究したがよからう。」

と茲に始めてお手本らしいものを授けられた。それ迄はたゞ散歩に連れられて行つて、歸ると種々の質問を受け、先生の不満を買ふ事が連續したことは前述の通りであるが、これぞ自發自得を主眼とする容齋の教育法であつて、自發的に考へを促すといふのでなければ、本當の發明は出來ないものだ、といふのが彼の信條であつた。是は獨り容齋のみならず、近頃有名であつた橋本雅邦の如きも同様で、嘗て下村觀山氏から次のやうな話を聞いたことがある。

「雅邦先生の門に入つてから時々何か描いて行つて示すと、先生は何時も褒めて下さる計りで一向なほして下さらず、別に教へても下さらなかつた。併し、對坐してゐると、言外に何等かの教訓を得るやうな感じがし、少くとも人格上の教育を得て、それが爲に畫に多少の品位を持たせることが出來た。」

總じて昔の教育法は、この自發を促し自得させる事を主眼としたもので、徒らに細々しく教へるよりも、寧ろその方が徹底的であり、且つ眞實なる教育法であると思はる。

省亭が追々功を積んで大家となり果せたのは、畢竟この自發的の教育法が與つて力あつたのであらう。併し、かゝる教育を受けるといふことは却々つらいことである。又それを行ふ師匠も、内實はやはり案外つらみのあつた事であらうと思ふ。省亭が晩年に至つてその時分の事を想ひ起し、つくづくそのつらかつた事を涙ながらに物語り、同時に師恩の深かつたことを語り出したことがあつた。

省亭は一體純江戸つ子であつて、その行ひが輒もすると奇矯に流れた。併し、それが江戸つ子の眞面目である。

或る時何れからか畫を頼まれて、絹本に三幅對を描いたが、頗る上出来であつた。で、依頼者からは何百圓といふ謝禮金を持たせて、受取りの者を寄越した。然るに受取つて歸つて二時間ばかり経つと、その使者がまたやつて来て、丁寧に挨拶していふには、

「主人は之を見て、大層結構に出来たと喜びましたが、生憎この懸物は尺が少しく足りないの  
で床に嵌りかねますから、甚だ恐入りますが、どうか少し尺長シヤクナガに描き直して頂きたいと申し  
まして御座います。お禮金はいくらでも差上げますから……」

省亭は黙つて聞いてゐるたが、いきなり先刻持つて来た包みのまゝである禮金をその使者に返して、

「畫といふものは、同じものが二度描けるものではない。」

と云つたきり何も云はず、その目前で三枚の絹本を、ビリ／＼と裂いて、その儘奥へ引込んだ。或る人が丁度其處に居合せて、その畫の裂かれるのを見て、如何にも惜しかつた、と私に語つたことがある。是はほんの一例に過ぎないが、この意氣が江戸つ子でもあり、又藝術家肌でもあるといふ事を明かに物語るものである。

省亭は頗る潔癖で、家は廣くもなかつたといふが、非常に綺麗に出来ても居り、掃除も行届いてゐて、臺所の如きは一塵もとゞめず、殆んど鏡のやうに拭きこまれて居つて、其處に置かれてある器物は勿論、漬物をする樽の如きも、小氣味のいゝ程綺麗にされて居るといふ風であつた。で、可なりの生活をして居る彼にとつて、風呂をつくる位は何の面倒もない事であるのに、矢張り江戸つ子氣質で、錢湯が好きで、毎日其處へ行くのを例とした。そこへ行く場合にも、僅か一町かそこらの極めて近い所であるのに、手拭を提げてブラ／＼歩くといふ遣り口で

なく、必らず俵を僦ひ、それも極めて清潔で、そして綺麗に造られたのを選び、それに乗つて出かけて、浴し了ると、携へた香水を全身にふりまくといった調子であつた。

彼が最も好んだ食物は鰻で、有名な鰻屋だと必らず道の遠きを厭はずして食ひに出かけたり、或は取寄せたりしたものである。鰻ばかりでない、一體非常な食道樂で、殊に平凡な食物を嫌ひ、必らず何人も口に上し得ないやうな時節外れの物を或は魚河岸或は野菜市場から取寄せて、贅澤な料理屋ですら用る得ない、所謂ハシリの品を、價にか、はらず購うてそれを食するのを興味とした。だから、その臺所には頗る珍物があると云はれてゐた。

省亭と極めて懇意な大商人、名を忘れたが、随分省亭に目をかけて、省亭にとつてはバトロンといふ格の人であるが、それがいろんな用件で屢々使ひをよこす。やはり或る時何かの用で小僧をよこしたが、折節正午に近いので、省亭は家族にいひつけて、午食をくはせて歸した。主人は小僧の歸りが遅かつたので、

「お前食事はどうした。」  
と聞くと、

「渡邊さんが御飯を食べて行けと云つて、御膳をお出しになりましたから、頂戴して参りました。」

と答へた。そこで主人は、渡邊の事だから何か妙なものを食はせたに違ひないと考へて、何を食つてきたかと聞くと、まだ其季節には、食道樂にあらずんば殆んど氣もつかぬであらう所の、時節外れの鱧を皿に附けてくれたのであつた。

それを聞くと主人も、  
「ヤ、流石に省亭だ。だが、こんな小僧に惜し氣もなく鱧などを食べさせるとは、省亭もなかなか變り者だなア。」

と手を拍つて笑つたといふ話がある。以て彼の食道樂を知るべしである。

此の純江戸つ子肌の畫家が曾て何らかの折に洋行した事がある。彼もさる者である、其洋行に就て服裝を考へて、斯くあるべしと工夫したものが何かといふに、法被股引の扮装であつた。其法被の背中に何か大きな紋のやうな徽章があつたかどうか、そこ迄は知らないが、よく云へば意氣な扮装、悪く云へば職人姿といふ服裝であつて、其の人が日本に隠れもない畫家である、

それがかやうな姿で臆面もなく歐羅巴を旅行した。そこに彼の面目躍如たるものがある。

外國人の眼にこの服装が如何に映じたか。或は西洋の服装にや、近い所もあるから、案外外人の眼にはよく映じたかも知れぬが、こゝに珍とすべきは、この先生が金髪美人の心を捉へ得た一事である。

省亭は一體非常に豊満な、かつぶくのよい體格で、日本人には罕に觀る所であるが、或はこの體格が美人の好むところであつたかも知れぬ。何れ惡所であらうが所は獨逸で、或る溫柔郷の出來事である。深夜閨房の外に、窓を隔て、内方を窺ふ者があつた。美人はそれを叱して、頻りに斥けようとしたが、その者は何時迄も立留つて退く様子もなかつたので、遂に彼女は起き上つてピストルを取出し、それに擬するに至つて漸く逐ふことが出來た。この窓外の人物は云ふまでもなく、この女の情客の一人であらうが、それにピストルを擬してまで、この法被先生に情を専らにさせたなどは省亭此の處大成功で、却々隅に置けぬ、と在留の日本人たちが彼に感服したといふ一笑話がある。

松本楓湖は同門であるが、是は何處迄も先生の風一點張りで一向變化がない。そこに行くと

省亭は、前にも云うた一種の教育を受けた結果として自發自得の味ひが頗る多い。即ち言ひ換へれば省亭の畫には獨特の所があり、畫の種類も頗る多方面にわたつて居る。その畫には何となく粹な所、氣のきいた所があるので、殊に下町邊の人々に喜ばれた。

彼は多くの場合、自分の好みの裂で表装をした。その裂地はいろ／＼あつた様だが、業平格オウジヤウ子などがその好みの一つで、それで表装すると畫とよく調和した。全體畫家が自分の好みの表装をする例は強ち少なくない。昔し岸駒が、必らず自分の出入りのものに袷具をさせるといふ事を條件として畫を描いたと云はれて居るが、併し、この岸駒の場合は貪る方の趣意から出たので、表装代にいくらかをかけて、表装からも幾何かの金をはねるといふ、頗る卑劣な仕方であつた爲めに、人々が擯斥した。省亭の場合は全くそれとは異つて、自分の畫を引立てるために、自分の好みの裂地を用ゐるのであつて、やゝもすると自腹をきつてまで、その好みの裂を使はせた。大體自分の畫を人に贈る時などは、自分でよく畫に調和する裂を用ゐて、立派に表装をして贈るといふのが例であつた。何處までも純江戸つ子式で、少しも卑陋のところがない。

## 八 隠れた畫家長井雲坪の事蹟

私の郷國越後に生れた畫家で長井雲坪といふがある。埋没して一向に聞こえなかつたのが、掘り出されて、或る數寄者に珍重されるやうになつた。私は郷國の畫家の作品は新古に拘らず、大抵見てゐる積りであるが、此人の畫を見たのは近年の事である。尤も此畫家は越後に生れたけれども、長崎で修業し、それから支那に遊び、一トかどの畫家となつて歸つて來ても、郷里に歸省したことはあるが、重もに信州に住し、終に信州に歿したので、その作品は多く信州に存し、郷國には餘り残つてゐない。私が長い間此人の畫に接しなかつたのは此爲めである。信州に多く此人の作品が散らばつてゐても、多くの人は田舎繪師の畫と輕んじて東京へ持出すこともなかつたらしく、私は東京に於ても近年まで見受けなかつた。

この人の畫を始めて世に紹介した人は東海銀行主菊池惺堂氏などであらう。氏は隠れた畫家の作品を特に集めて、それを品鷹月旦して不幸なる作家の爲めに氣を吐いたが、長井雲坪も掘

り出された一人で、私などは其お蔭で六七年前始めて寓目するを得た。雲坪の閱歷に就ても惺堂氏の書いたものを見て始めて知り、その超脱の人格と奇警の行動とは少なからず惹きつけられて妙に興味を感じた。ひとり私ばかりでなく、書畫界にも影響して、一時この畫家の作品に高い價が附され、埋没してゐた畫が多く東京に持込まれた。雲坪の名が段々高くなるにつれて、其人の經歷の委曲を取調べゝる人も出て來たが、尤も委しく書いたものは、私の知る所では、一昨年春頃であつたか、村松梢風氏が「中央公論」に書いたのがそれである。

私は此人の作品を五六幅所藏してゐたが、多くは人から贈られたもので、皆傑作と云ひかねる程度のものである。それにしても此人の特徴は十分に現はれてゐて、その飄逸の筆致と南畫の神髓に觸れ、毫も匠氣の無い處を看取することが出來た。私は常に此人の傑作を見たいと心掛けたが、その機を得なかつた。然るに昨年郷國新潟に歸り、滯在中私の友人がこの畫家の末弟の子息長井鴻一といふ年の若い人を伴うて來た。其人は此頃出版された許りの二冊の畫集を携へて示した。それが雲坪の畫集で、信州の數寄者に依つて上版されただけに、其國に珍藏されるものが七八分を占めてゐた。これには多くの畫が收められてゐて、山水、人物、花卉、各

方面に涉り、書幅も若干あつた。複製ながら此人の書を斯く多く見る事はこれが始めて、眞に雲坪作品の大観であつた。此内には少なからず傑作もあり精作もあり大作もあり、皆氣韻が生動してゐるので、少なくとも氣韻に於て越後南畫家の首位に置くべきものと思つた。有體に云へば、自分が思つてゐたよりも、より以上の手腕を有するものであることを感じた。流石に支那に修業もしたから、ともすると日本畫家に免かれ難い倭臭といふものがない。最初長崎の鐵翁や木下逸雲に師事した關係から、どこことなくその筆致もあつて、蘭などは頗る鐵翁の風を格偲ばせるものがあつた。私が此畫集を見て別に得る所があつたのは、雲坪は畫に力量があつたのみでなく、書に於ても造詣の深かつたことを始めて知り得た。これ迄雲坪の書は畫の題識にのみ見てゐて、さまで書の妙を感じもしなかつたが、大字の書幅を見るに迫んで、斯道に於ても決して日本文人に一步を譲るものではないことが知れた。草體の書が殊に美事で、王鐸の風がある所から判すると、此人に私淑したらしく思はる。楷書は極めて希に觀るものであるが、この集の内に細字に書いたものがあつて、それを見ると、趙士謙でも學んだかのごとく、なかなか見上げたものであり、雲坪は確かに書を以ても立つことの出來た人と思はれた。恐らくは

彼れ自身の抱負も亦そこに在つたのではあるまいか。

雲坪の閱歴は近頃世に知れてゐるから、それを改めて書くには及ばない。私の此稿を草するのは、其閱歴を繰り返して書くのが目的ではなく、これ迄書かれたのには多少の誤謬もあり、餘りに潤色に過ぎて事實と遠かつてゐることがあり、又事實の漏れたものもある。それを聊か正したり補うたりして見ようと思ふのに過ぎぬ。大體雲坪の經歷は、前に惺堂氏に書かれ後に村松氏に書かれたやうに、藝術家にふさはしい、脱俗、奇警、清貧、不遇などが經緯をなして興味のあるものである。併し郷國で雲坪の親族に就きて親しく聞いて見ると、可なり誤りが傳はつてをるやうである。その誤りを正せば、却つて面白味のある經歷を無趣味にする氣もないではないが、事實は事實として傳へねばなるまいと思ふ。

今までの雲坪の傳として書かれてゐるものを極めて荒ッボク叙して見ると、

雲坪は新潟に隣る沼垂ぬまひらの貧家に生れ、其家は豆腐を作るを業とした。雲坪は天性畫を好んで、遠く長崎に師を求めんとした。同村に篤志の老婆があつて、其志を隣み、これに幾許の旅費を與へ、且つ日蓮行者の白装束を給し、旅中の便を謀つてやつた。雲坪は此好意

で長崎に辿りつき、初め鐵翁に學び後に逸雲に學んだ。逸雲は彼れを愛して雲坪の雅號を與へると共に自刻の印を與へた。逸雲が江戸へ上る時に彼れは從者として隨ふべきであつたが、その折は病んでゐて、それが叶はなかつた。然るに逸雲は江戸から長崎へ歸る途中船が覆没して、從者たる一門人と共に魚腹に葬られた。彼れはこの不幸を聽いて深く悲しみ、自分が師に隨伴したら共に死すべきであつたが、その不幸を免かれたのは全く偶然であるから、師に殉ずることを決して忘れぬと茲に發心した。彼れは後支那に遊ぶの機を得て、その後藝術は益々進んだ。歸朝の後は、同じく支那に遊んだ安田老山は東京で時めいたが、彼れは郷國にも歸らず、信州にクスブレて、或る時は戸隠山に隠れたりして、常に清貧の境に在つた。彼れは或る旅舎で重患に罹り、深切の看護を受けた女中があつたが、終にそれを納れて妻とした。或る時老山が信州を通過の折、此舊友を態々訪ねて見ると、頗る貧生涯に居るので氣の毒に思ひ、酒間一封の金を贈つたのを、雲坪は一旦は納めたが、「君もこんな田舎にクスブレてゐるずに東京へ來てはどうか」といふと、雲坪は遽に氣色を損じ、曩に受けた封金を無理やり返して家から追出したと云ふ逸事がある。又彼

れは深く師恩を感じて逸雲自刻の印を常に神棚に上げ置き、これを用ゐる時は再拜して卸し、戴いてこれを捺したといふ逸事もある。彼れが晩年重患に罹り不起と覺つた時は、藥劑を一切排して、師に殉ずる微忱を表したとも云ひ、又己れの葬式は日蓮宗の禮を以てすべしと遺命をしたのは、老婆の恩誼を忘れなかつた爲めだと云はれてゐる。雲坪は旅で得た妻を喪つて、後に妻を迎へた。先妻には子がなく、後妻には子が四人あつた。

以上が雲坪の閱歷として世に現はれてゐる大略である。これに由つて見ると、雲坪の風格は時流を抜いてゐて、徒らに名を賣るものでなかつたこともわかり、恩人に對しては信誼の厚かつたこともわかつて、滔々たる輕薄文人とはおのづから其選を異にしてゐる。此人にして風韻の高い畫を作つたのは決して偶然でない。同じく支那に修業した友人の老山が一たびは時めきながら、今は却つて顧みられず、埋没したる雲坪の作品が歿後幾十年の今日珍とせらるゝに至つたのも怪しむに足らぬと思ふ。

以上略傳の内、どれだけが事實で、どれだけが誤りであるか、自分は未だ十分調査の暇もないが、蓋し大體は事實であらうと思ふ。たゞ雲坪の家庭に就ては漏れてゐることが少なくない、



又誤つてゐることもある。自分の今度調べたのも重にその方面にあるので、前に掲げた雲坪の一族長井鴻一氏から得た材料に据つて二三叙べてみる。

雲坪の俗稱は長井元次郎で、父の名は甚六と云うた。母の名は不明であるが、其實家は越後北蒲原郡太子堂の石井兵左衛門というて、かなりの家であつた。雲坪には二人の弟がある、次弟は廣五郎、末弟は末太郎。

廣五郎は北海道で土木の業に成功し、其跡は今も函館で西洋家具店を営み、斯業界の随一と稱されてゐる。此人の姓が長井でなく長岡と云うてゐるのは戸籍の誤りで、廣五郎の屋號が角長で、其商標が四角の角のトレた其中へ長の字を書いた所から、戸籍吏が見誤つて長岡としたのが本で、姓はやはり長井である。北海道へ籍を移したのが明治十三年の頃で、其際書き誤つただけでも、それを改めずに今も長岡と呼んでゐる。

雲坪は父の死後家督を相續し、雲坪の雅號を本名として戸籍に記されてゐる。雲坪の先妻には子が無かつたので、末太郎を養嗣子として家を嗣がせた。然るに雲坪の後妻には四人の子があつたから、其一人を末太郎の養子とした。四人の子は今も健在である。

雲坪の家は醫を業とした。雲坪を長崎に遊學せしめたのも醫業を修めしめんとしたのであるが、雲坪の志は醫にあらずして畫に在つた。彼れの長崎行は十五歳の持で、一家の同意を得て出かけたので、脱走ではなかつた。旅費は家から給されて、不自由のあつた譯ではない。或る老婆が與へたのは錢別で、日蓮宗の白衣を貰つた譯は、途中行者の姿で行けば安全であると老婆が心付いての厚意であつた。老婆は十五歳の少年の長旅を心配したものと見える。

長崎で雲坪が身を寄せた醫家が二軒ある。其内の一は渡邊清藏で、號を紫雲というた。他の一軒の名は不明であるが、この渡邊は渡邊華山の崇拜家で、其家には華山の作品が多く藏されてあつたといふ。

雲坪は醫家に託されたのだけれども、其志これにあらずして、畫にあつた所から、渡邊も終に共鳴して自から鐵翁に紹介し、後に鐵翁から逸雲に紹介して畫を學ばしめるに至つた。則ち雲坪は二大家に師事したのである。

一旦長崎から歸國したのは雲坪が十八か十九の頃で、本人が醫學を修めず、外の修業をしてゐるのを、親族は面白からず思ひ、近親の病氣を口實に呼び戻し、本人に異見を加へんとした

のであるが、彼れはそれに應じなかつたのである。

この歸省の時は父母は既に無く、末弟も當時母の實家に引取られてゐたので、雲坪も太子堂に赴き、母方の家に寓した。尤も沼垂には從弟長井由次郎といふがあり、そこにも僅かの間滞在し、竹馬の友である醫師小林某と共に始終飲み回つたと傳へられてゐる。

雲坪の家が豆腐屋であるかに傳へられてゐるのは誤りだ。從弟由次郎の家が豆腐屋であつたのは事實であるが、併しそれも近年の事である、それを取違へたものと見える。現在は其業を廢したと聞くが、沼垂には此由次郎の分家で、長井姓を冒してゐるものが他に一軒ある。

雲坪の支那に赴いたのは三十一二歳の頃で、三十八九歳の時再び歸郷したことがあるが、次項に記する理由で信州に去り、それが動機で信州に永住することになつたと云はれてゐる。

この歸省の時鬱勃の念遣り難く、由次郎宅に寓して舊友小林醫師と連日痛飲をつゞけてゐると、里人は一途に長井が名醫となつて歸つて來たと思ひこみ、大勢の患者が山なす勢ひで由次郎の門前に群をなした。雲坪は驚いて倉皇裏口から逃げ出し、到底郷里には居り難いと信州に入つた。

又長崎の鐵翁門下に在つた青年時代に一たび歸省したことは前にも言つたが、其際母の實家に滞在中、眼疾に罹り臥床してゐると、一人の旅繪師がやつて來て、鐵翁の門人であるが、一枚書かせてくれと云ふので、家人は畫師と聞いては無下に僉略にも出來ず、家へ上げて雲坪に其事を告げると、雲坪はこゝへ呼べと枕邊に招き、眼に繃帶を施しながら起き直り、俺は鐵翁門下の桂山（其頃はかく號した）だが、同門に君の名を聞いたことが無い、察する所、君は鐵翁門人を詐稱するものであらう。苟くも畫家ともあらうものが名家の名を利用するとは不埒である。速かに立去るべしと大喝し、家人に命じて追出さしめた。家人は此繪師の爲めに飯の用意もしてゐたのであるが、繪師はよもや鐵翁門人が此家にあらうとは夢にも考へず、一時の方便に鐵翁門人と云うたのであるが、さて見現はされては寸時もゐた、まらず、一散に遁け出したのを、家人は何故とも知らず氣の毒に思つてゐると、雲坪は且らく默考してゐたが家人を呼んで、あの男はまだ遠くへは行くまい。呼び戻せと云ふので、二三の壯丁が手別けをして追跡したけれども終に行方が分らなかつた。後に弟が何故急に呼び戻す氣になつたかと聞いたら、あの男は師の名を利用して不埒の奴だが、その畫は相當に出來てをる、今少し修養を経れば立

派な畫家になるであらう。それを怒りに任せて追出したのは不覺であつたと悔いたといふ。

沼垂に於ける淨徳寺は雲坪が幼時手習に通つた縁故があるので、最初長崎から戻つて來た時繪馬を描いた額を納めたことがある。二回目に歸省した時、其額はどうなつたとしきりに見たがつたが、終に見當らなかつたので、雲坪は更に菊花を畫して任職に與へた。然るにそれも今は失せて所在が知れず、任職は残念がり、頻りに物色しつゝ、あると聞いた。

以上の事實は私が長井鴻一氏から聴き得た所である。これまで雲坪の傳として書かれたものと、どれだけ違つてゐるか。今は手許に惺堂氏のも村松氏のも持合はせてゐないから、對照して見ることの出来ないのを遺憾に思ふが、少なくとも親族の直話であるから、材料は精確であると思ふ。若し村松氏のものされた長篇の補遺ともなることが出来るならば、私は本意とするのである。

## 九 頼山陽は何故に人氣があるか

附山陽の逸事數則

東西古今の文豪で長く名聲の傳はるものと否らざるものがある。必ずしも其技能の優劣に依るものではない。不朽の大文章を残した人でも忘れられて仕舞ふものもある。一部の人に持て囃されても一般に及ばないものもある。一時持て囃されても久しく續かないものもある。賀茂眞淵は國學の泰斗であるが、社會一般が持て囃すほどポピュラーでない。青木昆陽は偉い學者である。其燒芋屋に尊崇され、豐碑の建設された譯は、その學問の爲めでなく、甘藷移植の恩人としてある。新井白石などの偉い學者でも、俗流はこれを崇敬することを知らぬ。文豪にも頗る幸不幸がある。

世間で蔭日向なく崇敬を博してゐるものは、往々人格が神化する。菅公は文學の祖と云はれ、神としてウオルシツプされてゐる。空海は大天才で永く崇敬の的となつてゐるが、これも亦宗教的である。此等の人の名聲あるのは強ち人氣があるからと云ふ譯ではない。長く國民の人氣を保つものはその言行技能に原因するけれども、單にそればかりに依るとは思はれない。人氣を博するといふには複雑な原因があらねばならぬ。あらゆる美德と才能を備へてゐても、その人が必らず人氣を博するとは言ひかねる。時代の精神に觸れ大衆の氣分に投ずるの素質が無け

れば、人氣は博し得られないものである。

頼山陽が何故人氣があるかといふことを書くに就ては、以上の如き前置が入用だ。山陽といふ人を赤俣々に云へば、實は疵だらけの人である。青年時代は脱藩をした。放蕩をやつて父母を困らせた。勘當の身となり廢嫡された。學問はどうかと云ふと、當時漢學を貴んだ時代には經學の造詣の深淺が即ち學問の尺度であつた。然るに山陽は幾んど經學を修めなかつた。山陽は史家を以て任じたけれども、今日から見ると、その史學はお話にならない程の粗案のものであつた。その最も長所であつた文や詩や書などにしても、當時山陽よりも長じたものがあつたのである。畫などになると、全くの素人畫であることは言ふを待たぬ。そして當時中央の最高學府たる昌平覺に教授の席も占めず、京洛にかゝんでゐて、割合に早世した此人が死後人氣を大いに集めて、年を経るに従ひ、ますます其名聲の揚るのは何故であらうか。

山陽の著述が冷熱なく歡迎を受け、「日本外史」の如きは無際限に版を重ね、版式も種々あり、譯書もあれば註釋書もあり、三四の外國語にも譯されてゐる。漢文の廢り行く世の中に斯くも普行することは、山陽の人氣を見るの一徴であらねばならぬ。およそ山陽に關する著書の明治

以來出版されたものだけでも幾十を數へるであらうが、それが多く賣行のよいのも山陽の人氣が然らしめるものである。山陽の書畫の廣く珍重されるは今日始まつたことではないが、年を経るに従つてますます價を高め、今は空前の價をあらはしてゐる。斷簡零墨と雖も山陽の筆に成るとし云へばそれが珍重されて、破格の價を以て賣買される。大體故人の墨蹟はその居住地に存し親戚故舊の手に傳はるのが通例であるのに、山陽のは全國に分布してゐて、縁故の有無に關係が無い。そして山陽の書畫は高い階級にも低い階級にも喜ばれ、政治家にも商人にも老人にも壯者にも歡ばれてゐる。他の先哲の遺墨の愛重されてゐるものは勿論多いけれども、山陽の遺墨の喜ばるゝのは些しく違つた趣がある。空海や眞淵などの墨蹟になると、愛すると云ふよりも寧ろ敬する方で、所藏者の氣分が違ふのである。床に幅を掲げての氣分にしても、空海眞淵のになると頭も自然下るが、山陽のはそれとは違つて親しむ氣分が起る。畫などは、其性質上誰れの作でも愛玩的氣分が起るものであるが、山陽のは、その書でも畫に對すると同じ氣分が起るのは、大衆の趣味に適つてゐるからであらう。山陽の人氣のある有様は現實人の目前に在ることであるから、これより以上絮説を要せぬと思ふ。

山陽の人氣のある事實は以上の如くである。さてその原因に就いて人は多く言ふ、山陽は幕府の末造に革命氣分の漸く萌した時、「日本外史」を著して勤王の大義を鼓吹し、志士を鼓舞作興するに大いに力があつたから、人氣を一身に集めたのであると。如何にも其通りである。尙ほ山陽の子に三樹三郎があつて勤王の爲めに身を犠牲にしたことも閑却してはならぬ。三樹の遺骸を埋葬するに方り、其片腕を奪ひ去つた幕臣があつた。その人が三樹の片腕を神棚に安置し、毎朝禮拜したと云ふが、此逸事は如何に幕末に山陽崇拜熱の高かつたかを語るもので、幕臣ですら斯くの如くであるから、肉躍り血湧く當時の志士が、山陽の文や詩に激勵されたことは想像に餘りある。併し、これだけの事で山陽の人氣がいつまでも持續するとは思へない。勤王論は今日山陽の講釋を待たず、誰れも心得てゐる。尙ほ又勤王論を熱烈に主張したものは決して山陽ばかりではない。然るにそれらは皆閑却されて、ひとり山陽のみが名聲を持續するのみか、ます／＼その名聲の騰る所以は、他に複雑の原因があらねばならぬ。

愚按では、山陽の作品には民衆に喜ばるべき素質がある。言ひ換へれば、山陽は國民的文藝家であるが故に、廣く長く一般から渴仰される、のであると思ふ。「日本外史」が今日尙ほ讀書子の

愛する所となつて居る所以も、やはりその歴史が國民の嗜好に投するやうに書かれて居るからである。山陽は外史を著はすに就て、一種の新しい文體を工夫した。それが丁度國民の嗜好に適する文體であつたのだ。それより以前の歴史家は、日本の歴史を書くに當つても、無暗に支那の文章を摸倣した結果として、その書かれた歴史は恰かも「左傳」でも讀むかの如く、日本の面目が一向發揮せず、さながら我が歴史を支那人を傭うて書かせた様な風があつたが、山陽はこれを排して一生面を開いた。だからどの頁を讀んで見ても、日本の面目が躍如としてゐる。全體支那崇拜の盛んであつた當時、新體の文を臆面もなく縦横に遣つたのは、大膽なる業で冒險の行爲とも見るべきものであるが、山陽はその冒險を敢てして成功したのである。勿論新體の文にはいつも非難が伴ふもので、「日本外史」の始めて出た時には、其文章に就いて漢學者は彼是云うたものである。丁度昔し漢の時代に司馬遷が「史記」を書いた時に、其文章に就いても歴史の編制に就いても非難があつたと同様である。支那では久しい間歴史と倫理を混同して風教に害ある事を歴史に書く可からずとした。司馬溫公の「資治通鑑」などが其一例である。班固の「漢書」なども、やはり資治通鑑風のものである。司馬遷の「史記」に至つては、歴史

は歴史であると云ふ見解から刺客の傳まで收めてゐる。そして文章もすべて寫實であつて、刺客を傳するにも刺客其人の性格に依つて書き振りを異にし、其人を躍如たらしめてゐる。其歴史の編制は丁度今日の西洋のその如くで、倫理道德とは全く離れたものとなつてゐる。此新體の歴史は當時の史家を驚かし、刺客や盜賊の事蹟を書くなどは以ての外だ、と班固の如きも非難したけれども、後世になつて見れば、此司馬遷のやり口が歴史の本體を得てをると稱讚され、それが不朽の書となつた。山陽の新體の文も司馬遷に私淑したと云はれてゐるが、それが新體であるだけにやはりいろいろ非難もあつたが、終には「史記」同様に不朽の歴史となり、萬戸必備のものとなつた。

漢學隆盛時代には、文章は漢魏六朝の古文に摸倣し、歴史を書くにも飽くまで古體の文に據り、山陽同時代の龜井昭陽などは「書經」の文に倣つて歴史を書いた。それに對し山陽は、そんな無駄の骨を折つても、恐らく世間には流布しまいと云うたが、果して其通りであつた。右の如き次第であつたから、山陽の「日本外史」に對し、いろいろの文章家が筆を加へたものもある。聖堂などでは惡文の標本として、或る部分を抄出して學徒に直させ、文章の研究に資し

たこともある。又史實も頗る誤つてゐるといふて、川田甕江の如きはその誤謬を指摘して全然書直さんと企て、いくばく筆を進めたこともある。實を云へば、「日本外史」は、歴史と見るよりも一篇の詩と見る方がよいかも知れない。考證本位の歴史と見る可からざるは言ふまでもない。併し、史實は正確でないにしても、描寫は如何にも妙を得てをる。英國の史家マコーレーは、グラヒツクの書き方をして世界の稱讚を博したが、山陽の書き振りが亦グラヒツクで、英雄の行動でも戦争の記事でも、さながら繪を見る如き生彩があり、讀者に興味をそゝるのは、主として寫實の文の然らしめる所と云ふべきであらう。

山陽の新體の史筆は國民の嗜好に適したものであつた。それが國民全般の歡迎を受けたのは決して偶然でない。これを繪畫に譬へると、古文家の文章は土佐や狩野の畫のやうなもので、少數の貴族に喜ばれたにしても、國民一般の喜んだものは、寧ろ浮世繪であつた。浮世繪は久しく市井の俗畫として、高い階級に排斥を受けたけれども、實生活を如實に描寫したものは浮世繪である。その廣く社會に流布した點から見ても、これが眞に國民的繪畫であるのだ。一たびは士君子の鑑賞す可からざるもの、如くに考へられた此の畫が、今日となつて世界の趣味家

の賞讃を博し、内地に於ても大いに聲價を發して來たのは誰れも知る通りで、畢竟、國民的繪畫として一般に認められた結果に外ならぬ。「日本外史」の文章はこの浮世繪にたとへるべきもので、その描寫がグラヒックで、讀み易く解し易からしめた點は、丁度北齋や豊國の技を文章の上に試みたものと言ひ得るであらう。又その論贊になると、慷慨の氣が漲つて、懦夫をして起たしめるの力がある。「日本外史」の間斷なく聲價を保つてゐるのは此故であつて、勤王の意が寓されてゐるといふ單純な譯ではない。

全體山陽は、學者といふには餘りに經學に暗かつた。山陽は才の人であつて、學の人ではなかつた。併し、經學に暗かつただけそれだけ其の拘束を脱して、縦横に天稟の才を馳せることが出來た。若し山陽が後ればせに經學者となつて、力をその方面に用ゐたならば何うであつたらうか。遠い過去は兎に角として、山陽の時代に於ては、經學は國民文藝家に取つて既に餘り必要のもので無くなつてゐた。若し山陽が經學に造詣深く、經書の注疏に没頭したとすれば、あの位の天才を有してゐても、恐らくは遂に一學究となつてしまつて、自然種々の束縛を受け縦横の筆を揮ふことが出來なかつたであらう。元來經學者といふものは、多くは文章に拙なも

のである。山陽のやうな氣の利いた文章は、到底經學者に望み得べきもので無い。畢竟山陽は經學に暗かつたが爲めに、却つてあのやうな氣の利いた文章を書くことが出來たと言ひ得るであらう。山陽の文章は如何にも學者ばなれがしてゐて、腐儒の臭氣が無い。そこが又國民の嗜好に投じた所以ではあるまいか。

山陽は青年時代に廣島藩を脱したので、無論藩祿を食まなかつた。後に大家になつてから、諸藩より抱へたいと云はれてもそれに應ぜず、一生處士で終つた。若し山陽が脱藩しなかつたら、無論藩儒春水の嫡子である關係上、その後を承けて藩儒となり藩祿を食んだに相違ない。随つて生活難も無かつたであらうけれども、田舎學者を以て一生を畢つたであらう。如何に氣骨があつても、あれほどの氣燄を吐ける譯のものでない。何の束縛も受けず、自由の境遇にゐたればこそ勝手な主張も出來たのである。父母の藩にすら仕へないのだからと云うて、姫路藩などの聘に應じなかつたのも、山陽としては筋の通つた行き方であつた。山陽は此爲めに生活上少なからず困難を感じた。併し、飽くまで操守を枉げず、權貴に對して屈する所が無かつた。今日では權貴に屈しないなどは餘り困難のことでないが、あの頃は事情が異つてゐた。京都の

文人などは兎角表を飾つても内實は弱く、暮夜密かに權門に媚を呈するものがあり、それが利口のやり口でもあつたのだが、山陽はどこまでも地歩を保つて、有力の藩から書を依頼されても、吾は畫師にあらずと勿附けた。「日本外史」を當時の執權樂翁公に呈するにしても、先方から望まるゝので無ければ呈したくないと頑張つた。内實はいろく運動をやつたにしても、表面は飽くまで地歩を保つたのである。こゝらが全く江戸氣質で、京都の文人としては珍らしい。大田錦城が始めて山陽の居を訪うた時に酒の饗を受け、あとで何と評したかと云ふと、主人も酒も共に江戸風だと褒めたとあるが、蓋し適評である。山陽の布衣的自由の行動は、國民的性格を飾りなく赤裸に發揮したとも云ひ得るであらう。彼れが國民的人氣を博しつゝ、あるは決して偶然でない。

山陽は前陳の如く高く標持したけれども、決して頑固な唐變木でなく、頗る人情に通じた解人であつた。彼れは青年時代には確かに不良青年であつた。彼れは嚴島の遊里に通つたり、寡婦に通じたり、遊蕩資金に窮して悪策を弄したり、乞食姿で脱走したり、捕はれて座敷牢に入られたり、流離時代に備書に甘んじたり、婦を定めんとして拒絶を喰つたり、世味の酸いも辛

いも嘗め盡したものである。彼れは俗物でもあり通人でもあつて、世間を理解してゐる。彼れが言ふことは人情の琴線に觸れ實生活に觸れてゐる。彼れが手紙に妙を得てゐるのも、つまり人情味の發露に外ならぬ。彼れの筆一たび動けば、決して何人をもそらさぬ。其如才ないと云うたら、待合の女將よりも、ヨリ以上である。併し、いつもどこかに地歩を占めてゐる。例へば金を借りる場合ですら、尙ほ且つ自己の地歩を占めて居る。こんな手紙の書きぶりは、到底經學者などの企て及ぶ所で無い。山陽の手紙は、その存命中に於ても一般に珍重され、友人ですら之を保存したものである。爲めに山陽の手紙の今日に傳はつて居るものは非常に多く、自分の寓目したものだけでも五百通に達する。若し全部を寄せ集めたらば、幾千通といふ多數に上るであらう。斯様に珍重され保存さるゝ所以は、山陽が高名な文人である爲めよりも、その書き振りにえも言はれない面白味があるからである。山陽は、確かに手紙の文にも獨創の一體を開いたものと言つてよい。山陽以前には、久しく支那風の形式に拘泥した手紙の體が行はれて居つたのであるが、その形式を破つて、情味本位の、氣持のよい、手紙の書き方を教へたものは山陽であると云はねばならぬ。山陽の手紙は正さに通人の筆であつて、國民用書簡の軌範と



爲すに足るものである。

山陽の書風について見ても、亦國民的であると云ひ得る。晩年の書は殊に熟したもので、適麗の感が深い。能書ではあるけれども、書家の臭氣が無く、又志士的の粗豪な處も無い。何處と無く氣品があつて、流暢を極めて居る。云はゞ萬人受けのする書で、誰れが見ても氣持よく感ずる。其書が近來空前の値を生じて來たのは、全く何人にも喜ばれる書風であるからで、此點も亦廣く國民の嗜好に投じて居るものと言つてよい。

山陽は如何にも多方面の趣味家であつて、此多方面の趣味家であつたといふ事も、亦種々の方面に人受けのよい原因をなして居ると思ふ。山陽は書畫や骨董に鑑識のあつたことは勿論、煎茶もやれば酒も飲む。印を彫つたり、盆栽を玩んだり、平家を語つたり、芝居を好んだり、その嗜好は、有らゆる方面に及んでゐた。この多様の趣味が自然文章の上にも現はれ、従つて其文章には他人の及ばざる趣味を生じて來る。だから風流を喜ぶ人達は、どうしても山陽を喜ばざるを得ぬことになるのだ。書畫の題識とか、骨董の記文とか、それが山陽が書けば重きを爲すといふのも、山陽が其等の趣味に深く通じて居るからで、之を讀めば、何人といへども首肯せざるを得ない妙がある。その書畫屋、骨董屋に喜ばれ、茶家にも酒客にも其他の風流人にも渴仰され、信者の範圍が頗る廣汎である點も、亦國民的であると云ひ得らるゝであらう。

要するに、山陽ほど手廣の信者を有つてゐる學者はない。彼れの信者は全國に及んでゐる、そして或る階級に限られてゐない。山陽は此意味に於て天下の人である。山陽自身も廣島の人として終りたく無かつたので國を脱したのだ。廣島が生んだからと云うても廣島の人でなく、京都に帷を垂れて一生を畢つたと云うても京都の人でない。彼れは日本國民共有の名器であらねばならぬ。彼れも天下の人たらんことを期したに相違ないが、現實の如き人氣を博しようとは、恐らく生前思はなかつたであらう。その著述が無限に賣れ、其遺墨が全國的に分布し、その墨蹟が千金の高價で賣れるなどは、夢にも思はなかつたであらう。しかし、これは不思議でもなく僥倖でもない。廣い民衆の氣合に投ずれば斯くあるのが寧ろ當然である。彼れは意識してか否か、彼れの文藝は當時に於て既に國民の氣合に投じた。別して彼れが暗に冀望した革命後の民衆に投じたから、彼れの名聲がますます揚り、その人氣は年月と共に高まつて來るのである。國民の意氣に投ずれば何事も斯くある筈で、ひとり文藝のみではない。

終りに臨んで一言を要することがある。從來山陽に對して二様の見方がある。即ち山陽を一種の偶像として、その如何なる疵をも辯護する人があると共に、又山陽嫌ひの一派があつて、そのアラ計りを摘發する人もある。併し、その何れも中庸を得たものと云ふことは出来ぬ。私は、山陽を以て最も國民に親しみのある先輩とするものであつて、山陽に買ふ可き處は、常識があり、人間味があり、多趣味、多藝で、且つ頗る氣格の高い處にあると思ふ。従つて一概に之を崇拜することを非とすると共に、その若い頃の瑕瑾をいつまでも叫んで之を罪することを欲しない。私は、山陽を國民的性格を遺憾なく發揮した愉快なる文豪として大衆と共に親しみ、且つその人氣を長く續けたいと思ふ。

拙著「隨筆頼山陽」が媒をなして、山陽に關する種々の物が机邊に集つて來るので、居ながら山陽の逸事を知ることが出来る。先頃兵庫縣本山村安東忠次郎氏より一簡を寄せられた。其中に、山陽が王香と嵐山に遊んだ折誤つて王香携帯の瓢を破壊したので、それを修理して一詩を題した、其詩が録されてあつた。乃ち詩は、

余與王香遊嵐山。誤破酒瓢爲補之。係以詩。

醉破君瓢花外村。補吾膠漆尙溫存。庚々橫理君宜記。亦是春鴻舊爪痕。

襄

右の如くで、破損の處が赤い漆で繕つてあり、詩も同じ赤漆で書かれてゐるさうな。そして此瓢が安東氏の手に入つたと云ふことで、其王香とある人は、私が「隨筆頼山陽」に録した、廣島の王香で、「王香園叢書」を出版せん爲め山陽に序を請うた人であるまいか、と問はれたのである。如何にも名が同じであり、詩の題が嵐山に遊ぶとあるから、山陽の序にもある、王香と嵐山に同游の折の事に相違ない。そして酔うて瓢を破つた出來事と、其瓢の山陽の詩を留めて今尚ほ存してゐる事は始めて知る所である。瓢は破損の爲めに好詩を得、それが爲めに今珍とさるゝのである。王香は珍文と稱したことを序ながら附記しておく。

民友社出版の「頼山陽書簡集」は二千頁に垂んとする二冊の巨卷である。熟知の木崎好尙氏や光吉元次郎氏が徳富蘇峰氏の囑に應じて編纂したので、光吉氏生前しばしば訪ひ來つて、その経緯を語つたことがある。一千通の書簡を採收したと聞いたから一千頁一冊位のものかと想

像したるに、案外の巨冊である。山陽の書簡集は從來も出版されてゐるが、博收千通に迫んだのはこれが始めである。無論これまで刊行されたものも皆納めてあるに相違ない。尙ほ逸してゐるものは決して少なくないであらう。火災などに焼け失せ、若しくは他の事情で棄つた者などもあるであらう。それは已むを得ないとして尙ほ埋没してゐるものを蒐集したら、別に一千頁位の一冊を爲すであらう。山陽も随分手簡の多作家と謂ふべきだ。併し、交はりの廣いや繁劇の事に當つてゐる人の一生の手紙を蒐めて見たら、随分澤山のものであらう。強ち山陽を多作家と稱すべきでもなからうか。しかし、一千通が一千通悉く保存の價値があり、編纂刊行の甲斐があるものは、恐らく山陽に於て始めて見るの例であらう。西洋では文藝家の書簡を集めて公刊する例は無論澤山あつて、その書簡が藝術品として取扱はれてゐる。日本では新井白石の書簡の如き、多くは考證を包有したもので、普通の俗牘と異つてゐるが、山陽のはそれとは違つて日常の用を辨ずるもので、それでゐる藝術品たるの價値がある。自分は「隨筆頼山陽」に山陽の日記はその手紙である、山陽の隨筆も亦手紙であるといつたが、この巨冊のごとく纏まつてみると、自分の説の虚ならざることが知れるのである。山陽の書簡も、實は大著述と云

はねばならぬ。山陽は、必らずしも後世コンナ工合に自家の書簡が纂輯さるゝことを期して、その折々に書いたとも思はれないが、交付した其家に傳はる位は期したかも知れない。随つて筆作に意を用ゐるたかも知れない。それは何れにもあれ、輕率に手紙を作る可からざる教訓は、この書簡集に就て得らるゝのである。

山陽の逸事に就て尙ほ他に記すべきものがある。此頃郷人から一卷の詩書を示された。展べて見ると、卷頭に唐美人に擬した彩色入の婦人の圖があり、その坐邊に石菖蒲を盛つた盆が置かれてあつて、美人はこれを見つめて满面憂色を湛へてゐる。此圖に附隨して三家の詩が録してある。皆此の美人を思ひ遣つた閨怨の詩で、詩中の識語に、甲戌の歲、頼山陽黃薇に遊んで歸らず、情婦空閨を守る、其婦、名美瑯とあり、詩中には山陽黃薇の靉浦にあることを云ひ、又石菖蒲は山陽の愛する所であることをも云うてゐる。此等の事實に依り、好事家が山陽の情事を一幅の卷に收めたものであることが知れた。畫の筆者は琴浦とあるが、私は未だ其人を知らない。詩を賦した三家も、小石と琴浦の外は名を匿してゐるから誰れかは知り難いが、大方、

山陽と懇意の文人の戲筆であらう。随分好事家は假託のものを作つて、人を欺くこともあるから油斷が出来ないが、此卷は假託のものとも思へない。其譯は、詩の題識は事實と吻合してゐる。山陽系譜を案するに、甲戌は文化十一年で、山陽三十五歳、此年果して廣島に歸省してゐる。歸省の目的は父春水の病を見舞はん爲めで、八月十日京都發程、備中其他を経て八月廿三日廣島に歸着してゐる。識語の言ふ所は決して假託でなく、正さに此歸省の留守中の事であるとする。當時血氣の斯人にありさうなことである。但し、山陽が梨影を其室に定めたのは此歳であるけれども、攀花折柳の事があつたとて不思議もあるまい。所謂美瑠なるもの、本體は知ることとは出来ないが、詩中、淀流を涸るとあるを見れば、浪花あたりの花柳界のもので、もあらうか。山陽の暗黒面を知るの一資料である。

自別君來思萬端。夢魂縹渺渡層瀾。避人頻數郎歸日。不解年光似轉丸。  
 几上生塵硯欲蕪。汲泉空養石菖蒲。庭前葉落看無色。不獨妾容愁且癯。  
 偶得郎書喜且悲。燈前讀罷背燈啼。閑呼小婢喃喃語。郎在黃薇輛浦西。  
 甲戌之歲。賴山陽遊黃薇。不歸。其姪美瑠。獨守空閨。不堪相思。察其情態。爲賦數

絶。以寄。

懶僂戲草

獨對菱花閒沈思。今朝懶畫遠山眉。附鴻欲寄心頭事。陰憚更多於別時。  
 冷枕單衾易惹憂。屏風恁地掩牀頭。畫中又是鴛鴦子。偏使阿儂添幾愁。  
 岑寂一場無所訴。愁來萬事摠關情。傷心厭聽黃昏雨。向夜偏成點滴聲。  
 夕陽樓外雨初乾。獨捲珠簾立晚寒。今夜新升眉樣月。憶儂郎亦應憑欄。

琴浦鮫郎題

征帆影暗暮烟愁。妾亦買舟洄淀流。恨妾不如舟上月。追郎直到海西頭。  
 眉褪鴉青唇褪朱。悄然歸對一燈孤。空室蕭々何所有。阿郎曾愛石菖蒲。  
 空房一枕不堪清。難奈柔腸屢易驚。愁夢床頭誰喚覺。風吹落葉撲窓聲。  
 郎馬登山々有險。郎舟浮海々多瀾。妾身何恨愁憔悴。但恐郎輕行路難。  
 忙拆瑤絨忽蹙眉。歸期末識定何時。了鬟不解愁思切。挑得燈花頻笑嬉。

甲戌冬

小石龍題

山陽は歌も詠んだ、しかし其歌を書いた短冊の眞物といふものは幾んど見られ無かつたのだが、近頃其れが顯はれた。文化七年に當時大阪に在つた上州館林の藩士奥村就道が其六十の年祝ひに造つた帖の中に菅茶山の短冊と並べて貼つてあるのが即ち其れで、

奥村のぬしをことぶく歌

おしてゐるや浪速の三津にすむ人のみづはぐむま

ておひよとぞ思ふ

襄

とある。丁度山陽が茶山の廉塾に居つた時のものだ。茶山のは「蘆原にかゝれるつゆの恵こそ長きよはひのねざしなるらめ　晋帥」となつてゐる。そして兩人とも別に詩の短冊を一枚づゝ添へて居る。(近刊竹柏漫筆に据る)

## 第二 明治初頭文壇の回顧

○  
私の東京に出たのは明治八年であるが、それまでは小説に觸れたことが無かつた。其頃東京の書生社會では馬琴の小説——「八犬傳」や「弓張月」や「美少年録」などを讀むことが流行で、まだ其頃は貸本屋が江戸時代の型で方々にあつた。自分は番町の親戚の家に寄食してゐたが、親戚の子弟が毎日麴町の貸本屋から「八犬傳」を三冊五冊と借りて讀んでゐるので、自分も始めて馬琴の作に親しみ初めて、「八犬傳」を全部讀み通し、追々其他の大部の小説にも及んだ。七五調の文章が其頃大變におもしろく思はれたもので、「八犬傳」中のサツリ文句は多く書生間に諳記され、信乃濱路別れの一節などを諳誦が出来ないと、友人間に何となく片身が狭く感ぜられた。西洋の語學を習つてゐる一方、舊派の小説に耽つたなどは妙なことだが、此頃は

新體の小説はまだあまり無かつたやうである。

それから明治九年に開成學校の豫備門に入り、寄宿舎で坪内雄藏君と交つた。君は當時大の馬琴通で、馬琴のあらゆるものを讀過してゐたのみでなく、馬琴脈の文章を縦横に書いた。何といふ標題であつたか忘れたが、馬琴の鞏に倣つて南朝畑の材料で一冊の小説を書いて示されたのを見ると馬琴ソツクリで、例の七五調で、おもしろいかけ言葉もあり、サワリもあり、殺し文句もあるので、自分などはエライものだと思つた。坪内君は馬琴ばかりでなく、三馬でも春水でも一九でもあらゆる作家に通じて、談話の文はなか／＼得意であつた。それはズツと後に書いた「馬骨人言」などで何人も會得したであらうが、大學時代に書いた談話文字で自分の記憶にあるのは、五六人の同窓が連れ立つて、鴻臺<sup>コウダイ</sup>へ徒歩で往返した、其紀行を膝栗毛風に書いたものであつた。ある時坪内君が示された小説目録、それは讀み本、洒落本、人情本、草双紙の類まで千種以上も收めたものであつたが、何の目録かと聞いたら、郷里にある時名古屋の大惣(貸本屋)から借覽した書名の大略を書き記したのであると聞き、その涉獵の廣いのに一驚を喫した。坪内君は其頃既に一ト廉の小説家であつたのだ。

自分は大學の文科に入つたが、志す所は政治にあつたので、文學とは没交渉であつた。随つて文學に就て何も云ふ資格が無い。唯親しい友に坪内君のごとき人があつて、學窓時代から今日に至るまで、四十数年の間交情が連續してゐるために、此友人から文學上の薰陶を受けたことが少なくない。時折往來して話題となるのは文學談で、自分からワカラヌ事を問うたこともあつたが、坪内君はいつも深切に一時間も二時間もその蘊蓄を傾けて諄々として説き聞かされたので、興味を感じて時の移るを忘るゝのが常であつた。コンナ偶然の往復で自分の受けた文學上の薰陶も少なくないが、まして毎年例として熱海に坪内君と落合つては、一週間位毎日五六時間にわたり、坪内君の文學論を聞くのが定例で、新しい各國の文學思潮なども例の巧みな説き方で深切に話してくれられた。殊に劇に關しては古今東西に通じて該博な講説があつた。考へてみると坪内君には多くの門人があるが、自分は恐らくは尤も深切に且つ尤も多量に教育を受けた門人であらう。自分は文學趣味が缺けてゐるものか、性來の魯鈍は、薰陶を受けた割合に一向開發する所がない。しかし、多少にても文學に就て理解のあるのは、坪内君のお蔭である。坪内君は内々自分を劇趣味の歸依者にしたい下心もあつたらしく、特に熱心に劇に關し

て講説されたが、どう云ふものか自分には劇の趣味が起つて來ないので、坪内君もいつぞや、君は何でも趣味に通ずる人だが、劇だけは取除けかね、と云はれたこともある。又、君に劇の趣味があると俺も助かるが、など云はれた事もあつた。如何にも坪内君の期待に背かないで劇趣味があつたら、折角参加した文藝協會にもまう少し手腕が揮へたのだつたらう。併し、坪内君は自分に對しては特別の同情がある。いつぞや大隈老侯が雑誌を起さるゝに付自分に擔任せよとあつた時などは、坪内君は「早稻田文學」を人に委して以來連續的に雑誌に執筆することを思ひ止まつてゐられたのだが、此事あるを聞き、君がやるなら、俺も努力して助筆すると云はれた。此雑誌は遂に自分が擔當せずには了つたが、坪内君の同情は眞に感謝に堪へない。

私は坪内君と右いふ様な間柄であるから、坪内君の作などを是非する能力も資格も有つてゐない。唯大學同窓時代の事を追憶して見るのに、自分の觀察が誤つてゐるかも知れないが、多少の説がある。それは何かといふと、前にも云つた通り坪内君は學窓時代に既に立派な舊派の小説家であつた。少なくとも非常の素養があつた。其素養が結局坪内君を大家となしたのであるけれども、西洋風の小説に推し移るには或は却つて累をなしたかの様にも考へらるゝ。どう

も一つの形式に熟してゐる人は、それに捕へられて他に轉ずる場合には困難を感じるものである。坪内君に若し舊派の小説の筆が無かつたとして、西洋小説に早くから没頭したら、初めからモット新しい小説が書けたであらうと思はれる。坪内君の「書生氣質」は有名なものであるけれども、舊派の筆致や趣向が隨處に散見するのも其素養の然らしめたものではあるまいか。半峯高田君があの小説に對しての批評は、今想ひ出すが、半分書きかけて、何年であつたか、正月の二日か三日に共に静岡へ旅行した事がある。高田君は批評の後半を静岡の酒樓で書き畢つたことを思ひ起すが、昨今讀んで見ると、高田君の批評は坪内君の病根によく言及してゐて、高田君の小説眼が一段高い様に思はれる。全體高田君は坪内君と同窓であるが、西洋小説の繙讀は高田君の方が少しく早かつたし、又相當に見解もあつた様に思ふ。此頃の早大出の若い文學者達は、當時の高田君の批評を讀んで意外の感に打たれ、高田さんもなか／＼エラカッタのですナ、と云つた者もあるが、高田君も文學者たらん事を志したのであつたならば、恐らくは人後に落ちなかつたであらう。但し、作家となるよりも批評家の方であつたゞらう。今日の高田君は教育家經營家であるけれども、學窓時代は文學の天分をあらはしてゐたものである。

高田君は坪内君の如き小説の筆を動かす能力は無かつたが、英文を縦横に書き、相當文學的に書き得た人であつた。多分日本風の文章に素養が少なかつた爲めに、英文には却つて達したものであらう。近日三宅雪嶺君が其個人雜誌「我觀」に吾等同窓の事を書いてをる内に、高田君の事に迫んで、其本領は文學であるか政治であるか、疑はしいと云うてゐるが全く同感である。兎に角同窓時代を振り返つて思ふと、高田君は西洋小説に於て坪内君よりも一日の長があつたやうに思ふ。勿論其事に専であるか否とで追々懸隔を生ずるのは當然のことで、坪内君は間もなく高田君を駕するに至つたが、高田君の文學的才能は十分認めざるを得ないのである。

明治の九年十年の頃に帝大でボツ／＼西洋小説を読み耽ることが行はれ始めたが、しかし、この趣味家は甚だ少なかつた。先輩には金子堅太郎君が此方面の隠れもない人であつた。洋行中小説ばかり讀んでゐたと云ふことが同君に對する非難であつたなど、西洋文學はまださう理解されてゐなかつた。大學の豫備門に入つて本科まで進まず退學した、丹乙馬といふ人などは大の小説愛讀者で、英文も達者にかき、時々日本人を驚かす様な新思想を吐いたので、吾々も奇怪に感じた位幼稚であつた。此頃讀まれた西洋小説はスコットが大流行で、リットンやサカ

レーなども愛讀された様に思ふ。吾々の先輩で芳菲山人と號した、西松次郎といふ理學畑の人も此趣味家で、卒業後新聞紙上に得意の筆を揮つたことは隠れもない事であるが、しかし、大學から専門の作家を出したのは坪内逍遙君だけであらう。

今から考へると一笑を催すほどであるが、當時は文學に理解がなく、帝大を卒業した文學士坪内雄藏が春廼屋隴の名を以て小説界に現はれ出たのを驚異の目を以て見、「時事新報」のごとき、比較的新思想に理解のあつたものですら、苟くも文學士たるものが野卑な小説家となるなどは以ての外の事だと攻撃を加へたことがある。此時分は假名垣魯文が戯作の文權を握つてゐて、小説家たらんものは其門に趨り、束脩を納めて門下生となり、魯か文かの一字を頂戴しなければ世に立て無かつた位であるから、「時事新報」が小説家を輕蔑したのも無理は無かつた。坪内君はコンナ情實に捕はれずに、巍然獨立獨歩でやつてのけたのは流石に一見識であつた。

漢文で無ければ文學でない様に思はれた時代には、戯作者は一併に擯斥を受けた。當時は西洋の所謂文學なるもの、一端も世に理解されてゐなかつた。それを闡明して世の妄を啓いたものは坪内君の「小説神髓」であつた。今ではこの著にあるほどのことは誰れも知つてゐるけ



れども、當時に於ては尤も時宜を得た著述で、小説が重んぜらるゝに至つた動機は、此著の出版から發したと云ふも謬言であるまい。坪内君當時の傑作は「書生氣質」にあらず、寧ろ「小説神髓」にありと私は思ふ。坪内君は作家としてもエライに相違ないが、それよりも君は文壇の教育家として尤もエライと平素自分は思つてゐる。君は文學の各方面に先鞭を着け、それを開拓し、且つ其將來に起るべきものを指摘もし教へもしてゐる。乃ち歌曲に就ても、劇に就ても、ペーゼントなどに就ても、皆君が唱首で、君が開拓したものであるが、文壇教育の第一歩は即ち「小説神髓」である。此著述の稿も早く大學にある頃ノートに書きつけたものを書き直したものであつたやうに覺える。まだ外に學窓時代に書いたもので、自己の名を署するを忌み、服部誠一の名で出したもの、友人橋顯三の名で出したものなどもあつた。此等の書名は自分しかしかと記憶がない。春廼屋作とない爲めに、多くは閑却されてゐるかも知れない。

坪内君とは長い交りであるから、龍岡町の僑居時代、又そこから大久保余丁町に移つて以來の事をよく知つてゐるが、文學上に關係あることは多く憶ひ出し得ない。「内地雜居未來の夢」を書かれた時などは、自分から僉末な材料を提供したことなどを思ひ出す。其標題を私に書け

とあつたが、それを斷つたことをも思ひ出す。龍岡町時代は君も何となく戯作者風であつたやうに思はる。君は「朧ろ月夜にしく物ぞなき」といふ古歌から春廼屋朧と名を命じたので、その家に訪ねて見ると、掛物でも額でもこの和歌に因んだものが掲げてあり、日用の箸函にも月下に櫻が散つてゐる圖が蒔繪で出来てゐて、如何にも氣取つたものであつた。併し、君は昔しの戯作者とは大いに其品を異にした。と云ふのは、學殖も非常の相違があるからでもあつたが、君は名家の子弟を家に預つて、その監督やら教育やらを擔任してゐた。且つ早稻田大學の前身東京専門學校に追々日勤することになり、歴史や文學の教授をやる身でもあつたので、嚴正身を持たねばならず、事實君の半面は堅苦しい先生であつた。

早稻田中學の起つた頃は、君の大久保余丁町住居時代だが、君は其教頭にならざるを得無かつた。君が後年私に語る所に據ると、實に心にも無いことであつたが、高田君や君が早稻田大學の經營に盡力してゐるのに、自分のみ何もしないであつては氣が咎めるので、せめてはと教頭となつたが、教頭の受持で倫理の一科を十年も講じたことは、自分に取つて此上ないつらい事であつたと聞いて同情に堪へなかつた。あれだけの文學者を其作に専らならしめず、アタラ

大切な時間を中等教育の爲めに割かしたのは如何にも勿體ないと感じた。勿論倫理の研究が君の修養や人格に益する所があつたかも知れない。その得た所と失つた所とを較べて差引損得どんなものであつたか。ソナナことは今爰には問題外であるが、何れにしても坪内君の経歴中の大事件であつたに相違ない。此事を閑却して君の文藝を論じ、又君の人格を評するものがあらば、それは甚だ不備の評たるを免かれない。

以上を書き畢つてから、或日多くの雑筆を出して検すると、大正五年十二月中の雑筆に坪内君の九箇條の信條が書きつけてあるのを見出した。これは私が熱海で毎日坪内君と往來してゐた頃、聞いた事などを多く録したもの、内にあるのだが、倉卒のノートではあるが爰に收めておく。坪内君が座右の銘としてゐると云はれた九箇條は左の如くである。

- 一 行ふ前に先づ論じて立場を定む。
- 二 作すれば必らず他の未だ爲さざることをなす。
- 三 他を崇拜せず。(内外人何れでも、沙翁とても)
- 四 流行の公平なる傍觀者たり批判者たるを任とし、追隨者たらず。

五 少くとも一事に七年を傾く。

六 他の美所を看取して他山の石となす。

七 古人よりも今人、今の先輩よりも今の後輩を規とす。

八 他人を自己の便宜の爲めに使はず、他の功を奪はず。

この八箇條は君が平生の箴となすだけに、君の文學上の経歴はよく之れに嵌つてゐる。君の告白は決して自らを欺いてゐないと思ふ。(一)先づ行ふに先だちては理論を著はしてゐる。小説を書く前には「小説神髓」を著はし、脚本を書く前には「夢幻劇論」を書き、歌劇を作る前には「新樂劇論」を書いてゐるなど、必らず行ふ前に論がある。(二)君は文學上他人の未だ手を觸れざる所を開拓し、何につけても先驅をなしてゐる。劇の改善に就ても、樂劇に就ても、ペーゼントに就ても、児童劇に就ても、皆君は先驅である。(三)君は「沙翁全集」を譯し半生之れに没頭してゐるのを見て、少なくとも君は沙翁の崇拜者であると誤認する者もあらうが、君は沙翁のアドマイラーに相違ない、しかしウォルシッパではない。君自身は何人もウォルシッパしないと云ふを以て信條として居る。(四)君自ら

の告白に、自分は流行を注意する點に於て人後に落ちずと信じてゐる。併し、斷然其の流  
行のフオロワーたるを欲しないと常に云はる。(五)一事を企て、それに七年を傾けると  
あるも事實である。君が小説を書いた間も、舞踊に没頭した間も、中學で倫理研究に従事  
した間も、雜誌「早稲田文學」に従事した間も、皆七年若しくはそれ以上費してゐて決して  
朝三暮四でない。(六)他人の長所善點を看取するに熱心なるは、君が時代に後れず、年齒  
の進むと共に藝術の進む所以であらう。君はみづから赤保々に告白された、自分は全體弱  
味のある男である、他人の美所を看てはみづから倨傲を以て居ることが出来ない。君が  
精神的に老いざる所以であらう。(七)後進の作を閑却せずに、孫弟子のやうな若輩の作ま  
でも見逃さず、必らず一ト通り目を通さる、が常である。これなどは私の最も敬服する所  
で、繁劇なる大家の出來難いことである。(八)君は寧ろ潔癖に過ぎる人で、常に人の善を  
爲すに汲々とし、往々人のために自らの名を蔽うて事を行ふことが珍らしくない。他人の  
功を奪ふごときは君の最も忌む所である。

私が君から以上八箇條を聽いた、其翌日君を訪うた時に、昨日は一箇條を脱したと云う

て追補された。即ち第九に云く、自分は鬱憤を蓄積する主義で、之れを發散しない流儀で  
あると。種々例を擧げて説明されたが、成る程、これは出來難いことである。多くの文學  
者は鬱憤を直ちに何等かの形にあらはし、或は辯疏し或は報復するが常で、それを忍耐す  
るのは容易の業でない。君の云はる、に、自分は批評家に對しても己むを得ない場合でな  
ければ答へない。實は、鬱憤を漏らすは一時の快を得るに庶幾いけれども、藝術の蓄積を  
併せて散じ失ふの損もある、と云はれたが如何にも名言である。

次に紅葉山人に就ての追憶に移るが、此思ひ出もなかく、簡單でない。山人とは随分長い間  
の交りであつた。私が最初山人の「色懺悔」を読んだのは、郷里で「新潟新聞」を主宰してゐた  
頃であつたかと思ふ。此小説を読んで山人の垢ぬけした筆致に少なからず感興を覺えた。こゝ  
にチョット餘談に移るが、此「色懺悔」の版元は吉岡哲太郎といふ人で、此の人は嘗て同窓で  
あつた。氣の利いた才子肌であつたが、山氣があつたと見えて、小説出版を企てたと聞くと、

間もなく此手から「色懺悔」が出版されたので面白く感じた。露伴君の「風流佛」も矢張り此人に依つて出版された事を考へると、なか／＼着眼がよかつたのである。けれども餘り長續きはしなかつたかと思ふ。それは兎も角話しは戻つて山人と懇意となつたのは、私が高田君に代つて「讀賣新聞」の主筆となつてからであるやうに記憶する。此頃山人は讀賣紙上に其艶麗の小説を連載してゐた。社へ日々來るでもなかつたが、時には原稿をみづから社へ持つて來たこともあつた。社で書く様なことは滅多に無かつた。實はそんなに無雜作に出来る文章でなく、坪内君が一瀉千里と筆を走らすのとは違つて、山人は一語々々嚙んで出すやうな苦吟の餘に出来るものであつた。山人の風格は、軀瘦せ幹高く、色黒く眸明かに、顔に苦が味が走り、舉止輕快、言語はキビ／＼してゐて、相對すると何となく愉快を覺えしめるものがあつた。生粹の江戸ッ兒といふ風格は自然に備つてゐた。自分は社で交はつたばかりで無く、山人の住した牛込の横寺町の居へは幾十回か足を運んだ。自分が讀賣を去つてからも山人との交りは永く續いて、其終焉に迫んだ。自分は前にも云つた通り文學に興味があつたのではなく、趣味は寧ろ政治にあつただけけれども、文學者と交はることを好んだ。山人は食物に頗る趣味があり、茶菓

には別してやかまし屋であつたが、下戸であつた。その下戸の山人を上戸の自分が随分たびたび連れ出して、方々飲み回つたものである。山谷の八百善へ出かけた時、膳部にあつた野菜の胡麻壘を丁寧解剖して、これだけの中に七八種のもが混じてゐるなど云つて手帳に書きつけたり、或る鳥屋へ出かけて女中にテバの注文をして女中が解しかねたので、料理番を呼出して通がつたこともある。山人は食通であると共に寫眞道樂もあつて、有名な料理屋の臺所を寫眞に取りたいと言ひ出し、一二ヶ所試みた事もあつたが、臺所はどこも暗いので不成功であつた様に覺える。なか／＼の凝り性で趣味も甚だ廣かつた。自分が多少江戸趣味を解するのは山人に得た所が少なくない様に思ふ。

山人が筆を荷くもしなかつた一例は、「隣の女」を書いた時、編中に尺八の事が出てくる。山人は尺八の吹き方に心得が無いので、その研究に向島に居る知人佐藤某を泊りがけに訪うたことがある。それが爲め讀賣紙上に二日ばかり續稿が途切れた。其際山人から私に寄せた手紙が今も手許に保存されてゐる。當時の讀賣社長本野盛亨氏（本野一郎氏の父）が編輯局へやつて來て、紅葉の時々ナマケルには困るというて、小説の續稿の途切れる事を頻りに攻撃するのであ

つた。自分は山人の爲めに辯疏して、尺八の吹き方が分らんため向島に出かけて已むなく途切れたのだというても、社長はなか／＼承知しない。全體あれの小説の途切れるのは今度に限らず度々ある。あの男の様にスラ／＼書けるものが何故に時々停顿するのかと詰るのを、私が制して、スラ／＼讀めてもスラ／＼書くのではない。山人の小説は一字一句も苟くもしない。なかなか毎日稿を續けるのは容易なことでない、是を御覽なさい、と山人の原稿を校正方から取寄せて社長に示した。此原稿には數ヶ所の貼り紙があつて、中には一ヶ所に三枚も四枚も重ねて貼り紙をした所もある。私は一枚一枚剥ぎ取つて社長に讀んで聞かせた。段々剥いで原作に戻つた時、自分の云ふには、一番初めの筆でも此通り玲瓏珠の如き文章であるが、讀み較べると初度の貼紙での直しはいくらかよい、二度の直しは更に一段よい、最後のは最もよいことが斯く歴々とわかるでありませうというた時、社長も始めて成るほどとうなづいた。私はすかさず、實は小説というても長い詩である。あなたも漢詩を作らるゝが推敲に随分苦心されるであらう。紅葉などの大家は名譽の爲めにもナグリ書きする事は出来ないで、尺八の吹き方を知らないからというて書けぬ譯もないが、大事を取つて吹き方までも研究するのだと説明した所

が、社長も漸く文學者の苦心の容易でないことを悟つたらしく、其後は餘り小言を云はなかつた。此事を後日山人に語つた時、山人はひどく喜んで私を徳とした。此「隣の女」に就て更に憶ひ出したことがある。あれには頗る際どい處まで筆が迫んでゐる。其際前島密男から一封の書狀が到達した。その手紙は極めて簡單で「隣の女危険迫る、請ふ隣の疝氣となす勿れ、注意注意」と三くだり許り書いてあつた。此時分は新聞に對する取締が馬鹿に嚴重で、小説も風俗懷亂でやられることが頻繁であつたので、前島男はそれを注意されたのであつた。

山人が「金色夜叉」を書いた時、貫一の死處に苦心し、わざ／＼鹽原まで出かけて、實地を探検して死處を定めた。これは誰れも知つてゐる事實だから委しく語るまでもない。此事につき曾て坪内君と語り合つたことがある。西洋あたりの例に倣へば、貫一の死處に一碑を樹て、それを鹽原の一名所とするもおもしろいではないか。幾分か資を投じて計畫しようかと相談したことがあつた。無論山人歿後の事で、山人のための記念の意味もあつたのである。が、此事を終に果さなかつた譯は、鹽原の某寺の住職がほゞ類似の事を考へ、鹽原の宣傳者奥三郎兵衛（藍田と號す）、尾崎紅葉兩人の鹽原に關する事蹟を刻して碑を建てる企てがあると聞いた。そ

して撰文は私の友人松平康國氏の手になつたことは事實であるから、自分共はそれが爲め建碑を見合はせたが、此寺の住職が其後他界したとかで、終に沙汰止みとなつた。思へば吾等はコシナ他人の計畫に顧慮せず、初思を貫ぬけばよかつたのだ。

坪内逍遙君と紅葉山人は互ひによく知り合つてもゐた。交はりも深かつた。勿論兩人の間に疎隔があらう筈は無かつた。併し、兩頭領の末流の間には動もすると相軋つて反目する様な事があつた。私は當時祕かに之を憂へた。と云ふのは、いつも末輩の疎隔反目から兩雄の争の端を發し、ともすると意外の事を惹き起す事があるからだ。或る時牛込の吉熊に東京専門學校の幹部の寄合があつて、高田坪内兩君と自分も其席にゐた。其日偶々階下に山人の率ゐる硯友社の集會があると聞いて、自分は祕かに案じた。得難い此機會を利用して兩者の反目を解きたいものだ、とワザト坪内君には精しい事情を語らず、突然坪内君を誘うて階下の一室を明けて見ると、山人を初席にして硯友社の面々二十人許りが兩側に居並んでゐた。席が狭くて吾々の割込む處も無かつた。坪内君は何の意味で此席に伴はれたかも知れないので一寸面喰つた様であつたが、末席に坐して列の當意即妙の談話を弄して満座に挨拶をされたので、一同は覺えず噴き

出して拍手した。坪内君の此の態度と雅量は末流の頭腦に蟠まる誤解を一掃し去つて、それからは甚だ釋然たるものがあつた様である。

山人が食通であつたことは前にも云うたが、日本橋の中華亭の料理が氣に適つて、臨終の病中もそこから料理を取寄せたと聞いたが、この中華亭に就て語るべき一笑話がある。この亭のお福と云ふ娘が大の紅葉崇拜で、山人の小説と云へば、何でも精讀してゐる。私の亡友山田一郎といふが此事を知つて、或る時ニセ紅葉を連れてこのお福に一杯喰はせたことがある。山田の知る人で静岡縣の或る年若の醫師が俳句をやる所から思ひつき、伴うて中華亭に到り、今日は尾崎紅葉君を同伴したから、短冊でも書いて貰へとお福を喜ばせた。ニセ物と知らないお福はひどく喜んで、酒席を斡旋し揮毫を請うたりした。コンナ事があつてから數日を経て私が行くと、お福は先日紅葉先生が山田さんと共にお出になりました、とニコ／＼して云ふから、自分は一寸不審に思つた、山田は尾崎を知らない筈だが、どうして連れ合つて來たかしらと。お福に紅葉さんはドンナ様子の人であつたかと聞くと、色の青白い、丈の低い、鼻下に髭のある人だといふから、私は噴出した。お前、それは偽物だよ、紅葉は色が黒く丈が高く髭がない。お

前は山田にハメられたのだというたら、お福はくやしがるから、私が慰めて近日本物を連れて來るといつて終に其約を果した。山人が中華亭の料理を愛するの端はこれから發してゐるのだ。

山人は下戸で、二三杯呑むと必らず其席に横臥するのが例であつた。或る時柳橋で三四の妓を招き、二三杯傾け、例の如く横臥し、半睡半醒の境に入り、妓等の勝手に話し合ふ事が銘々愛讀の小説に關してゐるので、山人もそれとなしに耳を傾けると、甲乙丙互ひに好む所を擧げて、その優劣を戦はしたが、皆三文小説ばかりで、一世に名の高い紅葉の小説に就ては一語も及ばなかつた。勿論そこに寝てゐる客が大小説家であるなどは彼等の夢にも知らなかつたことである。山人はあの時はをかしかつたと後に語つたが、中華亭とは全然逆の話しであるので思ひ出した。

山人は不起の病を抱へて私の郷國越後を経て佐渡へ渡つたことがある。「烟霞療養」と題する續きものが讀賣に出たのは其時の作である。山人は佐渡の小木に暫らく滞在して、日夕左右に侍した或る妓の爲めに三絃の匣に字を題してやつたり、別に臨んでは未刊の小説の稿本を贈つたりした。此稿本を贈つた時山人は特に注意して、お前が或る場合に金に困るやうなことが起

つたら、これを東京の本屋に賣れば相當の金になる。龜末にせず仕舞つて置け。決して人に欺かれて取られてはならぬ、と堅く言ひつけたといふことが、山人の歿後に知れた。山人は自身の口から此事を誰れにも話さなかつたらしく、いつぞや紅葉祭のあつた時、私は追懷談の一節として語つたことがあるが、硯友社の面々も皆初耳だといふた。此未刊の原稿は何であつたらうか。自分はそれを知りたく、佐渡の知人に問合はせたこともあつたが、それは惜むらくは火災に焼けて今は無く、其女は或る寺の大黒となつてゐると聞いた。

いつであつたか時は忘れたが、私が幹事で一ツ橋時代の帝大の同窓會を東台の櫻雲臺（後に梅川樓）に開いた事があつた。其際紅葉君は私を助けていろ／＼周旋されたが、餘興に伊井蓉峰に「書生氣質」をやらせては何うか。幸に櫻雲臺には舞臺もある。蓉峰とは懇意だから、寄附的にやらせる。別に報酬はいらぬとあるから、喜んで山人に任せた。伊井も快諾して、門人數名を伴うて登場し、確か西瓜を割るあたりをやつたが、これは意外であつた。面白からうと期したのが全く裏切られて全然失敗に歸した。何分吾々時代の大學生の氣合は可なり違つてもゐて、墮落書生の伊井の肚に入りかねたのも無理はなく、兎角明治十年頃の大學生の風を寫し

出すことが出来なかつた。座中にはこの「書生氣質」の作中の人物も甲乙丙丁居並んでゐた。確か西瓜割りの本尊三宅雪嶺君は舞臺に接近して見てゐた。此小説の作者坪内君も席にゐた。銘々のことを時代違ひの書生から成り立つた俳優の演ずるのだから、いろいろのアラが現はれて、十分も経つか経たぬに、みなく退屈を生じて、早く止めよ、アレよりもお互ひがやる方がましだなどいふものもあつて、蓉峰には氣の毒であつた。山人に關係のある事ではないが、思ひ出づるまゝ、こゝに書いておく。

山人に就てまだ思ひ出せばいろいろの事があるが、餘りに長くなるから、一二雑事を録して他の項に移るとしよう。山人は多趣味であつたが、印癖もあつて、頻りに自用の印を作つた。足立疇村氏の作が尤も氣に入つて、此人の作が多かつた。不起の病に罹り覺悟をした時なども、其意味の印を疇村氏に刻させた。其印文は確か「化及我」の三字であつた様に記憶する。山人は時々私の家に来て、私の讀みふるしの隨筆を持ち去り、それを翻案して小説の種にしたことが一再ならずある。今は精確に記憶しないが「破茶碗」といふ短篇小説は或る支那の隨筆から翻案したのであり、又「愼夏漫筆」といふ漢文で書いた日本人の隨筆に、或る幕府の役人が木

蘇の旅宿にやどり、その家に鶉を籠に入れて飼つてあるのを見て私かに望をかけ、何とかして無心を云はん、とわざと多くの茶代を贈つて主人を喜ばせたのが却つて仇となり、主人は茶代に酬いる馳走の材料に窮し、鶉を屠つて膳部に供へ、客人の大失望を買つたといふ一話が山人の興味をそゝり、短篇小説となつたが、標題は今思ひ出せぬ。山人は私が長い間日誌を書き續けてゐるのを知つて、頻りに褒めるから私は山人に、自分などの日誌は何の役にも立たぬが、君の様な文人こそ日誌を書くべきだと勧めたことがあつた。山人もそれから日誌を書き初めた様である。不起の病に罹つても日誌を書いた事は誰も知る通りだが、山人の歿後日誌が出版されたのを見ると、ある年の元日の記事に、私と佐藤某とが、山人の横寺町の二階の書齋で、長時間酒を呑んで山人を困らせた。其時の記には吾等兩人を新年の悪客と罵つてゐる。日誌を書く事を勧めたお蔭でトンデもない罵倒を受けた譯である。山人は江戸ッ兒氣質の卒直で、日誌には何でも赤保々に書く流儀で、人から物を贈られても氣に喰はぬと、なんだコンナもの、人を馬鹿にしてゐると罵倒して憚らない。そこに山人の面目が現はれてゐるのだが、此日誌を公刊する際に、斯様な記事は多く取り去られたから、いくらか膩が抜けた感じもする。



茲に山人に關する一事を書き添へる。

既刊の私の隨筆に、山人が不治の病を得たのを慰める爲め友人が山人を迎へて會食したことを書いたが、頃日、明治三十六年三月、即ち山人が病中であつた際の、私の雜筆を調べて見ると、同月十八日私が山人を見舞つて、長時間に互り談話を交へた委曲が録されてゐた。此訪問は尋常の見舞でなく、山人が病症を或る友人より知らされたと聞いたので、慰藉の爲めの訪問であつた。私は此訪問を幾回か躊躇した。不治の宣告を受けた山人を見るに忍びなかつたからだ。併し、終に決然起つて訪問し、山人の覺悟の程を聞いた。これが山人と談話を交へた最後であつたやうに思ふ。左に訪問當夜録した記事を收め、山人を偲ぶの料とする。

自分はけふ紅葉山人を訪うた。訪ふ前に幾度か躊躇した。不起を知る山人を見るに忍びなかつたからである。併し思ひ返した、吾れとても重患に罹つた豫後である、健康のものならば遠慮もあるべし、吾が病を知る山人に對して遠慮は無用であらうと。山人に對する

私の同情は遂に私を勵まして訪問せしめたのである。

例のごとく二階の書齋に通された。(牛込横寺町の宅)かねて相識る河喜多某氏も座に在つたが、早く辭し去つた。山人は階下で來客に接見中だと聞いた。門生が階上へ茶を運んできた。自分は門生に私語して、細君は既に先生の病症を知つてゐるかと問うて見たら、門生は祕密になつてゐると云うた。門生はまだ先生も知らないと思つてゐる様子であつたから、先生は既に知つてゐる、と長田秋濤から聞いたまゝを語ると、門生は一驚を喫した様子であつた。

しばらくすると山人は階上へ登つて來た。この時自分は山人の面貌を見ることを躊躇した。併し遂に見た。山人の元氣は毫も平日と異なる所が無かつた。机邊に坐し、例のごとく茶を啜りながら、しきりに語る。自分は大阪に出張中月ヶ瀬の梅を觀たことや、大阪の博覽會を見たことなどを話した。山人の話の内に、今明日中芝新堀町廿五番地の細君の縁家榊島方へ引移り、靜養の積であると云うた。他にも種々の談話があつたが、渠に死の覺悟があるか否やは搜るに由なかつた。自分は心竊かに誓つた、渠より漏らすでなければ、

吾れよりは斷じて之を誘ふ話をなすまじと。頗る談話に注意を拂つた。

漸く時刻が移り、山人の話頭は終に胃癌の事に及んだ。但し、山人自身のことでは無かつた。渠は某氏が胃癌にかゝり、其臨終が甚だ美ごとであつたと語り、且つ一説を立て、云ふのに、癌症は危篤に瀕しても精神に毫も變りが無い。之に反し、肺を患ふる者は臨終にぼけるといふて、その例として前年歿した門人中村花瘦の事を語り出した。中村は危篤に瀕してゐても終に遺言を傳へなかつた。萬一の僥倖を冀つたことは確かに精神に變狀を生じた一徴と見るべきであると。

山人の覺悟を窺ひ知るべき話の端緒は斯くして開かれた。僅かに綻ぶればこれを開くことは容易である。彼我の談は直ちに死の問題に入つた。自分は思ひ切つて云つた。死は恐る可からざるにあらず、併し、尤も恐るべきは死の宣告である。然れども既に宣告を受ければおのづから覺悟が生ずる、臨終は安泰なるを得べしと。山人は之に答へて實に然り、死は恐るべきでない。但だ周圍の繫累を思へばこそ悲痛の情が起るのだ。自分は更に云うた。知識階級に對し病症を匿すはよろしくない。山人云く、洵に然り、吾々に病症を匿

すごときは確かに侮辱であると。山人は終に宣告を受けた當時の感情を陳べ、其夜だけはどうしても睡ることが出来なかつた。遂に一杯の葡萄酒を傾けて眠を得んと圖つた。僅かに一杯の酒が非常に利いた。夢心地となつて、快感云ふ可からざるものがあつた。この夢心地の間に種々面白い考が浮んだ。實は平素も夜分寢臥中面白い考を得る習慣がある。その時は刎ね起きて枕頭に紙を探り、筆録するのが常である。この夜もいろいろの考を起した。第一、繪はがきの意匠を工夫した。それは内臓の圖を描き、患部に金粉を施し、死後それを黒色とするのが思ひついた意匠で、この繪はがきを作らんとすため、病院より内臓の圖を買ひ受けてゐる。病中同人間の往復にこれを用ゐて、記念にしたいと思ふ。今一つ考へたのは辭世百首を詠んで見ようと思つたが、百首の句を詠するほどならば寧ろ文章を書く方がよからうとも思つて、まだ惑うてゐると語つた。山人は死の宣告を受けても趣味を忘るゝことが出来なかつたのである。自分は自家の經驗を陳べて、病に惱まされず、寧ろ病を楽しむことに勉めよと勧めた。山人はうなづき、君の掣みに倣つて、これから日誌を書くことにしようと言つた。自分は山人に佛書を読んだらどうかと云うたら、山人は、「碧巖

録」をたまに読んで見ても、どうも面白く無い。且つ死期に臨み佛法の慰藉をかりたと云はれるのも口惜しいと云ふから自分は、如何にもさうだ、君は愉快に死ぬがよい。死の方法も江戸ッ兒風にありたいと云ふと山人は、最も吾が意を得た、實は其方法の考案中だと云うた。自分は、君が無聊を慰するため書籍の活用あらば遠慮なく申されたいと云ふと、山人、それは最も希ふ所である。差向き面白い隨筆が讀みたい。劍掃體（明の陸紹珩の撰に醉古堂劍掃がある）の語録も見たいとの註文があつたので、自分は快よくこれを諾し、最後に訪問客に就て注意し、多くの知人に一々面接するも五月繩いであらう。會心の友の外は面接を断つてはどうか。山人曰く、その積りだ、新堀町へ移るのも客を謝する爲めである。「二六新報」の社長が、毎日同じことを繰返すのも厄介だから、君の談話を印刷して女關で訪問者に頒つたらどうかと云うたが、新聞屋の工夫は到底活字を離れる事が出来かねると一笑した。私はこれを機會に辭し去つた。

山人は、死に就て覺悟は定めながら、それが二三月の近きに迫つてゐるとは思つてゐない様子に見受けたので、自分は窃かにこれ pensando 思つて黯然たらざるを得なかつた。（明治三十

六年三月十八日夜記す）

山人が病中丸善で月賦の販賣法で頒つ「センチユリー・ヂクシヨナリー」に加入したなどは、死期が近づいてゐることを知らなかつた爲めであらう。山人は、話中にあるごとく、葬儀の方法までも自から案じた。輿で昇かる、のが嫌とあつて、駕籠を望み、配り物の饅頭の中は潰し餡でなければならぬと定め、容器も自からの好みで、表を黒、内を朱塗にして、源氏の紅葉の香の巢を蓋裏に黒漆で出すべしなどと遺言をしたので、すべてそれに従つた。山人はどこまでも趣味の人であつた。自分も趣味を以て山人と交はり、山人の薰陶を受けたことも少なくないが、今也則亡。噫。

○

自分の多少知つてゐた文人は今も多く故人となつてゐる。服部誠一といふ人などは故人となつて餘ほど久しいことである。此人は撫松と號し、「東京繁昌記」の著者として知られてゐる。新橋近く銀座の通りの角に九春社といふのがあつて、そこから「東京新誌」といふ雑誌を發行

し、一時は盛んに行はれ、可なり號を積んだものである。服部は此雜誌に漢文體の戯作を掲げた。此時分はまだ支那小説脈の文章が喜ばれた。服部の文は艶麗で頻りに綺語を弄した。成島柳北のに較べると文品は下つたけれども、それが却つて俗に投じた。随分思ひ切つて淫褻の事を書いたものであつた。私は此頃九春社に看板をかけて、友人と共に「内外政黨事情」といふ隔日發刊の新聞を起してそれに従事してゐた。服部と同じ編輯局に机を並べてゐたから、服部の原稿を書くのを常に見てゐた。如何にも達者なものであつた。漢文には無論上り點をつけたが、書き／＼上り點をつけてゆく。それが迅速で如何にも慣れたものであつた。アンナ綺語を弄する撫松其人は意氣なしやれた人で、もあるかのやうに人は想像するであらうが、顔には痘痕があり、辯舌は東北訛りのヅウ／＼で、文章と打つて變つた人であつた。江戸の歴史を書きたいというて材料を蒐めたと聞いたこともあつたが、遂に果さなかつたやうである。

森田思軒にも多少の交りがあつた。此人は慶應義塾出身で、年は若かつたが、漢文を達者に書いた。矢野龍溪翁が「經國美談」を著した時、精細な評を漢文で書いて、早く漢文の力を認められた。後には反譯殊に西洋小説の反譯に筆を專にして、頗る自得の色があつた。早稻田大

學の前身東京専門學校時代に、雜誌であつたか講義録であつたか、思軒氏に譯筆を煩したことがあつた。其頃何かの用で朝早く岡倉覺三氏を根岸邊の宅にたづねると、氏は、朝であるのに、杯盤を運ばせて、主客對酌するといふノンキな事であつた。そこへ一客の入り來つたのを見るところ思軒氏であつて、氏は主客に挨拶もせず上席に坐り込んで、それから挨拶をすると云ふやうな倨傲の態度で、私の席にあるのを見て、學校へ上げるべき草稿は既に書いてあるけれども、今日の様な雨天に金玉の文を濡しては困るからワザト控へてゐますといふを聞き、私は此男氣が狂つてゐないかと思つた位で、如何にも自負満々たる人であつた。

櫻痴居士福地源一郎氏が銀座街頭に「太政官御用日報社」の看板を掲げ、「東京日々新聞」記者として名聲を馳せたのは、私どもの帝大にゐた頃であつた。此人の文章は老熟して氣格が高かつた。その毎日の社説は大學生と雖も争うて讀み、敬意を拂つた位である。後には官權新聞とあれば文章がよくとも輕蔑の念を以て讀んだものだが、福地の頃は官權新聞にまだ權威があつた。これには吾曹子の文品も與つて力があつたやうである。私などは、今になつて考へると何となく恥かしい様な氣もするが、吾曹先生の警歎に接し、一たび議論を戦はして見たいと思

つた。實は崇拜の念もあつたのである。然る處議論を戦はす機會が生じた。その頃私は、亡友岡山兼吉、山田一郎の兩氏と共に元老院に向つて官吏學生の政談演説を禁することを不可として建議をしたことがある。大學生の身分でコンナ事をやつたのは、大學では前例のないことであつた。田中稻城氏が何か建議をしたことがあつたが、それは政治に關係したことでは無かつた。此私共の建議に對し福地氏は賛成が出来ぬと云つたと聞き込んだので、當時日報社に橘村居士の號で西洋小説を反譯してゐた關直彦氏は、吾々の同窓でまだ在學中であつたから、此人を介して福地氏に面會することとなり、三人連れ立つて日報社の樓上で顔を合せたのが初對面であつた。福地氏は此頃四十年輩で、もあつたであらうか、贅澤づくめの日本服で袴はつけず、俳優で、もあるかの如き身なりであつたが、流石に議論は老僧で、行き詰まると逃けることが巧妙であつた。併し、書生輩何かあらんの調子で吾々を輕んずる風が見えて癢に障つたが、いつまでたつても議論が盡きない。紹介者の關君が社長はまだ社説を書き畢らんからと水を差したので、それを機會に別れた。コンナ事があつてから後、十年も會する機會が無かつたが、榮枯盛衰の變は儘ならぬ世の中の常で、一時飛ぶ鳥を落すほどの櫻痴居士も、劇場の經營などに失

敗して哀れな境遇に陥り、全く筆を新聞に絶ち、戯作者として糊口する様のことになつた。私が居士に再會したのはその頃であつた。私は「讀賣新聞」の編輯を主宰して居つたが、ある日の編輯會議で居士の作を掲げたいとあつて、私は居士を訪問した。居士は、築地であつたかと思ふが裏通りの小屋、幾んど膝を容る、許りの家を出張所とし、日々通つてこゝに筆を把つてゐた。刺を通じて面會して見ると、六疊程の一室に机と筆硯と僅かばかりの書物があるのみで、婢僕も見えず、如何にも孤篋蕭然たる有様で、日報社樓上に會つた時とは全く異つて、意氣も頗る衰へて見えた。私は「讀賣新聞」の爲めに一作を願ひたいと請求に及ぶと、書きますが私の原稿料は高いかも知れませんが、それでよろしければ、と云うて机上の原稿紙を出して示し、これが一枚一圓ですといふ。當時としては高い原稿料であつたが、ほゞ覺悟を極めて行つたのだから、云はる、通り諾した。それから數日間讀賣に連載したのが「豊島の嵐」であつた。

左の一篇は福地櫻痴居士が、角田竹冷に寄せて竹冷一派の俳句を批評した書簡である。書簡の原書は十二行の美濃紙野紙四枚に細書したもので、往年竹冷が尾崎紅葉に轉送したのを、私が貰ひ受けて、今も藏してゐる。居士は書中にいふごとく、自から俳句を作らな

かつたが、併し其評は皆要を得て、着々中つてゐる。先づ俳諧の季節を論じ、竹冷一派の俳諧を總論し、次に俳諧に忌むべき事を挙げ、終りに秀句を摘録して一々評を下してゐる。居士は晩年論壇に筆を絶ち、脚本家となり小説家となつた。その豊富の才藻は往く所として可ならざるは無かつた。その天才的の負けず魂は、俳句に對しても黙過は出来なかつたのである。但し居士の俳句に就ての説は恐らく此外には無からうと思ふと、この書簡一通は頗る珍とすべきものである。竹冷一派の俳諧は明治の文藝史に逸す可からざるものたるは云ふ迄もない。其俳社は秋聲會と云ひ、其機關雜誌は「木太刀」というた。社中には紅葉、小波を始め硯友社中の人も参加してゐる。櫻痴居士の批評は即ち「木太刀」に載せた秋聲會員の句に就てであつて、明治初頭の文藝にも屬するから、こゝに其全文を掲げる。

俳諧「木太刀」特に面白う拜讀して候ひぬ。秋聲會員の御中にて、竹冷紅葉の兩大人の老手作家にておはす事は、劣生夙に詳知して候ひけるが、會員諸君打揃はせて、斯く名家の多く集<sup>ツト</sup>らせて、此風流没地の中に立ちて、巍然俳諧の韻事を樂しませらるゝこと感服の

至りと欣羨仕り候ふ。

劣生原來俳諧に於ては全くの門外漢、一句一吟も曾て仕りたる無し。されども其趣味は敢て解せずと云ふにも非ず。現時流行の批判家に倣ひて旨評を試んは、難事にも非ざる可きが、止なん／＼、今の評に従ふものは殆<sup>アヤ</sup>しと、身の程を省みて思ひ止りて候ふ。但し舊友の老兄にまで内々にて思ふ所を申述べ、仔細あるまじき歎。あな賢<sup>コ</sup>、劣生が云々言ふなりなど人々に漫語<sup>ソコガタ</sup>り仕たまふな。

第一、劣生が老兄の御苦心に敬服し參らせたるは、春夏秋冬季節の定め方、その穩當を得たまひつる事で候ふなり。今日の太陽曆一月一日の大寒前より三月三十一日までをば、春と名くべきに非ず。去とて現に片田舎にて行はるゝ類ひ、一月送りも亦其實を得ず。證する所は、春夏秋冬の季節は十二月に對して、きちりとはあてはまらぬもので候ふ。去れば劣生は春分より夏至迄を春とし、夏至より立秋までを夏、立秋より冬至までを秋、冬至より春分までを冬と、大凡に定めなば、稍々其當を得べしと存じて、常に筆とり候ふにも、其如く心得て獨り極いたし候ひぬるが、今や「木太刀」を閱するに、老兄にも同じ御考と

見えて、大に同志を得たるを喜び、殊に其季候々々の選題に關して御用意の周密なるに服し、御苦心察し上たてまつり候ふ。御蔭にて劣生も頗る啓發の益を得て候ふ。

次に御選擇の句に、勿論巧拙は候ふべきが、纖巧に流れ、若くは奇矯に走るの二弊なきは敬服なり。此二弊は獨り俳諧に限らず、現時は、和歌にも、漢詩にも、俗歌にも、淨瑠璃にも、文章にも、都て附纏ひつる弊風にて候ふが、夫を斷然擯斥ありて、奇想は奇想のまゝ、叙景抒情は叙景抒情のまゝと、別に罪深き剪裁を加へずして、天籟自然を全くするの高識、大に劣生の心を得たり。原來奇想雄思は求めて得べきに非ず。布置結構の妙想なき畫家が紙に臨みて俄かに筆を嘗め、何がな奇抜の繪を寫出さんと致ても、書き上て見れば、岩が跳たり、樹が踊たりして見ゆるだけで、其山水は依然凡庸の山水にて、花卉人物みな其通なり。文章も亦然り、徒らに目新らしき語句を拈出し、甚しきは、自ら製造の語を弄して讀者の眼に新奇を映せしめんと謀るも、其立案趣向が平凡陳腐なる時は、更に其甲斐なきものぞかし。此理を達觀ありて、秋聲會員諸君の句々皆平易にして活氣あるは、實に世上俳諧の弊風を矯正するに足れりと云ふべし。「木太刀」の句々概ね蕉門の正風と見

受らる、が、偶々談林の如きもあり、江戸座の如きもありて、敢て一派に僻せず、流風に拘泥せられざる所、識見の卓越なる、尤も面白く拜讀して、夜の深るをも覺えざりけり。

劣生が幼少の頃に先人石橋先生戒めてノケハ、詩歌にまれ、文章にまれ、經典詩賦若くは古人の姓名典故などを戲謔に濫用すること勿れと、諄々に其非なるを誨へ玉ひき。劣生は此誨戒を記憶して、爾來詩歌文章を讀むに、成程この戲謔は一寸は面白さうで、其實は決して面白からず覺え候ふ。今や「木太刀」中にて這般の戲謔あり、其一二を擧んに、

千早 振 卯月 八日の野守哉

千早振卯月八月は吉日よの歌が原來俗歌也、典故とするに足らず。

子の内は世をうぢ山の鹿ならず

世をうぢ山と云へる喜撰法師の歌に、千鹿何の因縁かある。

新茶 煮て喝 破す 聖諦シヤウタイ 第一義

是れ聖諦第一義の問答を解せざるの作家たり。

木 の 下 の 藤 吉 も 居 る 納 涼 哉

明治初頭文壇の回顧

即ち古人を穢すもの。

の如きも劣生が敬服せざる所なり。然れども劣生は一概に此類を非とするものにあらず。左の諸句

鳥一聲山靜かにて椿落つ  
五畝の宅井戸も厠も柳かな  
春雨や鳥啼て山客猶眠る  
昔男ありけり今も杜若  
夕立の來ぬべき雲のふるまひよ  
長安に響けと打つか小夜砧  
切干も三千丈や西ヶ原

の如きは所謂善く戲謔して虐とせざることなれば、勿論集中にありて然るべき句なり。

次には、俳諧は悪口を旨とするに非ず。然るに奇警斬新の趣向を求るの餘り、識らず知らず悪口に陥ること、詩文の通弊にて、集中にも亦往々見掛け候ふ。

董摘む中に紅毛の少女あり  
春の夜や老道士書を枕にす  
覗いたれば唯の女よ青簾  
蝙蝠や金貨の女露地を出る  
汽車の旅人誤つてラムネを浴ぶ  
女客ラムネの泡の消えたるを飲む  
順禮の道に産する清水かな  
事じやく納涼の女水にはまる  
君が代や月の出て居る大晦日  
の如きなり。中にも

漢方醫の書齋古りたる葭戸哉

の如きは實に奇趣奔逸の妙はあれども、悪口たるを免れざるは惜き事にて候ふ。次に、無風流、所謂殺風景の句あり。是また奇拔の警句を吐かんと思ふ餘り、誰も踏迷



ふ岐路にて候ふなれば、所謂風流の魔道に陥るものなり。

戀猫をいたく打たる女かな  
 佛頂に糞ひり掛ける乙鳥哉  
 權門に馬の嘶く牡丹かな  
 夜をこめて葬禮ゆきぬ時鳥  
 暗がりに小便すれば鳴く蚊哉  
 水音や團扇暫く尻に敷く  
 化粧して鼻に汗かく娘かな  
 名月や誰がふんどしぞ竿の先  
 升に落てしられし除夜の鼠哉

の如き、一吟すれば其意表の趣向面白きやうに候ふが、試に靜思して再三再四吟誦して見  
 たまへ。奇警にせよ、斬新にせよ、没風流殺風景の譏は免れ難かるべきか。  
 斯いへば劣生が選擇のやかましき、「木太刀」集中一の完璧なしと云ふかと思召されんが、

決して然らず。戲謔に陥らず、惡口に流れず、没風流たらずして、しかも或は奇拔雄渾、  
 或は溫藉典雅の名句いくらも見受けて候ふ。其中にて劣生が尤も感吟いたし候を左に選ぶ  
 べし。

狼の人食ひし野も若菜哉

紅葉

天地の妙觀收て一句の中にあり。

残雪や如意輪堂の椽の下

竹冷

何等の感慨。

鶯や須磨の苦屋の古簾

馥一

清麗佳調。

涅槃像獅子の泣面哀なり

烏黒

奇想天外より来る。

金堂も跡ばかりなり壺董

殘花

夢田よりも一層の妙あり。

雉子の尾に良狗の額飾らばや

紅葉

典故の活用是の如くにて實に妙。

牛も寐つ牛飼も寐つ日永ぶり

竹園

宛然畫を觀るが如し。

嘴の赤き鳥が浮くぞや霞むぞや

知十

光景を寫出す、何等の妙手ぞ。

ふうはりと三笠の山やおぼる月

竹冷

巧を求めずして自ら巧。

苧の薬に酔を乞ふと書き送りけり

紅葉

巧妙極りて斧鑿の痕なし。

鳥部山の烟仇し野の露さくら哉

曲瀬

人生の無常觀。

斗酒ありや日暮て胡瓜刻む音

紅葉

常事を巧に弄して、以て風流の家事に轉化し來る。

つれづれや雙が岡の五月雨

竹冷

劣生尤も此種の句を愛吟す。

篝火は小さく焚えて涼み舟

無黄

一幅の妙畫。

肌寒の身は國を出て十歳かな

蘆水

十年夜雨不<sub>レ</sub>曾知<sub>レ</sub>より脱化し來りて妙。

十六夜は御家來衆の月見哉

小波

貴紳の樂事見るが如し。

新米や馬に腹掛買てやる

黄雨

豊年の狀を寫し得て、以て神樂に挿入して可なり。

指貫の露打拂ふ嵯峨野かな

飯人

此風流、今は無いかな。

春城筆語

阿刺比亞の蠶剛し秋の風

新語是の如く用ひ來りて初て可。

秋の暮を心強くも寐る人よ

多情多恨の妙句。

阿字消て卒塔婆に秋の蝶一つ

愴然たる秋景。

後の月青女房の寒けなり

往時榮華の夢思ひやられて哀也。

凧の碓氷に掛る夜汽車哉

實景自然。

風の落葉落葉の風と亂れ打つ

此景物何處より得來れる、奇想々々。

香聞くや世は背にして投頭巾

無黄

苔花

殘花

竹冷

月人

紅葉

殘花

自然の開悟。

夢の跡残る蒲團のくぼみ哉

一部の哀情史、一句の中にあり。

憂き人の音頭に踊る女かな

生非薄命不爲花の佳人信に是の如し、情緒可憐想。

秋の蚊の物思ふ臂を繞りけり

約臂黄金寛一寸、對人猶言不三相思の趣向に勝る數等の妙思。

朝ぼらけあいぬの髻の水柱哉

自から雄渾。

鉤借りて戸尻直すや冬の雨

實況の妙致。

行雁や江口の君のうしろ影

情意自から言外に在りて、眞に妙趣の上乗たり。

明治初頭文壇の回顧

竹冷

愚佛

紅葉

四丁

無一

竹冷

うかりける人の砧を聞く夜哉

秋琴

巧ならず奇ならず、意想の到る所發して句と成る。是即ち風流の最上極致。かく拜讀いたして候ひぬ。秋の夜の御つれづれ、御一笑玉はり候へかし。

十月二十一日夜

櫻痴居士拜

竹冷宗匠机下

幸田露伴氏の「風流佛」を私が讀んだのは、まだ氏と交りの無かつた頃であつた。私が郷里でしきりに政治運動をやつてゐた時分、此の小説を携へ、數時間人力車で片田舎を乗り回つた其折に、車上に讀んで、その筆致の妙にひどく感服した。この小説も吾等の同窓吉岡哲太郎の出版したものであつたと思ふ。私は其後郷里を去つて「讀賣新聞」に入社したが、或る時私の一尙知らない人が、編輯所へやつてきて、頗る磊落な調子で、私の傍に傲然アグラをかき、社員と高い聲で談話を始めた。その應答が如何にも奇矯であつたので、自然露伴氏であることが知れた。何でも此頃露伴氏は戯れに知人に書狀を寄せて自己の死亡を通知したこともあつたらしく、社員は氏にカラカツて死んだ人が來た、幽霊ではあるまいかなどいって皆々笑つた。

とを思ひ起すのである。露伴氏は或る時代に讀賣に筆を執つたこともあり、此頃も社友であつたと思ふ。それからズツト後、私が早稻田大學の圖書館の館長であつた頃、いろ／＼の名家を招請して趣味談を聽聞したことがある。其頃露伴氏をも招き、氏の得意の釣の話しを聽聞した。氏は釣に就ても該博の考證家で、古今東西にわたり釣の趣味家をいろ／＼挙げられ、釣に關する希觀の書籍に就ての談もあつた。今でも記憶に存するのは、支那の唐代の詩人陸龜蒙が釣の達人であつたといふことや、釣の書物の稀本は「何羨錄」と「釣客傳」で、これが一番よい本であることなどは其時に聞き得たことである。それから後、私が國書刊行會で「新群書類從」を編纂する時に、狂歌の部と外に一二の部門を露伴君に頼みたいと思つて氏を向島の居に尋ねたが、氏は快諾されて、此部門の編纂が間もなく出來た。氏の精力の絶倫であるのに驚いたのは、幾千の狂歌を寫字生などの手を藉りずに、悉く自筆で書かれたことであつた。堆い原稿の手許に達した時は實に驚いた。露伴氏の凝り性は周知の事實であるが、嘗て多くの一枚摺りの御和讃を幾百種と集められたことがある。丁度私が向島に氏を訪ねたころは其の蒐集に力を致して居られた時で、自然談は此事に涉つた。氏のいふには、和讃を多く集めて見たら、いろいろ

ろ句法などの異なるものもあらうと研究的にやつて見たが、案外同調のものが多いので失望した。アンナ紙屑のやうなものは、價は無い程のものだが、捜し出すのに骨が折れたと一笑された。

以上の外、森鷗外氏や、饗庭篁村氏、川上眉山氏等、既に故人になつた人に就て語るべき追憶がないでもないが、それは他日を期するとして、これを斷落とする。

### 第三 烟霞游記

#### 一 烈風と戦ひつゝ富士に登るの記

私の富士登山は、明治十二年帝大在學時代であつた。ある暑中休暇に亡友岡山梧堂とつれ立ち東海道を旅行した折である。箱根の舊道を跋涉して、芦の湖を舟で渡り、姥の湯と云ふむさくるしい温泉に一夜を明かし、翌朝發して御殿場迄行く途中道を失して無駄な時間を費し、正午頃ヤット御殿場に着し、それから富士の麓須走に達したのは午後五時頃であつた。山中で一宿し朝太陽の昇るのを見たい、とわざと須走の宿に泊らず、強力一人を僦うて出かけると、間もなく森林帯に入つたが、こゝに大學の文科の教授リーバー氏の下山するに出遇つた。氏は吾等に山の天候の危険を説き、注意せよと云はれた。全體登山期は舊曆六月一日より始るので、吾等の登山は其期に先つ三日ばかり前であつた。真逆三日の違ひで荒れることもあるまい、と

高をく、つて足を運ぶと、ボツ／＼雨が降り出して来た。山下では雨模様もなかつたのに、山中の事は測り難いと先づ覺つた。日は終に暮れて林中は殊に闇く、雨の落來る音が物凄く聞こえ、終に雷も鳴り出した。人の通行は絶対に無く、頗る心細い感じがした。中食場といふ所に辿りついたのは七時頃でもあつたらうか。茲に一宿する豫定であつたから、小屋に入つて寛ぎ、雨露に霑うた衣類を火爐に乾かしながら、晚餐を済ました。此中食場は山麓に近い處だから、一ト通り飲食物も備はり、粗末ながら寢具もあつた。

翌朝早く起きて太陽を拜せんとすると、前夜來の雨がまだ收らず、天地は濃霧に掩はれて、眼前屹立の山すら辨じ兼ねるのに失望した。小屋の主人は霧の晴れない内に登るは危険だと云ふから、已むなく九時頃まで待つと、幸に雨も霽れ霧も收まつたが、風が出だした。しかし強くもないからと出かけることにしたが、此中食場からは局面が全く變じ、樹木も無く、山の傾斜は益々急である。道と云うても巖石で、歩を和けるため多少の屈曲はあるが大體一直線で、平らな所などは全く無い。仰ぎ見れば絶頂は雲に没して、どれほど高いのか想像もつかぬ。朝の元氣で段々に登つて行くと、登るに従つて風が強くなり、豁然、遮るもの、ない山だから、兎も

すると吹き飛ばされさうな氣がして、悚然としたこともしば／＼あつた。風は呼吸のごとく吹いたり過んだり、斷續的に起り、強く吹く時は小石を飛ばして、遠慮なく登攀者の面を撲つので、その危険を避けるために、吹き出せば巖陰に身を匿し、過めば一氣に登る。追々勾配が急になつてくるので、巖に手をかけて喘ぎ／＼登る苦しさは名狀し難い。手袋は巖角に觸れて、忽ちに指頭のあたりが破れ始めた。一合目毎に石を以て圍んだ粗造の小屋があるのだが、登山の季節前であるから、その小屋が石で閉されてゐて、入つて憩ふことが出来ず、烈風に吹きさらされて些の休憩もなく登りつゝけたが、足の疲る、と反比例に勾配は益々急となり、道に屈曲がなくなつて來たから登攀に一層困難を感じた。行けども／＼憩ふべき小屋は皆閉ぢてあつて、五合目邊では小屋の前に立止まり、強力に此の戸口を開く手段は無いかと圖つても見たが無益であつた。若し六合目に辿りついても小屋が鎖してあつたら、吾等も力を添へて戸を開くべしなど、出來さうもないことを云うて、亦喘ぎ／＼風と闘つて、やつこのことに六合目の小屋に辿りついた時に、歡喜を禁じ得なかつたのは、この小屋の入口は幸に開放してあつたからだ。中食場を發してから幾時間の後始めて休憩するのだから、眞に救はれたのである。

小屋に入つて見ると、爐が切つてあり、幸に多くの薪も積みかさねてあつた。何寄りの仕合せと先づ薪を焚いて暖を取り、室内を隈なく捜索して見ると寝具が二人前あつた。飲食物はと捜したが、梅干が一樽あるのみであつた。爰に食事を済ましたが、風は益々威力を加へてすさまじい勢である。強力の云ふには、此風で登ることは危険だから、今夜はこゝに泊るとしよう。明朝は多分風がなくなるだらうと勧めるので、疲勞と怖氣に満ちてゐる、吾等はその言ふにまかせて、こゝに泊ることになつたが、問題となつたのは食料が足るか否やの點にあつた。一日分の用意をして須走を發した食料が足る道理もなく、礮と當惑した。強力の云ふには、コンナ風で無ければ中食場まで降りて、食料を取つてくるが、此風では逆も降り兼ねるといふを聞いては愈々行き詰つた。已むなくば少し許り残つてゐる食物を明朝の用に向け、今夜は梅干でもかじつて我慢しようと言つたが、高山の中腹寒氣が猛烈であるから、設令ひ暖を取ることが出来ても晩食を廢し得るかは疑問であつた。兎角する内に戶外に人語が聞こえるので、此小屋の主でも來たのかと出て見ると、軍服を着けた二人が強力を伴うてゐた。彼等は海軍の士官で、吾等と同じく烈風と闘ひつゝ、登つて來たのである。先づ爐邊に座を與へて、何よりも先きに吾等

の間は食物の有無であつた。彼等の答は吾等をしていたく失望せしめた。彼等は一氣に山を下する豫定で、多く食物を携帯せず、それも既に盡きたと云ふのである。吾等にすら足らざる食物を預たねばならぬとあつては困つたものと苦慮する折柄、士官達は強力に食料を取り來る事は出来るかと交渉を始めた。強力は多分不可能と答へるだらうと吾等は豫期したが、幸に二人ならば提携して烈風でも食料を取つて來られようと言ふので、一同は大いに力を得た。無論中食場でそれを調へるのである。二組の客は錢を與へて飲食物を注文したが、士官達は特に焼酎二升の注文をした。彼等強力はやがて下山の途に就いたが、吾等の心が、りは、彼等が無事下山しても、風が一層烈しくなつて、爲めに戻つてくる事が出来ないやうなことはあるまいか、その時は絶體絶命である、と一同不安に驅られた。幸に二人の強力は重いものを擔ぎながら小屋に戻つて來たので、始めて憂悶をひらき、小屋の内は俄かに陽氣になつた。士官は兩人共薩摩出身で、焼酎を沸かして飲む慣習があり、自分も勧められて飲んだが、山の寒氣は醉を打消して、いくら飲んでも酔心地にもなれないのに吾れながら驚いた。此夜は寝具が足りない所から、自分は寧ろ櫓かざを焚きながら爐邊に在る方を選び、横臥しても眠を得ず、早く夜は明け

た。

先づ天候如何と見るに、相變らず風は猛威を揮つてゐるので、早發を見合はせてゐると、無聊に堪へかねた士官達は、強力から此邊に兎がゐると聞き、それを狩るために戸外に出た。しばらくすると「トレタ〜」と叫んで一頭の兎を携へて來た。直ちに軍刀で肉を切り刺身のやうなものを作つたが、さて醬油などは一滴もないので、梅酢をつけて兎の酢物は富士の名物で御座いというて戯れたのも一興であつた。漸く風が和らいだので一同登り出した。天氣はよいが濃霧は山頂を掩うてゐる。下界を見ると、白雲が足下を埋めて、群山が頭を露はしてゐる光景はさながら洋中に島を望むが如くで、高山に在つて始めて見るの奇景と感じた。殊に奇なるは、下界一杯の白雲が倏忽の間に消失して跡方もなくなると思ふと、亦いつしかもとの如くなる變幻の景に接しては崇高の感に堪へなかつた。六合目よりは勾配が益々急で、四人の客と二人の強力は相呼應して攀ぢた。昨日は三人であつたのに、けふは倍數であるから何となく心強く覺えた。やつとのこと下八合目に辿りつくと、此處の小屋が案外大きく、且つ戸も明けてあり、小屋の主もゐた。こゝは各方面から登る旅客の湊合する所だから、旅客を待つ設備が早く

届いてゐるのであらう。中をのぞくと、爐には大きな鐵鍋がかつてゐて、主人が其傍らに坐し、愛想よく吾等を迎へた。吾等は物言はず立入つて爐邊に足を投出し、先づ暖を取り、鍋を明けて見ると味噌汁が煮え立つてゐるのを見て溜らない程愉快を感じ、強力の擔つて來た殘飯を全部これに投じ、怪しげな雜炊を作つた。さて食器と云へば、嘗て洗つたこともないやうな汚らしい椀の外は無かつたが、汚穢を厭ふ違もなく、さながら餓虎のごとく、幾椀も食つた。温食はこゝで始めてあるから、銘々痛快を叫んで、漸く元氣がついた。最早絶頂が近いと云ふので勢込んで更らに登つたが、これより絶頂までは愈々峻嶮で、備さに登攀の艱を味つたが、さて漸く絶頂に達すると、濃霧が四閉して咫尺を辨せず、互ひ／＼の顔すらわからない位で、且つ積雪が尙ほ深く、所謂人穴などは捜ることも出来なかつた。

頂上の寒氣は一段激しく、須走の宿より借用の綿入では到底凌ぎかねてブル／＼振ひ上つた。かねては下りは別路を取り、大宮口に下りる積であつたが、さうすると強力にも別れねばならず、綿入の衣類も返さねばならず、心細く感じた折柄、士官達もしきりに止めるので、豫定を變じて例の砂走といふ砂路を下ることにした。この砂路は富嶽に奇とすべきもので、上から下



まで小石をも交へない砂ばかりの一條の道がある。これに踏み入ると砂は流れて、人はスキーに乗つたかの如く止めどもなく快速力で馳せる。前日の喘ぎく、一寸一尺と刻むやうに歩したのと較べると全くの反對で、眞に痛快である。案外と思つたのは草鞋の底が損する事で、幾足かを穿き替へた。砂路の兩側に草鞋の壘壁が築かれてあるのは此故であらう。二日を経て登つた山を僅かに一時間ほどで降るのであるから、氣温が刻々に異つて、中頃以下には暑氣を感じて綿入を脱ぎ棄て、終には襯衣一枚になり、流汗淋漓で麓に達した。

さて前日立寄つた旅館に着くと、多數の旅客は家前に立塞がつて、しきりに山中の事を聞きながら、喧噪を極めるので、何故かと宿のものに糺して見ると、従來山に入つて二日も歸つて來ないと、およそ怪我のあつた事と判するのが例となつてゐる。實は貴客方の消息がわからぬ内は危険と考へて、この多數の人達を引留めてあるのだと語つた。そこでわれ々もその意を諒して、特に五六の總代を選ばしめて、それに對し可なり誇張して得意顔に山の嶮を語り、大勢より無事を祝されたのも一興であつた。われ々は須走を發して三日目に歸つた。食料は中食場で辨じた爲めに、宿では食料が絶えたと速断したのも無理はなかつた。

## 二 淺間山跋涉の記

富嶽に登つた同じ旅中、吾等は東海道を過ぎ信州路に入り、佐久郡の小諸に一宿した。旅舎の窓を開くと、烟を噴きつ、ある淺間の山が間近に見えるので、亦遊思が動き、翌朝登山と決した。旅舎で里程を聞くと山麓まで約三里、山の絶巔まで四里半に過ぎない。しかし山には危険が多いから、案内者を伴ふ必要があると云うた。吾等は富士に登つた餘勢で、コレ式の山に案内を要するものかと血氣の勇に驅られて案内なしに出かけた。

驛を左に折れて行くと、冥々たる曠原が眼前に展開された。これが所謂淺間の燒野で、田畝もなく樹木もなく、唯蕪草が徒らに叢生して殆んど道を辨じないので、終に道を失つた。しかし咫尺の間に見る山を目掛けて行けば、自然に達するであらう、と草生を矢鱈に踏みわけて行くと、草間に去年刈り去つた萱などの株が潜んで足を噛み、少なからず悩まされた。山を望んで一直線に進み行くのだから最捷徑を取つたには相違ないが、案外に里程があり、炎天にさ

らされて大汗に濕ひ、やつとの事に山麓に達すると、これが所謂の臺山と呼ぶもので淺間の本山を抱擁してゐる。更らに小徑をたどつて行くと、左は絶壁百仞で、仰いで其の頂を見ず、右は幽谷で、水聲を聞けども水を見ることが出来ない。忽にして頭上に憂々の聲を聴き、驚いてこれを避けると、その刹那巖石が墮ち來つた。初め拳のごとき小石が二三輾轉して下ると、他の石が附加して其勢を加へ、愈々下れば愈々勢を増し、遂に一大礮丸の如き大をなして墮ち來るので、觸る、もの皆碎け、其勢當る可からざるものがある。吾等は悚然たらざるを得なかつた。亦行くこと半里ばかり、淺間の本山は咫尺の間に現はれた。頭を擡げてこれを望むに、圓錐形の兀山で、童然草木なく、唯一條の窄路を存するのみだ。吾等は魂先づ飛び、一躍絶巔に至るべし、と勇を鼓して登ると、山路は羊腸百折で、磊々鑿々たる火石は頗る歩しにくく、尺を進めば半ば退くと云ふ鹽梅で、氣餒え體憊れ、幾んど僵れんとした。一里ばかりの道を十回も愁うて漸く山頂近くになると、烟雲人を襲うて腥臭の氣は鼻を撲ち、活火山の本性を現はして來た。絶巔には山身が縦横に摧折して巨坑をなし、烟を噴くものあり、噴かないものあり、其深さ幾千仞なるかを知らぬ。絶頂は案外平坦で且つ廣く、大火坑は目前に横はつてゐた。

登山の前には火坑に就ていろ／＼の想像を馳せ、旅舎からいろ／＼聴かされたが、小諸は山の附近でありながら實際に暗く、山には硫氣が充ち、火坑に近づけないとか、火坑の周圍には埒が構へてあるなど云うてゐたが、それは全く出鱈目で、硫氣は無いでもないが、堪へ難いほどでもなく、火坑は豁然として周圍に人造のものなどは何一つも無かつた。但し風の方向が吾等に面してゐたら噴烟を浴び、硫氣に咽んだかも知れんが、幸に風は逆であつたから噴烟も反對に流れた爲め、吾等は何の支障もなく、火坑に咫尺することが出來た。併し噴烟の盛んな時は坑中を覗いても暗黒で、何も辨じ兼ねた。然るに幸にこの噴烟は間歇的で、僅かの間收まることがある。その收まつた刹那に火坑を下瞰した折、偶々日光が差込んで、坑中に重疊してゐる山々に反射し、黄金の山と見まがふ美觀を呈したので快哉を禁じ得無かつた。坑中には硫氣が充塞し、重なり合ふ何の山でも硫氣に充ちてゐるから此の美觀を呈するのである。且くすると坑中幾千尺の底に、颯風の如き凄まじい聲が聞えると、間もなく噴烟が起つてくる。吾等は坑口に佇立して坑の周圍がどれほどあらうと案じたが、およその測定もつかかなかつた。私の郷人で大野某といふ劍客が、火坑に一夜宿した話を幼時聞かされたことを憶ひ起し、坑口を一周

して見ようかと企てたが、萬一過があつてはと自重して引返した。小諸の旅舎に歸着したのは午後四時であつた。

自分は大山に登る毎に良候を得ないのに、此日は天氣清明で、能く活火山の狀を窮め得たのは仕合せであつた。

### 三 白雲金洞探檢の記

私は壯年の頃登山が道樂の一つであつた。東京から郷里へ歸省の途中、上州を経て松井田邊から妙義の山を望む毎に其奇勝に憧憬し、常に登攀を念とした。澤元愷の白雲金洞の游記を讀むに迫んで、一層游思を切にし、明治十三年の九月父を伴うて東上する時一僕をも從へてゐたから、此時こそ、と父を松井田の旅館に留め、僕を伴うて行を啓いた。

九月二十日の朝未明に旅裝して立出で、松井田の驛を西へ折れて行くと、茲に一帶の流がある。橋を渡り、十町ばかり行つたとき夜もやうやく明けわたつた。頭を擡げて彼方を望めば、

奇巖簇々直面して立ち、幸に好天氣であつたので、奇秀は畢く露はれ、えも云はれない景色であつた。唯上をのみ視てひた走りに覺えず十二三町行くと、はや妙義の町へ近いた。此處に一條の阪路があり、その窮まる處に大なる黒門がある。これぞ妙義の町の入口で、門内には人家三十數軒を見受けた。旅舎もあり、割烹店などもあつて絃歌の聲が聞こえ、意外の繁華に驚いた。町の北の方危磴の穹窿たる上に一大社がある。これが妙義神社で、磴を拾つて登ると、一大華表に白雲山の扁額が掲げてあつた。幼時太宰春臺の白雲山の詩を愛誦しながら、いづれの山とも辨へなかつたが、こゝに始めて此山のことと悟つて、興情はいやましにました。神社を拜して妙義の町に戻り、一旗亭に一酌して案内者を僦ひ、試みに何れの山が尤も風景に富むと尋ねると、巖石の幽怪なるは中ヶ岳に若くはないといふ。依つて其里程を問へば僅かに三里といふから、直ちに探討と決し、市街を西に折れて十四五町行くと、諸山が抱圍して、さながら釜中にあるが如き處に出た。つゞけて登り道で、殘暑の折柄無風であるのに困んだ。しかし景色は一步毎によくなつてくる。白雲山は屏障のやうに骨立し、左手には金鷄山、蠟燭岩と相對して劍立する。その光景の奇峭なるに疲れを忘れた。案内者は中ヶ岳はあの蠟燭岩の後方に當る

と指さしたのを便りに歩むと、此れより山路は半腸として一步は一步より高く、路は甚だ峻嶮である。過ぎ／＼一里ばかり行き、漸く中ヶ岳の麓に達した。この邊の巖石は紫色を帯び、皆凡ならざるを覺えた。尙ほ二三町許り行くと、圖らず一巨巖の屹然目を遮るものに會した。案内者は急に足を駐め、これぞ中ヶ岳四石門の第一門であると云うた。澤元愷が其游記に門にして山、山にして石、其高さ數百仞、垂天の雲の如く、兀然獨立するは此門也とあるが則ちこれである。私は此石門を夢寐の間に憧憬すること幾年の久しいものがある。さて今ぞ始めて戀人に遇つて却つて辭がなく、唯恍然たるのみであつた。斯くて亦麓に傍うて行くに、怪岩奇石鬱樹の間に出没し、巖壁の窮まるるところ、更らに石筍の空を凌いで直立するのを見た。此邊奇峭の景は到底描寫し難いものがある。此の巖下に官司の住する一字の茅舎があつた。そこに入つて且らく憩ひ、これからの案内を此の家の人に頼まんといろ／＼言へども、よい返事をしない。主人らしいもの、いふには、今は茂つた草や藤蔓が道を塞いでゐて、それを伐り拂はねば通られぬ處がある、と斷り口上である。自分は兎も角も全山の圖を得たいと思つて求めると、今は搦つて無いと云ふ。それはどんなものか、版木を見せよ、と云ふと澁々出して來たのが、誰れ

の畫か解し兼ねたが、南畫風に書いた極めて大きな圖で、如何にも風致のある畫である。そこでどうかして欲しいと思つたが、搦つたのがないといふからは非もなく、唐紙一枚譲つてくれれば自分で搦るから、バレンを貸して貰ひたいと言ひ出した。主人も私の餘りに熱心であるのに少しく調子も變つて、唐紙半切を出して與へた。依つて不完全ながら匆卒一枚搦つて厚く禮を陳べ、若干の金を投じ、更らに案内を求めて、謝金は幾許出しても苦しくない。樹を切り拂ふに人手を要すとあらば、幾人でも傭うてもらひたい、と云ふと、始めて主人も本氣になり、一人の男に鎌や斧を持たせて、然らばとて先導した。

此家を出て右手の方へと進むに、但見る、巖石屏風の如く直立して登らんやうもなければ、たゞ一向に見上げるばかり。吾等は呆れ果て、あれは如何と進み兼ねるのを見て、案内者は微笑しつゝ、我々は今彼の絶頂まで登り行くのであるというた。案内者はやがてこの巖の左手に導いた。こゝに數百級の危磴がある。それを拾ひ盡せば、日本武尊の小社がある。それを左に折れて更らに登ると、怪石紛錯し、或は磐石の重々層をなすものあり、或は蒼蘚岩を封じて潤滑足を失し易い所がある。或は石もて橋をかけたとき所がある。登ること五町ばかりで、眼

界が俄かに遼濶となつた。爰に佇立してあたりを顧みると、顛上に大なる巖石の屹立するものがあつた。これこそ先きに登るべくも思はれなかつた巨巖の上頭で、吾等はいつしか其頂點近く來たのであることを知つた。案内者は左方に見える山をさし、あれが中ヶ岳だといふを見ると、一山盡く骨ならざるなきが、屏風のやうに疊み重つて、其の一ときは高いのが即ち中ヶ岳であつた。乃ち澤元愷が山中の舊記に徴し金洞山と云つてゐるのがこれである。その後ろに當つて、渾身肥大、帽を戴いて微笑するかの如き巨巖が大黒岩で、南の方には絶崖屏立する中に春箏の如く直立するもの、半ば土に没するもの、鬱樹の間に僅かに其頭角をあらはすもの等、一々名状することを得ない。雲霧時に巖石の間に起つて動搖定まらず、或は片々として飛び、或は散じ或は合し、散ずれば天地瞬息の間に清明となり、聚れば天地一白となる。其の變幻は筆寫の及ぶ所でない。自分は低回去り兼ねたが、促されて又巖角を踏んで登ると、一大巨石の、斧もて劈きたらんがごとくに、怪しく二つに裂けたるがあつた。その裂け目は僅かに二尺ばかりで、石を累ねて登り得べきを表はしてある。これに登るの法は、先づ身を裂け目の一方の石に寄せ、他の一方の石に足を託し、漸次に身體をせりあげるのだ。これを鬼の鬚磨ヒゲスリと名づけて

ゐる。この石上は僅かに一疊敷程の廣さで、それに坐すると目も醒める許りに四面が快濶で、眼下は幾千仞の谷である。こゝより舊路を辿つて降つたところは正午に近かつたが、食事をする所もないから絶食と覺悟を定めて、案内者の導くがまゝ、先づ社の右手にある二見が浦といふを訪うた。こゝは秦莽篠蕩、晝猶ほ暗く、路もつばらにわけがたい處に、雙岩が相對して路に横はるを見た。一岩は大、一岩は小で、其状さながら伊勢の二見の雙石に酷似してゐるのも一奇である。總じてこの山の諸巖石のすべてが奇絶であるのは、造化がこの山に偏私して乾機坤秘を惜しけもなくフندگانにあらはしたかの如き趣がある。

更に本道に出で、右に折れ、第一石門を通るに、折しも夏の末で、蕪草茂つて道も定かにわかり難く、案内者の導くまゝ、に行けば、路は嶮惡で障礙物が多く、案内者は山刀を抜き放ち上に切り下に披いて行く。其状さながら戦地にあるが如くであつて、漸くにして第二門に至る。此石門は第一門に重なつて、其大きさも似てゐる。其洞穴は上廣く下狭く、股間を歩するの思がした。見おろせば數百仞の下に谷あり、鳥聲を幽かに聞くのみ。樹木鬱して何物も見えなかつた。此邊の道は頗る窄く、それが樹木に掩はれて暗い、そして潤滑であるので足を失しやすく、幾

度か心膽を震はした。かくて鳥道をたどり第三石門に達した。此石門は高さ第一二門に比し半ばにも及ばない。代りに横に廣く、穴も遼濶である。第四石門も第三門とや、似てゐる。各門の距離は四五町を隔てるに過ぎないが、幽谷を迂回するために案外遠く感じた。第四門を過ぎ、少し登ると、眺望絶佳の處に出た。石に踞して憇ひつゝ、今經て來た所を望めば皆脚底にありて、一二の門は屏風の如く對立し、其前面に孤劍の空を削るごときものが大柱峯、屹然龜の如くに天半に半身を突き出し、背を晒すに似たものが龜石、飛樓の如きもの、城廓の如きもの、一々列擧に違が無い。

尙ほ細逕を小半時歩すると、道はやゝ急となり道幅は益々細くなつて、道の最極點に達した。其行詰つた所が此山の最も高い處で、そこに一大巨石が行路を塞いでゐる。其石は私の身長より二倍もあつて、石膚は平滑で中央がふくれてゐる。これを攀ぢらねば絶巔に行かれないのだが、さて足を託する所がない。登り損ずれば忽ち幾千尺の谿に墜ちるのだから悚然たらざるを得なかつた。従僕はこゝで縮み上がつて、腰を抜かしたやうになつた。案内者の云ふには、こゝが山の最難所である。しかしこれを登らねば、山の最大奇勝を探つたとは云へぬと勵まし、

先づ身輕に石に足を寄せたと思ふと、早や石上に立ち手を差延べて、自分の手を取つて全身を引上げてくれた。従僕は畏れ戦いて石下にゐんで待つことゝなつた。此上が壁立の巖石の絶巔で、其幅が屏風の縁の如くに狭く、數千尺の高い處であるから、天風激しく到れば吹き飛ばされさうに想はれて怖氣がさした。しかし血氣の自分は勇を鼓して、先づ右方に突出した二坪もある平扁の石上に立つた。これが前に記した天半に懸つてゐる龜石である。私はこゝで膽試しに一二分の演説を試みた。それは山の奇勝に感じ山靈に謝するの詞であつた。左方が即ち屏風の縁同様細い危ない所であるが、如何にも平で、二三間を隔て、多少廣い處がある。これを橋に見立て、三橋と云うてゐる。此三橋を渡ると、行詰つた所に洞穴のある巨巖が遮つてゐる。それが所謂胎内潜りで、匍匐して潜り抜けると舊路に復し得るのも一奇である。如何にもこゝは神秘に屬する所である。三橋を渡りながら、切つたてになつてゐる下を瞰ると、覺えず心膽を寒からしめ、久しく止まることが出來ず、匆々に例の石を下つて歸路に就いた。時は既に午後の三時頃で、午飯を取らない吾等は流石に空腹を感じた處へ、宮司の妻女が氣を利かせ、重箱に握飯と漬物を入れ、路傍に待受けてゐたので救はれた。

## 四 白帝城と木曾川の奇勝

徳川家康の重臣成瀬隼人正ハヤトノカミの居城、犬山城の在る、犬山を中心とした木曾川の上流下流は、奇勝の名區として早くから喧傳し、今は日本八勝の内へ入選してゐる。私は木曾川とは古い馴染で、四十餘年前の書生時代には、膝栗毛で木曾街道を踏破し、毎日此川に沿うて歩し、飽き飽きするほど此川に應接したが、この名區だけが漏れた。多分山靈水伯は幼穉な吾等の眼に入るを吝んだのであらう。幸ひ昨秋の關西旅行はこの名區を探るの機會を得た。今は名古屋市の柳橋を起點として電車が開け、一時間で犬山に達することが出来る。偶々此電鐵會社の社長上遠野氏は吾等の友人で、觀賞には種々の便利があり、二三の社員が東道の勞を執られ、五六の校友と四五の校書も一行に加つた。柳橋驛を發したのは午後の二時で、枇杷島、西春、岩倉、石佛、布袋、柏森等の停車場を経て、犬山口に達するのである。白帝城だけを遊覽するには、犬山口下車し、十數町自動車で行けば城下に達する。併し、川の勝區は其上流にあるので、

それを觀賞しつゝ、流を下つて城下に達せんには犬山口で電車を乗換へ、更らに富岡前、善師野、愛岐、帷子、春星の諸驛を経て今湊まで行かねばならぬ。此間約二十五分。今湊と前岸の太田の庄との間には鐵橋が架してある。この太田の庄は友人坪内逍遙氏の先代が代官をつとめた處で、毎々坪内氏から聞いてゐるが、その地に咫尺するのはこれが始めである。大正八年坪内氏が久方振りにこゝを訪うたときには、代官所の遺址は既に桑田に變じて尋ねるに由なかつた。聞いたが、その際案内に頼んだ、老農夫の素姓を尋ねて見ると、それが氏の腕白時代の遊び友達であつたことが分り、氏は今昔の感に打たれたと云ふ話を憶ひ起した。一寸行つて見たいと思つたが、豫定の時間を變ずることが出来ず、終にその地を踏むことが出来なかつた。一行は川に臨んでゐる北陽館といふ大旅館に入り、樓上より先づ溪流を望んで勝槩の一斑を見た。こゝは流の屈曲の處で、水の多い時は氾濫して樓を侵すと聞いた。この旅館より二隻の游船を僦ひ、流に従ひ三里白帝城下に下る。ひそめられた奇勝は乃ち此間にあるのだ。旅館に休憩中、主人の需め辭しかねて、倉皇拙毫を揮ひ、絶勝の二字を書いて責を塞ぎ、時を惜んで一行と共に直ちに船に入つた。船は館下に用意してあつたが、乗船の處が既に絶勝區の一端である。左

方には仰ぎ見る巖山が壁立し、怪巖奇石は水中に出没して、景色は凡庸でなく、先づ吾が意を得た。流は矢のごとく早く、篙を勢せずして船は下る。二隻の船は校書と酒を載せ、時に兩船を繋ぎ、時には兩船を分つた。兩船を分つ時は水中の暗礁を避ける時で、篙師は秘術をこゝに盡すのである。船底が暗礁に觸る、時は氣味のわるい聲を發し、激浪の飛沫は船に入つて、人をして手に汗を握らしめた。私はこゝに於て保津川を聯想せざるを得なかつた。水中に暗礁の多いこと、随つて船の構造皆保津川と似てゐる。併し似ないものもある。彼れに在りては地境が狭く、兩岸山に包まれて景物が陰鬱であり、此れに在りては一方が開けて快濶である。彼れにも怪巖奇石あれども、此れに於てはその規模一層雄大で、往々屏風の狀をなして駢列するものがある。總じて保津の景は單調であるが、これに於ては複雑である。石門、飛瀑、佛閣などは彼れに無くして此れに在つて、景色に光彩を添へてゐる。若し優劣を論ずるならば、私は寧ろこれを優れりとしよう。船中河風が寒く、溫酒をしきりに傾けたが、酔を覺えなかつた。船矢のごとく駛せ、さながら畫圖の中に在るが如く、眞に應接の遑が無かつた。一二勝槩の處を擧げれば、飛瀑には乙女が瀧あり、瀨には觀音の瀨あり、灣に赤岩灣あり、佛閣に岩谷觀音

あり、新赤壁と稱する處などは流石に風致がある。奇巖怪石其狀により様々の名あれども一々録するの遑がない。此仙寰には、山に猿猴の縦横に駈け回るあり、樹に怪鳥の奇聲を放つあり、皆塵外のものである。一時間餘でまだ興の盡きざるに、船は早く白帝城を見るの地點に達した。城は川に臨んで、高く崖上に天主閣をあらはし、崖下に一山の富士形を爲すものを望む。所謂夕暮富士と呼ぶのがこれである。川を横斷して鐵橋が通じ、城の山下に會社の經營に係る彩雲閣がある。皆風景を彩るものであるが、就中孤城山に憑り、巍然河に臨むの景は眞に絶勝である。獨逸のライン河にも古城址の水に臨むものがあり、風趣が似てゐるといふので、志賀矧川はこの勝區に日本ラインの名を命じ、それからは自然此名を以て呼んでゐるけれども、私は斯様な名で呼びたくない。第一、川の性質がラインと異なつて、彼れには奇巖怪石がない。矧川は上流の奇勝を探らず、單に古城址の存する風趣の似寄りを見て輕率名を命じたので、甚だ不倫である。私はラインに優る幾等の、あたらし勝區を、膝を西洋に屈してその名に擬ふ、不見識を一蹴し去らんとする。犬山城を支那の白帝城に擬するのも、考へものであるけれども、強ち妥當を缺いたとも思へないから、且らくそれを可とせん。私は閣筆に追ひ、此神秘的でサブ



リミテーに富んでゐる境に臨み、萬が一をも形容する筆を有たぬことを恥ぢる。老杜が白帝城最高樓の詩に「峽坼雲龍虎臥、江清日抱鼉鼉遊」と云ふ熟知の句がある。それを幾回か誦して、此の句を藉り來らば、幾許か勝槩を髣髴し得ようかなど、坐ろに思ひ、又雄渾沈鬱の景は老杜の詩そのもの、如くであるとも感じた。此日、一行は彩雲閣に宿したが、私は小山松壽氏と共に晩間名古屋へと歸途を急いだ。

## 五十和田湖と溪流美

私が青森秋田を漫遊したのは、四年前の眞夏であつた。此行、兩縣に跨る十和田湖の勝を探らんとするのが、目的の一つであつた。私は先づ東北線の古間木驛から、支線の十和田鐵道に乗り換へ、三本木町で下車し、焼山から奥入瀬川に沿うて湖畔の子の口に達する間を三里、自動車で通過した。此間の溪流が眞に天下無雙とも云ふべき奇勝である。此日は生憎雨が降つて觀望には甚だ不便であつたが、車の幌を拂つて雨を浴びながら賞覽した。

此溪流奥入瀬川は湖水に源を發して透漚帶の如く、十餘里流れて太平洋に注ぐのであるが、もとは此溪流の通ずる所皆風致があつたと云はれるが、度々洪水があつた爲めに何物も押し流され凡溪となり了つた。其原因は、近年製材所が設けられ、伐木が盛んである爲めと分つた。併し幸ひに焼山から少しく進むと、山林が深くして斧斤の入らない爲めに、洪水の難を免かれ、舊態を維持してゐる。そしてその勝區は實に三里に亘つてゐる。

先づ此の勝區を總説すると、極めて陰鬱な境に在る。左右山が迫つて、曾て斧斤の入らない森林は天を翳して日光を遮り、積翠の間を水が縦横に走つてゐる。溪は淺く水は清く、道路と平行してゐる趣は全く鹽原邊とは異つて、彼れが如く、深く崖の落込み、下に水を見るやうな處は無い。少しく水が澎漲すれば道路を侵すであらうと思はれるほどであるのに、さること無いのは、森林の深い故であらう。殆んど道を侵さんばかりに水の亂れ流る、状態は此溪の特徴で、趣味もこゝに在ると思はれた。

湖面と此の溪流とは相當に勾配があつて湍ハヤセを爲す所が甚だ多い。そしてその緩なる所は水が涇々の聲を發して落ち、其急なる所は雷聲を發して飛沫が四方に飛ぶ。總じて水路に巖石が

多く、水の自由に流る、を許さないもので、盤桓して右に左に亂れ流る、のが多い。殊に奇なるは、水中の巖石がさながら小島嶼の如く、苔むして樹木を被つてゐるのが少なからざることである。此等が或は疎に、或は群をなしてゐる。是も畢竟洪水を知らざる一微であらう。飛瀑も沿道に數多く、高さ二三十丈に及ぶもあり、一所に大小四瀑を見る所もあつて、目は非常の多忙であつた。尙ほ私の目を怡ばしめたものは、老樹の枝が高く垂下して溪流に浸つてゐるさまで、何とも云へぬ幽致のあるのには激賞を禁じ得なかつた。實に一路の溪流は一幅の名畫で、巨手を儼ひ來らなければ、寫し難い妙がある。近來自動車を通ずる爲め四五の橋を架したのは神秘の區に人臭い味を加へたと云へるが、見方によつてはそれが却つて風致を助けてゐる。概して此境が自然のまゝに委し去られ、且つ風景に甚だ變化の多いのは此溪の特徴で、耶馬溪などの遠く及ぶ所でない。

時間が許さば靜かに箒を曳いて十分風景を玩賞し、或はレンズの中に絶佳の處を收むべきであつたが、何分にも湖水に達するには日が暮れるといふので、自動車を急がせねばならなかつたのは遺憾であつた。すべて谿谷の鬱林中は、眞夏であるのに、空氣は秋の末の如く冷かで、

かて、加へて雨さへ降るので一段の寒氣を添へ、燒山の旅館から綿入のドテラを借りて着用してゐても、身體は顫へるほどであつたが、飽かぬ眺めは吾等をして寒さを全く忘れしめた。

車は疾走して、漸く湖畔近くなり、こゝに激湍の尤も大なるものを見た。これが子の口の瀧で、湖より溢れた水が河床の斷壁より落下するのであるが、こゝは溢れた全水の集注する所で、最も壯觀を呈してゐる。此激湍を見て間もなく溪は盡き、陰鬱の境は一變して快濶の天地となり、鏡の如き大湖を望んだ。これぞ十和田湖で、その湖畔は子の口村である。

湖畔に自動車の着いた時は日は既に暮れた。幸に宿るべき旅館から船が差し回されてゐたから、湖畔の茶屋には立寄りず直ちに乗船した。船には酒食の用意もあつたから、寒さ凌ぎに一杯を傾けながら、ほの闇い湖を渡りつゝ、夜山夜水を賞したのは一興であつた。自分は幾回か山湖を涉つた經驗を有してゐるが、夜中に渡るのはこれが始めて、海拔一千尺の山湖の夜景には頗る趣味を感じた。私共は湖水の探勝を明日に譲り、船中では頻りに酒を貪り、前刻經過した溪流美に就いて私は云うた。十和田湖を激賞する人はいくらもあるが、溪流美は兎もすると閑却さるゝ。併し、あれを閑却しては十和田湖の奇勝の一半を失ふのである。恐らくあの溪流も

追々人の手が入り、樹木が伐られたり、茶屋が出来たりして、俗了する日は遠くもあるまい。其自然のまゝなるを見たのは實に仕合せであつた、とさまざま評論し合ふ内に、船は二里餘を走せて彼岸に達した。

翌朝幸に好晴を得たので、早くから起きて、先づ旅館の縁先より湖面を眺めた。昨夜模糊たりし風景は、けさ朝暾に輝き、山容島姿、水光樹色、一として吾等が游思を躍らせないものになかつた。一行快哉を叫んで、半日湖上の人とならんと決し、車を僦ひ酒肴を載せて十時頃湖に泛んだ。

大體山湖は共通の風格を備へてゐるが、此湖には種々の特徴がある。周回十六里もあるから規模が大きい。二大島嶼が一里も湖中に突出してゐるのがこの湖の最も得意とする所で、他の山湖に見得ない特徴である。四圍の山勢が雄偉で、満山鬱蒼たる樹木を以て掩はれ、巖膚の露出した處が一ヶ所もないのも亦一特徴であらう。水は紺碧で、スコットランド邊の湖水を偲ばしめ、二大島嶼があるために灣曲が殊に多く、十和田と云ふも實は十灣田の轉化だと云ふが、さもあらうと思はれた。山湖の風光は往々單調に失する嫌ひがある。然るに此の湖の特徴は皆

單調を破るもので、十和田の勝の天下に鳴るのは偶然でない。二大島嶼の如きは、見る方角に依つては湖面を遮り、湖を狭く見せる難がないでもないが、尤も大なる風趣を添へるのは此島であらう。若し之を除却したとあらば、此湖も凡庸の山湖に墮するであらう。此半島は共に南岸より突出し、東にあるのが御倉半島、西にあるのが中山半島と稱され、兩半島は湖の一面を兩斷して、御倉半島の東を東湖、中山半島の西を西湖、其中間を中湖と稱してゐる。

吾等の船は先づ西湖に泛び、中山半島に沿うて中湖に入り、前面に御倉半島を望み、背面に中山半島を見、更に御倉半島に沿うて東湖に出る順路を取つた。先づ中山半島の景を云ふと、小島と灣曲の多いのが景の骨子で、概して雄渾の氣象はなく、寧ろ纖弱優美と云ふ方である。壯觀は、何と云うても、中湖に入り御倉半島を望む所にある。この中湖は噴火口の跡と傳へられ、近年田中子爵の調査に據ると、水深一千二百尺と云はれてゐるから、水底は幾んど海面と平準を保つことになる。兩半島の間にあるから、船中では、さながら獨立した一湖に遊んでゐるの思があつた。一方に峙つ御倉半島を望むと、山容が如何にも奇抜で、千丈幕と唱へる巖壁の如きは殊に人目を駭かすものがある。すべて此半島の一面は豪宕雄偉の氣象に滿ち、之を以て

本湖の絶勝と爲すも敢て誣言でないと感じた。吾等は日暮崎と云ふあたりに停船して、奇巖怪石に對して一杯を傾けたが、全く仙寰にあるの思があつた。併し靜かに考へれば、こゝが噴火の口で、聳える半島の山は千尺も高く、海中に没してゐる山脚が一千二百尺もあつて、吾等が居る所は稍々山の中腹に近いことなどを考へ合はせると、崇高幽玄の氣に襲はれ、襟を正さざるを得なかつた。吾等は三十分餘りこの神秘區域にあつて十分風光を弄び、東湖に回るを割愛し、歸途に就く途中、特に舟を中流に放つて、全局の景を綜覽しながら旅館に歸つた。

此日此地を去り、大館に赴かんとして先づ發荷峠を攀ぢ、高處より全湖を下瞰し、爰に湖に別を告げた。湖の風光佳ならざるにあらざれども、自分としては寧ろ溪流美に重きを厝きたいと思ふ。

## 六 大隈老侯に随つて三谿園を訪ふの記

横濱といふ俗地の中に唯一の風流の境はと問はゞ、勿論三谿園を挙げねばならぬ。全體横濱は狭い上に遊ばうと思ふ場所もないのに、適々此園の如き勝概地の存在するは、横濱一般の人

の爲めに眞に無上の樂地が出来た者といふべきだ。園は富豪原富太郎氏の私營に屬する、即ち同氏の別荘ではあるが、今では全家其處に居住して、事實は本宅も同様である。場所が甚だ宏濶なところから其全部を解放して常に何人をも自由に出入させ、逍遙去來、欲する所に任せてあるが、此意味からは殆んど公園と評しても不當ではない。實に横濱に過ぎたものは此三谿園である、と自分をつくづく感じた譯で、唯徒らに巨費を投じて輪奐の美を誇るの類でない。

先づ自然の地形から言へば、横濱の停車場を下りると櫻木町、あれから電車に據つて本牧に達する。恰も海岸に沿うた所で、双方から起伏してゐる山の相接する間に三の谷といふ地がある。此處に好位置を相して造られたのが此別邸で、三谿園とは即ち三の谷といふ俗の名を其儘採り用ゐて名づけたのである。總じて海岸といへば、誰しも目を遮るものもない、極めて空濶な景を聯想することだらうが、此地は出張つた山と山があつて、其隙から海を眺める趣が實に凡ならざるもので、海岸といふよりも寧ろ山中の感がある。然るに其間から海上を見渡すのだから、人をして覺えずこんな所に海があつたのかと疑はしめる位なもので、即ち海岸に山があるといふ此意外の地形が洵に面白い。全體大磯あたりのやうに平地に海を見るのであつたら、

それは尋常一様の風光である。然るに是は横濱といふ俗地不相應な天然の好地形で、随つて風景に變化が多い、其處を利用して山勢の起伏してゐる所に營まれたのが、即ち此園である。

園内に施された種々なる意匠は何れも高雅なものであつて、當に天然の地形を利用したのみならず、幾多の樹石が巧に配列されて、其處には自然的に大きな池があり、橋なども架けられて、池には蓮を植ゑ、夏時一種の美觀を添へるといふ風であるが、此園に入つて先づ何人でも注目するのは、稍々中央に突出した山の上に、巍然として聳えてゐる三重の塔で、是が園内で最も美觀とする所である。それから其下に折れ曲つて、恰も深山幽谷に入るの趣ある地形を利用しては種々なる古代の建物が洵に巧妙に安排され、或は宮祠、或は佛殿、見る目に變つた建築が各所に散らばつて建てられてゐる。中には又幾つかの茶室或は四阿のやうなものも點綴され、過ぐるものをして坐ろに田舎の道中でもしてゐるやうな快感を湧かさせる。

さうかと思ふと頗る大規模の堂々たる建物もあるので、益々驚異の眼を輝かさぬ譯には行かぬ。斯くして前に話した塔のある所に達し、其處から上つて更に折れ曲ると境は全く變じて眼界一新、眞に支那に遊ぶと同じ趣のある所に出る。見渡せば煉瓦作りの高い建物が支那式に造

られ、その下には瀟洒たる一二の支那風の家がある。それには無論瓦が敷き詰められてゐて、支那流の調度、書畫、其他が心持よく配列されて、長方形の高卓の上には琴が置かれ、其後には是も支那風の屏風が立て、あるといふ工合に、滿目殆んど支那の文人畫に見るが如きもの計りだ。庭園には大なる太湖石を置き、配するに竹などを以てしたあたりは、益々支那畫を活現して、之が横濱の地内だとは實に夢にも想はれぬ風趣である。更に此邊から幽路に下るといふやうな細徑がある。そこを下る時は全く深山を行くの想ひであるが、さて下りて見ると天地一變、忽ち快潤なる海の面が眼前に現はれるので、風景實に幾變化、歩々眼を喜ばして倦むことを知らぬ。

殊に一言し置くべきは、園内幾多の建築物が悉く歴史に觸れぬものはなく、今一々記憶もして居らないが、或は楠公戦死の時に之を祀つたといふ祠であるとか、或は彼の著名な千家の茶人の住んでゐた茶室であるとか、十數大小の建物は一々歴史に因縁を有つもので、中には吾が國寶として永久保存すべきものさへ二三ある。前に話した高い處に立てられた層塔の如きも、上方筋で有名な或る寺の由緒ある塔を移したものだと傳へられる。

以上は單に一方面の風景であるが、さて此邊の入口から入つて其左手にも種々なる建物が見られる。是も風の變つたもので且つ又歴史の物であるが、其中の最も大きな建物が、原氏常住の母屋になつてゐる。處で之に隣つてはるるが、併し接續はして居らぬ一建物が別にある。是ぞ桃山時代の建築で、即ち大隈老侯と我々が招かれて行つたのも此處なれば、同時に最も貴重すべき活きたる歴史の斷片として之より話さうといふ主題も亦此建物なのである。

桃山時代の遺物たる此建築物は殆んど「く」の字形に出来たもので、坪數は凡そ百四五十坪位であるが、其尊重すべき理由は、即ち豊大閣が桃山に造つた別邸の或る部分を其儘移し來つたものであるからで、特に淀君が平素住んでゐた部分と聞いては尙更等閑に看過することが出来ぬ。いや全く今日に於ては國寶若しくはそれに準すべき取扱を爲すべき建築で、眞に希世の歴史の建物だといはねばならぬ。

實際自分の知る限りに於て、斯くの如く完全な形で其儘残つてゐる桃山建築としては、本派本願寺の飛雲閣と、今一つは同寺の大なる建築物中に取り込まれてゐるものだけであるが、そこに見られる一段高い室は、其昔豊公が坐して諸侯を引見した、所謂謁見の間といふべき所で

ある。苟くも桃山建築の遺物としては此二つと三谿園内の淀君の居室以外に、決して他にありとも覺えられぬ。元來豊臣氏一たび滅びて天下が徳川家に歸すると共に、豊氏時代のものといへば其建造物すらも全部焼捨てたと傳へられる程で、殊に桃山では僅に土中から缺けた瓦などを發掘して當時を偲ぶよすがにするといふ様な實に頼りない有様で、今では一塊土も一拳石も悉く歴史的色彩を持つ貴重な斷片として珍品視される位になつてゐる。然るに三谿園の建物が本願寺のそれと共に具體的に現に残されてゐるのであるから、是は希世の珍とせねばならぬ。

此建物が何うして原氏の手に歸したかと問うた處、何でも二代將軍秀忠の頃、其親戚たる紀州家に與へられたもので、それを如何なる方法によつたか知らぬが、大阪に引き移して來た。當時此建築の在つた所は今の大阪築港の場所であつたが、堺の商人で紀州家へ出入の豪商が何かの譯で更に紀州家から頂戴した。併し紀州侯が大阪へ出られた時だけ、此處を其休憩所、若しくは旅館に充てるといふことになつてゐたのが、其後年代を経て此建物及び之に附帶した土地ぐるみ、大阪の商人清海某が買受けて、ツイ近年迄繼續所有してゐたのである。

爾來清海が先代から引續いて此建物を擁してゐた譯であるが、先祖からの遺言で、此中には

火氣を取扱つてはならぬといふことであつた。此意味は火難を避けることも含まれてゐたらうし、且つ妄りに客などを入れるなといふ意味もあつたらしく、斯くして完全に其儘保存させたものと見えるが、尙ほ又斯る室を用ゐて自然贅澤に流れぬやう儉約の趣旨を含んだ用意もあつたのかも知れぬ。兎に角かうして永い星霜を保存されて來たものであつた。

其後持主清海は先祖傳來の此建物を、敢て大切に考へない譯ではなかつたが、徒らに斯る大なる貴重なるものを捻り廻してゐた處で、それ程大資産家でもない身分として甚だ不釣合だといふ考へから、結局幾許かの金に代へられて、遂に原氏の手に移つた。然るに其後此建物のあつた清海の持地は、大阪の市勢向上と共に地價が非常に高くなつたので、清海も一躍資産家になると共に、斯うなると貴重なる建物を原氏に賣つて了つたのを今更後悔してゐる様子で、屢々其意を原氏に語ることもあるとやらで、原氏は笑ひながら我々に其來歴を話された。

さて此建物の全體は前にも言ふ如く僅に百數十坪に過ぎぬもので、一代の英傑豊太閤の別邸とは言ひながら、當時の所謂休燕の場所であるから、彼の加藤清正、小西行長、其他饒勇の諸豪傑が、朝夕眉を揚げ聲を厲しうして議論したりなどする席から、姑く遠ざかつて肩休めをす

る所でもあり、且つ其當時茶趣味の盛行した時代で、利休の如き大家も起つた折柄だけに、此建築も頗る茶的な氣分の下に造られてゐる。即ち金碧燦爛の數寄を極めた類ではなく、飽く迄金ピカを避けた茶室的のものである。

全體百數十坪といへば、少し大きい部屋などは唯一室でも其れ位は要するとも言ひ得らる、が、此建物は坪數こそ小さけれ、其室の數は中々多く、凡そ七八を數へられ、凡ての室が一通り整つて設けられてゐる。茶の間の如きものから、納戸、さては厠に至る迄、其端には二階まで附いてゐる。平素淀君がゐるた所と云はれるだけに化粧の間といふものもある。又一段高い席の設けられてある一室は即ち此日大隈侯の座席に充てられた所であるが、此室などは淀君の日々の居室らしく、場合によつては豊太閤の來られた時など必らずこゝに相對して、公が潤達洒落な笑ひ聲の漏れ聞えた所であつたらう。

話が一寸一轉するが、此日大隈侯が行かれるといふので、園主は病中推して款待に努めたが、準備萬端行届いたもので、桃山時代のあらゆるものを取り揃へて此建物に調和するやう座敷其他の裝飾にしてあつたので、恰も其時代の世界を逍遙する如く、實に用意の周到なるに感服し

た。先づ今話した一段高い所の室には、中央に大きな蒔繪の床几が置かれ、其前には螺鈿の高卓があり、それに桃山時代の蒔繪の箱に巻煙草が盛られてゐて、こゝを侯爵の座席としてある。尙ほ其左右には布團を敷いて我々の席とし、床の間には豊公肖像の幅が懸けられてあつたが、之をよく見ると、豊公に親近した狩野山樂が、朝暮其左右に侍して熟知してゐる公の眞容を描いた、其束帶姿である。從來世間に見る所の豊公圖などは無論違ふし、あちこちに在る國寶などのそれとも亦頗る其顔面を異にしたもので、史家或は畫家は固より我々と雖も、一見して大いに参考になる珍品であつて、太閤の眞影といへば即ち此幅などであらう。幅の餘白には三藐院ミヤクケ(近衛信尹公)の偈が書かれてあるのに徴しても、豊公歿後に描いたものと見える。更に其室の床脇の違棚を見ると、黄金作りの太刀が飾られてゐる。これも豊公佩用の由緒あるものだといふ。さてそろ／＼此室内を見廻すと、其天井板の如きは存外に綺麗に保たれてゐるが、總杉で、其組板は今日のものと同く違つて、眞に大なる茶室の趣を見せてゐる。斯く保存のよく行届いた點から見ても、前持主の先代から、此室には火を入れてはならぬといふ戒めも今更流石にと頷かれる。

此室——即ち侯と我々一行が座席に供された所は、僅に十疊敷位な比較的小室で、他に一向裝飾も何も無い、至つて質朴な室であつたが、其處から一段下つた室は、同じく質素ながらも稍々大きい。最も目を惹くのは、此室あたりから其立てられた襖が悉く稀なる名畫であることだ。それから更に入口側の方へ追々と部屋を経て出るのであるが、其邊の襖も亦悉く名畫づくめで、探幽、安信、常信といふが如きものが澤山に貼られてゐる。勿論時代からいへば、是等丹青の諸名手は豊公以後の人々であるから、其昔は何れ別なものが貼られてゐたのを、其後是等に貼り代へたのではあらうが、是とも既に多くの時代を経てゐる爲めに、今では實によく折合つて其調和が何とも言へない。殊に入口近くに立てられてある襖の、常信の筆に成る瀟湘八景の圖の如きは、好事家をして覺えず恍然として其處に足を止めしめる傑作だと感服した。此他其あたりの襖は皆豊公歿後の畫家によつて描かれたものであるが、淀君並に豊公の居室ともいふべき所の壁に貼られた種々な畫は、落款こそなければ、何れも山樂の筆だと傳へられるもので、いかにも一見してさもこそと想はれた。

尙ほ茲に附言すべきは、其次の室に入ると、種々の部面に朝鮮の美術品が裝飾に用ゐられて



あることである。初めは欄間とか袋戸とか皆何れも日本式であつたものらしいが、後になつて斯く朝鮮式が應用されたといふ痕跡が歴々として見受けられる。畢竟等は朝鮮の役に分捕して來たものが著しく豊公の好奇心を惹いて、早速之を用ゐて嬉しがつたものと見える。元來朝鮮美術は、今日から見ると頗る粗末なもので、支那明時代の美術品などに比しては遙に見劣りするものであるが、其當時はいかに豊公をして珍奇の眼を輝かせたことであらうか。さればこそ、折角立派に出來てゐる部分を壞してまでも態と後から嵌め込んだものらしい……など、想像して見るだけでも益々感興が湧いて來る。

此室から縁側に出て欄干に倚ると、其下に池が見られる。是も其昔桃山の此部屋が建てられてゐた處に池があつて、豊公時々淀君を伴うては綸を垂れたと言ひ傳へられてゐる所から、それに倣つて掘つたのだといふことであつた。そこから續いて長廊下に出で、他の一方に導かれるのであるが、此長廊下の境目に大きな二枚の戸が建つてゐる。これ亦朝鮮の寺か何かに在つた彫刻物を、さも面白けにこゝに持つて來て應用したものだ。それから其廊下の左側の壁には小さな繪馬額のやうな木製の額が六枚嵌入されてゐるのを見る。これが又頗る珍なもので、一

寸見ては何だか分らぬ不思議な畫だが、よく見ると十二支の獸に人間の衣裳を纏はせて描いたものだ。是亦山樂の筆に成り、豊公が此邸を築く時、北の政所から贈つて來たものだといふ。怪奇の中にも一種蒼古の風あるもので、誠に面白味の深い畫である。殊に斯く迄古いものが煤けのないのも亦甚だ奇として珍重せねばならぬ。

此廊下の附近にも尙ほ茶室らしい小室が其横手に幾つも續いてゐる。聞いて見ると、それは其當時の便所だといふ。流石豊公の別邸だけ、便所とは言へ、頗る大きく且つ贅澤に出來てゐるには一驚を喫せざるを得ぬ。それから此長廊下から導かれて二間續きの室に入ると、此邊の畫も悉く山樂の靈筆で、豊公當時其儘のものであるが、此二室こそ、淀君が化粧の間と唱へられる所である。

それには床の間もついてゐる。恐らく化粧の間といふよりも淀君平素の居室であらうと思はれるが、此二室の境に在る欄間が又奇なるもので、是にも文祿の役に朝鮮から持來つたといふ根來風の朱塗で欄間型のもものが二ヶ所に應用されてゐる。其一面には嵌め外しの出來る筈に笙が巧に取附けられ、他の一面には笛が二本、これも同じ工合に取附けられてゐるのが見られる

が、樂器といふやうなものからも、女流の部屋といふことが其間自然に聯想される。又此座敷の床には、檜扇が中央に下けられ、それには一首の歌が書いてある。是が淀君の筆蹟と傳へられるものだが、全體淀君の書といふものは世にも珍らしいもので、所謂眞筆と稱する書でも頗る疑はしいのであるが、此歌の筆蹟は古來慥なものとして傳へられてゐるので、成程よく見ると世尊寺流の書風美事に、全く淀君の墨跡らしく思はれた。尙ほ床には琵琶の如きものも置いてあつたが、是亦淀君に因縁ある遺品であると言はれてゐる。元來此室は「く」の字形の一番上端の所で、其次の間から階段を経て二階に上る所があるが、其又階段の拵へかたが注目を惹く。此階段の附け方は後世數寄者の範として盛んに應用した型で、種々に屈曲させて昇り降り樂にするやう造つたもの、一寸言葉で説明することは困難だが頗る巧に出來たもので、一見して技術の進んでゐることに驚く。大隈侯の如き足の不自由な人でも至極樂々と昇られたのであるが、始め下から見上げた時は天井が低くて頭が支へさうに思つた。それが昇つて見ると存外で、アノ長驅な侯ですら敢て頭も打たれずに濟んだ。

やがて昇り詰めると二室續きの二階座敷だ。こゝは眺望最も佳で、其名を「村時雨の間」と

いふ。蓋し此室は、桃山に此建物が在つた當時、其階上から望むと附近村落が歴々指顧の間に入り、殊に雨中の風光がえも言はれない興味を添へたといふことから、古來此名があるのださうで、其欄干の擬寶珠なども皆傘の形に造られてゐるなども、悉く雨に因んだものであつた。此他次の間の壁に貼られた山樂の畫も松並木に雨の景色を描いたもので、いかにも「村時雨の間」といふ其名にふさはしいものであつた。併し、此室の中間に在る承塵オケシの低いのには驚いた。元來桃山時代の建築は二階の天井の低いものであつたとも聞くが、それにしても此承塵は甚だ低い。候などは直立しては通れない程であつたが、是から自然的に聯想を惹くのは、豊太閤が體軀倭小の人であつたといふことで、今此室に來て見ると一層成程と頷かれて、思はず微笑を禁じ得なかつた。

概して總體の建物は檜皮葺ヒノカサヅキで、一時は瓦にした時代もあつたが、豊公の其昔はやはり檜皮葺であつたといふところから、即ち元の面影を傳ふべく復舊したのだといふことであつた。其全體はつまり大なる茶室ともいふべく、至つて質素なものであるが、今日から見て頗る意外の事は、木材は凡て杉材を使つてはあつたが、節こそなければ、其木理モクノなどは甚だ亂れたものである。

若し之が今日ならば檜或は杉の証などを用ゐるであらうのに、一切其類は使つて居らぬ。然るに更に妙なことは、昔から其儘に残つてゐる雨戸などには、至つて贅澤な細目な杉の証目を用ゐられてゐる。全く今とは反對であるが、思ふに是は風雨に曝されても狂はない爲めに、實用上の見地から斯ういふ場所に却つて贅澤な杉証を使つたのであらう。我々はこんな點からも其頃の用意の跡を推想して、感服に耐へなかつた。

更に此處を中心として其周圍にも種々な室があるのだが、此座敷から斜めに見える位置に當つて一つの祠が眼界に入る。是亦一見して桃山時代らしく、聞くに、豊公が大政所オホマシドコロの爲めに建てた壽塔を移し來つたのだといふ。

尙ほ地形の高い處を見ると、堂々たる建物が幾つもある。是も悉く昔桃山邸内に在つたものだといふことである。

當日大隈侯爵は、侯の爲めに設けてあつた、是も桃山時代の床几を一見し、莞爾として語られるには、「御厚意誠に有難う。殊に此の時代の遺物には吾輩實に一種の因縁が深い。と言ふのは、以前吾輩夫婦で京都の醍醐寺に參詣した時も、同寺に保存してあつた豊公の遺物だといふ蓮

臺型の乗物に乗せられ、松茸狩を試みた事があつた。然るに今又此床几を見るのは、豊太閤と吾輩と何だか淺からぬ宿縁があるやうぢや。」と頗る満足を表されたが、併し却つて坐る方が樂だとなつて、侯は之を用ゐるずに座布團を敷かれた。其時候は尙ほ語を繼いで一同に云はれた。曰く、紳士紳商がどうせ骨董を弄ぶなら、望むらくは斯くの如き大骨董に注目するやうになつて欲しい。極めて小さな品物に驚くべき大金を吝まらず投じて、而もそれが偽物であつたりするやうな類は吾輩の甚だ探らざる所だ。故にどうせ之を弄ぶなら、この建築物の如き大規模のもので且つ史的價值のある、所謂大骨董に眼を着けられたいと。

斯く語つて老侯は、例の困難な足をも忘れたかのやうに園内隈なく歩き廻り、我々も心ゆくまでに其風光を觀賞して、身の塵寰に在ることを忘れた。

三谿園を最初に訪うた記は右の如くであるが、大隈侯歿後再訪の機會があつた。それは私が會社の職員を率ゐて半日の清遊を此處に試みた時である。此時も主人から厚い款待を受け、建築の内部まで見る事を許された。前回には経営中であつた、庭園も既に立派に出來上つて居り、一層の風致を感じた。殊に前回に無かつたもので頗る私の注意を惹いたの

は、山上に獨立してゐる一室（桃山の舊建物）と山下の建物とを連絡する爲めに、雲梯も  
 管ならざる透漣たる回廊の出來てゐたことである。この結構が全局の風景に一大壯觀を添  
 へたことは言ふを待たない。私は此回廊を歩しながら直ちに感じた、ハハア、京都の高臺  
 寺にこれに似た回廊がある。そしてあの寺は北の政所の菩提所である。園主の此經營は恐  
 らくそれに因んだものではあるまいかと。試みに案内の執事に問うて見ると、果してさうで  
 あつたので、私は園主の工夫の趣味ある外に意義の存在することに敬服した。

## 七 加治川堤上觀櫻の記

私の郷里に近年櫻を以て名高い處が出來た。私はしばしば歸省するけれども、いつも花候で  
 ないので、賞覽を心掛けたことも無かつたが、昨年春恰かも花候に歸省したので、郷友に誘  
 はれ、始めて一覽した。

場所は新潟縣の新發田を距る一里ばかり、加治川を挟んで兩堤三里の長きに亘つてゐる。全  
 體ならば船を川に浮べて賞覽するのが尤も佳いと聞いたが、それに應ずる時間が無かつたので、

唯一斑を見れば足るとはし、開門の設けあるあたりが、最も花樹密で風致に富むと云ふに任せ、  
 それに向つて自動車を馳せた。

三十分ばかりで川の流域に達し、車を棄て、歩いて堤上に登つて見ると、右岸も左岸も、上  
 流も下流も、水の通ずる所、堤の列なる所、花ならざるなく、紅雲たなびき渡つて清き流れに  
 映發する光景は眞に天下の奇觀で、先づ吾等をして覺えず快哉を叫ばしめた。殊に吾等を驚か  
 したものは、遠くもあらざる飲豊イシデの連峯が、透漣屏風の如く列つて一大背景をなしてゐるので  
 あるが、それが皆皚々たる雪を戴いてゐて、櫻雲の色彩は爲めに一層の煥發を覺えた。北地の  
 残雪は花時幾許存するを例とすれども、去年の雪は殊に深かつた爲め、連山は猶皆眞綿に包ま  
 れ、冬期であるかの如く濃厚のものがあつた。吾等は堤上を歩しながら、花間に雪を望む奇景  
 は吾が越後の獨山であらうと云うた。雪ある處何ぞ限らん、花なきを奈何、花ある處何ぞ限ら  
 ん、雪なきを奈何せん。人は風景の三美を雪月花と數へて古來禮讚すれども、時を同じうして  
 見得べきでない。唯此地のみ、月夜に策を曳かば三景を兼ね賞することが出来る、と私の遊心  
 は益々躍つた。

一町餘り歩し閘門に達すると、こゝより道は折れて眼界更に新たなれども、限りなき櫻樹は満目堤を埋めて、經來りし處に較ぶれば、樹は一段密にして、花は一層鮮かである。閘門の橋を渡り一丘に登れば、こゝに豊碑があつて、此河瀬替の巔末が刻されてゐた。私は碑前に立ち刻文を読んで感慨に堪へざるものがあつた。實はこの大工事に私自身淺からざる關係があつたのである。此瀬替工事は縣の大工事の一で、瀬替の得失に就き一時議論沸騰、大地主は各々其利害に依り説を異にし、縣の當局も亦惑うて決する所がなく、吾れは三代の縣知事に瀬替の必要を説き、某々の豪農に巨資を投せしめて測量設計をなさしめるなど、努力數年に涉つたのである。幸ひに氣運熟し、終に九十餘萬圓の大土功を興し、次第濱に達する一里の堀割を作つて剩水を吐くと共に渴水の場合を調節するの大設備をなし、今皆其利澤を蒙つてゐるのであるが、その成功の跡を見るのは私に於てこれが始めてあつた。一行には此の治水に委しい人があつて私の爲めにいろ／＼と説明されたので、私は賞櫻の外に他に獲る所もあつた。私が二十年許り此河に背いてゐる内に兩堤に植ゑた幾萬の櫻樹は皆成木して、花時の美觀は北陸の一大勝區と稱へらるゝに至つたのである。

## 第四 漫興偶錄

### 一 讀書 八 境

古語に居は氣を移すとあるが、居所に依つて氣分の異なるは事實である。讀書も境に依つて其味が異なるのは主として氣分が違ふからで、白晝多忙の際に讀むのと、深夜人定まる後に讀むのとに相違があり、黃塵萬丈の間に讀むのと、林泉幽邃の地に讀むのとではおのづから異なる味がある。忙中に讀んで何等感興を覺えないものを閑中に讀んで感興を覺えることがあり、得意の時に讀んで快とするものを失意の時讀んで不快に感ずることもある。人の氣分は其の境遇で異なるのみならず、四季朝夕其候其時を異にすれば亦同じきを得ない。随つて讀書の味も亦異ならざるを得ないのである。今境に依り書味の異なるものを案じ、八目を選び、之を讀書八境といふ。

- 一 羈旅
- 二 酔後
- 三 喪中
- 四 幽囚
- 五 陣營
- 六 病蓐
- 七 僧院
- 八 林泉

(一) 羈旅は舟車客館其總べてを包羅するのであるが、多くの同伴のある場合や極めて近距離の旅は別として、大體旅中は沈黙の續く時である。無聊遣る瀬のない時である。シンミリ書物に親しみ得るは此時であらねばならぬ。云ふまでもなく旅中には多くの書籍を携へ得ない。行李に收むるものは僅かに二三に過ぎぬ。書齋などでは多くの書冊が取巻いてゐるから、移り氣がして一書に専らなることを得ないが、旅中同伴となる書物は一二に過ぎないから精讀が出

來る。亦翫味も出来る。幾十時間に涉る汽車中、幾十日にわたる船中、滞留幾週間にわたる旅舎に於て、箒々孤獨で唯友とするは書卷の外に無いから、通常躁急に卒讀して何も感じないものを、此場合に於て大いに得る所がある、終生忘れ難い深い印象も此時に得るのである。

(二) 酔後は精神が興奮してゐるから、沈着の人でも粗豪となる。勿論細心に書物を熟讀するの時ではない。併し會心の書を読んで感興を覺えるは此時である。支那の醉人は「離騷」を讀んで興ずると云ふが、「離騷」にあらずとも詩篇は概ね酔後の好同伴である。讀史古今の治亂を辿るも亦一興であらう。閨房の書も恐らく酔臥の時に適するものであらう。酔後は精神活動し百思湧く時であるから、書を読んで己れの思想を助けるヒントを得ることもある。詩人が酒後に考案を得るのも此故である。亦常よりも著者に同感を寄することもあるが、著者に反感を抱くも亦此時である。

(三) 喪中は憂愁悲哀の時で、精神が沈んでゐる。排悶の爲めに精神を引立てる書を選んで讀むものが多い。亦好んで同じ境地の人の書いたものを讀むものもある。概して宗教の書が此場合に適する。謹慎中であるから難解の書物も手に取る氣もおこる。併し尤も同情を惹くもの

は悲哀の書である。通常看過することも此場合には看過することは無い。平生無感覺で讀過することも此場合痛切を感じる。故人の遺稿などを取り出して翫味する機會も此時であらう。故人を偲ぶにはこれ以上の好機は無い。

(四) 幽囚は圜圜配所の生活を云ふのである。勿論常事犯で獄に繋がれた場合は例外とする。獄中生活、謫居生活は或る點に於て羈旅と其趣を同じうする。それは眷屬と離れて孤獨である點にある。羈旅に無くして此れにあるのは憂憤の情の激越であることだ。此の激越の情を和けるのも讀書であり、之を一層高めるのも亦讀書である。何といつても書物の外には友はない、無聊を慰するものとはこれより外にはない。古人の書を讀んで益を得るのは此時にある。憤慨の餘り書物を悪用する例もあるけれども、善用すれば修養を積み人格を養ふ糧となる。古來謫居中に立派な學者になつた人が少なくない。修養を積んで人格を高めた人も少なくない。又憂憤の餘りに書いた文章や詩篇で不朽の名譽を博した例も澤山ある。要するに幽囚中の讀書ほど身に資するものが無いと云ひ得よう。

(五) 陣中の讀書は死活の境に立つての讀書である。勿論彈丸雨射の間に立つては讀書の餘地はない。或は長期にわたる籠城、邊塞の衛戍、皆此の範圍に屬し、危險はあるにしても讀書の餘地が無い譯ではない。多くの場合、兵書を講じ軍機軍略の書を讀む。實境に臨んで此種の書を讀み且つ研究するほど痛切に得失を感じることは無い。併し必らずしも兵書軍籍には限らない。報國忠君の思想を鼓舞作興するものには歴史あり、人豪傳あり、靖獻遺言的の文篇もある。此等の圖書は陣中に讀んで最も感興を覺えるもので、武人的修養は多く陣中の讀書から來るといふも敢て誣言であるまい。

(六) 病瘳も亦讀書の一境である。苦痛ある疾患若しくは熱に困しむ病は例外だが、否らざる病人で長く臥瘳に餘儀なくさる、場合に於て、其の慰安となり其の消悶の具となるものは唯讀書あるのみだ。平素繁劇の人は斯る場合で無ければ書物に親しむ機會が無い。さるが故に此種の人は病中を樂天地として喜ぶものもある。病中は接客の煩もなく、何等清閑を妨げるものもないから、羈旅以上に讀書に耽けることが出来る。多くの場合精神が沈靜して自然サブゼクテーヴになつてゐるから、靜思熟考も出來、随つて讀書に依つて受け入れることも多いので、讀書人はたまさか微恙に罹りたいと思ふことすらある。

(七) 僧院は一種清寂の境である。佛像を拜し、瓣香を嗅ぎ、梵鐘を聞く處におのづから超脱の趣がある。堂宇が高く廣く、樹木は鬱翠、市塵に遠かり、俗音を絶つてゐるから、讀書には尤も此境が適する。古來多くの賢哲が僧院より輩出してゐるのは偶然でない。是の如き處に聖典を讀み禪學を修め哲理を講ずるは最もふさはしいとされるが、必らずしも哲學研究の擅場とするにも及ぶまい。飛び離れた世俗の書を何くれとなく讀むにも此境地が適してゐる。

(八) 林泉も亦讀書の一境である。人里遠き山や林に市塵を避け、佗びた草庵を結んだり、或は贅澤を極めた風景地の別荘など皆此の境地に屬する。寛いだ氣分で讀書を爲すはかゝる處であらねばならぬ。日夕接客に忙殺され、交際に日も亦足らぬ繁劇の人が靜かに讀書に親しむ得るは此境が最も適してゐる。或は溫泉場を讀書の處に選ぶのも、山海の旅館を假りの住居として夏時暑を避けつゝ、讀書三昧に入るのも亦同日の談である。連續的に書物を讀む必要がある時、著述の爲めに書を讀む時には、何人も林泉の境を喜ぶ。清閑である外に精神を養ふ自然美の環境が備つてゐるからである。僧院生活に似て、類は乃ち異なつてゐる。

以上八境の外にまだいろいろの境地がある。月明りで書を讀んだり、螢や雪の光りで書を讀

んだりすることもあれば、隣りの燈光を穿つて拜借しての讀書もある。或は厠で書物を讀む慣習の人もある。一種の病に罹つて厠に長い時間居ることを餘儀なくさるゝ人々などは、特に書物を載せる見臺を構へる例もある。西洋ではバス・ブックといふ一種の本も出來てゐて、浴槽に體を浸しつゝ、讀書をする慣習もある。或は釣を垂れつゝの讀書、昔は茶臼を碾きながらの讀書もあつた。或は人の僕となり主人に随伴し、供待の間に讀書をしたり、或は駱駝や牛馬に跨りながらの讀書もあつて、數へ來ればいろいろある。そして其境が異なれば讀書の味もおのづから異なつてゐる。取り分け寸陰を惜む上から來る讀書は勉強家の爲す所で、斯る苦學を螢雪の二字を以て形容してゐるが、案外窮苦の讀書は暖飽の人の知らない收穫の多いものである。随つて斯る境地の讀書は決して閑却すべきでないが、併し較し異例であるから、これらは八境の外に置くことにした。

閣筆に臨んで支那人の讀書を頌する詩一篇を掲げる。

富<sub>レ</sub>家不<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>買<sub>レ</sub>良田。書中自在<sub>ニ</sub>千鍾粟。安<sub>レ</sub>居不<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>架<sub>ニ</sub>高堂。書中自在<sub>ニ</sub>黃金屋。出<sub>レ</sub>門莫<sub>レ</sub>恨<sub>レ</sub>無<sub>ニ</sub>人隨。書中車馬多如<sub>レ</sub>簇。娶<sub>レ</sub>妻莫<sub>レ</sub>恨<sub>レ</sub>無<sub>ニ</sub>良媒。書中有<sub>ニ</sub>女顏如<sub>レ</sub>玉。(下略)



此詩の如くなれば、讀書に據つて得られないものとは無い。妻子珍寶富貴利達、皆書中に在り、即ち讀書は萬能である。此の詩意を以て心とすれば、讀書ほど楽しいものは無いとも謂へる。

## 二 今

七八年前に「日本及日本人」が百字百人觀を其の新年號に載せたことがある。其際私の取當てたのが「今」と云ふ字であつた。其の舊稿は既に佚して手許に無いが、今に對する私の説は大略左の如くである。

私はいくら字書をひねくり回しても、今と云ふ字よりヨリ以上の力強い字を發見するこゝとが出来ない。古來の賢哲、能く百代の師たり、萬世の範たる金言を遺したと云うても、今なる語以上に力強い語を案出したものはない。正にこれに首肺肝を穿つの語である。人生、唯、今あるのみ。昨日は去れる今であり、明日は來らんとする今である。回顧と豫想は

假設で、我等にあるものは、唯、今のみである。日月移り、動植物代謝し、天地は須臾も息まない。そして刻一刻推移し行く今こそ宇宙の本體である。

之を吾等の日常に見るも、今と云ふ瞬間程大切な時はない。事の成るも敗る、も今に在る。此の一瞬は活機である。此の瞬間こそ髓の底迄も振ひ起す力がある。今の外に既往と未來とがあるかに見えるが、畢竟既往は今の葬られた殘骸であり、未來は今のまだ産まれない陰影であつて、其處には何物もない。葬りたるを語るは死兒の年を數ふるが如く、來年を語れば鬼も笑ふと云はれてゐる。既往は逐ふべくもなく、未來は期し難い。唯、根強く迫り來るの力は今と云ふ一瞬に在るのだ。既往に善なるものありとするも、それは其當時の今に於て成れるものだ。更らに再び善なるもの偉なるものを求めんと欲すれば、今之を成すの外はない。

今日成さざるも明日ありと云ふが如きは、天地不息の大道に背いて、自から死滅を求むるものである。之を未來に期すといふ如きは、長へに之を失ふと言ふに同じい。特に未來なる別境地の存するのではない。唯、今現在の推移……これやがて未來である。未來を期

すといふは、畢竟薄志弱行者の遁辭に過ぎぬ。未來などいふ空虚を假定するは愚である。何ぞ直ちに起つて今之を爲さざる。期し難い假定に遁れて未來を口にするは、其の優柔怯懦を自白するものでなくて何であらう。

故に私は全力を今の一字に注ぎ、斷として今の一瞬を守る。一人の生涯、一國の運命、唯、今に全力を傾注するに於て始めて大成が期し得らるゝのである。今を外にして競争場裏に立つことは難い。闘は今である。勝敗は今の一瞬に在る。「時は今」と叫ぶ時、其處に果斷の決心があり、剛健の意氣があり、直截の邁進があり、奮闘の努力があり、其間一毫の惰容を許さない。かくして全力の發動となり、渾身の熱血となり、精神一到して大事が成るのである。私は一意「今」を禮讚する。

昔し黒田如水は豊太閤の偉業を思うて或る時問うた。殿下の成功には必らず秘訣があるでありませう。願くはそれを承りたいと。豊公は笑つて別に秘訣は無い。唯、過去を追はず、未來を慮らず、今日一日の事業を一心不亂に成したに過ぎぬと答へたとあるが、豊公も今の禮讚者であることが知れる。如何にも、英雄豪傑の事業も今の成功の積まれたものであるのだ。

私は「今」といふに因んで、更らに茶人千宗且の一遺事を語らう。宗且が新たに茶室を建てた折、兼ねて別懇の大徳寺の名僧清巖和尚が、多分普請も落成に及んだであらうと尋ねて來た。宗且悦び迎へて、普請は漸く成つた。どうか庵號を考へて下さいと云うた。清巖は、いかさま尤ものことだ。しかし何ぞ好みはないかと問うた。宗且しばらく考へ、古語に「懈怠比丘期明日」とあるが、面白く思ふと云ふと、清巖うなづき、成程面白い。人間の生涯は明日も知れぬことだから、庵號を今日庵とされてはどうか。それでよければ額字は揮毫すべしといふを、宗且悦び、種々の物語りに時も移り、清巖暇乞して去らんとするを、宗且引きとめ、今こゝで額字の御揮毫をと需めると、和尚、イヤそれは餘りに倉卒、追つて認めて進じ申さんと云ふを、宗且、然様にては今日庵の意に叶はず。唯今こゝで直ぐお書き被下てこそ今日庵だと云ふを、清巖も尤も至極と筆紙を求めると、即座に唐紙や筆を辨じかねた。紙は僅かに障子の張り残りの紙を見出したれど、筆の無きに當惑した折柄、傍らにゐた妻女が眉掠を取り出し、コンナもので間に合ひますなら、と云ふに任せ、清巖、今日庵の三字を書いた。これが千家に名高い額面である。清巖、揮毫を果して歸院すると、程なく宗且から使があつて、茶を進ぜますから、

唯今お出を願ふとあつた。清巖は不審を抱き、つい今まで咄してゐた其折何の沙汰もなかつたのに、妙な事と思ひながら直ちに出かけると、前刻書いた額面は針にとめて壁に掲げてあつて宗且は茶室開きの茶を點てた。其日を越さず、即日茶を振舞つた處に宗且の趣向があるので、今日庵といふ以上は斯く無ければならぬ、と清巖も感に入つたとある。この額は千家の寶とする大切のものであるのに、展轉して商人の手に歸し、價千圓と號したことなどが、小川白山の隨筆「蕉齋筆記」に收めてある。聊か文章を書き直して、「今」の説に添へる。

### 三 田園の趣味

歸去來兮、歸去來兮、都門に久しく居住する吾等は淵明ならずとも常に此感なき能はずである。ともすれば街頭農夫の牛馬に車を挽かせるのに出會ふ。道路の窄い所では、車を促して疾走する時と雖もハタと行き詰り、一步も進む事が出来ない。車上焦りながら農夫の態度を見れば、如何にも悠々緩々たるもので、少しも迫らない。背後からいかに苛立つても、殆んど知ら

ざるが如き態度で、急ぎもせず惶て、道を譲るといふ事もなく、自分の思ふがまゝに悠然として歩いて行く。其態度は恰かも神仙の如く堂々としてゐて、如何なる權貴も之に出逢うては一步を譲らざるを得ない事を考へると、彼等も中々貴いものであるといふ感が起る。此の農夫が即ち農村を代表する一小標本である。農村は斯様な人間の住つて居る所である。其代表たる農夫の態度は直ちに農村の態度を想像して宜しいのである。彼等に斯の如き態度のあるのは決して偶然でない。彼等は清朗の天地に生息し、馬糞を糶へた黄塵萬丈の天地を知らぬ。彼等の耳には死活を争ふ悲惨の聲の交はる物賣の聲を知らぬ。彼等は電火閃々、疾走の車に駕して世を渡ると云ふことなどを夢にも知らぬ。都門の状態は全く疾走の世の中である。其乗物が火を吹く上から云へば、都門の人は火の車に乗つて月日を送つて居るやうなものだ。之に反して農村の人の親しむ所のものは自然である。山高く水清く、樹老い草茂り、馬嘶き牛吠ゆ。彼等の日夕親しむ所のものは是である。彼等程自然に接して自然に交りの厚いものはない。彼等の境域には名利といふ者が入る事を許されない。彼等の村の入口には兎もすると乞食物貰入る可からずなど云ふ高札が立て、あるが、名利も乞食非人と共に入ること許されないのである。彼等の

住む天地は高潔なる樂園である。羨むべきは彼等の境遇である。斯様な高潔無垢の境遇に在つてや、もすれば都門を羨むのは何故であらうか。都門に居る者より見れば不審に堪へぬ感がある。なる程都門にもそれ相應の娛樂もあり、便利もあり、種々なる愉快もあるであらう。併しながら若し純潔なる趣味、高雅なる娛樂は孰れに多きかといへば、吾等は寧ろ田園に在りと云ひたい。試みに思へ、人造の公園に散策すると、自然の山野を跋涉すると、其趣味孰れぞ。寸尺の庭園を賞すると、一望千里の田園を賞すると、其興孰れぞ。餘り清淨でもない美人を擁して杯を擧ぐると、夕顔柵の下家嬢に酌させて一杯を傾くると、其興孰れぞ。枯燥腐爛に瀕しつゝ、ある蔬菜や魚鳥を食ふの都人士と、潑刺新鮮の蔬菜魚鳥を口にする農村人と、其快果して孰れぞ。凡そ都鄙此等の比較を列舉せんには、僕を換へるも恐らく盡すことが出来まいと思ふ。製鹽が政府の專賣事業となつてから、鹽は皆雪を欺く精製のものとなり、鹵分ニガリを有する鹽は幾んど得られない。そして人は往々鹵分を有する鹽の得難きを訴へるではないか。精製の鹽は味美ならざるにあらざれども趣味は寧ろ鹵分を有する鹽に存するのである。實用の上に於ても鹵分の多い鹽が入用である。例へば漬物を製するなどには、これではなくてはならぬ。即ち今日猶ほ

鹵分の多い鹽を貴ぶは即ち野味のある所を貴ぶのである。之を都鄙に喩へれば、都會は精製の鹽である、田舎は鹵分のある鹽である。都門は其色美で體裁も可なれども、天然の味に於ては田舎に譲らざるを得ないのである。即ち我輩が田舎に興味の多きを云ふのは専ら此野味の多きを云ふのである。野味は即ち天然の味である。都門のあらゆる事物、美は則ち美だが、肝腎の自然美が缺けて居る。都人士が田舎を羨む所のものは即ち是である。例へば田舎の家庭に就いて云へば、知人が訪ひ來つた時それを賄ふ料理は、東京の如く電話をかければ咄嗟に辨ずると云ふ便利がないから、主婦が裏の畑より野菜を探り、主人が前川に網を投じて漁るといふ馳走振りで、自ら庖丁を取つて立ち働くのである。不便は不便であるが、併し趣味は都門に較べて孰れが多いだらうか。料理屋より苦もなく取る馳走は、料理屋へ行けば何時でも食はれる、それが何たる馳走にならうぞ。主人の志は那邊にありや。田舎に於ける家庭の待遇の貴い處は、其主人の志の存して居る所にあるではないか。都門の家庭に於ては萬事萬端便利主義で、裁縫は仕立屋に託し、洗濯は洗濯屋に命ずると云ふ如く、殆んど手を勞せずして調ふ事になつて居るが、是は趣味の問題でない。一家一同が立騒いで細君兒女家童皆手を勞し、思ひ／＼に工夫

を凝らし、而して裁縫洗濯成り其他百般の經營を爲すと云ふに較べて、趣味の上に於て霄壤の差があるではないか。且つ田舎には舊慣が多く保存されて居る。これが實に趣味と娛樂の源泉である。即ち一村には一村の習慣があり、一家には一家の故禮があつて、これが先祖より歴史的に傳つてゐて、おのづから古代の事を語つて居る。これは實に面白味のあることで、又高く貴い趣味である。季節々の行事、例へば男子の節句に菖蒲刀を作る、幟を樹てる、オナキ粽を作る。女子の節句に雛を飾る。中元に生靈棚をかざる、盆踊をやる。凡そ此等の年中行事を始めとして、村社の祭禮には種々なる舊慣があつてこれが中々興がある。所によつては一村と他村とが紙鳶を闘はすこともあり、或は牛などを闘はすこともある。此等の習慣故禮は都門に於て方今幾んど絶えて、ひとり田舎にのみ存して居る。或は今日の時勢に於てコンナ事を遣るのは馬鹿氣で居ると考へる人もある様であるが、實は斯様に考へる人が間違つて居るのである。何處の國に於ても年中行事や祭典は歴史のもの、古風である所がよいのである。西洋あたりの古國では矢張り今猶ほ歴史的の年中行事や祭禮が行はれて居る。時勢に不釣合だからとて棄つべきでない。日本でも一時は西洋の風潮に襲はれて何も彼も打壞す事が流行したが、實をいへ

ば間違つた事であつた。苟くも日本に獨立の見識が存するからには、今後は此等の事を存續して行かねばならぬ。幸ひ今日田舎にはまだ此舊慣が廢らない。それを存續することを力めず、却つて徒らに都門の例に倣つて之を打破しようとする考がありとすれば、それは趣味ある農村を變じて無趣味の農村となすものである。都門に於てすら一旦打破したものをソロ／＼復舊せなければならぬと氣が付いて來た時に於て、農村が寧ろ誇とすべき舊慣を今日打破せんとする考を持つは大間違である。都人士は全く都下の趣味にいや氣を感じて田舎戀しく感じて居る。彼の別莊を特に僻遠の地を相して建てる如き、或は富貴を誇る虛榮心又は銜氣よりするものもあらうけれども、心ある者は趣味ある田園生活を欲するからである。然るを田舎の人々は何を苦んで己れの長を捨て、都門の最も俗惡にして趣味なき成金黨の風を學ばんとするのであるか。都門の趣味は今漸次墮落しつゝ、ある、都門の家庭の風紀は益々頽敗に赴きつゝ、ある今日に於て、風紀の嚴格で生活趣味の高雅な者が都門に學ばんとするは寧ろ解す可からざる事である。高雅な趣味と嚴正の風紀を有つて居る農村の人々は、何故に之を誇りとせぬのであるか。何故に自から進んで都門を田舎化する事を企てぬのであるか。久しく都門に客たる身にとりては轉

た農村を思ふの情に堪へず、淵明ならずとも吾等はこゝに歸去來を叫ばざるを得ない。

吾等は斯くばかり田園の趣味に憧憬しつゝあるに、何事ぞ、農村は却つて吾等を裏切つてゐる。近年都會の風は追々地方に及び、ひとり淳朴の風俗を悪化する計りか、危険思想までが地方の純なる頭腦を侵し、それが一種の疾をなして、莽りに諍議が起る。地主と小作は累代の歴史や因縁を忘れて、小作は地主に楯を突き、地主はそれを五月蠅がつて、追々郷國を離れて都門に移り、耒耜を執るの男女も亦土臭き田舎を厭うて、都門に馳せ參するものが少なくない。都會は爲めに人口が激増して其の仕末に困み、農村は益々荒み行く傾がある。これは看過の出來ぬ大患であつて、今に於て救治しなければ、農村のバラダイスも終に滅亡するかも知れぬ。救治の法は種々あらうが、何寄りも大切であるのは農村の特殊教育であらう。其の教育は高尚な學問でなく、農村に相當する社會教育であらねばならぬ。西洋に行はるゝ特殊の思想が、ウブな農村人の頭を侵すのは、畢竟教育を缺くからである。其證據には、苟くも相當の識見ある者は、如何に巧みな宣傳に遇つても、屹然として受け付けないではないか。元來純理論は無條件で行はるべきものでない。それを無條件で行はんとするのは頭腦が單純であるからの事で、

危険思想の宣傳家など云ふものは、實は甚だ幼稚な頭腦の持主である。所謂る危険思想なる學說を生んだ西洋とは全く歴史も事情も異なる日本に純理其儘を行はんとするなどは沙汰の限りで、幼稚の頭腦でなくて何であらうか。凡そ國の獨立は思想の獨立から來るものである。外國の思想にかぶれて心酔し、其奴隸たることを甘んずるものは、國の獨立を賣ることを敢てするものではあるまいか。彼等が、特に侵され易い智識の低い階級に就て煽動し瞞着するのは、農村の人を侮辱するものである。農村の人々は大いに警戒し、覺醒する所が無ければならぬ。此の大切な時に當り、農村の先達たる有力者が去つて都門に來るのは、あたはバラダイスを不心得の煽動者の蹂躪に委せんとするものだ。先達たる有力者が地主として其郷土にあればこそ、歴史的因縁もつながるのであるのに、それを自から振り切る如き態度に出るのは何たることである。悪思想防止の任務は何といつても先達者にあらねばならぬ。吾等が今、農村の趣味を説くのは、閑筆を弄するのではなく、激する所があるからである。

#### 四 僧房生活

僧房生活は一種風趣のあるものだ。詩人の寺を歌つたものを見ると、別して風韻の掬すべきものがある。寺は詩人の好材料で、寺を風韻あらしむるは詩で、詩を風韻あらしむるは寺である。詩人の寺を歌つたものは数限りもないほどあるが、手近にある詩集から引出して見ると、「野寺山邊斜轉徑、僧家竹裏半開門」とある。これを讀むと、山邊の野寺の屈曲の路や、竹裏に半ば門があけてある僧家の模様があり／＼と眼に入るの思がする。「竹間泉落山厨靜、塔下僧歸野殿空」の句を讀むと、高い處から水が笕で臺所に通ずる清閑な景と、誦經の僧が坊に歸つた後の佛殿の寥闊な様子が知れる。「竹亭斜覆半潭烟、老衲眠多不語禪、欲識暑消無事意、厨中破竹引山泉」の詩を讀むと、寺の夏景色があり／＼と目前に來る。老僧の眠を食つてゐるのも夏の景だが、山泉が笕で引いてあつて、涼味萬斛、寺は暑氣を知らないと云ふ處に寺の誇りがある。「翠竹碧梧、高僧對奕、蒼苔紅葉、童子煎茶」とあるは、簡單ながら僧房の光景をよく寫してゐる。兎角、翠竹、碧梧、蒼苔、紅葉は、寺院の風景を織出す色絲である。

扱又遠く寺を形容するには、鐘聲磬韻が常套の材料で、しきりに用ゐられてゐる。「僧寺茫茫看不見、暮烟生處忽聞鐘」と詠じたり、「水田秋雁落、山寺夜鐘沈」と詠じ、或は「古木無人逕、深山何處鐘」と歌つたりして、いろ／＼の詩がある。實は僧房生活は、生活者其人が幽雅を感じるよりも、詩に入つて第三者に幽雅を感じしめる方が寧ろ多いのである。試みに僧自身をして其生活の一端を語らしめよ。僧貫休の詩に「薪拾紛々葉、茶烹滴々泉」と、西行の歌にも「とく／＼とおつる谷間の苔清水くみほすほどもなきすまひかな」と、如何に住庵の小なることよ。僧和知の詩に「竹篔兩三升野水、松窓五七片閑雲」と、僧の同伴は野水閑雲あるのみである。蕪村の句に「庵の月あるじを問へば芋掘りに」と、如何に生活の簡素なることよ。僧院は閑寂を喜ぶとは云へ、餘りに閑なるは精神を鈍殺する。或る知人は佳詩を得んとして山深い僧院に立籠つたが、餘りに寂寞で旬日を経ても一詩も得無かつたと云うた。さうかというて靜閑を欲しても、實際靜閑は得難いものである。靜窮つて却つて靜を破ることがあるからだ。韋莊の詩に「靜極却嫌流水闊、閑多翻笑野雲忙」といふが即ちそれである。兎角人間の本能は

容易に解脱し難い。僧肇は解脱を云うて、惱の惱に非ざることを知れば、惱も亦淨である。淨を以て淨とすれば、淨も惱だと云うたが、至言である。しかし到り難いことだ。龜田鵬齋の詩に「身在塵中不識塵、離塵看塵始知塵、纔認塵來已分隔、未認塵時不<sub>二</sub>是塵<sub>一</sub>とあるのも亦同じ事を云うたのだが、兎角惱や塵は人間に纏綿して離脱し難い、僧とても人間である、争でか全然人間を超越し得んやである。氷心凍腸の寒山子ですら、其の逸詩の内に、家を憶ひ妻を夢みるの詩がある。「昨夜夢還家、見婦機中織、駐機如有思、擊機似無力、呼之廻面視、悅復不相識、應是別多年、鬢毛非舊色」と。寒山子の人間味のあることがわかるではないか。身を棄てた西行の自白に「捨て果て、身は無きものと思へども雪のふる日は寒くこそあれ」と。如何にもみづから欺かざる告白である。耆山上人云く、「皮相の人は共に語るに足りない。舞臺のみ見てその樂屋を見ないものに實相が分るものか。西行が風呂敷包を脊負つて、あじろの笠かたむけ、風になびく富士の烟を詠めるさまは、こよなう心すしく見ゆれど、獨り歩く旅なれば、禪に二分はなくてはなはず。兼好がつれなるまゝに、日くらし、硯にむかひ、見ぬ世の人を友とし、庭のかけひの音なふけしきも、チョン／＼の拍子木と共にキリ／＼

と後ろへ回れば、糞漬、飯櫃、味噌桶、酒の通帳などはあるであらう。」とはよく穿つてゐる。

## 五 露地生活

毎日カランコロんと日和下駄を大地にふみ鳴らして、東京市中を隈なく歩き、江戸時代を追懐して、其の趣味を研究し且つ幾分かそれを發揚した永井荷風氏に「日和下駄」の著があつて、それを讀むと同感を禁じ得ない處がある。先づ大體近世の文明が残酷に舊趣味を打破し行くに就ては、これに反抗した文學の起るのが當然であると思ふ。ひとり日本ばかりでなく、西洋でも同じことのあるのは言ふ迄もない。斯く云うても自分は強ち守舊を可とする者ではないが、文明が無差別に時々刻々舊物を打破し去るのを見ては餘りよい心地がせぬ。随つて此の風潮に反抗する荷風氏の文章に對しては同感を寄せざるを得ぬ。氏の「日和下駄」の中に最も趣味を感ずるは、恐らく「露地」の一篇であらう。敢て文章を壓卷とは云はぬ、其の題目が壓卷である。



元來露地は公道を外れた處であるから、自然狹隘を意味し、祕密區を意味し、闇黒境を意味し、隱栖を意味し、貧窟を意味し、罪惡郷を意味し、不潔の處を意味し、病毒の淵叢を意味し、警察の注意區であるだけ、通常、人の注意の届かぬ處であるが、實は一種面白味のある所である。江戸趣味から云へば江戸時代の名残りを留むる所とも云ひ得るであらう。或は優勝劣敗の結果、江戸の人が本所深川に追ひつめられたと同じやうに、こゝを最後の隠れ所としたやうな趣が無いでもない。今日江戸舊時の面影を見る所とはいくらも無い。お茶の水に舟をおろして、兩國へ出る水路と此の露地とだけが、いくばく江戸の舊時を偲ばせたものである。されば江戸趣味を搜り歩く荷風氏が、其の日和下駄を此方面に印したのは理りである。否、此方面に及ばないとおつては、氏の折角の著述も畫龍點睛を缺くものと難ぜざるを得ない。

全體露地にはさまざまの處がある、一直線に細い道があつて、道の左右に、軒を並べて家のある所もあり、又道の片側にのみ家のある所もあり、路が迂紆曲折して、八幡不知ヤハタシラのやうな所もある、濱町の花屋敷あたりがこの一例で、私などは何度行つても道に迷うて分らなかつた。京都には大體家に細い路地があつて、それが立關に導かれてゐるのが幾んど例となつてゐるが、

露地に、東京の様に幾軒若しくは幾十軒の家のある所は私はまだ見たことは無いが、無論あるであらう。大體東京の家は京都と異つて、建て方が頗る錯綜してゐて、僅かの餘地を惜んで立てた家などは外部からは少しも分らず、火災でもあつた時に始めてコンナ所に此様に澤山人家があつたのか、と意外に思ふ位である。大體コンナ所には總體に關する木戸があつて、夜間は或る時間に木戸を締めるのが例となつてゐるので、其中に住するものは囊の鼠同然で、ぬけ道がなく、随分不便のものである。

併し露地の住宅には上等のものも下等のものもある。一概に露地を貧民窟罪惡區とばかり思つてはならぬ。支那などでも所謂狹斜の巷は佳麗の居る所で、日本に於ても女菩薩の住居はこゝである。曰く何々新道、曰く某々横町、皆自動車を通じ難い所だが、自動車に乗る人の寵姫はこゝに在るのだ。世に名高い割烹店も多くはこゝに在つて、それを知らねば通人でないと笑はるゝ。藝人もこゝに住み、名匠もこゝに潛む。兎もすると優産を擁するスネ物もこゝに隠れてゐる。安官吏、禁治産者、いろ／＼の落伍者、注意人物、さては貧人も皆錯綜して壁を合はせて、さながら一軒屋に雜居する如き奇觀を呈してゐる所が此露地で、或る意味に於て一種

のクラブとも見らるゝものである。

荷風氏は此の雜居の状態を左のごとく叙してゐる。

露地は……今も昔と變りなく、細民の棲息する處。表通りの日當りからは見る事の出来ない、種々なる生活が潛みかくれてゐる。佗住居の果敢なさもある。隠棲の平和もある。失敗と挫折と窮迫との最終の報酬なる怠惰と、無責任の樂境もある。すいた同志の新世帯もあれば、命掛けなる密通の冒險もある。されば露地は細く短しと雖も、趣味と變化に富むこと、恰かも長篇の小説の如しと云はれるであらう。

荷風氏又云く、

露地は、いかに精密なる東京市の地圖にも決して明には描き出されてゐない。どこから這入つて何處へ抜けられるか、或は何處へも抜けられず、行止りになつてゐるものか否か。それは蓋し其の露地に住んで始めて判然するので、一度や二度通り抜けた位では容易に判明すべきものではない。露地には往々江戸時代から傳承し來つた古い名前がある。即ち中橋の狩野新道と云ふが如き、歴史的由緒あるものも尠ない。然し、それとても其の土地に

住古したものの、間にのみ通用されべき名前であつて、東京市の市政が認めて以て公の町名にしたるものは恐らくは一つもあるまい。露地は即ち飽まで平民の間にのみ存在し了解されてゐるのである。犬や猫が垣の破れや塀の隙間を見出して、自然と其の種屬ばかりに限られた通路を作ると同じやうに、表通りに門戸を張ることの出來ぬ平民は、大道と大道との間に自ら彼等の棲息に適當した露地を作つたのだ。露地は公然市政によつて計營されたものではない。都市の面目體裁品格とは全然關係なき別天地である。されば貴人の馬車自動車デビヤの地響チビヤに午睡の夢を驚かさるゝ恐れなく、夏の夕は格子戸の外に裸體で涼む自由があり、冬の夜は置炬燵に隣家の三味線を聞く面白さがある。新聞買はずとも世間の噂は金棒引の女房によつて仔細に傳へられ、喘息持の隠居が咳嗽は頼まざるに夜通し泥棒の用心となる。かくの如く露地は一種云ひがたき生活の悲哀の中に、おのづから又深刻なる滑稽の情趣を伴はせた、小説的世界である。而して凡て此の世界の飽まで下世話なる感情と生活とは、又この世界を構成する格子戸、溝板、物干臺、木戸口、忍返シノレガヘシなど云ふ道具立と一致してゐる。この點よりして、露地は又渾然たる藝術的調和の世界と云はねばならぬ。

凡そ世の中の心髓、人情の機微などいふものは、露地に一たび生活し、自から體驗して後始めて會得し得るものではあるまいか。此の一區は小説の材料をもつて充ち満ちてゐる。式亭三馬などが人情の機微に觸れ、生きた社會を寫し得たのも、畢竟此の露地の消息に通じ、それより、多く材料を拾ひ集めた故ではあるまいか。私は會て坪内逍遙君が小説を書いてゐる時分に露地の事を云うて、君は不自由のない境遇ではあるが、一たびは露地生活を試みてはどうか。世間に遠ざからんとするものは別荘を山水の郷に構ふべし、世の中を味はんとするものは露地を別荘とすべきである。君のごとく世態人情の生きた材料を要する人は、よろしく露地生活を試むべしと云うた時に、逍遙君は、全く君の氣付の通りである。自分も會てそれを心掛けたこともあつたが、家族が同意しない爲めに思ひ止まつたと云はれた。

私が荷風氏の「日和下駄」を讀んだのは大震災の前であつて、其際雜筆に録した記事が右の如くである。今は何物もあの大火で亡びて、露地として存してゐるものは幾んど無い。全體露地は警察の厄介視したものであるから、衛生防火其他種々の點から、もとの如く許さるべしとも思へない。震災後に出來た、アルケードなどいふ、細い道を挟んで商店の軒を竝べてゐるのまに爰に收めることにした。

## 六 流行と女装

流行は物に飽きて變化を欲するから起る。則ち一種の反動である。反動は緩急こそあれ、常に活動しつゝあるものだ。大體反動は新らしきを迎へるのが常であるけれども、多くの場合古きを呼び返すのである。即ち反動は、誰れであつたか時計の振子に譬へたが、誠に適切である。何人か、或る場合に何等かの工夫をする。それが人を刺激すると、人は之れを摸倣する。それが流行の端緒である。故に流行は摸倣である。そして或る場合に於ては雷同である。趣味の上から人の爲すに賛同するのを一概に雷同と云ふは酷であるが、人がやるからというて浮氣に之れに趨るのは雷同である。雷同の結果、何人も同じ流行を趨うて同型になると、自然それが

平凡となる。そこで亦反動が起らざるを得ぬ。

衣服に就て流行の淵源如何と見るに、國に依つて異なるけれども、西洋では貴族の婦人が其範を示し、或は俳優が其範を示す。日本でも俳優が多くの場合其源をなし、藝妓も亦範を示すもの、一つとなつてゐる。呉服屋の宣傳も亦其一つであらう。

いくら新案を凝しても、抵ね昔し嘗て行はれたものを繰返すか、若しくはそれをモデファイしたものに過ぎぬ。(絶対にとは云はぬが)言ひ換へれば、一たび流行して廢つたものを時を経て復舊するに外ならぬと云うて太過あるまい。

日本の過去に就て云ふと、習慣として日本固有の風俗があるから、衣服もそれに副はねばならぬ。乃ち婦人が八疊十疊の座敷を天地として起臥する場合に於て、近づいて見なければわかりかねるやうな文様を貴んだのも無理はないのである。色も亦遠見の利くものを擇ぶ必要は無かつた。恰かも日本の音楽が抵ね四疊半式であると同様に、服装美も小室を天地として工夫された。随つて流行が去來しても此範圍の出入に過ぎなかつた。

西洋はどうかと云ふと、街路を歩いたり、自動車で乗り廻ることが頻繁であり、公けの集會

などに出入することが日常のことであるから、昔しの日本婦人の生活と異なる結果として、衣服は遠見の利くものでなければならぬ。

日本も漸く婦人の生活に變化が來た。金屋の婦人も電車自動車で外出する機會が多くなつた。随つて服装にも變化がおこらねばならぬ。乃ち室内標準の文様や色彩は、漸く街路にアダプトするやうに一種の流行が起らざるを得ないのである。

近年一齊に派手な風が婦人の間に行はれ、若造りが流行し、刺激性の色彩が喜ばれ、動もすると母も娘も派手を競うて、母子を判じ兼ねるやうになつたのは、種々原因もあらうが、一つは家居標準が變じて街頭標準となつた爲めに依るのであらう。元祿風の文様が多少の變化を経て用ゐらるゝやうになつたのも、畢竟派手を欲する流行に外ならぬ。

如何にも街頭標準となれば斯る反動も起る筈だが、無闇矢鱈に釣り合はぬ衣服を着け、年輩や頭髮や體の肥瘦に頓着せず、一概に派手を喜ぶのは、偶々路人の失笑を博するのみで、實に婦人の恥辱である。何といつても調和の取れた服装美は藝妓などにある。彼等は表商賣ではあるが、素人よりも地味である。そしてよく調和が取れてゐる。昨今の素人婦人の行き過ぎる

ることは申すまでもない。

實は今日が恐らく服装の調和を圖るに尤も困難の時であらう。斷髮のモガもあり、和髮で腰下にスカートを穿つもあり、半和半洋、如何にも混沌時代である。實に日本婦人の風俗は長い間研究されて、日本の風土に適ひ、日本の女性に適するやう工夫されたものであるから、和洋折衷は其の長所を損して、メチャクに作る失がある。洋風なれば洋風、和風なれば和風、と其の畛域を亂さない方がよろしいので、調和を亂る折衷はよろしくない。

日本婦人の頭髪美は世界に誇るべき一つである。そしてそれを發揮するものは丸髻であり、島田である。赤毛やちゅれ髪ならば束髪もよからう、斷髮もよからう。折角よい髪をもちながら、洋風に倣ふなどは惜しむべきである。若し近來の研究家のいふごとく肉體美を暗示する服装を可とすと云ふならば、頭髪は正しく肉體美の一つで且つ大なるものである。緑りなす黒髪、素直で長く香露滴らんばかりの黒髪、これを飽くまで發揮するやうに、と工夫されたものが丸髻である。日本婦人を實質よりよく見せるものは毛髪と髮容であつて、服装は寧ろ之に次ぐものとされてゐるのに、此の大切な肉體美、尤も露出してゐる肉體美を閑却するなどは沙汰の

限りである。尙ほ頭髪美に附隨して洩らす可からざるものは襟脚エリアシであつて、これが日本婦人の誇りとする一つで、襟脚が綺麗であることが頸邊に非常の美を添へる。外國へ旅行した日本人が歸つて來て氣の付くのは此點であつて、頗る快感を覺えるといつてゐる。名優市川團洲が、婦人の化粧に就いて、他を粗略にしても、意を用ゐるべきは襟脚であると云うたのは流石に要を得てゐる。モガが、オール・バックなど、妙な髪を結んで、此の誇りとすべき大切な所をメチャメチャにするのは思はざるも亦甚しいではあるまいか。

日本婦人服装美の中心は帯にありと云ふべきであらう。その幅が廣い爲めに衛生上云々の説もあれど、西洋婦人は帯よりも更らに身體を緊縮するコルセットを嵌める慣習があるから、双方五分五分として、此の帯が服装の全體を引立たせる趣向となつてゐる。これが爲めに乳も臀部も隠れる便利があるばかりか、帯を高く締めるから矮軀を長身に見せる得もある。亦これにより衣服の色や文様と調節を保ち、地味な服装を地味に落ちないやうにするのが帯である。尙ほ帯に附屬してバチンの如きものがある。これが亦よく工夫された裝飾である。

帯の結び方もいろいろあつて、若い娘には「や」の字に結ばせたりして可愛らしい味を添へ

る。亦京都の舞子<sup>マヒコ</sup>などで、誰れも知る如く帯の兩端を垂れ下けて一種の美を添へる工夫もある。尺が長く要るから不經濟ではあるが、ダラリ兩方に垂れ下つてゐる處に趣致がある。今日婦人の帯の締めやうに就て悪弊とも見るべきは、帯を胸高かに締めることであつて、鬼もすると乳の上にも及ぶものがある。その結果、帯下の衣類は締りを失つて、昔しのアブナ繪にある女のごとくなつて如何にも見苦しい。全體斯るやり方は俳優が狂女を演ずる時にやる扮装で、ダラシのない惡風俗である。

日本婦人が正装の場合に黒と白を重ねた紋服を着する。黒の服には裾<sup>ソリ</sup>に文様のあるのが通例で、これに依り單調を破るところに妙がある。そして斯る場合に金襴のやうな莊重の帯をしめるのもよく工夫された調和である。

半襟は如何にも尺の短い僅かに胸部にあらはる、ものだが、これが大切な役目をつとめ、帯に次いで装飾の要部である。地味づくめの服装に活氣を生ずるのも、服全體を引立てるのも此もの、働きである。衣服がしぶくともこれが華麗であれば、そこに調節が取れてゆく。

支那婦人の服装は西洋婦人のそれに似て、上衣は筒袖であるが、袴は西洋の男子の如く、兩

脚に分れたズボン式のを穿つてゐるものがある。此點は西洋婦人と異つてゐる。若し肉體暗示の服装を可とすと云はゞ、支那婦人の袴はこれに庶幾いと云ふべきだが、どう見ても貧弱の感がする。全體肉體美を誇とするものは西洋婦人であるが、それが却つて男子と別を立て、兩脚暗示を没却するの袴を着けてゐるではないか。東洋婦人のやうな貧弱な肉體を暗示せしむる趣向は、寧ろ醜を露はすものである。此意味に於ても、日本婦人の在來の服装は一概に非とすべきでない。

日本の婦人服は筒袖でない代はりに、肉體を或る程度まで露はしてゐる。襟の間から幾許胸部も露はれ、又頸部も露はれ、廣袖を着けてはゐるが、手も腕も往々に露出する。西洋婦人が幾んど上部半身を赤裸に露出するのに較べると、日本の服は肉體の暗示に近いと云ふことが出來よう。亦身體の下半は西洋婦人と同じやうに全部掩はれ、肉體暗示を没却した觀はあるが、裙が風に飄れば、裾の内から脚部が現はれる。そしてそれを日本では美としてゐる。西洋では長いストッキングを着けて兩脚を露出し、肉體暗示をしてゐる。それに比すると日本のは謹嚴の趣があるが、その謹嚴を破つて偶然肉體を露はす。そしてそれが故<sup>コト</sup>さらでない處に趣致が

ある。浮世繪に危繪アブナエといふがあつて、股のあたりまで白肌を露はした圖がある。これは行き過ぎてゐるが、掩はれた處の自然に露はれて白肌を現するのは一種の美である。西洋婦人が下半部の肉體を全然現はさないのを習慣としてゐながら、浮世繪の感化で近頃は日本婦人を學び、袴の左右兩端を裂き、それより肉體の隠見するやうな工夫をやつてゐると聞いたが、西洋婦人の思ひつきさうなことである。附け加へて置くが、日本婦人は長襦袢や蹴出しの品柄に吟味をする。これは歩行につれて其部面が現はれるからであつて、西洋あたりには絶対に無く、日本婦人の隠れた飾りであることは言ふまでもない。

要するに日本婦人の服飾はなかく洗練を経たものであつて、西洋心酔者が思ふやうな杜撰ソザンのものではない。或は日本の衣服は支那や西洋のそれに比して不經濟であるといふ説もあるけれども、經濟論と服装美論とはおのづから別である。又女性が舊套を破つて追々活動を始めたに就ては、其の活動に便利な輕快の服装を要することも認めるが、これも亦女装美論とは別論である。

日本の女装も、長い間工夫を重ねて洗練を経た結果であるから、決して他國に對して

後れを取るものではない。江戸時代には、階級に依り種別があつたは勿論、年輩により差異があり、職業により特色もあつて、なかく複雑であつた。例へば、娘には娘相應の粧ひがあつて、袖を長くしたり、未亡人には帯を前に結ばせ、特に地味な服地を選んだりした。妾は妾らしく、藝者は藝者らしく、娼婦は娼婦らしく、商家の婦にはおかみさん風があり、魚屋などの氣負ひ婦人には亦一種の特徴があつて、誰れが見ても直ちに服装で其の人柄を判じ得たものである。實に江戸時代には女装も複雑であつたが、銘々の地位や人柄にキチンとはまる粧ひをするには自然複雑とならざるを得ぬ。其の複雑なることがやがて女装美の極致であつたのであるが、今は頗る單純化して來たから人柄や身體に調和することがなく、女装美も大いに崩れた。これも時勢の變遷で已むを得ないけれども、實を云へば、まう少し吟味したいものである。折角洗練したものを打毀すのは惜しいことである。洋装を欲するものは洋装をして妨げないが、和洋折衷、和洋併用は、多くの場合調和を缺くから、それを非とする。勿論、今日流行となつてゐる、袖の先レースをつけたり、スカートを穿つ如きは、強ち調和を害する程でもないから、敢て妨げもなからう、いくら丸髷がよいからと云うても、老婆が強ひて小形の丸髷を戴く

などは寧ろ滑稽に近いから、それは束髪とするもよからう。ちやれ毛や赤毛のものは、たとひ年が若くとも束髪の方がよいと云ふ如き取捨はあるべきであらう。兎角、今日の如き服装の混沌時代に於ては其混沌に委するの外はないけれども、混沌ながら其間に調和があつて欲しい。調和といふのは、衣服の上のみにいふのではない。其の坐臥の家屋なども調和しなければならぬといふのである。

## 七 扇

扇ほど其の用の多様であるものは少なからう。普通は夏時風を煽つて涼を採るに用ゐるが、儀式用にも軍隊用にも遊戯的にも用ゐられてゐる。儀式に就て云へば、すべて儀容を正す時には、季節の如何に拘らず、之を用ゐる。或は慶賀の意を寓し、末廣と名づけて、年頭や結婚の祝儀物に用ゐる、公家や僧侶は中啓といふ一端の開いてゐるのを儀式用に用ゐる。皆煽ぐのが目的でない。宮中では檜扇といふが女流に用ゐらるゝ。是も儀容を正す一種の装飾で、煽ぐ爲め

と云ふよりは面貌を覆ふためなどに用ゐらるゝ。昔しの軍隊に於ては武將に指揮刀のごとく用ゐられたこともある。それは鐵で作られて護身用ともなつた。普通の扇でさへ不意に抜刀で襲はるゝのを巧みに扇であしらふこともあつて、劍術の心得があれば扇一本が護身の役に立つたのである。又扇を大形に作つて、それを指物とした武將もあるから、扇は武器に應用されたとも云ひ得よう。扇を遊戯に用ゐる尤も著しい例は投扇興で、今でも或る範囲に行はれてゐる。講談師が包み扇で案を拍ち氣合を取るのも扇の用であり、關西では落語家までが扇をもつて案を打つ。舞妓の扇は親骨が五彩の絲でくゝられてゐる。そして投げて手に取り易からしめんが爲めに鉛が骨に装置されてゐる。仕舞の扇は、寶生、觀世、其流派によつて親骨の透し彫りに多少の相違がある。

尙ほ扇を繪馬のやうに神に捧げる例は、京都の祇園社に今も行はれてゐる。その形は中啓よりも更らに一方が廣がつてゐて、それに松竹梅と旭日に鶴が描かれ、尉と姥が配してある。昔しは一々書いたものであつたが、今のはカツバ摺りで、龜末な彩色が施されてゐる。之れを神に獻する趣意は繪馬と同様であるが、相異の點は、同じ扇を購ひ求め、それをもつて神に獻じ



であるのと取換へて持歸ることにある。然様にすれば、幸が來ると信ぜられてゐる。神社附近に此扇を鬻いでゐる店のあることは言ふまでもない。繪馬を獻するのに較べると、此方に工夫があるやうに思はれる。

扇には有職故實に屬するものがある。前に云うた檜扇や殿中扇などいふものは皆それに屬して、製作に定まつた式がある。昔しはそれを專賣にした家もあつた。京都で今も存在してゐる松月堂といふ老舗は其の家柄である。尙ほ茶人には其の流派により好みがあつて、それが自然製作の法式となつてゐる。昔し利休が工夫したと云はれてゐる扇は、尺度の代用になるやうに工夫され、長さが一尺で要より端れまで五分となつてゐる。茶席に入つて器物や書畫の大きを計るに之れが尺度になるので調法の工夫である。すべて茶人の工夫は微妙な處に趣がある。松月堂に作る茶人好みの扇子の内に裏表とも同じ繪がある。その繪がピッタリ合致し、纖毫も狂ひがないのでなければ茶人は承知しないので、日光に翳して見ても寸分の狂ひがない。斯様な製作の面倒であることは云ふまでもない。

扇の製作にさまざまあることは勿論だが、普通は骨を表裏の紙の中に没してゐるけれども、

裏に骨を露はしたのものもある。これを原始的の粗式とのみ思ふと誤る。わざと趣味的にかうしたものがある。又骨の数が極めて少なく、四五本に止まるのと、數十本に及ぶものもある。或は地紙が糊で骨に貼付されず、適宜に地紙の抜きさしの出来るものもある。地紙若くは骨に薰物を裝置し、使用毎に佳香を發するものあり、或は白檀のやうな香木をもつて骨とするものもあり、朝鮮のその如く、地紙に油を引いたものもある。これは水を點じて涼味を添へんとする趣向であるけれども、品の下るものである。骨も無地のがあり、塗つたのがあり、骨毎に五色さまざまの色を異にしたのがある。地紙の繪や色のさまざまであることは勿論で、一々擧げるに違ないが、私がいろ／＼の扇を見て食指の動いたのは、扇面の一半を臙脂で横に塗りつぶし、上半を白地とし、臙脂の盡きる所を巧みにぼかしたものであつた。又他の一は、各折目毎に互ひ違ひに五色で染めたもので、其色が如何にも高雅であつた。光琳特徴の色で此意匠に則つたら、一層よからうとも思つた。總じて扇は無地に限るやうに思ふ。ナマナカの繪はあらずもがなである。舞扇などでも金銀塗りつぶしはよいが、俗惡の繪は無い方が優しと思ふ。ある扇通の話に、糊引の地紙が涼風を煽るに尤もよいと云うたが、松月堂で製する扇は、概ね地紙が薄く

糊引となつてゐて、要が非常に堅固である。骨がバラ／＼になつても要は揺かぬと誇つてゐるが、流石に精製で、煽ると風が冷かでない心地がする。

私は前に俗悪の文様はあらずもがなというたが、扇には往々名書畫の、肉筆で物されたものがある。それが往々無雜作に用ゐられて、アタラ書畫をメチャ／＼にすることは惜しいものである。書畫に無理解な人の手で名書畫のある扇子が廢物となるのは、毎年どれほどあるであらうか。扇の運命を知るものが扇面に精畫を作らないのも、決して偶然でない。亦幸に汚損を免かれた骨つきの扇が書畫界に高く價附けらるゝのも不思議はない。支那の風習は日本と異つて扇を大切にす。半ば裝飾の用に供してゐるから、名書畫が減びない。支那では前に云うたやうに地紙のハメはづしの出来る扇を用ゐて、適意に差換へる習慣があつて、扇子の書畫に力を籠めるから、精作が頗る多い。幾んど一双の屏風に展開し得る程の畫を縮寫してゐる事が珍らしくない。つまり扇の運命が日本と異なるからである。此點は日本も支那に倣ひたいものだ。

全體日本のやうに無暗に扇子を使用する所は無い。夏時集會席などに入つて見ると、人の演説中に場内は扇子が各人の手に一齊に動いてゐる。昔し禮儀を重んじた時代には、矢鱈に人前

に扇で煽ぐことを無禮としたこともあるに、今は餘りに亂雜である。秋風が動くと、忽ち扇が籠を失つて委棄される。そこで籠の薄いことを秋扇に譬へてゐる。扇の運命が如何にも果敢ない所から、多くの人は書畫の揮毫を頼まれ、扇なら書くといふ人もある。言ふまでもなく恩卒の書畫の保存されることを厭ふからである。併し扇の用は日本に於て風を煽るだけではなく、前に云うたごとく頗る多般であるから、さう薄倖を歎ずるにも及ぶまい。

尙ほ書き漏らした二三の事を録するが、支那には鳥の羽で作つた扇が用ゐられてゐる。漢魏六朝あたりの遺風で、原始的の趣がある。現に篆體の扇字は鳥の羽を形どつてゐる。前に檜扇のことをいうたが、此の物の最も時代の古いのが熊野神社に存してゐる。多分鎌倉あたりのものであらうが、それには古雅の繪がかゝれてゐて、近來その圖を複製したものが世に流布してゐる。又昔しは扇面に經文を寫したのもあつて、四天王寺にはそれが存してゐる。これにも地紙に繪があつて、頗る珍とすべきものだ。僧侶が多く中啓を手にしてゐるのは、多分宮中から拜領したのが本で、裝飾にそれを繼承して用ゐてゐるのであらう。尙ほ扇の地紙を折ること、は可なり習熟を要する業であるが、昔しは女子の仕事であつたらしく、古い職人盡には女子が

折つてゐる圖が見える。又行商に扇の地紙賣といふがあつて、古い浮世繪にそれが寫されてゐる。

更らに扇にからんだ雑事を擧げると、那須與一は源平兩軍環視の中に日の丸の扇の高く掲げられたのを射落して、末代迄も射術の妙を稱へられ、「白扇倒懸東海天」の一詩は富嶽の絶唱として名高く、鎌倉の扇ヶ谷アサギヤは著名の史蹟として傳へられ、花扇は名妓として花柳にとゞろき、扇で人を煽ることが名將の手に於てさるれば無上の名譽であり、父母の手でさるれば子は慈愛の印とする。落語家や舞妓は杯を擧げるの状をなすときに扇を假用し、物を獻するに扇に載せて出し、拜領物を扇に載せて戴くのが敬禮である。此種のことを擧げれば際限もない。

製扇の技も或時代に美術工藝として大なる發達をしたが、其製産地が京都であることは言ふを待たぬ。各地にも製作が行はれて地方的特徴もあるが、今は粗製濫造で安物のみが行はれ、京都の老舗松月堂や林阿彌は今猶ほ存在してゐるけれども、店は寂寞としてゐる。

## 八 雪の思ひ出

火事を江戸の花と誇つたやうに、雪を豊年の兆として喜んだ。共に人間生活の大厄であるのに、是非もないことであるから、氣慰めに斯う云うたに過ぎぬ。北國の深雪は久しい間幾んど秘されてゐた。さながら北極の雪のやうに。九州其他暖地の人には幾んど想像の外にあつた。その秘密を一般に紹介したのは、越後で最も雪の深い處に住んだ鈴木牧之が、山東京山の筆を藉りて出版した「北越雪譜」であらう。片田舎の雪を叙したものであるのに、此の書が不思議に流布して、二篇までも續刊され、今でも流布してゐる。鐵道が縦横に敷かれ、交通が大いに開けてから、雪國の秘密も公開され、スキーの遊戯は雪の深い處を擇んで、大規模に行はれ、各地の人もそれに參加することになつたから、今は「北越雪譜」の記事を誇張とするものも無くなつたやうだが、暖地の人は此の書を小説同様に考へた時代もあつた。但し今日とても、通り一遍雪地を踏んだ位では、十分理解が出来ない。眞に理解あるものは其の地に生活するもの

であらねばならぬ。雪にはまだ公開されない秘密があると云ひ得よう。實を云へば北國の雪も四十年このかた餘程減つた。多分四境が開けて氣象などに變化を及ぼした爲めであらうが、私の幼少時代から青年時代までは雪が深かつた。雪が減つてから多く他國の人が冬期に北國に入り込み、そしてそれが身を鐵道に託して通過するのであるから、實は雪を十分理解しないのも無理はない。たまさか汽車の立往生で雪難を感じる事があつても、それは高の知れたことで、これを交通の開けない舊時の行旅に比すると、天壤雲ならざる苦樂の相違がある。近く一昨年の越後の大雪は、幾十年振りであると云はれてゐるが、斯様の場合には行旅が幾んど絶える位であるから、折角の機會でも他所の人は體驗することが出来ない。何といつても其土地に生活する者でなければ、事實理解は出来兼ねる。私が雪國に向ほ秘密があるといふのは此故である。私は今雪の思ひ出を語るには、明治十六十七年の舊時に溯らねばならぬ。處は越後の高田で、此地は越後の市街地の中で最も雪の深い處である。昔し天和元年に「此下に高田あり」の高札を建てたことは現に高田の市史に録されてゐる事實で、高田の深雪は隠れもなく聞こえてゐたと見え、加賀の飛脚が「諸國まで高く聞えし高田さへけふ來て見れば低くなりけり」と詠んだ

とは同じく市史の傳へる所である。今高田に存する記録に就て、大雪の年次と尺を擧げて見る。

寛文五年	一丈四尺
寛延二年	一丈六尺
文化十一年	一丈五尺
天保五年	一丈餘
同十二年	一丈餘
安政二年	九尺九寸
昭和二年	一丈二尺三寸七分

以上は尺の分つてゐるもの、みを擧げたので、唯大雪とのみあるのは、元和元年、寛延四年、寶曆二年、天明三年、そして明治になつてからは明治十八年。それから昭和二年までは多きも七八尺に過ぎない。

私が高田に冬を送つたのは確か明治十七年であつたやうに思ふ。即ち大雪と市史にある前年に當るので、さまでの大雪で無かつたのであらうが、それにしても屋根から卸した雪は通路を

塞いで、二階の屋根を摩せんとする程であつた。市中の往來は雁木庇ガシゼサシを通るの外なく、全くトンネルを通るが如くに暗黒で、商店では金物屋だけが眞鍮の品物で知れた位だ。無論雪を穿つてトンネルを作り、それを経て向ひ側に往來した。或は雪に段を刻み、それを上つて堆雪の大道に出で、それから又段を刻んだ所を降りて、向ひ側の雁木庇に通ずるやうな處もあつた。横丁などは道が狭い爲め屋上より卸す雪が一層高く堆をなすのであるが、底擴がりの上細ウズボで、さながら蒲鋒の形をなし、道が極めて細いから、兎もするとすべつて落ちる。堆雪が民家の高い天窓アサドにまで達してゐるので、落ちると人體の壓力で天窓を刎ね飛ばして人家の爐邊に落ちることがある。「北越雪譜」に按摩が天窓から天降つたとあるのは決して假託でない。市中の通路は杜絶するのであるけれども、橇コや馬はそこを往來することもある。融雪の後高い松の樹に馬鞋のかゝり居るを見るのは珍らしくないが、雪が松の木の頂上にまで及んでゐる證據である。昭和二年の大雪も幾んど電柱の上頭に達したので、「高壓線にさはると死ぬ」と書いた高札を立てたと聞いてゐる。

一夜の内に三尺も降り積り、それが三日も四日も間斷なく降り續くとあつては、眞に駭心驚

魂の事で、動もすれば家が壓力の爲めに倒壊するから眞に命がけである。然るに昭和二年の雪は六日間大雪が續いたのであるから、慘狀實に思ひやらる。雪中壯丁の働きは雪卸しにあるは勿論だ。勞働者が衣食の道を得るのも此の仕事にあるのだけれども、非常の大雪が降ると、人のためよりも先づ己れの爲めに働かねばならぬ。人を保護するよりも自家を防衛しなければならぬから、賃錢を拂つても人夫は出ない。まして昔は鐵道が無かつたから沿道の除雪と云ふことも無かつた。然るに何よりも急とするのは鐵路の除雪であるから、多くの人夫は皆それに赴くので、昭和二年の除雪人夫は數萬人に上つてゐる。斯く人夫拂底の爲めに普通の民家は勢ひ自分自から爲すの外はない。それが爲めに高田の遊廓などでは娼婦まで出で、雪卸しをした。女學生が家のために雪卸しに没頭したことは言ふを待たない。

私の實驗したのは昭和二年程の大雪ではなかつたから雪卸しに窮しもしなかつたが、何にしろ道と屋根とが平面になるのであるから、意外の事がある。その意外といふのは、屋根越しに歩けば十町もある所が一町に縮まると云ふことで、私と同宿の友人は中學の教頭で、毎日定時登校、定時に歸つて來るのだが、いつも旅宿の二階の段梯子を雪下駄で上つて、室を経て屋

根へ出で、それから一直線に學校に行くのを便利とした。いつも歸つて來る時雪下駄で段梯子をガタ／＼鳴らして降りてくるので、最初はをかく思つたが、後には自分もそれを試みて一向怪まないやうになつた。雪下駄の事は後に云ふが、どこに行つても土がないのだから、下駄で座敷を歩いてもきたないことは無いのである。

話は雪卸しに戻るが、屋根の雪を卸すには普通杓コソキを用ゐる。これは東京にも用ゐてゐる。市街道路の堆雪が家根よりも低ければ雪を卸すことが出来るが、其堆雪が屋根と平面になると、櫓こしで雪を運ぶより外はない。處で雪の棄て場のないのは困る。田畑の如き地域が近くにならない時には一櫓だけの雪を捨てるにもなか／＼手間が取れ且つ骨が折れる。降りつゞく真最中もあれば、除くよりも積る方の早い事は言ふまでもない。雪卸しは眞に死活の問題であるから數日降りつゞく雪ほど人に不安を與へるものは無い。更らに市中の雪を除く一段に就ては、多くは春先きの事に屬するけれども、或は道路を開く爲めに除かねばならぬ事もある。此場合に用ゐる物は杓ではなく木挽コビキの使用する大鋸を用ゐる。そして雪を二尺立方位に截り、それを櫓に載せて或る地點まで運搬するのである。市中には各家に雁木庇があるけれども、往還の宿驛な

どになると、家前に道を開かねば出入も出来兼ねるから、勢ひ此法に據らねばならぬ。私は青年時代しば／＼雪地の旅行をしたが、宿驛の旅舎の前などは、江戸の見付の石垣の如く、高く雪の壘壁が兩側に築かれ、其中に一縷の路があつて、僅かに旅舎に通じ得るのである。コンナ雪候には一泊の其夜に幾尺の雪が積つて、滞在を餘儀なくされたこともある。

雪國に何よりも大切であるのは櫓である。物貨の運搬にも旅客の交通にも之れに頼るの外はない。鐵道が開けたにしても尙ほ之れを廢することは出来ない。旅客を乗せる櫓には、挽くものと後押しが二人つく。頗る熟練のもので、急阪を下る時も危険は幾んどない。人力車が行はれてから雪中になると車を外した箱を櫓に装置し、それを箱櫓と呼んだこともある。或は特別に籃輿に近いやうなものを装置し、防寒の爲め覆をもつて四閉したものなども出来たが、案外不愉快に感ぜられた。雪國の選舉運動には候補者はこれに乗つて戸別訪問をしたものだ。先頃の普通選舉にも遊説の辯士はこれに頼るの外無かつたので、始めて櫓の味を知つた人も少なかつたらう。

なだれなだれ(雪類)は雪中最も危険なもの、一つであるが、屋根の雪が一時に落ちるのも小なるな

だれである。大なる物になると、山の傾斜地の積雪がすべり落ち、追々威力と速度が増して、其の道に横はるものは、立木でも人家でも一掃しなければ已まぬ。原因については、大體積雪の各層の間に融合密着しないところがあつて、その上層が落下するのもあり、或は春先きに土の温氣で土と雪との間に間隙を生じ、それが爲めに落下するものもある。落下を惹起す動機もいろいろだが、春先きに緩んだ傾斜地に起るなだれは、僅かに歩行の搖ぎで生ずることもある。或は又俗にウハボウと唱へて、堅い堆雪の上に霰が降り積り、更らに極めて輕鬆の雪が其の上降り積ると、上下の層が密着を缺くので、上層の雪がすべり出すと、中間の霰が丁度車輪の役廻りをするので、その勢が刻々猛烈となるのである。これは春先きの場合と同じ様に僅かの動搖で起ることもあるが、或は風の作用で雪を動かし、それが原因となることもある。傾斜地に雪に龜裂を見る場合は必然雪崩を起すに相違ないから油断はならぬ。昭和二年高田附近能生谷の大なだれは、幅三百尺高さ六千五六百尺の所からすべり落ちて、深夜多くの人家を倒壊したとある。これは恰も地すべりの如きもので、其の通過する所は樹木でも家屋でも遮るものは一掃し去らねば已まぬ。私の知人で十數年前魚沼地方に此厄に罹り、一村全滅した悲惨の例もある。

ある。

尙ほ他に危険なのは吹雪である。粉雪濛々として降りしきり、咫尺を辨ぜざること猶ほ海中の霧と一般で、前進後退共に不可能に陥るのである。斯る時に狼狽すれば必らず不測の禍に罹るから、雪地に慣れたものは、之れに備へるため、吠と唱へる藁筵の囊カマスに糶ホシヒを入れ、藁の筵を被り長い竿を携へて旅立つ。近村へ出かける時でも用心深いものには此の用意がある。途中吹雪に會へば、直ちに其處に筵を敷いて座を占め、竿を立て、幾時間でも糶を喫して救手の來るを待つのが例である。吹雪の起る時は何れの村でも難を救ひ合ふ習慣があるので、救手は竿を目當てに掘るから容易に所在が知れて、非命に斃る、ことは少ない、と嘗て雪の深い越後の東頸城で聞いたことがある。

雪の深い山間の僻地では、數月に亘つて土を見ることが出来ない。土の如何に懐かしいかは此境に居らねば知り得ない。魚沼地方などでは、春になつても雪が消えず、幾んど雪に飽きあきして、たまさか新潟へ出かけると、爰には塵埃が高く揚つてゐるので、それを浴びて痛快を呼んだといふ話は、既刊の余の隨筆にも載せたが、土が如何に懐しいか、此の挿話に據つても

分る。私が東頸城の僻村に宿した時、雪に關するいろいろの話を聞いた中に、何分雪が深いので、家族に死亡者でもありと全く仕末に困る。火葬を忌む者などは遺骸を礮にくりつけて、絶壁から千仞の谿へ投ずると云ふことを聞いた。船中では死骸を海中に葬る例もあるから、それを思へば一概に蠻風とも云へないと思つた。これは葬儀の一形式で、私は礮葬と名づけてゐる。

つらら(氷柱)を釘大若しくは箸大に思ふのは暖地のことである。北地のつららは屋根より地上に達すること珍らしくない。短い内に碎かねば屋根を損ふ虞れもあるが、屋後雪塞がり人の出入の出来兼ねる屋根のつららは、放任することの已むを得ない場合がある。斯る場所のつららは、地上に達するは勿論、最初こそつららとつららの間に多少の間隔はあるが、追々其の間隔にもつらら、が垂下し、それが又地上に及んで、一面の玻璃鏡となるは雪國の人の熟知の事である。これは格別の厚さはないが、水の落下する所になると厚さ一尺に及ぶつらら、が出来る。「北越雪譜」に一本のつらら、を半截して其の一半を橋で曳いてゐる圖があるが、それは決して假託でない。

雪路の歩行には履き物にいろいろの工夫がある。所謂雪下駄と云ふものは雪國に限るもので、一口に云ふと箱を伏せて底を上にして鼻緒を着けたやうなものである。二枚の齒の代りに四方に齒がある。これを穿てば、すべることもぬかることもない。又道なき所を行くには、草鞋の下に標と云ふを装置する。標は竹を長さ七八寸乃至一尺位に平裂きにし、之れを五六枚多少の間隔を置いて編み、それを草鞋に装置して歩けば、軟かな雪でもぬかることはない。全く道のない所でも無難に歩ける。尙ほ雪中の行旅には頭部を纏ふ藁帽子があり、棕梠の帽子があり、膝を掩ふには腰蓑があり、草鞋の先には足指を掩ふ藁製の爪掛がある。そして最も大切なものは深靴であつて、これでなければ凍傷を生ずる虞れがある。

雪國の遊戲もさまざまある。雪達磨を作ることなどは雪國にも限らないが、迂ることが兒童の興味をそゝる第一のものである。今はそれが發展してスキーが大規模に行はれ出したが、昔しはそれとは違つて、一種の下駄を穿つて道路をすべることを遊戲とした。私の知つてゐる下駄は二種あつて、一は徑二寸許の竹を半截し、其の蒲鋒形の處へ鼻緒を着けたものと、もう一つは、齒のない平たい木製の下駄で、雪に接着する所を滑かにしたもので、其形の似寄りから



コンニャク下駄と稱した。此外雪投げの戦ひは勿論行はれたが、雪で硬球を作り、それを互ひに打ち合つて、優劣を競ふの遊戯もあつた。此の球を作るには、最初豆程の小なるものより堅め、追々少量の雪を喰はせては固め、段々に大きく、徑三寸位にするのであるが、下駄の齒でぐる／＼壓搾しながら固めるのであるから、なか／＼堅いものだ。勿論雪の上などでは堅まらぬ。切り石の上でやることで、私なども幼時此の硬球を作るに餘念が無かつた。

## 九 醫藥としての水

私は曾て水に就て百則を書いたことがある。それは既刊の隨筆に收めてあるが、醫藥としての水には筆は及ばなかつた。全體人間の體は水で出来てゐるやうなものだ。昔しの哲人で斯く言明したのものもある。たとひ全部でなくとも、水が大なる要素であることは疑はれない。人間の毎に發散する津、液、涙、涎の、水であることは言ふまでもない。夫の土壁の破れたるを補ふには土を以てせねばならぬと同じやうに、水が大なる要素である人體の疾患を醫するには水

が重なる療劑であるべき筈である。乃ち伏熱を發したり冷したりするのも水であり、身體の枯槁を潤すのも亦水である。藥劑のいまだ工夫されなかつた原始時代に、水が如何ばかり療劑として用ゐられ、且つそれが效を奏したかは、藥劑の發達した今日尙ほ水を醫療に藉ることの多いことを考へても、思半ばに過ぎるものがあらう。唯水も時に害を爲すことがある。病症に依つては絶對に用ゐるべからざるものもあらう。又調量の如何により或は效を奏し或は否らざるものもあらう。昔し管子は萬物皆水なりと斷じ、終に治道の樞は水に在りと論じたが、治道の要決も調節裁量にあることは言ふまでもない。

近年の西洋醫家は醫術に氷塊を用ゐることが常套で、解熱の用として缺くべからざるものになつてゐる。素人でも聊か病理を知るものは醫者の來る前に水を以て手當をすることを忘れないが、これは強ち西洋醫家の發明といふ譯でもない。我國上代に氷塊を朝廷に獻じたる著明の例がある。氷塊の早く醫藥として重んぜられたことを想見すべきでなからうか。日本の古方に水療法といふものがあつたが、それが具體的に傳はらないのは惜しい事だといはれてゐる。その失はれた古方が支那傳來であるか、日本特有のものかは委しくは知れないが、支那にも古く

から此療法のおつたことは疑ひない。たゞ支那の法は多く日本に傳はつて、それが日本の研究で大成したものや、支那に亡びて日本のみに傳はるものもある。

日本の醫術も幾變遷を重ねてゐるから、外國の感化で、保存を要する固有のものまでも掃き去られたのも少なくない。水療法が現今完全に傳はらぬのも、おそらく或る變遷を経て顧みられなくなつたのではあるまいか。但し古書に散見する水療の斷片的醫法は決して少なくない。又昔から現在に至る迄、事實に行はれてゐる水療の法も敢て少ないとはいへぬ。即ち應急の手當に水を飲ませたり、水を面部に注いだり、或は頭部を冷したりする事などは、西洋醫術の行はれない前から行はれてゐた。腦症の患者が瀧の直下に立つて頭部を打たせるなど、古來行はれて效驗多いといはれてゐる。これ等は勿論宗教的觀念なども相當手傳つてはゐるらしいが、同時に合理的な療法でもあつた。平清盛が熱を病んで、冷水の浴槽に全身を濡らしたことなどは歴史にも著名な事實であるが、これまた當時の醫家が施した水療法とも見られるであらう。熱病患者が偶然の過失から水槽に陥り、渾身を冷した爲めに却つて平癒を得た例などはいくらもある。漢醫の説では、冷却も極度に達すれば反動作用で熱を生ずるといつてゐるが、體温を

維持する爲めにそれに相當する藥劑を投じて水療を施す時は、冷却のため患者が悶絶しない病患は必らず癒えると説いてゐる。

日本の古書に往々水療に關する記事がある。「醫談抄」には「諸病に水を進むる法師侍ハベルとて或貴所に被用」とあり、又「寛元の頃にや關東に水醫とて此方を諸人に進め侍り」云々ともあり、上代に水療の法のありし片影は此等の記事に據つても想見することが出来る。狩谷檢齋の考證に據れば、古昔は湯藥の事を水と稱したと云うてゐる。其の根據とする所は、建保七年源顯兼の著はした「續古事談」第五に「後朱雀院かさ(瘡)をやみ給ひけるに、典藥頭相成ミナサリ、よろしく成り給へり、水ちゞむべきよし申けるを、雅忠、いまだわか、りけるが、見たてまつりて、この御瘡いつ水とゞむべしともみへすと申けり」云々と云ふにあつて、現に檢齋所藏の六七百年前の古文書の内にも被<sub>レ</sub>止水とあるのは湯藥を水というた一證としてゐる。之に對し、明治年間「水志」を著はした、漢方醫家岡田滄海(昌春)は此の考證を誤れりとなし、瘡を水で洗ふ醫法があるから、所謂水といふは通常の水で、湯藥を水と云ふにあらずと駁して居るが、檢齋所持の古文書に所謂「被止水」は如何なる疾患に對していつてゐるのか、若し瘡毒の場合でない

とすれば、椽齋の説は一概に非とすべからずと思ふ。兎角椽齋所藏の古文書の全文を見なければ判別し難いが、水療の勢力ありし時代には、すべて薬とし云へば水と稱したと見る方、却つて自然に近いやうに思はる。

尙ほ水療について想ひ起すのは、ある季節に奈良の二月堂に行はる、水取の儀式である。これは天平の頃から連綿として今に至るまで絶え間なく行はれてゐるもので、頗る複雑且つ厳格なものだと聞くが、その修法が済むと、二月堂の附近にある古井から、その水を堂の縁の下に伏せてある大甕に汲み込むのである。この古井の水は水取専用のもので、修法終つて水を取つた後は嚴に封じて、次の水取のときまでは決して他に用ゐないといふ。又この水取の日は何故か天氣が寒冷で、その寒氣のために水取の日といふことがわかるからであるから、京阪などでは、その天候を水取というてゐる。さてかうして汲み込む水が古來百病を醫するに效驗ありといはれ、これを頒つ日になると、群衆が二月堂の界限に充滿して、非常の雜沓を極めるのが例である。この水取なるものは單に迷信であるか、又は或る時代の水療醫法が神佛にからんで、かうした行事がはじまつたのか、それらは今つまびらかにすることは出来ぬが、ひとり二月堂

ばかりでなく、隨所に神佛に關係した治病の水といふのがあつた。これらは悉く迷信といへばそれ迄であるが、古くから日本に水療が行はれ、水は病患に效ありとされた、その事に思ひ合はずと、何等かそこに脈絡がありはしないであらうか。

「醫學正傳或問」に、醫家は水を以て藥石を煎するに種々の水を用ゐる、本草は其の水の種類を擧げて其の用を詳かにしないと云うて、各種の水の用を陳べてゐるが、之れを詳悉するは煩はしいから、僅かに一斑を録する。水の種類は凡そ左の如し。

- |     |     |     |     |        |
|-----|-----|-----|-----|--------|
| 長流水 | 急流水 | 順流水 | 逆流水 | 半天河水   |
| 春雨水 | 秋露水 | 露花水 | 井花水 | 新汲水    |
| 無根水 | 菊英水 | 潦水  | 甘爛水 | 月窟水 等等 |

其用に就ては、長流水は手足の病を治し、大小便の通利によしと云ひ、逆流水は發吐痰飲の劑に適すと云ひ、春雨水は婦人子なきものに飲ましむれば效ありと説くの類で、一概に信じ難いものもあれど、水には有機無機種々の混濁物があり、病患に對し交渉がないとは云へぬ。水療古方の盛んであつた時代に水の用に就て相當の研究があつたのは當然の事と思はる、何に

しても煎藥に佳水を選んだことは支那も日本も同様で、醫學正傳にも、純潔の水は金丹を煉るに適すと説いてゐる。日本でも萩野台州と云ふ名醫が、彦根侯に召された時、藥方は藩醫と同案であるが、水を選ばねばならぬ。併しこの地ではよくない。京地は佳水多く、殊に我家の井水がよろしいから取寄せられたといつたので、時人は台州を水醫者と稱した。又江戸の醫官半井家は、昔は和氣英明と稱して京都に住したものであるが、庭前に名井があつて、その井戸を半分仕切り、半ばは製藥、半ばは日用としてゐたので、そのころの人はその本姓を呼ばずして半井と稱するに至つた。その井戸、今も三雲施藥院の庭に存す、と或る書に見える。これらの事實から考へても、日本の水療も早くから相當發達してゐたに違ひない。

維新後、岡田滄海が支那日本の古書を涉獵し、凡そ水療に關する事を、随つて見れば随つて輯めて、明治十二年に「水志」と名づける一書を出版した。五十枚にも充たぬ短篇で、不十分なものではあるが、それによつても古來水療が種々の形式で行はれ、それが效を奏した片影は窺はる。少なくとも水療法は洋醫のなす前に行はれてゐた事は歴然として居る。今後更に努力して、この「水志」に大増補を加へる人が出たならば、湮滅に歸した古方も復活し、洋家を後

へに瞠若たらしめるものも發見されないとはいへぬであらう。

## 10 繪はがき禮讚

私もかつて繪はがきに趣味を感じて、内外の繪はがきを多く蒐集したことがある。それは明治四十四年の頃であつた。當時は可なり内地でも繪はがきが流行し、日々新版の繪はがきが出た。其中に商品でない、趣味家の道樂に成つた繪はがきに佳品が多かつた。交換會などいふことも當時行はれた。私の郷里にはあらゆる繪はがきを蒐集した人もあつたが、それは皆商品で割合に逸品が乏しかつた。追々繪はがき熱も冷却し、今は活動寫眞の俳優や其場面のはがきで持ち切るやうになつて、頗る單調となり、従つて興味も薄らいだが、それ等のことからして、私も十數年前に蒐集する事は止めた。併し旅行する毎に繪はがきを發送する癖は今も已まぬ。そして一時蒐めたものは大小のアルバムに装して二百冊もある。嘗て蒐集熱に驅られたころ、その道の雜誌に請はれて、聊か書いて見たこともある。其の要點をこゝに書くのは無益の事に

紙を費す嫌ひがないでもないが、實は長く手紙に興味を有ち、手紙に就て既刊の私の隨筆にいろいろ書いてるながら、繪はがきの事にはまだ及んでるないから、其の漏を補はんとするのである。

繪はがきは近世の産物に相違ない。外國に倣つての郵便法が施行され、はがきに寸尺が定まつて、爰に外國に倣ひ、一面繪をつけ、一面に宛名と文言を書くことになつたのである。併し濫觴は我が日本にあることを思はねばならぬ。徳川期には繪半切、繪封筒が盛んに行はれた。それは當時有名な畫家の筆を勞して、百端の繪がある。その印刷もなか／＼二度三度の摺りではなく、十回も重ねたものがあり、金銀の彩色を施したのがあり、必要に應じて畫面を凹凸にしたのがあり、紙面全體に紗綾形を凸起したのもあり、紙の上下に紅を施したのがあり、男用女用各々其の形式を異にし、しきりに風流を競うた。其の美麗な繪の上を字で書き潰すのは勿體ない程であつた。既に書簡箋が右のごとくであるから、封筒にも無論意匠が無ければならぬ。随つて北齋や廣重などが下繪を書いたもので種々の繪が印刷された。私は嘗て此等の標本を集めたことがあるが、金花堂で發行した繪半切丈でも、自分の手にあるものが五十種もある。一

時盛んに行はれたことが想像される。即ち此等の繪半切と封筒が、其の形と大小こそ今のはがきと異つてはるるが、其の精神に至つては毫も變りがない。即ち繪半切は繪はがきの前驅をなしたもので、其の祖であるとも云へようと思ふ。

手紙に特別の趣味を有するものは別として、普通は、手紙を一見すると、直ぐに反故籠に葬るが例である。況んや片々たる葉書に於てをやだ。唯繪葉書に限つて無趣味の人も一概に棄てない。彩色が美麗で繪が面白く出来て居ると、何となく反故籠にはふり込むのが惜しくなる。人間には多少美を愛する性があるからであらう。新年などに自分の處へ舞ひ込んでくる幾千の賀章の内には、少なくとも五十や百の繪はがきが交つて居る。中にはなか／＼意匠を凝らした雅なものもある。普通のはがきは皆棄て、仕舞ふが、どうも繪のあるのは棄て兼ねて、いつも子供に言ひつけてアルバムに嵌めさせる。これが毎年の事である。繪はがきの筆者必らずしも保存に價ひする程の人でない。兎もすると全く記憶にも無い位な人から來た繪はがきに、意匠のよいのや繪の振つたのがある。これに反して名流の筆に成るはがきでも普通はがきである爲めに棄てられて、繪はがきであるために特別扱ひを受け、永く保存され、家庭娛樂の具となる

ことを思ふと、繪はがきの徳と謂はねばならぬ。

手紙を書くに極めて筆無性のものが世間少なく無い。是非書かねばならぬ用件があつても、兎角に怠る。旅行などの場合は懶くなつて、餘程の事が起らなければ、親兄弟や妻に手紙を寄せぬ。まして穉なき兒女などに書状を寄することは無い。然るに繪はがきが到る先きくくに販賣され、旅館にも名勝地にも其の景色の寫され居るものが備はることとなつては、筆無性の人も、これに對して動かぬ筆もこゝに始めて動き、朋友や兄弟や妻子にも、一寸安否を知らせかたがた二枚三枚のはがきを出す慣習がおこり、今となつては誰れも遣ることになつた。やつて見れば、たわいもないことである。普通の書状や普通の葉書では、聊か用事でもなければならず、文章も體を得なければならぬが、繪葉書では、文體もどうでもよく、用が全く無くとも、繪はがきそれ自身が多少物を言ふのみならず、幾何感興を惹き起すものであるから、どんな人でも筆を取つて見る氣になる。其の結果として、これ迄曾て一たびも良人より手紙をもらつたことのない細君が時より良人の筆の跡に接することが出来、子供扱ひを受けて、親より絶対に手紙を受けることのなかつた子女も、亦常に慈親の筆蹟に接することになるに至つた。これは

家庭の溫情を維持する上に大切な事で、全く繪はがきの賜物と謂はねばならぬ。

手紙の尤も趣味あるものは、文章の妙にあるは言ふまでもないが、繪入の手紙は極めて趣味のあるものである。例へば行路の風景を圖して文章を補ひ、若しくは何か見たものを圖して知らせるなどは、手紙に一段の光彩を添へるもので、何とも云へない味がある。それだから畫家の書簡に味のあるものが多い。併し幾何か畫のかける人でなければ此業は出来ぬ。近來段々手紙を書くことがそゝかしくなり、趣味を添へることに意を用ゐるなどは先づ絶えたと云ふ位に墮落したが、こゝに幸ひにも繪はがきが行はれ出して、到る處に其の土地相應のものが出来て、何人も時と場合に應ずるものをよく選びさへすれば、自から畫筆を弄せずとも畫手紙が書けることになつた。半ば畫を藉りて物を云ふことの出来る、趣味ある書簡箋の既往にも倍して、容易く且つ豊富に得らるゝことになつたのは、全く繪はがき流行のお蔭と謂つてよろしいのである。

繪はがきは一種美的修養の機關と見ることが出来よう。假りに家庭に就て見るに、家庭の子女が従前繪に親しむ場合と云へば、錦繪を見るか、繪本を繙くか、繪手本でも弄するより外に

は、繪に親しむ方法とはなかつた。處が錦繪や繪本などは、必らずしも各戸に藏されて居るものでない。中等以下の家になると、なか／＼そんなものはない。僅かに存するものは教科書(挿繪ある)や玩具屋に賣る俗惡の繪本位が、子女の親しむ繪となつて居るに過ぎない。然るに繪はがきが行はれてから、其價の廉なるために如何なる家庭にも入り込むこと、なつて、こゝに始めて萬戸の子女が繪に親しむ機會が生じた。彼等は天性繪を喜ぶものである。彼等は最初繪を弄んで、みだりに嗜好によりて選擇する。之を用ゐて音信を通ずるに迫んで、此の季節には此の繪がよい、此の用事には此の繪が適する、あの人には此の繪ならざるを得ない、と自然に繪を鑑賞するの端を發し、終にはみづから繪を習ひ、自製の繪はがきを作るまでに至る。その日夕家庭に於ける此の趣味ある薰陶は、幼少なる子女の頭腦に美的修養を爲すことが決して鮮少でない。教育家などはヨモヤ此方面に氣付かずしては居るまいが、美的方面の修養に此の繪はがきが與つてゐることは閑却してはならぬ。

繪はがきがハイカラ連中にのみ用ゐらるゝものとした時代は、無論とくの昔しとなつた。或る人は某老書家を訪問して、其の書齋に堆かく繪はがき帖の積んであつたのを見、此人にして

此趣味があるかと喫驚したと云うたが、今日は思ひも寄らざる方面に繪葉書が行はれてゐる。今其一二を云へば、歌人は色紙に擬した模様や輪廓を巧みに施した葉書に和歌をかき、俳人はみづから俳畫などをものして句を認め、或は俳畫の印刷してあるのを特に求めて俳句を認め、漢詩人は葉書の四周にからめきたる詩箋式の輪廓を施し、若しくは淡彩の地模様などを刷り、これに詩を草し、篆刻家ははがきを印箋に擬して印を捺し、金石家に至つても、或は古碑を撫した一片紙をはりつけ、若しくは古錢などを撫したものを貼つて、一種の繪はがきを作つてゐるし、好書家は古版本や古寫經などを切り縮めて之れを貼りつけて弄んでゐる。今日は繪はがきの及ばざる社會とてはないと謂ふまでに範圍が擴がつた。

繪はがきも多く蒐めてアルバムに嵌めて置けば興のあるものである。家庭の娛樂機關にもなり、記念にもなり、印刷や圖案の参考にもなる。追々年數を経れば経るほど、興もまし味も生ずる。己れの幼時の筆の跡もこれで見ることが出来る。亡くなつた兄弟姉妹の筆の跡もこゝに存する。自他の經歷を追懷する材料ともなる。或は大事件に關する繪はがきになると、年所を経たる後には容易ならぬ史料ともなるのである。繪本や書幅は精神に乏しいが、繪はがきは或

る人或る時或る場所に於ける好記念物で、これほど生き／＼したものは無い。眞に家庭の娯樂機關として上乘のものである。繪はがきを棄てるも存するも全く習慣で、一たび保存する癖が起れば、少しも骨の折れることでない。保存癖が起れば、成る可く多くして見たい情の起るが當然で、自分みづから旅行先より家庭へ發信し、それをも他日の記念に保存することにもなる。要は心がけ次第である。

世には道樂に郵便切手を蒐める人があり、<sup>アウチ</sup>燐寸のペーパーを集める人がある。而して又道樂に繪はがきを集める人もある。同じ様なものだが、趣味に於て優劣がある。世界各国各時代の郵便切手をあつめることも興が無いでもない。其の圖畫で國情も知れ、古帝王や豪傑などの肖像も興がある。僞版を防ぐ爲めの種々の工夫も味は、れないでもない。時代の古い稀れもの、流布時期の短かつたもの、若しくは交通不便の嶋地に行はれたものなどは皆レア・ヴァリュエがあり、趣味の無い譯ではないけれども、大體に於てウアラヤターが乏しく、活氣を缺いて居る。燐寸のペーパーになると、其の趣味は印紙よりも更に下つて、實は俗悪である。成るほどさまざま集めて見れば數は如何にも夥しいものであるが、<sup>カクヤ</sup>形屋の紋帳でも見るかの如く、意味の

寓してあるものなどは甚だ稀れである。成るほど支那向きのペーパーには支那の嗜好に投ずる圖があり、日清日露の戰役中に出來たものには強がりたる語などが撰んである。コンナ所に一寸玩味の價値があるが、概して意匠は俗悪で、唯稀れであるとか、コレクションが如何にも行き届いて居ると云ふ所を誇るに過ぎない。日本創設の新燧社の幼稚なペーパーが、稀れであるというて格外の價を有つて居るが、實は稀れと云ふ丈で、趣味としては絶無である。何と云うても商品の標記に過ぎない。それも年代が百年も二百年も経つたとあれば、時代に味ふ所もあらうが、極めて近いものであるから、時代の味は全く無い。以上二つに較べると、繪葉書は流石に興味がある。繪それ自身に多般多様の趣味があり、いろいろの意味もある。道樂に作つたものになると、銘々の心意氣が寓してある。その人がいくばくか此のカードの中にほのめいてもある。且つ繪はがきは印紙や商標の數の有限であるのに比し、無限である點に於ても優越してゐる。されば、ひとしく道樂でやるならば寧ろ繪はがき道樂をやる方がましであると私は主張する。

日本の山水風光は世界に冠絶すると誇るやうに、繪はがきの好材料が到る處にある。風景材



料の豊富なる點に於ては、世界如何なる國にも譲らない。此點に於て確かに日本は繪はがきの好製造國と云ふ事が出来る。面積が如何に大なる國土と雖も、或は漠々たる沙漠其の大部分を占め、或は土壤千里に渉るも風景の平凡なる所では、自然の風景を材料とする繪はがきを作る事が困難である。此點より見れば、現在の日本の風景繪はがきは既に世界各國に軼駕するものがあらう。唯材料の豊富なる所では、却つて印刷其他製造の術が進まない缺點がある。恰かも魚介の材料の多い海濱に割烹の術が進まないと一般である。遺憾ながら製作術は未だ西洋に及ばない。且つ日本の繪はがきの長所は、専ら自然の風景を材料とするものに止まつて、他の意匠の繪はがきは一向に進まない。畢竟風景の豊富に安んずる結果に外ならぬ。風景の美に對し、印刷彩色の術が如何にも劣つてゐて、有體に云へば、唯「寫眞」を「葉書」に印刷したまで、美術的加工は幾んど無いと云うてもよい。若し夫れ人事に關する繪はがき、殊に諷刺畫などに至つては、物になつてゐるものは幾んど無い。此點に於て特に將來の發展を要する。文様や圖案の西洋に劣るのもこれ亦言ふを要しない。要するに、意匠、彩色、印刷の諸點に於て將來改良に非常の餘地がある。

繪はがきが通信上にも娛樂上にも教育上にも如上の利益があるとすれば、願はくは之れを奨勵するために政府も特に意を致さねばならぬ。出來得べくんば、壹錢五厘の郵税を、特に繪はがきに限り、五厘を減せんことを欲する。普通の葉書は書く場所も多く製造費もかゝつてゐないが、之れに反して繪はがきは、製造費として若干多くかゝり、高いものは一枚十錢乃至三十錢のものもある。其上に書く餘地が甚だ狹隘である。此の理由からしても五厘位減してもよからう。但し遞信省の収入を減するが故に、五厘減じがたいとの論もあらうが、五厘を減する結果として、繪はがきを使用することが激増し、或は二倍し三倍するにも至らん。其の結果必ずしも遞信省の収入に減少を見るとは云ひがたい。

私が右のごとく繪はがき奨勵を主張したのは、二十年前の事であるが、近年追々繪はがき趣味が荒んで來て、其の通用も疎になつた事は疑はれない。近頃雜誌屋の店頭に活動物の繪はがきのみ跋扈してゐるが、あれは通信用に餘り多く使はれないやうである。はがき店も一と頃のやうに新版を出すことをしないから、店先は寂寥としてゐる。恐らく斯道の趣味家も鋒鋷を收めてゐるらしく、新年の賀狀に徴しても繪はがきが頗る衰へたことが看取される。これは甚だ

面白からぬ傾向である。私は嘗て繪はがき奨励の一端として各自常用の繪はがきを作るべしと主張したことすらある。其の大意は次の如くである。

境により時に應じ種々の繪はがきを臨機に使用するは勿論妨げないが、意匠あり工夫あり趣味ある人々の、特に自家用はがきを製作することは、誠に趣味の上に於て望ましいことである。今日、ポスターの意味で商店などが自家用の繪はがきを作り居るもあり、又極めて少數の好事家が自家用のはがきを作り居るもあり、新年に、年賀状のみに限り、銘々それ／＼の工夫を凝らすことはあるが、常用のはがきに意匠を凝らして作り置くなどは、いまだ多く行はれてゐない。若しこれが追々広い區域に行はるゝに至らば、繪はがき界は一層賑はひ、趣味も一層高まるに相違ない。その意匠に就ては其人の工夫次第如何様にても苦しくない。例へば十二月各々圖様を異にするもよろしい。男子用と女子用を異にするもよからう。別に小兒用を作るもよからう。必らずしも多費を要する圖を入れるゝに及ばない。いろ／＼の色をもつて無地に印刷する位でもよい。四季四色に刷り、春夏秋冬をわかつが如きも、簡單ながら、色の工夫によりて風味があらう。或はズット凝つて、朝夕出

す葉書に區別を立て、午前に出すのと午後に出すのとを違へるなども趣があらう。己が自慢の庭園や器物や建築物などを圖にする事は既に行はれて居る。これも不可なしだが、夫の文人墨客が特に自家用の詩箋や俳箋を作るが如く、又著述家が思ひ／＼に稿本の用箋を工夫するが如く、はがきに於ても幾許か工夫を施さば、其の意匠の巧拙精粗に拘らず、趣味はなか／＼に淺からぬであらう。吾等は、繪はがきの流行の、遂に此の域に達せんことを欲するものである。

## 一一 牧野子爵家の犬

狗子<sup>クシ</sup>佛性ありと云ふが、犬ほど感心な動物はない。私も愛犬家と名乗るを敢てするものであるが、二十數年の間、幾回か犬を飼養して見た。別荘にも幾回か愛犬を置いたが、私が本宅へ歸る都度、十町もある電車の停車場まで見送に來て、別れる時にむごたらしい様子を見ると、いつも忍びない情があつた。兎角よい犬は盜まれたりして幾回も失つた。今家に居るのは老犬であ

るが、ブルドックの血を承け、生れると直ぐに吾家に來たもので、家の子畜ならざる愛情がある。門外へ出すと、盗まれたり殺されたりするから、幼少から外に出さぬ。私の出入には必ず送り迎へをする。私の食膳には必ず側近く侍して、肉片の頒與を受けるものとしてゐる。食時の時刻を知つてゐて、書齋まで私を迎へに來ることもある。家族は勿論、婢僕に至るまで皆愛してゐる。寒中などは必ず私の寢室に眠るのが恒となつてゐる。此犬は男性であるが、面貌が秀麗で眼眸に威風が備はつてゐる。犬の習癖に就て云ふべきことは少からずあるが、それは愛犬家の齊しく知る所であるから、それ等は爰に略するが、茲に犬に就て語るべき一條の物語がある。前年郷里へ歸つた時、牧野忠篤子も丁度長岡に歸省中であつて、或る日種々の人と共に子爵に招かれて悠久山に閑遊を試みたことがある。此の悠久山は子爵の家廟のある所で、長岡の町を離れて一里足らずの郊外、幽雅の地である爲めに今は公園となつてゐる。子爵は吾等を饗應しつゝ、種々前代の事蹟や忠節の人の碑などに就て語り出された擧句、牧野家に名の高い犬の事に及び、巨細に語られたのに私は深く興味を感じた。其談話は左の如くであつた。

子爵家が閣老の時であつたか、殿に愛された犬があつた。一と年長岡城を發して江戸へ祇役

の時、犬もしきりにお供をしたい様子であつたが、百里もある旅程に犬を伴ふことは氣の毒でもあり不便でもあるといふ事から、犬を城内に留めて出發された。すると犬は翌日城を抜け出て、殿一行の跡を追ひ、晝夜一休もせず、小さな足を運んで追跡した。しかし遂に途中一行に追ひつくことが出來ず、殿が江戸へ着されて、一日か二日後れて屋敷に着したので、殿を初め家臣の面々も皆驚いて、よくも長途を辿つて來たもの、と懇ろに食物を供してはつた。それからは江戸の屋敷にゐるが、ある時隣家なる某大名の犬と葛藤を生じて犬同士鬭争の結果、隣犬に噛みつき死に到らしめたので、大騒ぎとなつた。高が犬の喧嘩であるから何でもないやうであるが、當時はコンナ事が動機となつて、大名同士の葛藤を生ずる事も間々あつたので、此の椿事を閑却することが出來ず、牧野家でも心配して、隣家に對し所謂運動を試みたのが幸に功を奏し、事無きを得た。殿も一時はひどく心を勞し、平生愛撫して居らるゝ犬を庭前に召して、此時は儼然として其の不心得を叱責された。

犬も恐縮して尾を垂れ、罪を謝するもの、如くであつたが、庭を去ると、それ切り影をかくして屋敷にゐなくなつた。殿も家臣に言ひつけて百方搜索されたが終に見當らなかつたので、

不審に思つてゐると、餘程あとに犬が長岡へ戻つたことが知れた時は、既に此世のものでなかつた。犬は主公の叱責で屋敷に居り兼ね、又百里の長程を数日晝夜兼行で故郷へ歸り、やつと城門まで辿りつくと、家臣は城内に入ることを許さなかつた。多分、犬の歸つて來たのには仔細があるであらう。或は殿の不興を受けたか、何れにしても江戸で不良の行があつたのであらう、と推測しての事であつたらしいが、犬は城門に入ることが出來ないので、已むなく疲れ足をひきすつて、悠久山へやつと辿りついたが、数日の過勞と食物の缺乏で氣力が續かず、終に主公の廟所近くに斃れた。此犬はもと悠久山附近の民家に生れたものと云へば、或は生家に歸らんとしたのであらうと云はれて居る。

以上が子爵の談話の大略で、牧野家では氣の毒に思つて其の遺骸を埋め、小石を建て、しるしとしてゐる。其の墓が矢張り此の名區にあるといふから、それを見たいと子爵の案内で訪うて見ると、吾等が休息してゐる亭から數十歩の近い處にあつた。私は其の墓前に佇立しつゝ、子爵に向つて、お話しのお話の如くであれば、此の犬は勘當を受けたものと心得て江戸のお屋敷を去つたと見える。御城へ戻つて來ても入ることを許されなかつたから、益々勘當を受けたと心得たに

相違ない。如何にも氣の毒に堪へぬ。其の責任感の立派であることは人類も及ばぬ所がある。貴家は此犬が斃れてから勘當を許されたかと問うたら、子爵の云はるゝには、敢て勘當した譯でもないから、別にそれを解くことも無かつたと答へられた。私はそれに對し、御尤もであるけれども、犬の情を推せば勘當を受けたと心得て地下に入つたと思はるゝ。どうか私に免じ、改めて此の墓前で勘當を許して戴きたいと求めた處、洒脱の子爵は許しますともくゝと繰り返されたので、私は喜んで犬の靈に向つて、今お詫が叶つてお前の勘當は許されたから喜べよと告げて合掌した。

其夜、或る宴席に再び子爵に會した折、子爵は特に隨筆やうの古寫本を持參されて、犬の事はこれに委しく書いてあるから一讀せよと云はれた。取り敢へず其席に讀んだが、大要、子爵の談話の如くであつた。年月と隨筆の名を逸したのは遺憾に思ふ。

## 一二 印人の習癖

藝術家には奇な習癖のあるのが少なくない。畢竟精力をある一方面に集注する結果、他が留主となるは自然の數で、一心不亂といふ域に入ると、當面の事の外何事も頭腦を拂ふに至るが常である。私はこゝに篆刻家に就て一二の逸事を録する。

日本の篆刻界で印聖として尊崇さるゝ高芙蓉(大鳥逸記)は、印を刻して其作が意に適さない時は、いつも庭前に其の印を抛り出して、何處ともなく出て行くのが例であつた。あとで細君が其の石を拾ひ上げ、砥石で綺麗に磨つて、それを机案の上に乗せて置くと、芙蓉は歸つて来て、婦に一應の挨拶もなく、白ばつて来て印刀を把り、再刻を試みたとは、柴野栗山の話で傳はつてゐるが、これなどは奇癖とも云ひ兼ねるが、中には往々極端の例がある。土佐の容堂侯のお抱篆刻家壬生(水石)は、市中を歩く時でも必らず印面に刀を揮ふごとくに足を運び、屈曲も亦運刀の法に倣うて苟くもしないので、路頭の人は其態度の奇なるに驚き、狂人と誤認するものもあつたと云ふ。亦食事の時でも、家人の持ち運ぶ膳部の中の皿や椀などを、必らず印面の配字の心意氣で、みづから色々と置き替へ、按排が意に滿たない間は箸を取らなかつたと云はれてゐる。印人の苦心は主として布字にあるから、斯る習癖を生ずるに至るのである。

又篠田芥津といふは印界に可なり名のあつた人だが、矢張り奇癖があつた。此人はもと三味線ひきで、壯年の頃之れを業とした事もある。性來潔癖で何事も几帳面であつた。常に調度などが亂脈に置かれてあるのを氣にかけて、それが目に入ると、直ちに自から置き直すのが例で、訪問客の下駄が正しく竝んでゐないと、自分で必らず之れを直した。餅などを切るにも、必らず尺度を以て寸分違はない様に形正しく切り、否らざるものは決して口にしなかつた。此人の細君を擇ぶ時にも、第一の條件が三味線のひけることで、第二は餅を上手に切ることであつた。書畫などを購ひ入れても、其の落款が曲つてゐると、苦辛して其の落款をツギハギをして直したものである。入浴の場合は湯加減に文句があり、身體を洗ふには順序があつて、どこから始めてどこに及ぶといふやうに、必らず其の順序を追はねば承知しなかつた、と此人の親戚に當る私の友人が嘗て語つたことがある。

筆の序に印に就て一二を書き添へる。大雅堂の戲刻の印に「仍如件」と三字を刻したものがあつた。書簡の末尾に押せば多少の趣致を添へる。俳人一茶の印は更らに奇抜である。其印文は「之印」といふ二字である。これは多分俳客は印など要らぬと皮肉つたのであらう。如何にも自

署より確かな印は無い筈だ。自署した下に此の印を捺すのは、自署が即ち印であると云ふ譯であらう。一茶の飄逸の風格がほのみえておもしろい。

### 一三 古本屋

近來古本の宣傳にいろいろの雜誌が出てをる。中には費用構はず、多く圖版を入れて趣味的に印刷したものもある。其の内容は書物の解題、著者の閱歴、書物に就ての逸話等さまざまに收めてあつて、名家の執筆に係るものも少なくない。私も長い間古本屋を日々散策の休憩所とした關係もあるから、敢て頼まれた譯でもないが、聊か古本屋の宣傳めかしい事を書いて見よう。

一、世間には物を賣る商店がいろいろあるが、古本屋は讀書人に糧を與へ、趣味を供給するといふ本分に於て、他の商店と異なる所がある。

二、古本屋に似寄りの商店は書畫屋骨董店であらう。書畫は人の思想の精華とも見るべきもので、骨董も藝術の發露であるけれども、古本は古人の思想精神の全體である點に於て、書畫

骨董と其の幅に於て異なつてゐる。

三、古本屋は古人の思想の陳列場である。或意味に於て古人の墓場のやうなものである。普通の墓は石で作られ、其の下には遺骨が埋まつてゐるが、此の墓は紙で作られ、そして思想精神が包まれてゐる。古本は古人の紙碑とも云ひ得るであらう。

四、圖書館は古本屋と似通つた所がある。圖書館も確かに古人の墓所であり、又思想の陳列場である。併し異なる所は、これに在りては、購ひ得て自家の有となすことが出来ない。古本屋に於ては任意に獲得が出来る。

五、古本屋は讀書人に取つて日々の遊樂場である。別して圖書趣味家、圖書蒐集家に取つて大切なる仕入場である。前の譬喩のごとく古本屋を古人の墓所と見做し得べくんば、讀書家蒐集家の毎日の訪問は古人の墓に參詣するものと云ひ得るであらう。

六、普通の墓は一人一墓であるが、こゝは一著一墓と見るのが適當であらう。乃ち多くの著述を残した人の墓は數多くある譯だ。

七、此の紙に作られた墓は、墓所一覽や人名録などに全く漏れてゐるのが多い。否な著作目

録にさへ漏れてゐるのが少なからずある。まして版元や刻師などになると、其名すら埋没して、埋骨の墓がどこにあるか分つたものでないが、此の紙碑の内にはチャンと傳はつてゐる。これが彼等の位牌とも見るべきものだ。

八、普通の墓は、如何に石にて築かれても、世の轉變に出遇つては幾百年と傳はるものは極めて少ない。且つそれは親族縁者の外には禮拜も受けないが、書物として残るものは、永久に傳はり、多くの他人に守護せられ且つ禮讚される。

九、新版は問題外であるが、併し古本と多少の交渉がある。と云ふ譯は、新版も古くなるとそれが古本屋の領域に入るからである。新本古本の優劣はこゝに論ずる場合でないが、何れかといふと、古本屋の奥行は新版屋よりも廣い。何と云うても奥床しい譯は、幾百年の昔に亘つてゐるからである。

十、讀書人や蒐集家が日參して多少の智識を得るのは、古本屋である。どんな該博な人でも未見の書物がある。そしてそれを知るのは古本屋である。圖書館も此點は同じであるけれども此店のやうに勝手にたやすく捜し兼ねる不便がある。古本屋の主人は必らずしも學者でない、

亦多くの智識の持主でもないが、其道の専門だけに、版式や、圖書に就ての事故や、僞版であるや否や、同じ書物で標題が變つたもの、あることなど、流石に多くの書物を取扱つてゐるだけに素人の知らないことを知つてゐる。それにより自然教はることがあり、亦有益なヒントを得ることもある。

十一、古本屋には、搜索者の眼識次第で掘り出しも出来る。所持の零本を完本としようとして、其目的を達することも出来る。亦悪本を下に出して佳本に換へることも出来る。

十二、古本漁りの興味は購うて自家の藏本とするのにあるけれども、必らずしも購ふのみが趣味でない。假令購はずとも、佳本や稀書に寓目するだけでも趣味を満足せしめ得る。

十三、或は云ふ、書物は讀むべきものだ。讀まずしてどこに趣味があると。一應尤もであるけれども、これは實用家の言ふことで、趣味家の見解でない。實用本位ならば、覆刻本でも活版本でも宜しい譯である。しかし趣味の問題はおのづから異なるものがある。趣味の上から云へば、中を讀まずとも、古色の掬すべきものがあり、古香の鼻を撲つものがあれば、それで満足が出来るのである。

十四、百年五百年若しくは千年の古書が幾回かの兵燹や天殃を免かれて儼然と存してゐるのは頗る稀れな例で、天佑というても誣ひないのである。趣味家がそれに興味を感じるのは當然の事で、これに對して多くの價を拂ふことを辭せないのも亦當然であらねばならぬ。

十五、圖書の時價は必らずしも其書の眞價の尺度でない。唯希覲の故を以て愚書に圖外れの相場を附するものもないではないが、大體或る程度まで眞價をあらはすものである。勿論世の風潮や嗜好の變遷で相場に高低がある。古本屋は此の點に於て一種の測候所とも見られる。

十六、何の商賣でも問屋があつて物を供給する。随つて問屋へ行けば何でもあるが、古本だけには問屋がない。それが故に書物を集めるには古本屋の努力が要る。吾等の古本屋を禮讚する一つの理由はこゝにあるのだ。

## 一四 日本料理に就て

日本料理は藝術として世界の番附のドンナ地位にあるものか。魚類の如き、或は野菜なども、

生で食ふ習慣があるので、直ちに原始的の料理であるとい概にケナスけれども、生を其ま、食ふのは原料が生で食へるほど新鮮でもあり美味でもあるからである。調理を経ずウブで食ふのも味の佳いもので、よい原料のある處の誇りとすべきものである。西洋人などが日本の刺身を食ひ得ぬのは、まづいからではなく、生で食ふ習慣を有たないからの事だ。何でもかでも複雑の調理を加へねばよい料理と思はないものは、いまだ料理の眞諦を知らないものである。複雑の工程を経ざればうまくならない原料に對してこそ、面倒な料理が必要であるのだ。例へば山間の僻地などで、鮮魚もなく野菜すら乏しい處などでは、勢ひ干物カシラを調理する外はない。それをうまくするには相當手数をかけねばならぬ筈である。我が舊帝都西京の如き、昔は山間の頗る不便の地であつた。然るに皇室を始め百官こゝに在り、あらゆる贅澤家もこゝにゐるから、其食欲を充すには勢ひ面倒な調理をなさねばならなかつたのだ。そこには鮮魚は幾んど得られなかつたからだ。京都に早く料理が發達したのは此故である。それに又茶道がこゝから起つた。此の茶に附帶する飲食に一種の料理法が工夫され、それが又非常に發達して後に料理の範となるに至つたのも、畢竟材料が乏しかつたことが大原因であつたに相違ない。鯉節をダシにする



のを惜んで、昆布をダシにする事を工夫したなどは何人も知るの例である。斯様な材料の不十分の處には勢ひ干物を原料に供せざるを得ぬ。随つて面倒な調理を要する。魚類に事を缺くから野菜の調理に力を込める事も自然の勢で、京都の野菜の調理の今も妙を得て居るのも此故である。野菜や干物を巧みに調理する腕があれば、肉類の調理を爲す事は易々たるものである。

支那は料理を以て誇る所であるが、その首府が日本の西京と同じ地形にあつて、鮮魚を得るには頗る困難である所から、西京と同じ理由で發達したのである。或る人は支那料理を干物料理だといった。如何にも其趣がある。彼等の調理の内には茸や燕巢や鱈の鰭などが珍とせられ乾魚乾肉の様なものも用ゐられてゐる。調理が複雑とならざるを得ぬ。又随つて調理法も發達せざるを得ないのである。

調理の經濟なども、畢竟材料を惜むから生ずるものである。支那で大體ものを棄てず、野菜でも肉でも日本で棄てる様な部分を食料に供し、それが却つて一種美味と賞玩さるゝのも材料經濟から來たのである。日本では魚類が到る處多い爲めに甚だ貪略に扱ふ氣味がある。唯茶人は普通うつちやる所を助けて一種の調理を教へたけれども、大體に於て支那の様に經濟にやつ

てをらぬ。爲めに、調理次第ではうまく食へるものを、ムザ／＼棄てゝゐるのは惜むべきである。

凡そ料理に難しとするものは精進料理であらう。これが京都で非常に發達したのは、地形の山間であるからでもあらうが、一つは京都は各宗本山の在る所で、これが爲めにも發達せざるを得無かつた。そして茶も亦此寺から生れた爲め、一層發達を促したと思はるゝ。恐らく精進料理は世界無比とも云へるであらう。「豆腐百珍」「芋百珍」の書は可なり古くから刊行されてゐるが、豆腐や芋を百通り料理し得る工夫のあるといふも、畢竟精進料理の發達に伴うた結果に外ならぬ。魚類に就ても「鯛百珍」と云ふ書物も出てゐる。これも食道樂の工夫として敢て異とするに足らぬ。此等に就て考へても、我國の料理は決して原始的單純のものでないことが頷かるゝであらう。八百善の「料理通」が如何に複雑であるか。料理の一科たる菓子も如何に精巧多種であるか。尙ほ各地の豪族素封の家に入つて見れば、さながら大名が各所に割據をなしておのづから一天地を形作り、何に就ても多少の特徴を持ったと同じ様に、素封家の臺所には其家獨特の料理法が必らず幾通りかある。それが兎もすると堂々たる料理人を驚かしめるも

のもある。

尙ほ地方的にそれ〴〵特徴もあり、上方料理カミガタに對抗しては江戸料理があつて、江戸前エドマエといふを誇りとした、いくばくか支那西洋を加味した長崎料理の一派もあつて、兩間に介在したなどは大なる流れである。由來日本の國民性はアツサリとした淡泊味を愛し、シッコイ毒々しいものを好まない。随つて料理の風も一特徴がある。何から何まで肉すくめの世界の料理と直ちに比較して優劣を比較するは困難であるけれども、肉の料理は技術上決して困難でない。野菜料理に熟した手を之れに移せば、其の調理は易々たるものであるから、吾邦の調理は世界の何れの國よりも一段高いと云ひ得るのだ。

私は何故に日本料理が一番進んでゐるかを一步進んで説いて見たい。料理の進歩したものと否とを判する尺度は、極めて簡單である。乃ち五味が離れ離れであるか、それが混融して一となつてゐるかにある。言ひ換へれば、五味がそれ〴〵獨立して鮮かに分ち得る調理は、未だ原始的の範圍を脱したとは云へぬ。五味が混融して綜合的の複雑味をなしてこそ、調理の極致と云ひ得るのである。外國人殊に支那人などは、一概に日本料理を原始的であると云ふけれども、

それは前にも云うた刺身の如き生肉を食ふのを見て云ふのであつて、實は彼等は日本のよく工夫された調理を實驗してゐない。茶人などの意匠に成る料理となると、食つて見て五味何れとも判じ兼ねるものがいくらかもある。甘いにつかず、辛いにつかず、酸味もあり、苦味もどことなくある様なものが少なくない。五味も、各々の特色を没却して互ひに融合すると、一種言ふ可からざる佳味を成すもので、料理の尤も發達した意義は、こゝに存する。此點になると、西洋のも支那のも、味が甚だ露骨で、五味はそれ〴〵餘りに鮮かである。彼等の調理の原始的範圍に居るといふ所以はこゝに在るのだ。或は日本の料理は目に訴へることを主眼とすると難ずる説もある。如何にも小笠原流の料理その他流派により種々の形や色彩に重きを措くものもあるけれども、それは一局部の事で、それを以て全般を評するは偏見である。茶人に限らず味を本位とする我が調理に於ては決して形貌や色彩に重きを置いてゐない。小笠原風などは我邦でも識者の決して喜ばない所である。兎角、外國の人は、日本の平凡の調理を味うて直ちに全般を評したがるのは困る。支那の康南海などは多少日本の事情にも通じてゐるが、矢張り日本の料理には通じてゐない。彼れは西洋料理の種類を數へて三百種ありとし、日本料理を五百種、

自國のを七百種と數へ、世界に尤も變化のある料理は支那だといつてゐるが、此説も餘り當にならぬ。日本料理を五百種と數へたのは何に據つたのであるか。前にも一二擧げたが、所謂百珍と名のつく料理法は、刊本となつてゐるものだけでも、自分の知る所では五種もある。それは「豆腐百珍」、「芋百珍」、「甘藷百珍」、「鯛百珍」、「海鰻百珍」などで、これだけでも料理法は既に五百種となる。日本料理の種類は決して外人の考へるやうな單純なものでない。且つ變化が多いからと云うて發達した料理とも斷じ兼ねる。兎角、外國の料理は趣致を缺いてゐるが、風流も料理に缺き難い大切な要件である。支那の鰻魚は桃花の時節に漁するもので、繪に書いてこそ風流もあるが、食つて見れば例の如く極點まで煮たもので、桃花の趣など何處を搜してもない。元來料理は舌に訴へるだけのものでなく、眼にも鼻にも喉にも佳なるものでなければ發達したものとは云へぬ。日本の瀧川豆腐といふもの、如きは、一種の豆腐を絲のごとく截つて、先づ綺麗に見せ、之れを口に入れて何を感じるかと云へば、舌に觸るゝものは付け味のみだが、それが喉を通る時につる／＼して心地がよいので、此の豆腐を喜ぶ。これは眼にも喉にも可なる一例に過ぎないが、食物の趣味は斯様の處にあるのだ。支那では肉類を激しく煮る特色

がある。日本でもそれと同じ調理法がいくらかもある。唯支那のごとく萬遍一律でなく、煮るにしても緩急様々ある所に變化がある。八百善の盛んな頃には、一皿の野菜のあへ物でも、解剖して見ると六種八種の材料が綜合してあつたものだ。又所謂ダシといふものでも、普通は昆布や鰹節を用ゐるれども、或は脂の無い魚類をダシにすることもあり、唐辛の十分發育しないのをダシに遣ふこともあり、ダシだけでも何十種もある譯だから、十分それ等を心得た上でなければ、日本料理を評するの能力は無い。

私は筆の序に日本料理の法則ともいふべきものを略述しよう。延享年間に谷水といふ人の撰んだ「歌仙料理」といふ小冊子がある。料理を三十六歌仙に見立てたのである。それは格別よい趣向でもないが、此書の劈頭の總説が簡單ながら要を得てゐる。其の十則の(一)には、色の取り合せを青黄赤白黒の五つとすべしとあつて、(二)鹽梅も亦五味にすべしとある。(三)料理の盛り方に就ては山水を形どるべしとあつて、例を擧げて膾<sup>ナマス</sup>を山に見立てるとある。(四)遠國より來た珍物を出すはよいが、そのみを馳走ぶりに思つて外の出しものを僞略にしてはならぬ。(五)自分の好まない物でも人は好みもするから、己れに偏して取捨するはよろしくない。

(六)時新トウキを料理第一の馳走とするはわるくないが、しかし初物は吟味を要する。別して茸類には毒があるから意を用るねばならぬ。(七)さる料理通の説に、海のものには初物がよく、山中のものは初物よろしからず。海鮮のハシリは脂薄アブラく、美味にして軽く、風味は格別である。(八)さる茶人の説に、茶席の料理は何ほど風雅な面白い取合せでも、濃味のもの一品なくては茶は呑めぬと云うた。餘りに侘びたことのみ偏するのはよろしくない。(九)精進料理は兎角揚げ物多きに過ぎ勝である。餘り厚味に過ぎてはよろしくない。(十)料理にのみ意を用るても、飯を閑却しては功を一簣に缺く。盛り方と器具の選び方も肝要であると。

以上は甚だ要を得てをる。料理の材料は其體裁や形や色彩にも大關係がある。五色さまざまのものがうまく盛られて、それが器物とも調和してゐるので快よく味はれるのである。單調のわるいことは云ふまでもあるまい。形の見立ても、餘りに巧緻に失しては却つてよくない。刺身を花の形に盛つたり、魚類を或るものに形どつて切つたりするのは俗である。山水に見立てる位アツサリとした意匠がよい。勿論山水にのみ偏すべきでもない。初物は珍らしいといふので多く人は喜ぶけれども、案外淡泊に過ぎ、旨くないものだ。所謂ハシリは佳品を選ばねば

ならぬ。有毒のもの、注意を要するは言ふを待たぬ。己れの好む所に偏するなと云ふは最も大切な注意である。兎角自分の厭ふものは出したがらぬものである。それが爲めに取合せに不自然なことがおこる。通な料理が如何によいといつても、餘り凝り過ぎても困る。飯の菜などには何としても濃味のものが無くてはならぬ。平凡のもの、方が兎もすると却つて勝を制するものである。いくら自慢のものがあつても、その一品で客の満足するものでない。客の内には案外其自慢の品を餘り好まなかつたりする事もないから、他の品を取合せて、相當に念を入れねばならぬ。精進料理に魚鳥の肉を除外する結果、揚げ物が料理の中樞となるが、兎もするとそれが過ぎ勝である。すべて何事に由らず重複を厭ふ。料理に於ても揚げ物の重複は避けねばならぬ。普通の料理でも材料の重複は禁物である。器物にしても重複は喜ばしくない。

## 一五 山 葵

日本のやうに鮮魚に富み、それが刺身などに作られ、或は鮮スシに生身を用るる處に於て、山葵

は無くてはならぬ植物である。此植物は魚毒を解くとも云はれてゐるが、それは何うあらうとも、魚肉に味を添へる絶好のものである。一種の香氣があつて辛味は其本領であるけれども、おのづから甘味もあつて、それを調節し、よく食氣を鼓舞し、辛味の内では尤も高雅のものである。野菜の中では稍々贅澤のものに屬し、田舎の臺所などでは遣ひ惜んだ時代もあつた。今は生活の向上と共に生産も盛んになつて、年額三百萬圓に上ると聞いてゐる。専門家の説では日本固有のもので、北海道より九州まで自然生の分布があり、「和名抄」にも名が出てをり、七百年前に書かれた「著聞集」に、堀河院の御即位の時、丹波から献上した記事もあるから、古くから食用になつてゐるに相違ない。

山葵は刺身や鮓に添へるものとして用ゐらるゝ香辛料であるのみか、之れを嗜む人は根を磨りおろして、そのみを下物として酒を飲む者もある。私の幼少の頃、郷里の某寺に學僧がゐて、毎夜深更まで讀書に耽つた。此僧頗る酒を嗜み、讀書の折杯を傾けるのが常習であつたが、その下物は必らず山葵であつた。渠は植木鉢に清淨の砂を盛つて、それに山葵の根を埋め、常に座邊に置き、陶製の「わさびおろし」を文房具と共に机案の上に載せ、聊か磨りおろしては根を砂

にさしこみ、斯くして一本の山葵で月餘も酒を飲んだと聞き、酒を嗜む自分には耳寄りの話と思つた。當時田舎では山葵は可なり珍物とされたもので、葉わさびの調理などは餘り行はれなかつたが、江戸から來た料理人が鰻の蒲焼に葉わさびの煮びたしを添へたのを、よい工夫と思つたのも少年時であつた。しかし此植物の叢生した所を見たのは、餘程後年である。熱海に山葵谷といふ所があつた。今は衛戍病院が設けられ、其谷もいつしか亡びたが、毎度の散策に此谷のあたりを徜徉して、山葵に親んだ。此谿は格別廣くもなかつたが、兩側に高樹が蒼鬱として日光を遮り、間近から全涌する清水が溪に流れこむ。溪には小礫が床をなしてゐて、傾斜があり、間斷なく清水が流れて些しも停滞しない。斯様な所が山葵の培養にはお誂への處で、ここに澤山に繁茂したのを見た。山葵は元來其の名の如く、葉が葵に似て、多少の風致もあるものだが、その培養地が上叙のごとく、樹下に清流があり、毫も汚穢を留めない淨界である處に興味もあつて、そこに多くの川蟹の遊んでゐるのが亦一種の味を添へる。元來蟹は風流人が繪に書いて喜ぶものである。それが風流人の好む辛味を喜んで喰ふといふも一奇で、風流人の愛する蟲は流石に愛する人と同好であると打興じたこともあつたが、専門家に聞くと、久しく信

じてゐる蟹の害は全く虚誕で、山葵の根を害するものは別な蟲である事が分り、今は蟹の冤が雪がれた。蟹は山葵と同じく汚穢を留めない清流を好んで、同棲するに外ならないのである。吾等の久しい考が裏切られたことが今一つある。山葵は絶対に肥料を要しないものと思つてゐた。吾等が此の植物を愛する所以の一は、肥料のやうな汚穢に染まぬといふにあつたが、専門家の説では、矢張り施肥を要するといふので失望した。併し谿水には自然窒素や磷酸や加里などが含まれて、それが肥料となるのだから、強ち汚穢として忌むべきでもない。

山葵を培養する所は、伊豆のやうな谿流ばかりでなく、畑地にも培養されてゐる。奈良や信州の日本アルプスの麓などに可なり大規模の畑がある。それが農家の土地利用法として便利である所以は、普通農産に役立ちかねる處が此畑に適するからである。乃ち林中などで日光を受けない處、自然に冷水の涌出する處、卑濕の窪地などは普通の農産に忌む所であるが、それが丁度山葵の培養地として適するので、斯やうな畑地に施肥を要するは勿論である。併し畑地に産するものは谿水のそれよりも劣るが、産額は畑地の方が多し。

山葵をすりおろすには多少の注意を要する。第一おろし器の目が細かであればならぬ。鮫

の皮を張つた器などが最もよろしい。おろす時も、靜かにこまやかにせねばならぬ。大體、根莖の上半部を佳とする。香氣があつて甘味のあるを可とし、苦味のあるのを忌む。靜かにおろせば粘氣を生ずる。それに少量の砂糖や醬油を和するもよろしい。香氣と辛味は時間を経れば亡失するから、食時に臨んですりおろすべきである。

## 一六 愛玉子

臺灣固有の植物で愛玉子と名づけられてゐるものがある。其實の形貌の醜に似ず、味は意外に上品なものである。近頃は夏時都下でも氷屋などに賣つてゐるから、其の味を知つてゐるものもいくらかあるであらう。これは蕁麻科に屬する常緑の蔓性植物で、氣根により樹幹や岩石に纏繞し、重に蕃地の海拔二千尺以上の處に産する。莖の大なるものは直徑二三寸に達し、葉は互生長卵形で、先端は稍尖り、表は綠色無毛で光澤があり、裏面は灰白色で茶色の軟毛密生し、葉の脈は著しく突出してゐる。果實は隱花果に屬し、形は扁平で長倒卵形をなし、長さ

二寸五分、徑一寸五分、先端は太く基部は細く、頂點に小凸頭がある。中に無數の濃茶色の果を藏し、外殼に軟毛叢生する。此の軟毛を取つて水に浸し、布巾に包み、靜かに揉めば、粘質の液流れ出づる。それを水を盛りたる鉢に移せば、水と相和して一種のゼリーを生ずる。さながら寒天のごときもので、色は稍々茶が、つてゐるが、純白なのを貴ぶ。砂糖を和して食へば味頗る佳で、臭氣などは毫もなく、無氣味の軟毛より、よくも斯る上品の粘液を生ずるものだと感じた。これは和名「かんでんいたび」と云ひ、蕃地から採り來り移植を試みても成績がよくないと聞いた。

## 一七 鍵 と 錠

鍵は日本でも大切なものであるが、藏鍵や錢箱の鍵や金庫の鍵や箆笥の鍵などは、餘程用心深いものでなければ、外出の際まで腰に帯びるやうなことはない。然るに西洋では男女共に必ず鍵を携帯し、一刻も體から離さない。家に入るにも、鍵が無ければ入ることが出来ぬ。室

に入るにも、これが無ければ開くことも閉ぢることも出来ぬ。日本でも裏店住居をしてゐるものなどは、往々家を空にして出るから鍵を携帯するが、中以上の家には此例が無い。第一、門外に鍵を使用する仕掛けは日本家屋に幾んど無い。家に入つても、室は、西洋造りの外、鍵を要する所は無い。洋風の室で錠のかゝるやうに出来てゐても、概ね錠を閉却して居る。

然るに西洋人は必ず錠をかけて置かねば氣が濟まぬ。それも其の筈、一字の家に幾十家族も室を並べ層を殊にして住居する所に於ては、扉一枚が鐵壁甞ならざるものがある。家族と雖も、鍵を持たねば家に入る譯にゆかぬ。

鍵の西洋人に大切である意味は、日本人の大切とするよりも一層剽切なものである。西洋婦人にオペラ・バックを携へる習慣のあるのは鍵あるが爲めである。男子のカクシを揮つたなら必ず亦鍵に觸るゝに定つてゐる。彼等に時計を缺くことがあつても、鍵は外出中決して其身を離れて居らぬ。鍵に對する觀念は我が邦人と大いに異なるものがあるだらう。

西洋人は秘密を解くことを比喩的に鍵といふ。如何にも西洋の如き家屋組織に於て一寸にも足らぬ鍵一本で秘密を保つ處には此比喩あるも偶然で無い。併し茲に奇とすべきは、此秘密を

保持すべき鍵の穴は、往々秘密を洩らすの門となる事だ。其穴は木の節穴よりも小さいものであるに、動もすれば大秘密が此穴から洩れて、非常な大事件を生ずることもある。鍵の穴は如何にも小なるものであるけれども、奥は千疊敷であつて、兎もすると内部の全景が眼に入つて来る。實は不思議でもない。人の眼も視力に關係ある所は小さなもので、小豆にも比すべき瞳に對して、鍵穴は丁度それとひとしい大きさで、内部を窺ふには十分である。

言ふ迄もなく、斯様な穴を通じて秘密を覗はんとする時は、視力が集中する結果、普通なら見のがすものをも、よく見得るものである。西洋で室内を秘密にする事は、日本などに比して嚴なるだけそれだけ、其秘密を知らんとする者が善にまれ惡にまれ生じて來るのも亦自然の勢ひで、意外の秘密が意外の方面に分ることがある。さうしてそれが多くは秘密を司る鍵の、其穴からといふのも亦甚だ皮肉である。恰も人の口が物を秘する道具であると共に秘密を洩らす禍門であると同じやうなものである。日本には「壁に耳あり」といふ諺があるが、西洋では「鍵の孔に眼あり」といふ諺がなくてはならぬ。西洋人は戸外に立聞きせず、必らず鍵穴を覗く。日本は耳を以てし、西洋人は眼を以て秘密を捉へようとする。東西互に相違のある處が面白い。

妙な動機から、以上のごとく、鍵に就て書いて見たが、鍵の事を云ふと、勢ひ鍵ヂヤクにも及ばねばならぬ。しかし鍵の構造は頗る複雑であるので、専門の知識を要する。幸ひに工學博士佐藤功一氏から一ト通り説明を聞いたから、それを經とし、取交せて大略を書くことにした。

鍵の發達の歴史は、頗る興味のあることだが、今それを語る暇がない。日本の昔しの錠などは極めて單純のものであるが、それにしても種々工夫の凝らされたことが古書に見えてをる。「今昔物語」に、飛驒カクミの匠が河成カハナリを招いて、一室に請じた折、河成が開いてある戸口から出ようとすると、其利那に其戸が閉ぢて、他の戸が開く。更らに其の開いた戸より出ようとすると、又其の戸が其の利那に閉ぢて、前の戸が同時に開くので、河成が困つたことが書かれてあるが、これは飛驒の匠の、不思議な技巧の持主であつたことを言ひ現はさんとした假託の物語であるかも知れないが、足の履み處に依つて自動的に戸が開閉する工夫が無い譯でもないから、一概に假託とのみ見るべきでない。時代は降つて徳川期になつてからであるけれども、茶人の工夫した密棧箱といふものがある。その箱は自分も所持してゐるが、これなどは今日金庫に用ゐらるる、文字合せの錠と、大體趣向を同じうしてゐるとも云へよう。箱の中に二本の棧サシが装置されて



るて、其の棧を動かすために、六角の栓が棧の下に伏してゐる。其の栓は箱の外部に現はれ、箱の中では、栓に一方平らで餘は圓形となつてゐる木片が附着してゐる。栓に書かれてある字が合ふと各栓に附着せる内部の木片が皆平らな一面を現はす。そこで棧が卸りる仕掛である。栓の六面に書いてある記號は、數字でも文字でもよいのだが、人を迷はす爲めにどの字を合はせても意味をなすやうな字を選ぶことになつてゐる。何れにしても其箱の持主の外は文字の合せ方を知らない譯だから、他人は開くことは絶対に出来ない。持主と雖も、記號の合せ方を失念すれば開き得ないことは言ふを待たぬ。一片の金屬を用ゐず、斯様な工夫をしたのは茶人の働であるが、此等の工夫のあつたことを思ひ合はせると、日本に於ても早くから錠に相當の工夫があつたと思はる。設令ひそれが手廣く用ゐられなかつたにしても。

西班牙や阿蘭陀が古く種々のものを日本に齎した中に、日本人が驚異を感じたものがある。いろあつたと云ふが、錠なども其の一つであつたであらう。紅毛錠を題にして現に前田曙山氏は今小説を書いてゐる。それはどんな構造であつたか自分は知らないが、シーボルトが江戸へ來た時に、何人も解くことの出来ない一個の袋を齎して來た。それを平賀源内のみは容易に

解いて、満座の人をアツと云はせたと云ふ話が傳つてゐる。之れを解き得る人は亦之れを工夫し得る人とも云ひ得よう。平賀源内ほどの技巧のあるものに錠を作らせたなら、どんなものが出來たであらうか。或は西洋を駕するものを早く工夫したかも知れぬと思ふ。

錠に大切な條件は、第一、堅固であらねばならぬ。第二、秘密が籠つてゐるものであらねばならぬ。第三、合鍵では開かれぬものでなければならぬ。第四、人をバズルする仕掛が無ければならぬ。此等の條件に嵌つた錠が最上のものとされてゐる。いくら精妙に工夫された錠でも、合鍵で開く錠では安心は出來兼ねる。極端を云ふと、錠も鍵も絶対に惟一のもので無ければならぬ。エール・ロックなどいふものは、今では日本にも採用されてゐるが、此の特徴は惟一無二である處にあつて、調法がらる、所以もそこにあるのだ。

エール・ロックもいろいろあるであらうが、普通洋風の旅館に用ゐられてゐるのは、シリンドラー・ロックである。内部の構造を圖なしで説くことは困難であるが、大略を云ふと、筒の中に金屬のプレートが五枚列んでゐる。此の五枚の組合せに工夫がある。さながら香の符號が五枚で源氏五十四帖に擬ひ、五十二の香の巢を爲すごとく、これも數理的に何百種異なつた組合

せをなすことが出来て、それに應ずる鍵が異なるから、どの錠も皆同一でない。それに應ずる鍵も惟一無二である。しかしこゝにマスター・キーと云ふものがあつて、一つ鍵でどの錠も明く。これはエール・ロックの大特徴を一擧打壞るやうでもあるが、此のマスター・キーでも明け得ないやうになし得る工夫がある。それは後段に説くが、旅館で此のマスター・キーを要する所以は、旅客が睡眠中に死んだり、或は窓から人が忍び込んで殺人行爲でもあつた時には、開く必要があるからである。勿論マスター・キーは最も大切なものであるから、ホテルの支配人のみが所持してゐるのが例となつてゐる。

マスター・キーでも明け難くするには、室内から錠の孔に鍵を挿し込んでおくことである。さう云ふ場合に室内に變事が起ると、戸を破壊するより外に開く方法がないから、西洋の旅館の廊下には斧が引きかけてあるのは之れが爲めである。日本ではオリエンタル・ホテルにのみ斧が二挺交叉して掲げてある。

前に鍵の部に書いたごとく、西洋では出入共に鍵が必要であるから、必らず鍵を身體から離してはならない。これは殆んど習慣となつてゐるけれども、急ぎの場合、往々戸の錠を卸す暇がなかつたり、或は忘れたりするやうな事がある。斯る場合に應ずるに調法の工夫があらねばならぬ。そこで工夫されたのは、ナイト・ラッチといふ一種の錠である。ラッチといふは錠チヤックといふことであるが、これが装置されてあると、戸をどんと閉ぢると自動的に錠がかつて、外部からは明かないやうになる。これが此の錠の特徴である。但し室内からは小握で動かすことが出来るものである。これが調法がられて、普通の錠の外に之れを取りつける家が多い。エール・ロックなどは此のナイト・ラッチのプリンシプルで出来てゐる。

尤も精巧の錠の用ゐられてゐるのは金庫である。上等の金庫になると、人間の智慧のあらゆる限りを絞つた錠がついてゐる。それは複雑を極めたもので、金庫の扉全部が錠である。此等の扉は言ふまでもなく硬質の金屬で厚いものであるが、それは金屬の板を合はせたものでなく、全體キャストしたもので、それを鍵にかけ、くりぬいたものであるので、製作が頗る難儀である。そしてその金屬は、如何なる破壊力にも堪へ得る最も丈夫なニッケル・ステール、或はクロム・ステールを用ゐてゐる。錠の仕組は文字合はせと、タイム・ロックが併用されてゐるが、タイム・ロックの仕掛は某時間で無ければ持主と雖も明かぬ事になつてゐる。尙ほ其時間が來

ても文字を合はせなければ明かない。斯様な仕掛であるから、装置されてゐる時計に狂ひが起ると、錠が明かないから、萬一のために時計が二つ若くは三つ装置されてゐる。此の扉の装置のある金庫は世界に最も廣く用ゐられてゐて、米國のモスラー會社の製作に係り、其價は二萬五千圓位である。

以上のごとき堅固な金庫の扉でも、酸水素瓦斯に出遇へば溶解する缺點がある。泥棒はクロツクを目がけて、吹管で此の瓦斯を利用して破壊することがあるので、酸水素瓦斯に堪へるステールの工夫が必要となり、終に發見されたものはドン・ステールであつて、今の處、之れを溶解する瓦斯其他破壊の能力のあるものは絶対に無いと云はれてゐる。

亞米利加邊の活動寫真には、盜賊が金庫に觸れると忽ち高く聲を發する仕掛があつたり、或は手が觸れる刹那に突如金屬製の鉤のやうなものが飛び出して盜賊の手を扼する仕掛などを現はしてゐるが、實地に斯様なものが行はれてゐるかどうか知らないが、今流行せぬ時計に、時間毎に或る部分の戸が自然に開いて、鶏が顔を出して聲を發する仕掛のあつたことを考へると、聲を發せしめる仕掛などは難いことでもあるまい。又電氣を應用したら、鉤を以て人の手を扼

するやうな仕掛も困難であるまい。しかし此等の設備は抑々末で、肝腎であるのは、如何にしても金庫を破壊し得ない點にある。勿論、盜術も錠の進歩と共に益々進み、競走の態であるから、此先き錠はどれほど進歩するか、幾んど豫想し難いものがある。

錠の應用はなかくに廣く、人體にまで及んでゐることを漏らしてはならぬ。罪人の手足を扼する刑具に錠のあることは言ふまでもないが、他に貞操錠といふものも古く行はれた。これは細説するまでもなく、嫉妬深い良人が妻の不貞を防制する爲め局部に交接を不能ならしめる器を装置するのであつて、其の器の工夫はさまざまあるやうだが、矢張り一種の錠で、開閉の鍵は唯一人に握られてゐる。此の錠は中世期にクルセード出征の時に行はれたと云はれ、今も其の器が存してゐる。支那の小説にも往々貞操錠の事が見えるし、日本でも、「沙石集」か何かに書いてあつたやうに思ふ。併し實物の存してゐるのは佛蘭西のクルユニー歴史博物館に藏されてある物で、一は鐵で作られ、一は象牙で作られてゐる。鐵のは勿論薄いものだが、それはベルトまでが鐵で、局部と共に肛門をも掩ふ様になつてゐて、双方に孔があるが、局部に當る孔の周邊にはギザ／＼の齒がある。製作は精巧で、器の表には唐草様の金象眼がしてある。象

牙の方は肛門に及んでゐない。矢張り孔の周圍にはギザ／＼がある。これは漫遊家が必らず見て来るものであるが、これが果して事實用られたものであるだらうか。今それを詮索するの違がない。或は今日でもどこに行はれてゐるかも知れないが、此の錠が果して效力があるか何うかは疑問であつて、往々それが他人に依つて開かる、ことのあるのは、金庫の錠が如何に巧妙堅固に作られてあつても、盗人の威嚇に遇つては主人自からそれを開かねばならぬと一般で、極度の事を考へると、覺束ないことに歸着する。

## 一八 得月樓の追憶

舊臘關西に旅行をした折、久方ぶりに名古屋に立寄つた。その目的は坪内逍遙氏の記念事業として演劇博物館の資金を募らんがためであつた。名古屋は坪内氏の故郷であることはいふまでもない。この行俗務忙々、風流の遊びを企つる餘地はなかつたのであるが、偶然半日の閑を得て、犬山の勝を尋ねた。其の事は「烟霞游記」の内に收めたが、丁度その夕べ、同人と共に名

古屋の割烹老舗得月樓に一醉することが出来たのは、私としては仕合せであつた。

此得月樓は私と坪内逍遙氏には舊縁のあるところだ。今度私が東京を發する前たま／＼名古屋の友人に會し、この樓の事を思ひ起し、今猶ほありやと尋ねたら、立派に存在して市内屈指の酒樓であり、家も昔のま、だと聞いた。そこで機會もあらば訪うて見たいと期したが、何分事務を帯びての忙しい旅だから、果して機會があるか否かを氣づかつたが、幸にその機會を得たのみならず、はからずも坪内氏に縁故の深い太田の庄まで望むことの出来たのは奇縁といふべきである。太田の庄の事は「烟霞游記」に記したから再叙しないが、得月樓は、私が氏と共に帝大在學時代、ある年の暑中休暇を、亡くなつた同窓岡山兼吉氏と四十日餘りの旅行をした折、名古屋を過ぎたのを機會に歸省中の氏の家を訪うた。その頃氏の家は町を離れた郊外にあつた。今のステーションのある笹島が即ち氏の家のあつたあたりである。氏は私共の訪問を喜んで、連立つて案内された酒樓が即ち得月樓で、こゝにうなぎの蒲焼を下物に、杯を擧げて款晤したのが、吾等の旅行中最も愉快に感じたことであつたが、指を屈すれば既に四十餘年の舊に屬してゐる。それを思ふと、吾人もまた老いたりと嘆せざるを得ない。

犬山の東道は小山松壽氏であつたが、得月樓への案内者もまた同じ人であつた。犬山に赴いた一行十數名は、清游の後白帝城下の彩雲閣に一泊する都合であつたから、私は小山氏と共に別れて薄暮名古屋に歸り、電車の起點である柳橋から一町足らずのところを歩いて得月樓を訪うた。あらかじめ電話を通じて置いたので、吾等のために席が設けてあつたが、其座敷は近年築いた新しいもので、私が昔し來た家とは違つてゐた。これが此家の別館であつて、路を隔てて母屋がある。その母屋こそ、昔しわれ等三友の會したところである。生憎母屋ほどの室もふさがつてゐたので、二時間ばかり別館に居らねばならなかつた。私は先づ同宿の長谷川天溪、河竹繁俊、片山木瓜の三人をこゝへ招いた。長谷川氏は京都へ出張して來り會することが出来なかつたが、他は直ぐに見えた。こゝに杯盤が陳ねられ、二三の老妓が來て席を周旋した。酒三行の後、主婦が母屋に案内するに任せて出かけると、成るほど古色蒼然たる家であるが、何となく懐しみを感じた。先づ一浴を試みると浴場に入つて見ると、地下室にでも入る如く、段階を下つて低いところに浴室がある。それがそつくり昔しのまゝで、風呂桶の外には新しいものではなく、さながら片田舎の農家の浴室で、もあるかの如く、何から何まで古風であるのに驚

きもしたが、飽くまで頑固一點張で改造をしない處に却つて興味を感じた。浴後主婦は吾等を二階に導いた。こゝは五十疊も敷く廣い席で、私が忘れもしない頼山陽の筆に成る得月樓の額が掲げてあつた。私はその額面を諦視する前に、フト樓名について一疑を發した。こんな繁華な市街の眞ん中に得月樓の名のあるは何故であらうか。私はこの疑ひを抱きながら主婦に、この家の傍に堀があつたはずだが今もあるかと聞いたら、主婦は一方の障子を押して御覽なさいといふから、下を覗くと眼下に流があつて、多くの船舶が簇集してゐた。自分の記憶に存する堀よりも遙に大きいものであつた。この夕べは恰も月夜で、月の光は水に映じてキラ／＼してえもいはれぬ風趣があるので、私は覺えず手を拍つて得月の二字虚しからず、と始めて樓名の疑ひを解いた。よつて靜かに山陽揮毫の扁額の下に立つて識語を讀んで見ると、

辛卯仲秋。書水西莊。爲樓主人。林谷囑也。

子成

とある。

往年は腕白の青書生で、この識語を全く閑却したが、今讀んで始めて此扁額の由來をほゞ知ることを得た。ある人の話に、山陽は此樓の得意とする野菜の漬物を賞味するためこゝに遊ん

で、その際に書いたのだと聞き、さうかと思つてゐたが、この識語を讀んで見ると、その説は全く間違つてゐた。

先づ辛卯の干支は天保二年で、山陽は五十二歳の時である。水西莊に書すとあれば、京都の三本木の自宅で書いたもので、この家で揮毫したものではない。なほ林谷の囑とあれば、樓主人から直接依頼したのではなく、山陽と親善であつた讃州出身の有名な篆刻家細川林谷の依頼で書したことも明かである。たゞ得月の二字はこの樓の舊名であるか、將た山陽が撰んだのであるかにはかに判じ兼ねたが、識語の内に仲秋とあるを以て察するに、林谷が季節柄自然河水に月の映する樓の地形などを語り出したのに思ひつき、得月の二字を撰んだのではあるまいか。こんな風に例の山陽研究癖が起こつてしばらく扁額の下に沈思したが、實はこの廣い座敷は昔し坐した所ではなかつた。さて樓を下つて二室のつらなるところに案内された時に、ムラ／＼と舊時の記憶が浮んで来て「コ、ダ／＼」と連呼したのと同じくふき出して笑つたが、私は熱心に天井を見、柱楹を見、掛物を見、襖を見て當時を追懐し、逍遙氏の若かりし頃を憶ふと共に亡友岡山氏のことなど追懐して、人知れず無限の感に打たれた。室は當時そのまゝで、天井は

意外に低く、柱などは黒光りに光つてゐて、全くの骨董である。

感興に満ちた私は別館の席に復して、更に飲みつゞけ、酔酣にして座中の人々に私は左の如く告げた。

けふは坪内氏に縁因淺からざる日である。前刻は圖らず氏の舊里太田の庄を望み、今は氏に會つて案内された家にゐる。ましてこの行、氏の記念事業の爲め氏の故郷に來たのであるが、諸君の連日の努力は謝するに餘りがある。私は氏になり代つた心持で、聊か諸君の勞をねぎらはんとするのだ。

と挨拶をして益々興が湧き、逍遙氏に就ていろいろの事を思ひ起した中に、去る明治四十五年六月、文藝協會の一座が「故郷」と題する脚本を演ずるため、逍遙氏と共に名古屋に來たことを想ひ出して、それが端なく酒席の談柄となつた。あの時は逍遙氏が藝術家として始めて郷里に歸り、父老に見えろといふ大切な場合であつた。阪本鈺之助氏が市長の時であつたが、盛んな宴會が開かれた。席上に逍遙氏は謝辭を陳べられたが、謙遜なる氏は自家の經歷は失敗亦失敗だなどと云はれたので、私は誤解があつてはならぬ、と起ち上つて、君の藝術上の價値や

早稻田大學に偉勳のあることなどを陳べたことを想ひ出すが、實はあの時私は心竊かに妙な事を感じたといふのは、逍遙氏が三十年振りに郷里に歸つて、郷黨に見せる演劇が偶然「故郷」といふ脚本であるのも一奇である。その「故郷」の主人公マゲダは、性に於てこそ男女の別があれ、久しく郷里を離れて藝術家となつた事蹟が似てゐる。逍遙氏の性格もどことなくマゲダに似た處もある。少なくとも藝術氣質に於て。そして此の劇が幸ひに名古屋の人氣に投ずれば仕合せであるが、萬一名古屋の風尚が猶ほ舊劇を喜び、此故郷劇が失敗にでも終るやうの事があつたら、それこそ逍遙氏はマゲダと同じく故郷に歸省したのを後悔するかも知れぬ。此點だけはマゲダの場合と反對であれかし、と氣を揉んだ。然るに幸ひに好評であつたのは何寄りであつたなど、話して何れも悦に入り、席上げふ半日のことを叙して遙かに東京に在る逍遙氏に寄せた。

### 一九 藝妓の垢すり

昨年越後へ歸省した折、彌彦に遊んで新潟へ歸る途中、岩室イハムロを過ぎ、若かりし折、熟知の綿屋といふ家に入つて、一行の友人と共に對酌した。此家は田舎不相應の瀟洒な結構で、いつも彌彦に賽する時に之れに立寄るのが例となつてゐる。三十餘年無沙汰をしたが、二階の座敷に通ると、熟知の額が舊のごとく掲げてあつた。即ち長三洲の揮毫に係る「綿々亭」の額がそれである。酒次會で遊んだ頃のいろ／＼の事を思ひ浮べ、座にゐた妓を顧み、この藝者は如何にも深切である。自分がいつぞやこゝへ來た時、風呂に入ると、襦を掛けて裳を高く捲り上げ、跣足で甲斐々々しく、三助同様の周旋をして、脊中の垢を摺つてくれたのは、今も忘れぬといふと、此家の主人は傍らより、それが此邊の慣習で、皆さまがお喜びですと云うた。一行中に佐渡出身の「新潟新聞」記者山田穀城氏がゐて、此の習慣はひとりこゝに限らず、佐渡の小木コベにも同じことがあると語つた。さう聞くと、成る程小木は一帶の海水を隔てた計りの隣りも同様であるから、或は小木の風俗がこゝに傳はつたのかも知れぬと思つた。其後委しく聞き糺す機會もなく過ぎたが、近日江見水蔭氏が紅葉山人の追憶談を載せた書物を讀むと、中に山人が小木に遊んだ折のことがあり、水蔭氏も會て山人のあとを辿つて遊んだことも書かれてある中

に、藝者の垢すりのことがある。山人が佐渡から新潟へ歸る途中、船中で得た句に、

汗虱搔かする人を思ひけり

といふがある。江見氏は最初句意を解しかねたが、小木に遊んで、始めて其謎を解き得たというて其次第を左の如く語つてゐる。氏の懇意である某海員が氏に語つた話に、

……誰だつて小木に行くと、有頂天になつて了ひますよ。小木の女は旅人を慰めるのに特別の技能を持つてゐますからね。

ニコ／＼して海員は語り出した。

早い話が、錢湯へ行きませう。屹と女は附いて来て、背中を流して呉れますんで。イエ自分が入浴はしません。襷掛け尻端折りになつて念入りに背中を流して呉れるんですが、それが決して、ヘチマの皮とか、手拭だらうが、垢摺りだらうが、そんな物は一つも遣ひません。素手なんです。指の先で、爪を立てない様に、巧く背中の垢を搔き落して呉れるんで、それは何とも云へぬ快い心持です。まア風呂に入るだけでも其位の技巧を弄するので、すから、萬事は御察しを願ひます。

……

これだな、尾崎も當然小木の女に、此垢搔きを食はされたのだな。

彼が佐渡を去る船中の句に「汗虱搔かする人を思ひけり」と有つたのも、これで初めて讀めるので有つた。彼は實に風呂好で、横寺町の錢湯へ行く時にも、書生連に能く背中を流さしたものだ、鏡花や春葉の不器用な流しぶりより、どの位小木のを喜んだか、知れなからう。

小木と岩室の習慣は斯くも似てゐる。二地何れが元か知らんが、何れにしても昔しの湯女の名残で、其面かけを偲ばせる處に興味がある。

## 二〇 赤十字

日本が萬國赤十字社へ加盟したのは確か明治十年頃であつたやうに思ふ。今では此事業が萬國に冠たるまでに進んだ。明治以來西洋に學んだ事の内、出藍の譽れのあるものは確かに赤十



字の事業である。嘗て此事の衝に當つた亡友有賀長雄博士から聞いたことがある。西洋諸國は此業に於て先輩であるけれども、日本のごとく眞面目に此事業をやつてゐる處は無い。いざ事ある時に直ちにそれに應じ得るやうになつてゐるのを見ては、諸外國も舌を捲いたとは博士の實歴談である。併し最初此の同盟に加入せんとした時は、外國では可なりに氣遣つたものである。全體赤十字の事業は耶蘇教の博愛主義から發したものであるが、日本のごとき耶蘇教國でもない所に、此事業が解るものか、と外國が思つたのも強ち無理はないが、しかし博愛は必ずしも耶蘇教國の獨占でないというて、日本は當時大いに辯ずる所があつた。其の際の往復文書が今も赤十字社に保存されてゐて、今日それを見ると、興味がある、と見た人から聞いた事がある。日本では敵人を愛し、其の戦死者を弔うた實例は少なからずある。赤十字の如き具體的のものはないにしても、その主義は戰國時代に行はれてゐる。それを徴し得べき金石の類も強ち少なくない。明治四十三年に赤十字の大會を開いた折、當時京都の圖書館長であつた友人湯淺吉郎氏の思ひつきで、此種の金石や文書を陳列して、赤十字の淵源の古いことを示した事がある。其の出陳目錄は散佚して今は無いが、記憶から一二を録すると、文祿の役に斃れた朝

鮮人の供養の碑が高野山にあるし、足利義滿の鎌倉時代の敵味方戦死者の碑が遊行寺にあるし、楠氏が建てた味方と寄手ヨセテの陣死者供養塔が金剛山にあるし、足利尊氏が後醍醐帝を始め元寇の役及びそれ以來の戦歿敵味方の供養のために自署した經が天龍寺に藏してあるなど、皆其の一端を語るもので、日本は早く人道を解してゐる。赤十字事業が先輩國にも優して發達したのも偶然でない。

## 二二 遼東半島還附立會の挿話

日清戦役の擧句、折角武力を以て獲た、遼東半島を三國の干渉により、之を還附すること、なつたのは眞に千歳の遺憾で、切齒に堪へぬ事であつた。還附に就ては受授の式もあるので、海軍から村上敬次郎男などが出張した。村上男が歸つてから、同じ廣島出身の亡友田原榮氏に語つたのを聞くに、二度とあんなお使は御免を蒙むる。實にあの時ほどイヤナ斷腸的感傷に堪へなかつたことは無い。還附の式として、旅順の埠頭に今まで樹て、あつた日章旗を卸して、

其の代りに清國旗を揚げるのであるが、それが一と思ひにズン／＼日章旗を卸すのであれば、何でもないが、日章旗が一方におりると同時に、一方に清國旗が昇るので、全く其の位地を易くる迄には約四十分間を要した。此間日本より出張した者は、この斷腸的光景を見守つてゐなければならぬので、實にたまらなかつた。まして此の光景に一段悽愴の氣を添へたのは、海軍樂隊が哀傷の譜を奏した事で、一層閉口した、と語つたといふを聞き、現場を思ひやりて、吾等は眞に同情を禁じ得無かつた。

## 第五 車 上 縦 談

二十四時間の汽車旅行、夜中寢臺に眠れば退屈もせずに時間は経過する。いつも日中汽車に乗るのを厭ふ自分も、已むを得ない都合で早朝乗車したので、一日を車中に暮らした。幸ひに車中に談敵となる一人がゐて、しきりに私に話しかけるので、退屈凌ぎにボツ／＼それに答へてゐると、遂に追々圖に乗つて、いろ／＼の事に涉つて饒舌を試みた。何といつても二十餘時間は下車が出来ないと極まつてゐるから悠然たる氣分で、話が熟してくると微細の事にも入るのである。自宅などでは談話中訪問の客などに妨げらるゝ事もあるが車中はそれが無いから、どこまでも話が續いて行く。座席に於ても、喫煙室に於ても、食堂に於ても、處はいろ／＼に變つても談話は間斷なく續いた。談敵もなかく、談柄に富んでゐるが、その長所は寧ろ人の話を引出すに妙を得てゐて、やつぎばやにいろ／＼と釣り出すので、或る事柄に就ては出鱈目を云はねばならぬこともあつた。私は一時の座興で、言う

たことは蟹の泡の様にそれが消えて仕舞ふものと思つてゐると、驚いたことには、二週間程を経て、私の談話が悉く此の人に筆記され、百幾十枚といふ原稿となつて私の家に郵送された。それに添へた書状には、旅を同じうした記念に此の稿本を保存したいから、校閲してくれよと云ふ事である。そこで已むなく多少筆を加へて返したが、今度此の隨筆を編するに付きそれを借り受けて、多くを切り捨て多少の増補訂正を加へて爰に收めることにした。原文は問答體になつてゐるが、問は煩はしいから多く省略し、文章も及ぶべく簡潔に書き直した。勿論退屈凌ぎの漫談で、人に示す程のものでない。若し筆記がなければ、こゝに幾何でも收める氣も出なかつたであらうに、と思つたのである。

### 一 侯爵朴泳孝の贈詩

談話は私の宅の改造から始まつた。大震災に破損した家が昨年ヤット改造された。勿論自分相應の家で、取立て、云ふほどのことは何もない。併し人間一代に家を建て、見るのも面白い

ことであると感じた。随分厄介なことではあるが、いろ／＼教訓を受けたこともある。それは一々言はないが、先づ出来上つて見れば、小屋ながら、何もかも新らしいので氣持はわるくない。但だ木材や襖や障子など新らしく白くなつて見ると、煤氣のある額や幅が折合はず、棚や箆笥や屏風などに至るまで古びのあるのが目立つて、皆新調を要することになり、古いものを喜ぶ私の趣味もこゝに變じて、新らしいものを寄せ集めるのに時と金を要し、家宅の改造は不經濟のものであると感じた。實は幾んど調度一式を一新するに至つたが、ひとり古びたもののあるのは自分である。是は新居に頗る折合はないものだが、さてこれをどうすることも出来ぬ。そこで自分は、形骸は兎も角もとして、更生氣分で若返らなければならぬと思つて己れを鞭撻してゐる。居は氣を移すとも云ふから、精神修養に改築が多少の甲斐があるかも知れぬ。こゝに何もかも改める折柄、偶然一幅の掛物を獲た。これは妙な因縁である。私の出版した隨筆の内に、ある新年の探梅散策に、當時日本に亡命中の朴泳孝氏と到る處に出會つたのが縁となつて、終に相携へて東京へ歸り、新橋の或る旗亭に飲んだことを書いた。私が朴氏に會したのは、あとにも先にもこれ切りであるが、私の隨筆を、京都の友人から朴氏に示したので、

氏は懷舊の念に驅られ、私に寄するの詩を録して寄越された。其詩には當時同游の事があり、拙著にも及んでゐる。即ち其の詩は、

小向<sup>コムカ</sup>梅花天下無。會同<sup>コト</sup>高士賞傾<sup>レ</sup>壺。

梅花高士如<sup>ニ</sup>重見。記到<sup>ニ</sup>君游<sup>ニ</sup>説到<sup>レ</sup>吾。

市島大兄法正 玄々居士朴泳孝

と雪白の紙本に書かれてゐて、書もよく出来て居り、丁度梅の氣節も近づいて居り、新居には屈竟のものと喜んで、表装をして私の居室に今も掲げてゐるが、拙劣な隨筆も不思議な媒酌を爲すものである。

## 二 日本のレニン

話頭は轉じて時局に觸れた問題に及んだが、私は近年政治問題に餘り興味を有つてゐないから成るべくそれを避けた。前内閣の斷末に起つた、バニツクにだけは聊か感想を陳べて見た。

私のいふには、十五銀行まで終に救はれず、閉鎖の非運に遇つたのは意外であつた。十五銀行は皇室の御財産を管理して、重い責任のある銀行である。西南の役に軍費を供給した経歴もあつて、維新史に大切な関係のあるものだ。華族の身代を預り、其の死命を司つてゐることは云ふまでもない。それだから、誰れも之れに信任をかけた。皇室にも関係があるから、よもや不都合はあるまい、と財界の雲行が怪しくなつても猶ほ信任を置き、敢て引出しをしなかつた者が多かつたのである。それが終に潰れたのだから驚かざるを得ない。そして誰れがそれを潰したかと云ふと、松方家が潰したとあつては更に驚かざるを得ないか。あの銀行の大株主は、松方の舊藩主である島津公である。松方の先代は日本の財政家と云はれて隠れもない人である。その相續人が巨億の金を事業に流用し、其れが崇つて此の銀行を破産倒行に導いたと云ふに至つては、誰れか驚かざるものがあらう。前年大阪の浪花銀行を華族銀行に併した時、財界の識者は早く華族銀行の爲めに危んだのである。浪花銀行も薩脈を引いた銀行であることは言ふまでもない。今度の倒行にそれも手傳つてゐるであらう。兎に角薩脈が寄つてたかつて潰したとも云へるのである。今の世の中では華族を忌んで、それを潰す主義を公然唱へてゐる

ものがある。併しそれ等が手出しをするまでもなく、日本の有名財政家の子で、左傾の主義者でもない、松方公一家の爲めに潰されて、多くの華族が丸裸にされたのだから、吾々が驚く計りでなく、無産主義者でも驚いたであらう。彼等は自から手を勞せずして幾んど其目的を達したやうなものである。彼等は華族殄滅の殊勳者として松方公一家を拜んでゐるであらう。松方公は日本のレニンである。彼れ一家は全財産を擲つて罪を謝してゐるけれども、そんな事で罪が償はれる筈のものでない。華族の内には、其肉を食つて尙ほ腹癒せの出来ないものがあるであらう。併し露西亞あたりへ亡命でもしたら、レニン以上に歓迎を受けるかも知れぬ。その破壊の猛烈さは、露國の赤手よりも幾倍も上であるから。

### 三 大量趣味

日本は島國であるから、大を以て誇るやうなものが甚だ少ない。日本で世界に誇り得るやうな大なるものと云つたら、奈良の大佛位なものであらう。世界中にあの位な大きなブロンズの

塊はない。佛典には大きな佛像の寸尺が載つてゐるけれども、事實佛教の本場印度にも奈良の大佛ほどのものはないと聞いてゐる。あれを作るには大量の銅を要し、大量の人を要し、大量の金を要したのである。これは千餘年前の昔のことであるが、近來稍々快とすべきは明治神宮の内外苑が可なりの大規模に出來て、明治大帝の大氣宇をいくらか表徴し得るやうな心持がある。支那の天壇を見た時に日本にもコンナ廣い處がほしいと思つたが、それに較べて遜色があるにしても、市中にあれほどのもの、出來たのは大出來である。實は日本の事は何でもかでも小規模でお話しにならない。唯陸海軍丈が割合に大規模であつて、日本が世界の列強に數へられてゐるのも此故であるが、それにしても随分外國に對して赤面したことがいくらかもある。世界の大戦に外國から軍需品の注文があつても其の數量が餘りに多かつたので、日本の製産力は微弱で、大抵それに應じかねた。日清日露の戦役に日本へ來た捕虜などは格別大數でもなかつたが、それに對してすら一寸困つた位で、捕虜に宛てた書信が本國から來るのを、それへ配達するのが面倒で、やつとカード式の名簿を作つたなど、云はれてゐる。小さな島國に溢れて仕末のつき兼ねるのは國民の數であるが、それに應ずるだけの物資が増進しない。皆比較

的小量である。日本人は昔しから大量を知らない、随つて大量に興味が無い。獨逸では戦後不換紙幣の下落に困んで、一寸の買物に十萬圓、兎もすると幾億の紙幣を要し、或る家政婦は十露盤のケタの番狂せに驚き、學校でそんな大數を教はつてゐないと云うたとある。其の詳しい話は小泉英一氏の「伯林夜話」に載つてゐる。氏は獨逸が戦敗の後マークの下落に困んでゐる最中同國に滞在中であつたので、其の實況を書いてゐる。即ち千九百二十三年、吾が大正十二年の事なのだ。氏曰く、

(前略)四月末から再び急激の下落を始め、七月末には一弗七十萬マルクとなり、十一月下旬には遂に一弗四兆二千億萬マルクまで下落した。たゞの六ヶ月の間に一弗につき四兆一千九百九十九億九千九百九十八萬マルクを崩落したのである。

只口にこそ四兆萬と云へば何でもないが、數字で表はすと、四、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇となる。私の下宿の老婦人がよく云つて嘆息した、「毎日常料の買入に行つても金の計算が出来ないで困る、も一度小學校に行つて數字を教はつて來なければ駄目だ」と。

それは老人には無理ならぬことで、私と雖も一兆萬と云ふ數字があると云ふことは知つて

居たにしろ、實の處、萬を幾つ寄せたものか、正確には知らなかつた。また知る必要がなかつた。否、天文學者や數學者以外には一生知る必要もない位に心得て居たのである。その莫大なる四兆萬の數が邦貨二圓の價値の買物に使用せられやうとは意外であつた。世界の人、誰ひとり豫想してゐた者はなかつたらう。

人類の歴史に始めて起つた數の椿事で、眞に世界の驚異である。日本にはそんな紙幣の下落を學びたくないけれども、天文學者でなければグラスプしかねるやうな大量をチト頭に入れたものである。日本の國民性は經濟に迂だと云はれてゐるが、今後大量數學の研究に心掛けねばならぬ。近年國家の豫算が著しく膨脹もした。國稅が益々殖えても來た。明治の初年に較べると驚くべき相違で、大量を感じない譯にゆかぬ。新聞紙なども或る四五のものは一日の發行百萬を數へ、漸く大量を感じるやうにもなつたが、さうかというてまだ大量に興味を有つやうになつたとも思へない。選舉などにした處で、やつと大量の普選が行はるゝに至つた。世界の列強に後れて漸く行ふことになつたのだが、それでゐる操縦に頗る難色が見える。併し到底日本も大量を理解し、それを趣味としなければ、國が立ち行かないのである。私は其意味に於て

普選の如き大量投票を喜ぶものである。普選に先ち都下の有力の新聞が、日本八景を募り、國民の頭数よりもヨリ多くの票数を集め得た一現象を見て喜ぶものである。乃ち投票總数が九千幾百萬票といふから、無論人口よりも多い、そして一票は郵便ハガキ一枚だから、葉書の原價は百三十五萬圓を突破してゐる。尙ほ此外に各名勝地の競争運動費が非常にかゝつてゐることを考へて見ると、眞に破天荒の大量運動と云はざるを得ないが、普選の前提として私はこれに興味を感じざるを得なかつた。尙ほ近時流行であるかの如き大量出版も爰に逸する譯にゆかぬ。一圓本、之れを大量に賣るの大廣告、これが不景氣の世の中の一活躍、手許の貧弱な書店の運動として誰れも危まないものはない。印刷でも廣告でも紙屋でも皆危んで、前金で無ければ應ずるものが無い。廣告の威力は幾十萬の購讀者を贏ち得たとして、豫定の卷数を續刊し得るかどうか。一回二回は豫約金を資本として行くにしても果して續行の資本が續くかどうか。すべて疑問であつて、斃れるものと成功するものとは現に顯はれてもゐるが、しかし其の運命はどうあらうと、其の内容は杜撰極まるものであらうと、それは暫く措いて問はずとして、此の破天荒の試みは痛快であつて、吾が出版界に種々の教訓を與へてゐる。(一)廣告と宣傳が届けば

多數に賣れるといふこと。(二)多數賣るには格別に價の廉を要すること。(三)幾十萬の圖書でも今は月刊不可能でない印刷力のあること。(四)或る讀者の数を繋ぎ得る丈の資力があれば一圓本は續刊し得ること。(五)西洋に行はれてゐるチープ・エディションが日本に行ひ得べきを立證したこと。(六)此の大量出版は著者に大なる印税を與へて著者を成金にした。文學者必ずしも貧を運命と諦らむべきでないこと。(七)大量出版に就て販賣運送其他の事に既往に無い實驗を得せしめたこと。數へ來ればまだもあるであらう。兎に角偶然ながら普選に先つて此の大量出版の試みは、八景の投票と共に興味ある前提とせざるを得ない。普選に伴うて多數の選舉人を開導するにも大量出版は大切である。私は之れを快として其の成功を祈るものである。

#### 四 長田秋濤

談敵が長田忠一と懇意であつたといふ所から、談は此亡友の事に移つた。私は早稻田方面で最後まで交りを續けた少數者の一人である。忘れもしない一事は、秋濤が歿する四五日前、須

磨の僑居から私を大阪の旅舎に訪ねて来た。私は、旅中に餘り例の無いことであるが、感冒に罹つて臥してゐた。そこへ相變らずの磊落な調子でやつて来て、私の病況を問ひながら、携帯してゐた風呂敷から一束の原稿を出していふには、これが南洋の紀行で、ヤット書き上げたから、出版の世話を君に頼むと云ふから、私は一も二もなく諾した。それから暫時談話を交へて例の阿絹のことなどを戯れ半分に言つてゐると、秋濤は眞面目になつて私に告げるには、僕は君に會するのはこれが最後であるかも知れぬ。僕は實は尿毒性に罹つてゐる。それが頭へ上ればそれつ切りであると。聞いて驚いたが、どう見てもそんな重患の人とも思はず、半信半疑で別れると、其後三四日経つて秋濤の訃が傳へられた。永訣の爲めに來た病友を、微恙の自分が幕中で應接したことなどを思ふと妙な氣がしてならぬ。折角依頼を受けた出版も私の手によつて成らず、他の友人の手でなつたが、實は其際私が原稿を預らず、死後他の人々は私が依頼を受けてゐることを知る由もなく出版したので、行違ひはコンナ譯だが、私としては多少遺憾がない譯でもなかつた。長田の號の秋濤と云ふは或る誤りから來たのだと曾て長田から聞いた。彼れの號はもと秋香といふた。ある時依田學海に何か揮毫を頼んで、號を聽かれた時秋香と云

うたのを、聞き違へて秋濤と書かれた。其の誤つた方が寧ろ氣に喰つて、それを終生號としたので、春濤に倣つての秋濤では無かつたのである。なか／＼の快男子であつた事は熟知の君には云ふまでもないが、あの磊落氣質が終に己れを損うたとも言ひ得よう。曾て露探と誤られたなども全く冤罪である。併し彼れの跌宕粗豪は此の誤解を惹いたに相違ない。露探事件は裁判沙汰にまでなつて、長田は法廷へ引出された。偶然始審の掛長は私の門下生格の人であつたら、私は事の實相に就て委曲を悉し、彼れの名譽のため公平な判決をと望み、其人も納得したのであつたが、判決を下すに迫んで、或る一種の情實の爲め所信を曲げねばならぬこと、なつて、食言するのは申譯がない、と態と私方へ言譯に來たことがある。實際の事は私の雜筆に書いてあるけれども、イキヤツ經緯が複雑で今一々思ひ出せないが、決して露探の行蹟はない。裁判所でも何一つ證據として持出すことが出来なかつたのである。つまりある干渉の手が司法權に及んだので、長田は迷惑を被つたのであるけれども、友人以外の人は今も半信半疑であるかも知れない。



## 五 赤 龍 子

長田との交りでいろ／＼面白いこともあるが、こゝに一つ思ひ出したことは、當時運命判断で名のあつた赤龍子に就てゝある。此人は芝日蔭町に住して代々觀相を専門としたものだが、今はどうなつたか知らない。長田が此人に觀相を請うた處、赤龍子は直ちにアナタは福相であるが、惜しいかな尻ぬけであるというた。長田はそれに感服したかどうか、兎に角急所を衝かれたので、信用せざるを得無かつたと見える。長田は取敢へず衆議院の書記官長であつた林田龜太郎氏に勧めてやると、赤龍子は一瞥して、直ちに君は探偵をやつてゐるに相違ないと一本參られ、林田はブン／＼怒つて歸つたと云ふが、成るほどよく當つてゐる。書記官長の職は政情の探偵役のやうなものであるからだ。林田は後に早稻田の吾々友人にも吹聴して、高田半峯博士は其勧めに従ひ、其友人である田村惟昌と云ふ富山縣の議員を伴うて出かけた。高田博士に就て赤龍子の云うたことが如何にも適中した。アナタの骨相は大分よく整うてゐる。まう少し

鼻が大きければ尙更よい。アナタは人に將たるよりも、將たる人を助けて仕事をする方であらう。多分アナタは教育家若くは教育行政家であらう。アナタは金にはありつき得ぬ。金があつても身につかぬ。蓄財は覺束ない。そして不幸にして相續人がない。恐らく養子を迎へて家を續がすであらう、と宛かも高田其人を熟知して語るかの如く、その頃の氏を歴々掌を指すが如くに判じたので氏も驚いた。田村氏に就ては赤龍子一見、嶮難の相があるというた。赤龍子は重ねて、ケンナンは劍難で身を殺すといふのではない。唯困難の位地に立つべきは疑はれないと云うたが、如何にも其通りであることが後に理解された。と云ふのは、議會が解散されて、氏の再選運動に大敵が現はれ、容易ならぬ苦心をしたからである。

## 六 酒 と 下 物

林田翰長が大の酒客であつたことから、談話は終に酒の事に轉じた。どうせ酒を談ずるなら食堂で酒を飲みながら、とまだ十一時にもならないのに出かけて見ると、客は一人も居らな

つたので、仕合せよし、と日本酒をチビく飲みながら亦話はずんだ。私の云ふには、酒舗に立寄り立つて櫛酒を一氣に飲みほし、僅かに一二分間に慾を充すのも、考へて見ればおもしろい酒の飲み方である。これは労働者、貧人、丐兒などの爲す業となつてゐて、酒舗でもあらかじめ廉酒を備へて置くが例であり、櫛の代りに近頃は水呑コップを出しておくやうだが、實は櫛の方がおもしろい。一合櫛にナミく注いで、角に口をつけて飲むのが野卑だなどいうて斥けるものもあるか知れないが、風流味は櫛にある。全體冷酒は一種の味のあるものであるから決して排すべきでない。且つ其の飲み振りが簡單で、別に下物を要するでなく、立ちながら飲んで代錢を拂つて直ちに去る態度は如何にも快活である。西洋のビヤ・ハウスやビヤ・スタンドも是と少しも變りはない。近頃日本に行はれ出したビヤ・スタンドで一杯立ちながら引つけて咄嗟酔を買つて立去るのは、櫛で酒を飲む流儀と毫も違はない。櫛酒が貧人丐兒の獨占だとして卑むのは寧ろ時代錯誤である。自分は常にさう思ひながら實は未だ之れを試みる機会がないが、之れを試みたら定めし一種の興を發するであらうと想像する。私は隨筆に「酒趣百則」を書いたけれども、經驗を缺く爲めに談は此一事に及ばなかつたが、わざとでなく、眞に

囊中空しく、疲れ切つた時などに之れを遣つたら、どんなに愉快を覺えるであらうか。先頃或る人の話しに、東京のある所では、コップと櫛を共用してゐる。乃ち櫛の中へ壹合入りのコップを入れて、コップへナミく酒を注ぎ、その溢れる餘滴を櫛で承けるやうな趣向である。これが頗る受けがよい。全體櫛酒をひつかける連中は一滴と雖も惜しむの情があつて、多少コップ程つけば喜ぶ筈である。彼等は先づコップで飲み、餘つたのを櫛の角からシヤブルから二重の快樂がある。二器併用はよい工夫だと思つた。又ある物真似の上手が櫛酒を飲むシグサを私に遣つて見せた。櫛の角を口にかた寄せて一滴も剩すまじと唇邊の緊張する處、飲み終つて餘滴もないのに指を以て唇の觸れたあたりを丁寧に拭うて、その指を嘗めるあたりは、如何にも酒を惜しむもの、態度で、金屋玉堂の人の知り難い處と感じ入つた。

いつぞや聞いたことを思ひ出すが、先代雷權太夫がまだ給金拾兩の時代に、客から祝儀を貰ふと本所二葉町の居酒屋に驅けつけ、五合櫛にナミくとつがせて、角から一口に息もつがず、グット飲みほして快哉を叫ぶのが常であつた。ある時例のごとく引つかけると、半ばにして咽で一ト息つく所を、傍らにゐる酒屋の主人は、減つた丈亦つぎ足してやつたので、其の好

意の嬉しきは一段酒の味を増して、今も忘れられぬと云つたことがある。

此榘酒に就て思ひ起すのは、今より三十年も前であらう。長田秋濤など、同じ佛蘭西派の學者で、寧ろ長田より先輩である、中島基と云ふ人があつた。江湖に落魄して、幾んど毎日自分其他文字に縁ある家に就て酒錢を乞うたものである。その人のやり口は、玄關口に來て必らずしも主人に面會したいとは言はず、「請ふ一杯の料を賜へ」と漢文に書いた紙片をつき出すのが例であつた。十錢やれば謝して去るのだから、氣の毒に思つて毎度やつた。尾崎罌堂氏などは酒錢をやつて、交換に佛語を教はつたやうであつた。此人十錢を得れば、近所の酒舗で必らず榘酒を引つかけるを例とした。私は自分の家に飲ませて箇中の消息を聞かなかつたことを遺憾とする。或は佛國滞在中酒で身を持ち崩し、日本で西洋の飲み方に近いのは榘酒であるから、それを快とするといふ様な説を聴かされたかも知れない。此人は私の玄關番をしてゐる書生に「私は酒の爲めにコンナ境遇に落ちた。卿等は酒を戒めよ」と毎々誡めたが、おもしろい男であつた。中江兆民や光妙寺三郎などと同位地の學者であるのに、惜しむべきである。

榘酒の談が畢つて朝酒アサザケの事に移つた。朝酒は支那の詩人は卯酒ウツシユと云つてゐる。酒家の一快と

する所であるけれども禁物でもある。痛快が禍をなして、終日飲みつゞくのがよろしくない。自分も卯酒の快を解しながら此意味から減多にやらぬ。前日浪花の旅中妙な機會があつて、或る酒友と、朝八時頃から酒を命じて、よい心地を覺えた。その時對酌の友人に私は卯酒の味を形容して、天馬空に行くが如しと云うた。その友人は成るほど好い比喩である。晚酌にも必らず適當の形容があらうと聞かれてまごついたが、ヤツトの事で蟄龍淵に躍るといふてお茶を濁した。勿論コンナ卒然の譬喩を剗切と思つてもゐないが、朝は頭腦に繫累がないから、酒に親しめば直ちに五體が軽く、羽化登仙的の概がある。夜分の酒となると、終日塵事に勞した擧句でいろ／＼複雑なことが頭に出没し、酒が旨い調子に折合ふ迄には多少の時間がかかり、後にはよい氣分になるにしても、卯酒のごとく酔つた心地が軽くゆかぬ。稍々重い氣合を蟄龍淵に躍ると譬へても、天馬空に行く卯酒に比し、必らずしも不倫でないと思ふ。

宿酔は酒客の悩みである。酒に中てられて治療の法は迎へ酒であるが、下物は酸味が尤も適する。これは東西何處の國も變りがない。獨逸で書生社會などでは、宿酔をキヤット・エークと云うてゐる。即ち猫の悩みといふが宿酔を形容する語で、さて迎へ酒にどんな下物があるかと

云へば鯉である。それが強烈の酸に漬けられたもので、ビスマーク・ヘリングと云ふ名が附いてゐる。ビスマークの名は蓋し強烈な酸味をいふのであらう。

西洋の好下物を今一つ挙げると、それはカビヤである。カビヤは黒龍江其他寒流にゐる鮫の卵で黒色を帯びてゐる。宛かも日本の鹽辛のやうなものだが、鹽分が薄く味が高尚である。我邦の長崎の唐すみのごとく高價のもので、西洋でもおつなものとして通人に喜ばれてゐる。日本でもオール・ダブルに用ゐてゐる。麵包を一寸四方位に斷つて、それにバタを附し、その上に少量のカビヤを載せ、レモンの汁をかけて出すのが例となつてゐる。これが料理の劈頭に出ると、上等の料理が出るものと判斷する位に珍重がられてゐる。併し通人の下物である證據には、沙翁は「ハムレット」に俗受のしない芝居を評せしめるに、彼等にはあの芝居はカビヤである、などと云はせてゐる。英吉利にも、早くから、此の食物が通人に珍とされたと見える。

## 七 節分の豆料理

追々酔が回つて時が移り、午餐の時刻が来て、ドヤ／＼客が食堂に集まつて来るから、放談も出来兼ねて、切り上げて今度は喫煙室に陣取り、烟草を喫しながら、亦饒舌をつけた。酔餘の談はエロチックに成り勝である。聽き上手の相手が水を其方へ回すからである。私が酔後の興に驅られて頭に浮んだことは、前年節分の夕べ、ある友人に招かれて饗應を受けたことであつた。ある友人は其頃東京に住して可なり豪華な生活をやつて、毎年の節分には例として知友を會して饗應をやつた。ある年の案内状に、節分であるから萬端豆の趣向でやる、と申越した。私は此の案内状を得て出席したい心が動いた。丁度其頃私が戯れに豆本の蒐集に没頭してゐた頃であつたから、節分の豆に縁因が無いでもないので、出席の返事にはソナ事を書いて出した。其時の會場は築地の瓢家であつたが、出かけて見ると、床には豆の俳句の幅が掲げてあり、追々出る料理が何もかも豆盡しで、引き物までが一合椀に煎り豆を盛つたものであつた。座が定まると藝者が男装して出て来て、福内鬼外を叫んで盛んに豆を撒き、それから豆に因んだ種々の餘興をやつたが、男子は一人も加はらず、皆豆の持主のみであつた。酒酣にして私は辭し去らんとすると、主人は引き留め、是非最後の餘興を見てくれ、とあるので、其の意に任

せると、忽ちに一室の電燈が減して、現はれ出たのは薄紗を纏うた裸體の婦人で、それがしきりにダンスをやる。座中は遽かに一段の活氣を増して、座客の内には電燈を點せよと叫ぶもあり、もう少し前進して踊れと云ふもあり、薄紗を撤せよと云ふもあつて、終には赤裸で踊り回る騒ぎに居並ぶ藝妓迄が驚かされた。私は主人に云ふに、豆の趣向と云ふからいろいろ想像もして来たが、コンナ豆の趣向があらうとは思はなかつた、と一笑した。ルーマニヤあたりの流離の婦人が、裸體で踊るのを見て、寧ろ悲哀を覺えたこともあつたが、これは日本の婦人であつた。

## 八 容貌毀傷の損害

話頭は外に轉じたが矢張り女性を離る、ことが出來ず、今度は婦人の結婚期が問題となつた。私は平生の感懷を陳べていふには、毎日電車に乗る毎に、若い婦人が赤ん坊を負つたり、頑是ない小兒の手を引いたりしてゐるのを見ると氣の毒な感じがする。此等の婦人の内には學校か

ら出て、まだ幾何も年を経ない、二十前後のものもある。それが結婚したとなると、直ぐに兒が生れて母となる。兒が生れると、容色が衰へ初める。小兒の世話に忙がしく、身仕舞などをしてゐる違もない。再び來らざる青春をメチャ／＼にするものは産兒である。これが結婚から生ずる約束であるとは云へ、婦人に取つては大なる損害である。小兒に對する愛が本能的に起つて、損害を損害ともしない處におもしろ味もあるのだが、餘りに早い結婚は婦人の不幸と見られないでもない。青春の美を或る程度まで發揮し保全するには、少くとも六七年度の餘地があつてよい。いつぞや讀んだ西洋の小説に、妙齡の婦人が嫁すると間もなく兒を産んだので、良人に對し、容貌毀損の訴訟を起した筋を見たことがある。それは極端であるにしても、容貌頽壞は婦人の損害に相違ない。モーバサンの「カウンテス・ド・マスカレー」にも前と似たやうな筋がある。夫人が追々子の産れるために美貌の損ふことを氣にして、わざと良人に愛想づかしを云うて、交接を避けんことを企て、七人ある子女の内一人は他人の胤であると云うて、貞操を破つたことを自白し、一時良人に遠ざかつた。さて六年の後再び夫婦が一緒になつた時、夫人より、前言は虚であつて、決して貞操を破つて居らぬ。七人の子女は皆あなたの子である、

と告げたと云ふが、此の小説の筋である。婦人が自衛の権利の主張としては、一應道理のある人生観だ。

### 九 いびきと睡眠

談者に酒が追々回つて多少睡氣を催したが、相手は残酷にも寐かさうとはせず、しきりに話かけるので、談は端なく睡眠のことに移つた。私は相手に云ふには、君は俳諧趣味があるから無論知つてゐるだらうが、芭蕉に「いびきの圖」と云ふのがあるネ。確か門人の杜國と芭蕉が吉野を行脚した時、杜國の高いびきに悩まれて芭蕉が戯れに作つた圖が残つてゐる。それはコシナ圖だ、と手帖を出して鉛筆で粗圖を作つて示しながら、(今爰に載せる圖は「早稻田文學」の芭蕉研究號にあつたのを轉載したのである)恐らくいびきを圖にしたものは芭蕉以外にあるまいネ。地震の震度ですら圖し得るのであるから、いびきも圖し得る筈だ。更に一步を進めて、いびきの音譜を作つて、いろ／＼の名家のいびきをラヂオに移したらおもしろからうと思ふ。



芭蕉戯書「いびきの圖」  
貞享五年の吉野行脚に同行の萬菊丸事杜國の高いびきに悩まれた芭蕉の戯筆で、上部に「是は萬菊殿いびきの圖に而御座候」と書いてある。伊賀上野の内神屋三四郎の珍藏にかゝはり、竹二坊の「ばせを翁正傳集」秋屋の「花はさくら」土郎の「琵琶園隨筆」に載するところ多少相違してゐるが、爰には流布本の少ない「花はさくら」から複寫した。此の圖の波線は鼾の震度を示したので、芭蕉一代の奇抜な洒落書きである。

それは兎に角として芭蕉の悩まされたいびきは、圖に據つて見ると、初め低く、中頃高く、末は低いやうであるから、通常平凡のものであるやうだが、自分の知つてゐる友人の範圍で尤も猛烈ないびきをやる人は某男爵である。嘗て秋田に旅行した時同室に寐たが、枕に就いたかと思ふと忽ちいびきを發して、其の猛烈さは眞に凄まじいもので、私は一驚を喫した。大抵のいびきは初め緩で中頃激に赴くものだが、冒頭から猛烈なのは之れを圖にしたらドシナものであらうか。瓢箪を逆に書いて

たら、いくらか髣髴するであらうかと一笑した。

睡眠と鼾はどんな関係のあるものか、研究した事もないが、睡眠も鼾の緩急のある如く、熟不熟の境がある。大體は三期四期に分つことが出来る。初期は睡氣を催す程度で、睡二分醒八分とも云はうか、追々睡氣が増進して半睡半醒となり、睡氣が七八分を占めることになる。之れを第二期とする。それから熟睡に入つて無我の境に遊ぶ。これが第三期で、漸く醒めて尙ほ多少睡氣を存する。これが第四期である。此の三期四期が果して鼾の緩急に應ずるものであらうか。鼾の尤も高い時が熟睡期であるやうに思ふ人もあるが、熟睡の時は鼾聲が収まるといふ説もある。何れにしても睡眠に大切であるのは熟睡である。熟睡の間が短かくとも眞の熟睡を得れば睡眠の目的は達せらるゝのであるが、人に依つてはなかく、此境に入りがたく、半醒半睡の間に彷徨して、終夜苦悶する者が多い。文學者などは夢中に腹稿を案じたりするから、常に睡眠に叛かれ、熟睡の境に入ることが稀である。私などはそれがいやさに文學者にならなかつたと云つたら負け惜みと笑ふであらうが、時たまそんな眞似をして毎日筆硯に親しむと睡眠に叛かるゝ事がある。坪内逍遙君などは一週快眠を得るのは一二回に過ぎないというてゐる。

偶々熟睡すれば翌期は言ふ可からざる快氣分を覺えると云うてゐる。私などは酒のお蔭で睡眠を得るのである。毎夜ある時間は必ず熟睡する。併し外に出て夜分おそく歸ると、縦令ひ酒氣があつても興奮して容易に睡に就き兼ねる。要は早く寐ることが肝要である。大隈老侯の例の國民葬を自分が總務の格で擔任した時などは、十五日間極度の緊張で努力を續けた。四圍の人達は必ず中途に斃れるだらうと氣づかつてくれたが、終にそれを裏切つて果し得たのは、毎夜早く事務を切り上げて家に歸り、酒を煽つて直ちにねむるから、毎夜熟睡の境に入り、朝になると全く疲勞がなく頭腦もハッキリするので、あの大役を勤め得たのである。若し多用を氣に病んで毎夜十二時迄勤勞を續けたら、それこそ中途に斃れたに相違ない。多くの人は睡眠劑を用ゐるが、酒量のあるものは酒の方が有効で無害である。私も大隈老侯に隨伴して長途の旅に上つた時、餘りに忙がしいので、酒を廢することを思ひ立ち、眠藥を其代りに服して見たが、翌期の氣分がよろしくないで、矢張り酒なる哉と感じたこともあつた。

## 一〇 俳客雪人

相手が俳諧趣味を有する人である爲めに、いろいろ俳味のある談が出た。私は、自身には交際はないが面白い性格の人だと思つてゐる、雪人の事を思ひ浮べて語り出した。此人は信州の出身で、句も書も超脱した處がある。自分と同番地に住む服部耕石氏が此俳客と懇意であるのでいろいろのことを語られた内に、興味ある小話がある。雪人ある時何れよりか木彫の芭蕉の像を購ひ得て、一時愛玩したが、漸く酒資に窮し、之れを角田竹冷に賣らんとして、其仲介を服部氏に依頼に及んだ。雪人のいふには、實は此像三圓五十錢で購つたものだが、君ほどの人を仲介者として竹冷ほどの人に賣るには、三圓五十錢などいふ價は無禮に近いから、十圓とでもいうて貰ひたいというた。服部氏は笑つて竹冷に其通りを取次ぐと、竹冷のいふには、三圓五十錢のものを十圓に買ふは愚のやうでもあるが、しかし持主が直と來たとすると、深更まで酒を飲まれてナカ／＼時間もつづれ費用もかゝる、それを思へば十圓で買ふは寧ろ利巧であら

うと云うて、それを購ひ入れた。さて雪人は十圓の金を手に入れて、服部氏に云ふには、幸に酒資を得たから、これから君と共に下谷の忍川シノヅカに出かけて一杯傾けたいが、それに就て亦君に懇願がある。此の十圓の内五圓丈は別に入用があつて、つかつてはならぬ。願はくは僕を監督して五圓で勘定の濟むやうにして貰ひたいと云うた。服部氏は之れに對し、自分は其の知る通り酒を嗜まない。その酒嫌ひが君と共に出かけて五圓を喰ひ込むのは無益だから、君ひとり行くがよからう、と勧めると、雪人のいふには、自分のみ行けば必らず全部を費すに相違ない。君に附添を請ふのは此故である、といふので服部氏も辭し兼ねて、共に忍川に到り、一策を案じて、女將に爾々シカクと實を告げ、五圓以上飲ます可からずと頼み、雪人のみを止めて、服部氏は密かに去つたといふ。雪人の呼吸はザットこんな工合で、恬澹で稗氣があり、赤貧を守つて晏如たる處に古人の面影がある。

## 一一 俳味ある放翁の詩



際限もない雑談に自分も漸く疲れて、相手に断つて横になり、暫時、本でも讀まう、とカバンの内から陸放翁の集を取り出して、三十分間ばかり黙讀してゐる間に、相手は手帖を出して熱心に何か書きつけてゐた。あとから思ひ合はせると、それは私の談話のノートを作つたのであつた。私は放翁の集を始めて讀むでもないのに、此日は俳諧話がしきりに出た爲めか、此集中に俳味のある詩が少なくないのに氣がついた。實は放翁の或る時の貧境遇が俳客に似てゐるために、其の發する所の詩にも枯淡閑寂の味のあるのも不思議はないのであるが、形式は兎もあれ、作意や詩材まで吾が俳句に似てゐるのは一奇であると思つて、ハネ起きて談敵に此事を語りて、四五の詩を指摘した。先づ蛙を聽くのを見給へ。原題は「村飲」だが、村酒を傾けて私蛙を聽く所に俳味があるではないか。蛙は俳客の常得意であらう。

不來東舍即西家。野老逢迎一笑譁。試說暮年如意事。細傾村釀聽私蛙。  
貧境にゐる猫を坐せしめる既もなく、食はせる魚もない、と猫に同情を寄せた詩も俳味がある。庵住の俳客に此の境遇が多く、猫を憐む俳句も少なくないではないか。

裏鹽迎得小狸奴。盡護山房萬卷書。慙愧家貧策勳薄。寒無氈坐食無魚。

放翁の花に對する趣味も俳客と同じい。山茶花を喜ぶ左の詩の如きは俳句を漢譯したのかとも思はるゝ位で、閑寂の氣分が溢れてゐる。

山茶一樹自冬至清明後着花不已

東園三日雨兼風。桃李飄零掃地空。惟有山茶偏耐久。綠叢又放數枝花。

左の一詩に至つては、作者の境遇全く雲水營ならざる俳客と同一で、其の作意は芭蕉の「夢は枯野をかけ廻る」の句の壘を摩し、其の豪宕の調は其角に似寄つてゐる。

行遍天涯等斷蓬。作詩博得一牛窮。可憐老境蕭々夢。常在荒山破驛中。

酒を飲むに相手を擇ばず、其の去來に任せて誰彼を論じない洒落の態度も、亦俳客によくあるやつだ。

馬瘦行遲自一奇。溪山佳處看無遺。酒壚強挽人同醉。散去何曾識是誰。

閑寂を詠じた村居の詩には、鴉や柿や鼠害を受けた書物などが詩材に扱はれてゐる。此處にも俳味を感じざるを得ない。

書收鼠齧猶堪讀。柿拾殘鴉亦自甜。動念不如姑省事。智謀老健恐難兼。

俳客庵を守り、偶々出で、遊ぶ。村人の男女耕を休みばら機より下り、よくお出かけです、何もありませんが掘り立ての野菜が煮てありますから、濁醪ドロウ一杯差上げます、と云つた様な俳境は「東村」と題する左の二詩に見ることが出来る。

野人知我出門稀。男輟鉏耨女下機。掘得菘菰炊正熟。一杯苦勸護寒歸。

野人喜我偶閑遊。取酒忽々勸小留。舍後携籃挑菜甲。門前喚擔買梨頭。

斯様な俳味のある詩はまだあるであらう。貧境を詠ずるの詩は多くの場合不平の氣が寓さるるが、放翁のにはそれが無い。放翁は貧に安んじて晏如たる概がある。貧に安んずる詩人は僂人氣取になつたり老莊氣分になり勝であるのに、放翁はどこまでも人間を以て貫いて居る。如何にも天真爛漫で些しも衒氣がなく、無邪氣な處に俳味があるやうに思ふ。

## 第六百道樂

### はしがき

湘南避暑のつれづれに、百道樂を數へて見たことがある。所謂る道樂も多方面に涉つてゐるから、百位は容易に數へ得る。併しまだ私等の氣のつかぬものが可なり澤山にあることであらう。

俗に所謂る道樂といふ語に就ては多少の解説を要する。道樂には必らず何等かの趣味が伴ひ、それに耽溺するを道樂というてゐるけれども、趣味に熱中するあらゆる人に一概に道樂の名を與へることが出来ない。例へば職業の爲め或は研究などの爲めの行動は、外面似寄つてゐてもそれを道樂とは云はぬ。例へば割烹店が各所の料理を食ひ廻つても、それは自家の營業に資せんとするのであるから、道樂とは云はぬ。考古學者が多くの資料の蒐

集に没頭しても、それは研究の爲めであるから、道樂とは云はぬ。敢て研究の目的があるでもなく、幾んど盲目的に趣味に驅られて好む所に熱中し、酒色に溺れたり、或る物の蒐集に耽つたりする者を普通道樂というてゐる。勿論道樂の結果何等かの研究を生むこともあるけれども、それは多くの場合偶然の結果であつたり、道樂の擧句自然修養を経て、それから生ずるのである。併し研究を名としたり、相當の理窟をつけて道樂をやる者もあるから、道樂と否との經界は甚だ畫し難いが、趣味界には道樂と見做さるゝものが少なく無い。此の道樂の對象は幾んどあらゆる事物に迫んでゐるとも云ひ得るやうに廣く、飲食の如く、消費して口腹を満足せしめるものもあり、旅行の如く、耳目を満足せしめるものもあり、種々の物を蒐集するものもあり、それが時代によりおのづから變遷もあつて、昔し道樂の對象であつたもので今無いものもあり、昔し無くして今あるものもある。其百端のものにはそれ／＼の天地があつて、其道のものに云はせると、おのづから専門に屬することもあり、門外漢の意料の外のこともあり、そこに道樂の本意が存するのである。故に百道樂を紹介するには、みづから道樂を體驗したもので無ければならぬことは勿論であるが、

私は百道樂に就てそれ／＼通を振り廻さんとするのではなく、唯試みに百道樂の目を列舉し、その一々に就て多少の解説を附するに過ぎない。

一 土木 昔しから帝王の道樂は領土の兼併で、人の國を我がものにしたさに、兵を動かすことであるが、これは道樂といふには稍々妥當を缺くかも知れぬ。それよりも小さな道樂は土木であらう。土木というても國民のために河を治め鐵路を敷くなどの公共的のものでなく、自家の虚榮を満足せしめるため、大なる宮殿を營み、大庭園を作ることが、帝王の常習的道樂となつてゐる。單に己が坐臥する宮殿に輪奐の美を盡すのみでなく、多くの勝槩地に別莊を大規模に營むなども亦常習となつてゐる。支那の西太后が海軍擴張費を國家的につかはす、一別莊萬壽山の經營に用ゐたなどは誰れも知る近い例である。専制君主國には此例が甚だ多いことは絮説を待たないが、帝王ならずとも、富豪の道樂は多く土木にある。所謂る普請道樂と云ふは資力豊富の階級に冷熱なく行はれ、殆んど周歲間斷なく、土木に終始してゐる人もある。此等は先づ道樂の大なるものとして數へることが出來よう。

二 寺社 宗教の旺盛時代に神社佛閣に大規模の土木を起したことは一種熱狂的信念に驅られての事であつて、之を道樂の内に數へることは安當であるまいが、宗教の信念にからんで自家の道樂に豪奢をやつた者も決して少なくない。金閣、銀閣を始め宇治の鳳凰堂や嵯峨の大覺寺などは、佛刹でもあるが、又帝者、將軍、關白の住所でもあつた。随つて前項土木の項に云つたと同一の趣がある。乃ち寺は或る時代に有力者の別業であり隱居所でもあつたのだから、その經營も一種の道樂と見做すことが出來よう。

三 慈善 を道樂とするものは少なくない。元來慈善といふは美名である。貧を救ふは人道の大切なことである。これを行ふに道を以てすれば、社會の缺陷を補ふことにもなるけれども、往々其法を誤り却つて害を爲す事がある。西洋でも貴婦人連が慈善に没頭するけれども、多くは見えを張るので、偽善である爲めに識者をして嚮蹙せしめる。日本でも賣名の爲めに此偽善を爲すものがあるが、これは道樂ではない。道樂になすものは老いたる婦人などに多く、寺社の參詣に幾許の錢を乞食に與へたり、救世軍に金を投じたり、貧民窟を訪うて金を蒔き散らしたり、孤兒院に物を贈つたり、種々の慈善事業に寄附をしたりするを、此上もない愉快の

事に思ひ、特に貯金までして其の費途に充てるものがある。これも宗教觀念にからんでゐるけれども、一種の道樂と云ふべきであらう。

四 任俠 と云へば、直ちに博徒の親分を聯想するが、必らずしもそのみでない。人の難を救ひ義を助けるのを愉快とし道樂とする一派の人がある。借り金までして人に金を貸したり、敢て報償を期待せず、面倒の事を擔當したりして、人知れず苦心するものがこれだ。此等は敢て功名心に驅られてゐなく、さうしなければ氣が濟まぬといふのである。所謂る政治道樂などいふものも此部類に屬し、敢て己れが議員とならう、大臣となりたいなどいふ野心や意思が毛頭あるでもなく、最負の角觚や俳優に心盡しを爲すやうに、飽くまで己が好みを満足して見たい一念で、産を傾けて迄も努力するものがある。これも一種任俠を道樂とするものと見なしてよからう。

五 茶器 に関する道樂ほど濃厚で手廣のものはない。茶器と云うても單に茶碗や茶入や茶杓ばかりを云ふのではなく、およそ茶席に入用の調度は、廣義に茶器と云はれてゐる。乃ち水差でも風爐でも釜でも、花瓶でも炭取りでも、皆茶器である。大體骨董といふもの、多くは

皆縁を茶に延いてゐる。其の範圍は實に廣汎である。茶會など催すに、季節に依り又は客人の趣味により若くは客の階級などに依つて、茶器を選ばねばならず、取り合せに依り、いろいろと器を異にせねばならぬから、茶碗丈でも幾十種を要する。二つ三つの藏一杯に茶器を擁するで無ければ、適意の茶會が出来ぬと云ふも一概に無理とは云はれぬ。茶を玩ぶものに茶器の道樂のあるのは此故である。昔しは大名は勿論、多くの富豪に此道樂があつた。今は茶が昔しのやうに流行しないが、矢張り此道樂が持續し、名物など云はる、茶器に何十萬の價を拂ふことを辭せぬ者がある。以上は主として抹茶に就て云うのだが、煎茶は様式が異なるだけに其の器物も異なるが、之に對する道樂も同様で、頗る濃厚のものである。支那あたりの雜器も古渡となれば、煎茶に重んぜられ、賣茶翁の手澤だと云へば、どんな器物調度でも重價がある。概して小品を好むことが追々流行で、小品の茶具一式を備へて、それを飾り物にして別な器物で茶を點するなどは、賣茶翁を失笑せしめるであらうけれども、斯道の道樂者流はその風潮を掉して憂き身をやつしてゐる。

六 陶瓷器

茶人は皆此の道樂をやる。併し陶瓷器の範圍は極めて廣汎であるから、部分

的に集めたり鑑賞したりするを趣味とする者が多い。例へば専ら茶碗や壺などを集める者があるかと思へば、仁清ニセイものばかり集めたり、支那の染付ソウジばかりに興を有つたりしてゐるものもある。或は青磁、或は赤繪、或は高麗カウライなどと、思ひ／＼に道樂をやる。いつぞや京都の下賀茂に或る人を尋ねたら、其人は年來寺小屋に用ゐた水滴を集めて五百種に達してゐるといつて示されたことがある。近來富豪の間に伊萬里道樂が始まつて、爲めに價が頗る昂騰した。

七 香

昔し香道の流行した頃、香木の需用が多く、随つて輸入も盛んであつた。當時伽羅を懐中してゐぬものは紳士の缺點とされた位で、茶道には最も名香を要したから、長崎へ香木が輸入さると、諸侯は競うて第一等品を購ひ得んと欲し、遠く家臣を派したものである。競争に敗れたものが申譯ないと切腹したものさへある。香は多く南洋の熱帶地に産し、七種名香など云ふもの、名は、皆産地の名を以て呼んでゐる。鬪香といふ一種複雑な遊戲が起つてから一層香の道樂がひろがり、甞に香木ばかりでなく、香器に對する道樂も起つた。香器と云うても香合などばかりをさすのではない。鬪香の道具はなか／＼込み入つたもので、それが美術の粹を凝らしたものであつたから、今日の香水道樂より幾層豪華のものであつた。今日は流行

しないが、敢て絶えた譯でもない。

八 書物 此の道樂は手廣く行はれて居る。書物とし云へば、何でも構はず集めて其藏書の多きを快とするものもあるが、珍書道樂と云ふが書物の各部類に涉つてある。書物には西洋も支那も日本もあるが、日本の珍書と云ふは、版本なれば慶長以前のものを珍とする。尤も慶長以前には軟種の書物は極めて少ないから、繪入本、花柳界の本のごときは元祿以前を珍とする。支那のは宋元以前の者を貴重本として居る。西洋の書物は千五百年代からおほむね珍とする。古版を珍とするのみでなく、古寫本も時代により珍とするは勿論である。又時代古からざるも、名家の自筆をも珍とする。各部類ともなかく、数の多いものであるから、部類々々に依り特別に道樂がある。大名で此道樂の尤なるものは加賀の松雲公、一市人で鑑識の卓越であつた者は狩谷掖齋である。圖書道樂の内には絶版書ばかり集めるものもあり、「蒙求」と名のついたものばかり集めるもの、往來ものばかり集める者、地圖ばかり集めるもの等、皆此の部類の道樂に屬する。

### 九 經卷

古經道樂と云ふが學者畑に昔から澤山ある。古經には版經と寫經の二種あつて

支那、印度、日本、其他を包羅すればなかく、廣いが、其内珍とするのは時代の古いものである。版なれば宋代の物、寫經は支那なれば六朝、唐、日本なれば天平、若くはそれ以上の物を貴ぶ。聖武帝、光明皇后の願經などは今は格別珍しくも無いが、昔は一行若くは數行切斷して珍藏したものである。白河樂翁公も此の道樂があつて、「大般若」の珍らしい零本ばかり六百卷集められたことがある。それは今は帝室の御物となつてゐる。田中光顯伯も嘗て此道樂に熱中され、頗る珍しいものが數十卷あつた。僧侶では京都花頂山の養鷗徹定と云ふ人が此の趣味を有し、天下の名經を多年探討して「古經題跋」を物し、一號を古經堂と云うた。

一〇 硯 文房器を多く集める道樂の内、尤も多くあるのは硯である。勿論支那のものを珍とする。歙溪、端溪など云ふは皆支那石で、日本には硯となる名石が少ない。石の質の佳なるを第一に擇ぶが、形態や刻字や時代で品段が定まる。日本でも高島其他多少佳石がある。昔し屋代弘賢は日本の各所の石で作つた多くの硯を集めたので名が高い。

一一 筆 も文房中の大切なもので、實用上から多く集める人があるが、趣味上から集める者は、軸の意匠の異つた者を取る。自分も曾て異つた筆軸を百餘り集めたことがある。實に

意匠は百端とも云へる。市河米庵は多く筆を集めた人で、其「筆譜」が版になつて居る。

一二 紙 も多種多様である。古今に通じて各地に産する紙を集めることも或る方面の道楽となつてゐる。紀文の舊宅の天井に張つてあつた紙を調べて見たれば、幾百千枚の紙が一紙毎に異つたものであつたといふ話も傳つてゐる。又いつぞや南葵文庫で紙の展覽會を催したこともある。正倉院あたりに存する古紙の斷片を得て張込帖を作つた好事家もあつた。當業者は必要上いろいろの紙の標本を集めるのであるが、唯道楽に寄せ集める人がいくらかもある。現に私の友人にも此の道楽をやつてゐるのがある。又紙の一種として書簡箋を漏すべきでない。昔の半切にもいろいろの意匠が凝らしてある。繪半切は幾んど繪はがきの祖と云うてよろしい。紗綾形サヤガタの空押カラシに口紅の半切や五色の紙の切りつきなど、なか／＼趣がある。封筒にも同様意匠を凝らしたもので、多く當時有名有名の畫家が下繪を書いて居る。此外詩箋もあつて、書簡用ともなつて居る。支那の詩箋の古いものは極めて雅なものだが、今は得難い。すべて此の種をあつめる道楽は今でもある。

一三 印 の趣味家は學者風の人に多くある。故人郷純造氏などは此の蒐集家として支那

にも餘り多く無い位だ。印に尤も貴ぶものは刻の佳なる者である。刻の佳なる者と云ふと漢にまで遡つて求めなければならぬ。印の趣味のあることは刻字に味のあるばかりでなく、材には石あり木あり竹あり硯あり水晶あり銅あり金銀あり、石の内にも鶏血、凍石、田黃、魚璣などさまざまあつて、凍石の内には純金よりも貴いものがある。又鈕ツボの刻も様々あつて一層趣味が加はる。印ほど形が小で趣味の多方面の者は少ない。又印の一種として絲印イトシといふがある。是は昔支那から絲を輸入した頃、割符の意味で此の印が荷の中に這入つて來たと云はれて居る。銅印で、刻字は多く讀めぬが鈕が甚だ雅である。日本趣味に投ぜん爲め惠比須大黒などの鈕を作つたのもある。豊太閤の用印も此の絲印を間に合はせたものである。數多く集めてみると、なか／＼面白味のあるものだ。館柳灣は百箇集めたと聞いて居るし、大阪の平瀬といふ豪家にも百箇藏して居ると聞いた。此の平瀬家の、は、もと伊勢の菊池二日坊が蒐集した品で、二日坊は此の百顆に就いて安永二年に「古鑄百印」といふ印譜を作つてゐる。

一四 書畫 の範圍は海洋の如く廣汎である。漢畫もあれば日本畫もある。流派にも様々あり、時代を云へば古畫もあり新畫もある。書に就ても同様に各様の書風があり、宋元あたり

の古墨蹟や日本上代の古筆が時代をわけて云へば古い方で、慶長から徳川期にかけての墨蹟は近世と云ひ得るであらう。斯く範圍が廣いから、人々も其趣味に依つて局部的に鑑賞をするので、随つて書畫道樂というても大體局部的の道樂である。唐物カラモノ一點張りの者もあれば、土佐、狩野、四條に偏するものもある。あらゆるものを度外に措き、浮世繪にのみ力を集注するものがあり、斷簡零墨殊に書簡の蒐集に没頭するものもある。近來洋畫が起り、更に一天地をひらいたから、愈々書畫の乾坤は廣大となつた。なか／＼一々に就て云ふことは煩瑣でもあり、且つ餘りに知れ切つてゐる道樂であるから、僅かに三四のものに就て多少の注を加へる。此等はそれ／＼一類をなすほど道樂者流の多いものである。

一五 古筆 書畫道樂と云へば餘りに範圍が廣過ぎるので部分的にいふ必要がある。爰に先づ古筆道樂を擧げる。古筆と云ふのは上代まで溯つて古墨蹟を指すのである。これが貴重のものであるから、蒐集の道樂があつても實際には容易に手に入らぬ。そこで一枚若くは一冊のものを寸斷して諸方に頒ち、多くの趣味家を満足させる様な工夫も起つた。手鑑帖テミテといふものは斯る斷墨を張り込んだものである。これが如何にも數多くあることから見ると、古筆道樂が

如何に盛んであつたか窺はる。今日でも此の道樂は富豪の間に猶ほ行はれてゐる。今は手鑑などでは満足せず、纏まつたものを得るに幾萬の金を投ずることを辭せぬ。

一六 古文書 と云うても、矢張り手簡が大部分を占めるが、徳川期以前のものになると多く古文書コモンシヨと云はれて居る所から類を分つが例となつて居る。是は多く古社寺などに傳はり、武家や由緒ある家に傳はつて居る者で、歴史の資料として大切なものである。随つて史的趣味を有する人が抵ね集めて道樂とする。併し書畫や茶湯チヤウを趣味とする人にも此道樂がある。慶應出身の岡本貞悠氏は此道樂をやつた。岩崎家のために重野博士が多く集めたこともある。

一七 曆 は版にならぬ前に具注曆と云ふのがあつた。巻物に縦横の野を引いて書込んだものであるが、大事件を書き入る、を例としたから具注曆と云ふ名がある。外にも書いた曆でいろ／＼のがある。又繪曆と云ふもある。昔は勝手に私製したこともあつたから、種類が多い。幾百年の曆を缺陷なしに年代順に集めることは難事であるが、其の得難いのを集めるのが此道の道樂となつて居る。

一八 古簡 古人の遺簡を集める道樂も廣く行はれて居る。これも際限なくある者である



から、あらゆる方面の書簡を集めることは困難である。多くは好む所に偏して集めて居る。例へば學者、畫家、俳人、歌人と云ふ様な鹽梅にそれ〴〵集める。勿論學者と云うても漢學者もあり、國學者もあり、畫家と云うても南畫家と日本繪師と云ふ様に區別があるから、それ〴〵方面を限つて集めて居るのが多い。嘗に古人の遺簡のみでない、現在名家の書簡を集める道樂が却つて多くある位だ。

一九 反故 手紙も古文書も反故と云へば反故である。反故と云ふ範圍はなかく、廣い。大抵書畫などで幅にもならぬ様な斷片や落款などの無い漫草や草稿様ものを總稱する。反故と云へばツマラヌ物の様にも聞えるが、此内にはなかく、容易ならぬものが包含されてある。殊に此の部類には名家が戯れに筆を揮つた者があるから、趣味は却つて立派な幅などに較べて深いものがいくらかもある。随つて反故集めを道樂として居る者がある。

二〇 短冊 は大體寸尺が極つて居る様なもの、實は時代により幾らか違つて居る。紙も勿論いろ〴〵異つて居り、或はカンナ屑のやうな木片や葛布などで作つたものもある。俳諧用のものは和歌用のと自から違つて居る。古今各種の短冊の蒐集家も稀にはあるが、重に書の

あるのを集める。古今の名人を集めて誇らんとするには、千枚位は集めなければならぬ。蒐集家の中には歌よみの和歌は有り觸れて居るからと云うて、非歌人の歌のみを集める人、或は詩のみを集める好事家も居る。

二一 法帖 は書を學ぶの軌範であるから、其の佳なる者を選ぶに古來苦心し、王羲之の蘭亭や聖教序ばかり百帖も集めたものが幾人もある位だ。古い程字が崩れて居らぬ譯だらう。宋拓を欲するも容易に獲られぬ。定武の蘭亭が第一と謂はれて居るが、日本、支那でも頗る稀れである。随つて其價は實に貴い。支那の帝王でも羲之の墨帖には憂き身をやつして搜した位のものである。羲之ばかりでなく、古賢の書を法帖に彫り且つ撫したものが幾十幾百通りあつて、多くは刻した人の名などで呼んで居る。斯道の數寄者は各所に澤山ある。

二二 拓本 も法帖に似た様なものだが、これは帖の形をなさぬ所から區別してこゝに一類として擧げる。例へば日本でいへば多賀城の碑や多胡の碑などを撫したもの、或は奈良朝佛像の背面若くは蓮座などに刻してある字を撫したもの、朝鮮でいへば日本の三韓征伐の事を勒してある高句麗カウリの碑を撫したもの、其他支那で數多き六朝其他の金石の拓本で、古い字の研究資

料となるべき者一切を網羅する。今此道の數寄者が澤山あり、支那より珍しい者が續々來るが矢張り古拓を珍とする。此道樂も他の道樂と同じ様に得難いものを欲するから、往々危険を冒してまでも索めるに至る。柴野栗山が官命で諸社寺の寶物調べをやつた時、隨員の内に屋代弘賢といふ此道の數寄者がゐた。奈良の某古刹の五重塔の上頭に刻字があるのを撫する爲め危険を冒して上り、栗山に叱られたなどは有名な話である。

二三 古瓦 を多く集めるのも拓本を集めると同脈の趣味に屬する。支那にも咸陽宮、未央宮などの瓦が今でも存して居る。昔入唐した僧は必らず土産に持歸つたものである。多分土産用に偽造したものも交つてゐたであらう。此の瓦には刻字のあるのや繪などを彫つたのもあつて風韻のあるものだ。或は之を材料として硯を作る人もある。日本でも一時古瓦を無闇に弄び、いろ／＼贋作が出來た。鎌倉の武將屋敷の瓦などは面白過ぎて眞物とは受取れない。

二四 古鏡 金石類を集める道樂がいろ／＼ある中に鏡を愛玩する道樂がある。鏡には支那鏡もあり倭鏡もあるが、多く珍とするは支那鏡で、其古いのは漢、六朝、唐あたりの物だ。倭鏡にも様々があるが、自分の知人中で多く集めた者は今は故人となつた木村糸市といふ人

で、和漢五百種も蒐集した。確かそれは今大阪の久原家の有に歸した筈だ。

二五 古錢 弄錢家も古來澤山ある中に、越中富山の城主前田正甫マサユキは延寶元祿年間の人で、弄錢の祖と云はれてゐる。當時浪華の富豪天王寺屋長左衛門は頗る古錢に富んだが、富山侯の懇望に依り辭し兼ねてそれを贈つた。又寛政頃に古錢家を以て聞こえた大名は丹波福知山の城主朽木龍橋で、「彩雲堂藏古泉目錄」が世に行はれてゐるが、如何にも豊富のものである。此外狩谷椽齋、成島柳北、守田寶丹など、皆此の道樂を以て聞こえた。

二六 貨幣 硬貨を集める道樂も前と同脈であるが、これは多く金銀であるから廉い道樂でない。昔から此の道樂をやる人は多く金持であつた。日本の小判の各種を始め世界各国のあらゆる貨幣を蒐集するとなつては幾萬といふ費用がかかるから、極めて少數者の間に行はれてゐる。

二七 札 は紙幣のことである。但し紙幣といへば多く政府發行のものを云ふが、商店などで私に發行する手形のごときものや、封建時代に各藩で發行した札なども紙幣と同様の働きをしたものである。そこで此等を假りに札と名づける。さて古來札と名のつくものを數へて見

ると實に數の多くあるものだ。博物館にも數千種の札が集めてあるが、自分の知人でそれより遙かに多く集めた人がある。それは大阪附近の前田惇と云ふ人で、五千幾百種集めた。中には頗る珍しいものがある。今時紙屑になつてしまつてゐる古い札を集めることは容易でないが、此道樂を遣つて居る人は意外に多い。

二八 寶石 はなかく種類が多い。支那では古來硃を貴んでゐる。青、白、紅、其色も様で、古いのを珍重する。琅玕も硃の一種で最も重んぜられてゐる。硃に近いもので、魚鱗といふ石がある。硃よりは軟かいが硃同様に織緯がない。すべて凍石と稱するものが此類で、印材として珍重されるが黄金に齊しい價格がある。尙ほ西洋趣味の寶石にはダイヤモンドがあり、ルビーがあり、エメラルドがあり、サファイヤがあり、トツパースなどがある。石ではないが寶石に準ずるものに眞珠がある。皆頗る貴重のもので、質と大きさに因つては非常の價格で、婦人指頭の裝飾として此上もないものとなつてゐる。此の道樂は巨費を要するから、大體優産を擁する富豪の懐ま、にする所であつて、硃器道樂は専ら支那趣味の富家に行はれ、凍石は印癖の人に玩ばれてゐる。しかし支那寶石を道樂にしてゐるものは割合に少ないが、西洋寶石を道

樂とするものは、決して少なくない。最高最大の道樂者としては先づ世界各國の皇妃に指を屈せねばならぬが、貴族の婦人が之れに次ぐ。日本でも近年婦人の愛好慾が、こゝに集中して、資力相應之れを道樂とするものが多くなつた。昔は婦人の道樂は多く髮具に在つたが、今は玳瑁でなく、珊瑚でなく、指頭の飾りに全力を注ぐことに移り變つた。

二九 古銅器 漢魏六朝の古代を味はんとするには金石類の外存して居らぬ、そこで古銅器道樂といふが起る。最も古い銅器は多く祭器である。それを花瓶や其他様々に見立て、適用して居る。模様や彫字が奇古で、吹き出した綠青や鏽に一種の風韻のあるのを喜ぶ。日本の古銅と云へば經筒キヤウツツなどである。他に佛具の類もあるが、別項に掲げる。日本で古銅器を多く集めて居るのは大阪の住友家などである。

三〇 佛像 趣味の向上は結局上代に溯る。上代に溯ると、佛像の外に物が多く存して居らぬ。佛像道樂ほど高尚のものは無いとも云へるが、多くの金を要する所から俗な人に却つて此の趣味がある。或は推古佛、或は六朝佛、形が大きく且つ名作であると幾萬圓もする。或は金碧燦爛たるもの、或は木地のもの、銅のもの、純金のもの、渡金のもの、乾漆のもの、いろ

いろあつて鎌倉代迄下ると愈々澤山ある。大なるものは多く獲がたく、室内の裝飾にも成り難いから、手頃のものを多く蒐集する。岡田法學博士は支那から六朝佛を多く購ひ得て歸り、其内一基を以て或人の別荘と交換したこともあつた。

三一 佛器 佛像趣味と關聯の道樂は佛具を集めることである。佛像を集めることから自然これに配する者が要る。香爐とか、獨鈷トウコとか、卓、瑤珞、蓮座などの類より袈裟などに至るまで、巨額の金を投じて集める者がある。天平頃のになると、コンナ者でも幾千圓の價のあるものが多い。又數珠の佳品を擇ぶ道樂もある。

三二 古鈴 も古銅器の一種として昔より集めるを趣味とした人が多くある。古く驛鈴と云ふものがあつて、其形にさまざまのがある。甚だ雅味のあるものだ。又神に捧げる鈴、馬につけるもの、子供の腰につけるもの、或は人を呼ぶ爲めのもの、大小形狀さまざまあつて、此の蒐集家は幾百となくもつて居る。本居宣長も此の趣味があつたが、書齋に鈴を吊して居るの屋と名乗つた。

三三 刀劍 は其の附屬品を併せると範圍は甚だ廣い。此の武器は日東の特製品であり、

名作が頗る多く、今日實用に供され難いものもあるが、戰國時代の遺習が今も猶ほ存し、此種の物を寄せ集めることが行はれてゐる。附屬品を多く蒐集した人には和田雲村があり、刀の鑑賞家には今村長賀もあるが、田中光顯伯や犬養木堂翁なども皆斯道の人である。此の道樂をやる人の常として、其の産地や其の作者を判知したいと云ふ慾が自然に生じて来る。それに熱中すると、往々噴飯の事が起る。私の郷里の醫家で淺田決といふがあつた。此の人は刀劍の愛賞家で、暇さへあれば刀劍を鑑賞して夙夜樂んでゐた。往々患者の脈を診しながら、沈思して備前だ相州だというて、患者を失笑せしめた。同じく診察であるとは云へ、心が人を離れてゐるは、如何に名醫でも、その診察はアテになつたものでない。

三四 時計 昔し阿蘭陀から始めて時計が渡つた頃は頗る吾が邦人に喜ばれて貴重物とされ、大名や富豪などは金を惜まず各種の時計を寄せ集めてそれを誇り、且つ娛んだことがある。今は敢て珍らしいものでもないが、既に廢物となつた、古い時代の時計を標本的に寄せ集め、それを材料として時計の歴史を書いたり、或は陳列などして娛んでゐる人もある。これも亦一種の道樂であらう。

三五 量器 古時の枴や分銅や尺を集める道樂がある。枴に年號が刻んであつたり、おもしろい烙印が捺してあつたりして古色蒼然たる味を珍とするので、數寄者は之れを煙草盆などに應用して居る。枴の種類も意外に多くあるもので、變遷の順序で集めた者は學術上の資料ともなる。尺には正倉院の御物を摸したものなどが珍とさるゝ。是にもいろいろの種類がある。此の道樂は學者側に多くあるやうだ。

三六 古裂 古金襴や布類の標本を集めるものがある。幅の表装や茶器の袋などに必要もある所から標本帖が實際必要でもあるが、それ等實用の意味でなくして蒐集する道樂がある。金襴類の外に有職裂と云ふがある。昔しの禮服の裂地を位階等級に従つて蒐集する。又僧服の裂地や能装束の裂地を集める道樂もあり、皆帖に貼りつけ、其名や時代が注されてゐるのが通例だ。亦更紗の裂を道樂に集める人もある。是は無論渡り物を珍とする。殊に古渡りを貴ぶ。古渡り更紗は今では頗る貴重のものとなつて居る。長崎で支那貿易が盛んであつた頃には、土地の藝者は更紗の衣服を着けて三都の藝者を壓したものだ。古渡り更紗の上等となると、長崎藝妓の垢付の衣服や帯でも非常の價を有する。此更紗は極めて雅趣あるもので、「華布便覽」な

どの書物は昔しからあり、應擧がいろいろの意匠を自寫したのも今は版になつて居る位で、此の方面の數寄者は少くない。

三七 革 は袋物に大切な材料である。古金襴などと同じく、中には驚くべき價を有してゐるものもある。正平革などは誰も知つて居る有名なものだ。金唐革と唱へるものは皆渡りもので、此の内には一寸四方幾十圓と云ふ珍物もある。日本では昔し姫路が革の上品を出した。これを集めるのも一つの道樂である。

三八 下け物 といふ内には印籠、烟具がある。それに附屬して緒締があり根付があつて昔しから之に憂き身を窺した好事家が少からずある。印籠は樂器で今は用が廢つたが、今日懐中時計を身邊の裝飾とする如く、印籠を腰邊の裝飾としたから、美術の精を盡した名品が少なくない。其の形態や意匠が千狀萬態で、工藝品の標本ともなるものであるから、これを集める人が各所にある。烟具即ち煙草入、烟管、并に筒に至つては、印籠よりも頻繁に人前に出して使用するものである所から、思ひ／＼に工夫を凝らし、互ひに巧を競つたことは言ふまでもない。時代や男女により又階級により様々のものがあるから、多く集めて見れば興味のあるもの

である。尙ほ此二品に附屬する緒締にも根付にも、それら好みがあつて、緒締には多く貴重  
の珠玉や金銀細工を用ゐる、根付には名工の作を多く珍重した。随つて根付彫といふ一種の工藝  
さへ起つた。

**三九 袋物** 下け物の内に收めた烟草入も袋物の一であるが、その外に紙入や箱セコや財  
布や巾着や奩具入、其他器物の袋など様々あつて、各々贅を盡したものである。往々種々の袋  
物を寄せ集めるものもあるが、概して持用のものに意匠を凝らすことを道樂とした。茶人など  
が名器の袋を作るに精を凝らしたことは亦特別である。昔しの紙入は、男子用では小菊の紙を  
二つに折つて入れ得る程大きなものであつた。その材料は革や金欄や緞子や外國の織物などを  
用ゐる、金具にも金銀の作物などを選んで、烟草入同様贅を盡した。婦人の箱セコも亦同様で頗  
る華麗のものを思ひくゝに作つた。財布は三つに折り、或は二つに折つたのが多く、抵ね軟か  
い革が用ゐられた。併し贅澤屋は古渡りの更紗や唐棧タウザンなどを用ゐて通がつた。巾着も烟草入同  
様種々さまざまの意匠を凝らしたもので、往々意外の形に作つたものがあり、鎧ヤに擬して緘ア  
たものなどもある。如何に人々が精根を凝らしたかは、四五十のコレクションを観ると容易に

うなづかる。茶器の袋になると一段精作を要し、紐の結び方などにも様々の形式があり、茶  
人は精神をこゝに打込んだ。名器となると替袋が要る所から、一つの器物に三つも袋を作るが  
法となつてゐる。乃ち茶器の道樂は取りも直さず袋の道樂であるのだ。

**四〇 衣類** に就ての道樂は勿論廣汎に行はれたが、衣類に附屬するもので、道樂の目的  
とするものがいくらかある。女子に於ては、襟、帶、バチンの類が裝飾の中樞でもあり、嵩に  
もならぬものであるから、道樂は自然これに集中する。男子に於ても羽織の紐や帶が矢張り道  
樂の的となつてゐる。近頃洋風が行はれて、道樂にもおのづから變遷があり、女子に手袋やハ  
ンケチや指輪の道樂が起り、男子には帽子や杖などに道樂が起つて來た。

**四一 手拭履物** 下町邊シタマヘンに行はる、低級趣味がいろ／＼ある中に、手拭、袱紗、風呂敷な  
どを藝人や料理屋などが四季折々に顧客に配る習慣があるので、其意匠や染め方を道樂に苦心  
しそれを自慢とするものがある。又名優や名妓の配り物、或は記念すべき配り物、優れた意匠  
のものを多く集めて樂む道樂もある。地方によつてはおのづから特徴もあつて、多少興味のあ  
るものである。いつぞや京都の八瀬大原並ヤスハラにその近郷の手拭を陳列したのを見たが、郷に依つ

て幾許か特色のあることを感じた。田舎では手拭をかぶることが裝飾となつてゐる。亦盆踊などにも用ゐる所から、意匠も百端である。亦同じく低級の趣味に屬するが、下町の通客には履物を選ぶ道樂がある。その材料の桐の正目（まぎら）を選んだり、其の格好を工夫したり、鼻緒を凝つたりして、多くの價を拂ふことを辭せないものがある。

**四二 雛** 三月の節句に互に雛人形を贈り合ふ事は都下では今もあるが、季節に拘らず、あらゆる雛を集めて興がる人がいくらもある。雛の極めて幼稚時代から、追々製作の進歩した京都産の内裏雛を始めとし、各地方に製する雛の種類は實に澤山ある。附屬品に至つては更に多くあるが、東京では清水晴風といふ人が一生涯これを集めることに没頭した。今は林若樹氏が譲り受けて所藏して居る。

**四三 玩具** これは雛と似た様なものであるが、自から一類をなすほど蒐集家がある。都鄙如何なる地方でも玩具を作らない所はないから、其の種類は實に夥しい。嵯峨人形などは地方産であるけれども、京都に近い爲めに製作が精巧で、今では品によると何百圓の價がある。亡友菊池晚香氏は裸人形ばかり何百と所持してゐた。西洋の人形を集める人も少なくない。是

も亦おもしろみのあるものだ。

**四四 小品** 何に寄らず小品のみを好む道樂がある。此の數寄者の珍とするは豆と名のつく程の小品であつて、茶器でも本でも文房器でも、小なるほど愛する。但し玩具と混じてはならぬ。玩具に小なるものあれど、此道の數寄者はそれを取らぬ。必らずわざと小形に作つたものを取る。此等のものは、同様の大きな物を作るよりも非常に手数のかゝるものである。數寄者の喜ぶ所は即ちそこにあるのだ。

**四五 記念品** 大事件、例へば御即位大典とか戦争とか大震災とか云ふ場合の新聞紙、繪はがき、旅行先から記念にとて何くれとなく其の土地の物産類などを集めるものはいくらもある。殊に外國あたりを漫遊する人の内に、到る處さきくで記念品をあつめ持ち歸る人が多くある。蠻島などでは、いろいろ風俗の相違より、妙なものが多くある。それ等は價の高からぬものであり、何人も一寸面白く思ふ所から、記念にとて大抵の人が持ちかへる。すべて此等は記念物道樂の部に入る。

**四六 阿蘭陀物** 昔ハイカラであつた連中は、外國のものをすべてオランダものと總稱し

て、何でもかでもオランダ物とし云へば興がつて、コップやら織物やら陶器やら金屬類の作品やら繪畫やら書籍やらを愛玩した。今でも文明源流の参考と云ふ様な理窟の下でこれを集めて居る人がある。渡邊脩次郎氏の如きは多くのオランダ物の圖書をあつめて居る。天正頃、スペイン國との交通關係から、色々の物が兎もするとあるが、是等も皆此類に包含されて居る。

**四七** 切支丹物 昔しは禁制で、マリヤの像などは内證に有つことも出来なかつた位であるが、今は當時の切支丹關係の遺品を珍重し蒐集する人が大分多くなつて來た。此等の人は憂身を窶して聖像は勿論、十字架、踏繪、キリシタン版の書物、其他殉教者の記念品などを集めて道樂としてゐる。

**四八** 江戸趣味 此の道樂は此頃に至つてしきりに流行する。江戸時代の風俗も今では歴史的のものとなり、昔有り觸れたものでも、今は珍しく感ぜらるゝものがいくらかもある。例へば當時の看版や千兩箱や行燈や饅頭箱や、其他錦繪や芝居の立看版などの類、實に數限りもないほどあつて、近頃では此の趣味の雜誌も刊行され、陳列會もあちらこちらにある。

**四九** 古材 由緒ある寺や宮や橋などの木片を集めて、家を建てたり或は器物を造つて興

がる人がある。著名な例は松浦武四郎が木片を知人に勸進して、それで一疊敷の書齋を作つた。又同じ道樂を更に大規模にやつた例は、山陰道の宍道湖邊シシヂの豪家で木幡黃雨といふ人の別莊獨樂山莊は史的な古材を集めて作つてゐる。その材は浪華の四天王寺の扉や、隅田川言問コトトヒの古材や、大同年間の出雲の清水寺の古材や、天平、應永、慶長あたりの色々のものを寄せ集めてゐる。尙ほ又千年以上の名刹の木片で、香篋や硯箱などを作つて喜んでゐるものは澤山にある。

**五〇** 竹器 曾ては全國各種の竹幾百種を集めて、書齋の壁に装置した博物館長もあつた。故徳川頼倫侯も竹の蒐集家で、茶筌ばかりでも百種近く集められた。竹器は廣く行はれてゐるから、此方面の採集家は勿論多くある。

**五一** 石 自然石が賣物となつて居るのは世界中日本ばかりだと云ふ。(建築用の石材は別として)支那と日本ほど自然石に興味をもつて居る國は無い。庭石を多く集める人も少なくないが、机上の置物、或は花に配するなどの爲めに眞石マインシを多く集める人もある。或は畸形の石のみを、或は支那の太湖石、靈璧などを集めるもある。随つて此等の石の價は不廉なものである。

**五二** 石燈籠 道樂の部に入る、は妙なものであるが、これが作庭の大切なものであつ



て、茶人は専ら力をこれに罩める。これには種々の好みもあり、時代や作者や形式などにいろいろの注文があつて、製作が甚だ面倒である。自分の氣に喰つた夜燈を寸時も目先から離すまい、と細川幽齋であつたか、旅中にも之を携へたと傳へられてゐる。今も高橋帚庵氏の如き、古來有名な各種の石燈籠を幾十基となく摸製し、樂んだ擧句、護國寺の境内に置いてゐる。氏は此の部類の稀なる道樂者と云ふべきだが、それほどでない例は、寧ろ茶を理解しない方面に相當にあつて、矢鱈に庭園に夜燈を置くために、庭の風致をメチャ／＼にするものもある。

**五三 籠** は各地方に於て産し、各々其特長がある。材料は主として竹であるが、アケビの蔓や其他地方特有の材料を用ゐて、手工に巧拙はあれど概して雅趣がある。其用途は種々で農漁それ／＼に依り變化がある。其手頃の者は都人士に取り上げられて意外に出世し、或は茶室に用ゐられ、或は机邊の塵壺ツツカゴなどに取り立てられる。此道樂をする人も少なくない。支那製の時代ある物となると、頗る高價のものである。

**五四 烟火戲** 今は甚しく衰へたが、昔し盛んであつたものは火戲であつた。夏の兩國橋下は花火の爲めに殷賑を極めた。墨水は游船を以て塞がり、兩國附近の家屋も道路も人を以て

埋まつたものであつた。花火の製造元たる玉屋、鍵屋は今も存して川開きは往々行はれてもゐるが、花火は附近の料理屋、待合などの景氣づけにやる位で、昔しに較べると甚だ貧弱である。蓋し此道の道樂者流が少なくなつたのであらう。兩國の盛時には、諸大名が道樂に花火を打上げた。多分諸藩が勢力の宣傳に競つたものであらう。今日何々デーといふ様に、某夕は鍋島、某夕は前田など、いうて、大衆はその花火を見て優劣を評したものである。亦游船を泛べてゐるものも、今日の様に唯打上がる花火を打詠めて興する計りでなく、玉屋、鍵屋に命じて特に適意のものを打上げさせた。全體人氣を煽る豪快の事であるから、資力あるものは自然これを道樂とし、往々みづから此技を研究もし、工夫もし、意想外の仕掛花火で大衆にアット云はせ、巨資を抛つて快とするものもあつた。

**五五 スポーツ** 洋式遊戯が發展した事は十年以降の偉觀である。ベースボールや、テニスや、水泳や、ランニングや、ボートレースや、スキーが、頗る大規模に行はれて幾萬の觀衆場に充ち、兩國の相撲の株を奪はんとする概がある。國際競技に於ても我邦は引けを取らず、或る競技は世界のレコードを破り、その驚異となつてゐる。随つてこれを興とするものが各所

に起り、遊戯者に聲援を與へ、若くは物質的援助を與へて、外國に出征せしめるに至つた。尙又スポーツの一として競馬も數へねばなるまい。これも近來盛んに行はれ、立派な人を會長として競馬會が起つてゐる。馬券を發行する爲めに益々人氣を煽り、女流までが熱狂してゐる。

**五六 電氣** 電氣道樂とも云ふべきものが追々認めらるゝ。ラヂオの熱心家があることは言ふまでもないが、新しい事を喜ぶ方面には、生活に必要な設備をすべて電氣仕掛とし、燈も爐も火鉢も竈も炬燵も洗濯道具もすべて電氣に頼らんとして、家の構造をそれに適ふやうにしてゐるものがある。これ等も電氣の道樂と云へようか。發明心のある面々は電氣の利用に種々の工夫をして、憂身をやつしてゐる。案外實用になる事が工夫されるといふが、此の道樂は若い人の間になかく廣く行はれてゐる。

**五七 寫眞** 明治以來非常の勢を以て廣汎に行はれ出したものは蓋し寫眞道樂であらう。輕便の寫眞機が益々工夫され、寫眞を適用する區域や事柄が愈々多くなるにつれて、此道樂は幾んど無限に擴がらんとする傾向がある。専門家は寫術に精しいが、寫さるべきもの、選定と趣味に至つては到底素人の寫眞道樂者に及ばない。近年又活動の映畫が流行して、寫眞の爲め

に虹の如き氣を吐き、映畫を味ふ一種の道樂が盛んに行はれ、演劇を壓倒せんとする概がある。

**五八 ポスター** 此言葉の行はれ出したのは近年であるが、ポスター其物は古くから行はれ、之を集める道樂も古くからある。各商鋪の仕切判を押したペーパーを集める道樂は昔しからある。引札や報條を集めるものもあつた。マッチのペーパーを集める道樂も此類に屬する。歐洲大戰に各國で宣傳の爲め發行した、ポスターは夥しいもので、中には名工の手に成つたものもあり、意匠も百端で興味のあるため、道樂にこれを集める人もゐる。芝居の繪看版も亦此類に屬する。

**五九 郵便切手** を弄ぶことは前項と似た道樂である。此切手は世界各國現行の切手の種類だけでも意外に多くあるが、既往に發行されたものとなると愈々數が多く、中には頗る得難い物もある。偽造を防ぐ意匠にも様々あつて、此點は形こそ小なれ紙幣と趣を同じうする。多く世に知られない島嶼などで發行するものなどが抵ね珍とさるゝ。此趣味家の範圍に「郵樂」と云ふ雜誌が出てゐる。

**六〇 納札** 神社佛閣へ參拜の記念に、銘々意匠を凝らし、己れの名をも入れて版にした

札を張ることが今でも俗な範圍に行はれて居るが、此の納札の珍しいものを集める人が古來尠なくない。帝室技藝員の竹内久一氏も此の道樂があり、西洋人でも此の趣味に熱中して、納札博士と紳名を受けた人もある。是も矢張り古い稀な物を珍とする。此事の祖と云はれて居る、天愚孔平の納札は極めて稀なもので、此道の數寄者はこれを得るに腐心する。納札には廣重、北齋などが繪を書いて極彩色にした贅澤なものもある。

六一 繪葉書 外國の繪葉書のみを集める人、郵便に託した者のみを集める人、繪はがきとし云へば何でもかでも集める人等さまざまあつて、一種繪畫の趣味から來た道樂で、絶えず是に没頭して居る者がいくらかもある。決して兒女などの戯れにやる道樂でなく、有髯の人の眞面目に遣つて居る道樂である。

六二 筥 を蒐集する一脈の道樂がある。筥にも頗る種類が多い、ザット列舉して見ると、經箱、茶箱、硯箱、筆箱、香箱、印箱、鏡箱、櫛箱、短冊箱、色紙箱、面箱、鼓箱、菓子箱、狀箱、用捨箱、辨當箱、重箱、饅飩箱、烟草箱、藥籠箱、密棧箱、幅箱等、咄嗟に二十數種位を數へることが出来る。此等の箱は其の用に依つて形式が異なり、製作の意匠は百端で、美術

の粹を盡してゐるものが少なくない。一概に容器と云へば、ボール箱でも濟む様なものだが、それは西洋あたりの風で、日本では箱を裝飾として重んずるから、蒔繪や螺鈿を鏤した名工の作もあり、利齋などの作つた木地のものもある。全體應用の利くものであるから、本來の用が廢つても適當に利用されてゐる。例へば漢方醫の携帯した藥籠スミの如き、又饅飩箱のごときは、今は不用に屬してゐるけれども、其の製作が如何にも精巧である爲めに、さまざまの容器に用ゐられてゐる。元來茶人は多く器物を取扱ふ關係から、箱とは深い緣因があつて、裸の器物の爲めに適當の合はせ箱を搜すのが常であるが、その流を汲み、箱を道樂に寄せ集めてゐるものもある。

六三 墨斗イタテ を集めるのを道樂としてゐる好事家も往々ある。今は鉛筆や萬年筆のやうな輕便のものがあるけれども、昔しは墨斗が必ず腰邊に纏はれた。勿論武家には武家相應、商家には商家に恰當のものがあつた。天正慶長頃の戰國時代には首級を録するに陣中頗る大なるものを用ゐた。柄が一尺三四寸もあり、墨壺もこれに應じて大きなものであつた。商家のものでも魚河岸邊のものは大きなものがある。しかし普通は成るべく輕便を尙び、徳川時代の太平の

天地となつては、コンナ物にも精一杯の技巧を凝らし、印籠や烟具と同じ様に數寄を極めた。勿論其の形式も材料も甚だ多様で、名工の作品も少なからずあるので、精力を此のコレクションに集注する人もある。

**六四 瓢** 千瓢を差し物とした豊太閤は愛瓢家であつたかどうか知らないが、瓢を集める道樂は昔しからある。瓢の持寄り會が往々に催され、各々天狗を競うてゐる。瓢は酒器であるから、酒客に此道樂があらねばならぬ。頼山陽なども愛瓢家で、他人が名瓢を所持して居れば執念く懇望して手に入れねば已まなかつた。勿論大小形状さまざまあつて、最小のものは豆大である。口部、腰邊、底などに種々の註文があり、雁の首のやうに曲がつてゐるのを珍としたりしてゐる。勿論光澤や色がやかましい。瓢も流石に酒客の愛器である丈に、酒を多く入れればしば取替へねば、よい色と光澤が出ない。又佳酒を入れ、ば入れるほど、よい色と光澤を發するなどは、酒客によく似て居る。日本で佳瓢を産する所は熊本であると云ふが、支那産の瓢が重んぜられ、名家手澤の來歴があると、一層珍とせらる。

**六五 盃** の意匠も百端である。陶器あり、金銀あり、漆器あり、又その形貌模様なども

種々で、如何にも多様である。概して形の小なる爲めに、蒐集して陶器の標本とする人が少なく無い。大抵の名人は必らず盃を造つて居るから、作者の標本にもなる。

**六六 扇** に就ては「漫興偶録」に書いたから、爰には解説を省略する。

**六七 團扇** は扇と似た趣味であるが、較ぶ俗な趣味である。これも製産地により、いくらか異なつて居る。大小さまざまあり、大なる者に至つては一人で振り廻はされぬ様なものもある。錦繪のある者、文人風の畫のあるもの、版畫、肉筆、さまざまで、肉筆物には光琳の筆などもあるから、一本幾百圓の價のあるものもある。大阪で日本のあらゆる製産地の團扇を集め、千近く所持して居る人がある。いつか京都の大丸で借り受けて陳列した時に一見した。松浦武四郎は名家を訪問する毎に必らず腰に一本の濫團扇を挿して出かけ、それに書畫を請うた。今それが屏風に張られて保護されてある。随分多い道樂である。

**六八 發掘物** 考古癖で、古墳から掘出すものを蒐集する道樂がある。大抵どこの國でも貴人を葬るには、遺愛の品を棺に納める慣習がある。或は又遺愛の物に擬してさまざまの物を作り、棺中若くは塋域内に埋める慣習もある。埴輪などがそれである。帝者の墳墓となると、

此の品種が頗る多く、生前使用したあらゆるもの、例へば圖書、什器、家屋、車駕の類より、愛寵の宮嬪、鳥、犬などまで摸して塋域に埋めるが、多く陶製で、すべて此等のものを明器メイキといつてゐる。だから古墳を發せば、漢魏、六朝、唐宋の古器がある。日本でも古墳から刀劍、馬具、矢の根、曲玉、管玉、金銀環等、上代のものが掘出され、昔しから考古家に玩ばれてゐる。支那では、久しい間葬具を忌んで玩ばなかつたが、考古家が漁り出してから盛んに市場に出で、各國へ輸出さるゝに至つた。支那では硃が貴ばれて、貴人の屍體には多くの硃が裝填されてゐる。殊に耳、鼻、口、陰部などを硃で塞ぐ慣習がある。鶏卵形の硃などは陰部に裝填するものであるのに、それを知らずにひねくり回して玩んでゐるもの、あるのは可笑しい。朝鮮の古墳には古陶器が多く埋藏されてゐるので、貴人の墳墓は日韓合邦前幾んど掘り盡され、すべてガラ明きになつてゐる。貴重器物や時代の参考になるものが多く出る所から、此の蒐集が道樂となるのも不思議はない。

六九 博物本艸 昔し漢方醫術の隆盛時代に本艸ホンゾウと云つたものが今の所謂博物である。醫家の感化も手傳つたに相違ないが、本艸道樂をやつた人が少なくなかつた。葦葭堂木村巽齋は

最も聞こえてゐる人だが、大名などでは、島津重豪が此道樂で知られてゐるし、富山の領主は賣藥を奨励した丈に、自身も本艸に熱中し、曾て「本草圖彙」を版刻刷行せんため、有名な本艸學者を招き、圖版を作るために一工場を起し、そして出した者は精巧無比のものではあるが、多くの版が出来ない内に火災で工場が焼けた爲めに其の掛りの役人を刑するに至つたといふので、此の圖譜を人殺し圖譜と云うてゐる位、悲惨の記念物となつた。富山侯の道樂の熱狂さが窺はるゝ。全體禽蟲、魚介、礦石などを學術研究に資せん爲め蒐集するは道樂とは言ひ得ないが、敢て研究に意あるにあらず、唯奇を好む所から蒐集につとめた者が昔しは甚だ多かつた。例へば海濱にある好事家は貝を集めることに没頭して、其多きを誇り、其奇を衒つた。それと同じやうに礦物の標本を多く集めて、小仕切りをした重ね箱に納め、産地などを注して大切につたものもある。越後高田の藩老鈴木某が多年熊を殺して其膽の研究を遂げ、一書を著はしたなどは、兎に角研究が主であるから道樂とも言ひ兼ねるやうだが、動もすると一種の道樂と見做されやすい。尙ほ自療のために家庭に種々の藥物が多く貯藏されたことは自分の幼少時代知つてゐる通りで、犀角だの、ウニコオールだの、人蔘ニンジンだの、其他當時名高い賣藥烏犀圓、紫金

錠、奇應丸、熊膽などは大抵家に藏して、急患に用ゐたものだ。これが遂には道樂となつて、各地に名高い賣藥を多く集めて、其の收藏の豊富に誇つたものもある。又阿蘭陀趣味から歐西の藥物を集める道樂もあつた。

七〇 烟草 此の道樂は最も多いから特に注意するまでもない位だ。喫烟家の趣味は向上限りのないものであるから、追々佳品を選ばうになる。甚だ不廉の道樂であるが、到底自製の出来ない程のものである。此の道樂に附屬してパイプやシガレット・ホルダーの佳品や稀物を玩ぶ道樂も自然起つて来る。此道にはなかくの通人がゐる。「烟草禮讚」などの本も出版されてゐるが、所詮は此の道樂の表現に過ぎぬ。烟管や烟包の事は別項に擧げたが、これは西洋趣味に屬するから爰に項を別けて一類とする。

七一 菓子 道樂は餘りに有觸れてゐるが、廣汎に亘る趣味であるから逸する譯にゆかぬ。大體乾菓と蒸菓に分れてゐるが、地方により各々特産があつて、例へば加賀の落雁、越後の越の雪などは乾菓子の關脇位に及第してゐる。東京に多くある菓子舗でも、それ〴〵得意なものがあつて、菓子通は羊羹はどこ、金鰐はどこ、と遠きを厭はず買ひに行くほどの熱が

ある。私の知人で菓子道樂の人がゐるが、菓子研究のため全国に行脚しての實驗によると、羊羹が一番普遍のものだと云うてゐる。此人は菓子の商標を蒐める道樂があつて、それを集める爲めに田舎道を二里も三里も歩くことがあると語つた。追々西洋菓子が盛んになり、日本固有の菓子は段々壓倒さるゝ氣味もある。洋風の菓子もなかく種類が多く、これにのみ偏する道樂者流もある。

七二 珍奇 道樂には珍奇を要求することが多くの場合一條件となつてゐる。併しある一類の趣味に偏しての道樂となると、數量の多きを貪ることになるので、珍奇一點張りといふ譯にゆかない。然るに爰に物の種類に頓着なく珍奇を本位として蒐集する道樂がある。昔し曲亭馬琴一輩の好事家は耽奇會といふを催し、珍奇のものを持寄り、其の記録として「耽奇漫録」といふ書が残つてゐるが、これも此脈を引く道樂である。珍奇は古來好事家の喜ぶ所であるから、寺社などの寶物に假託のものが少からずある。敦盛の青葉の笛だの、辨慶の負うた笈だの、靜御前の舞扇だのといふたぐひは皆此類で、俗衆は貴重書の書畫などに目をくれず、此種のものにのみ目を留めるから、それが呼び物になつてゐる。凡そ珍奇のものは或る範圍を超える

と多くは假託のものである。例へば兼好法師が高の師直の爲めに代筆した艶文とか、大石良雄の祇園遊びに着用した小袖とか、名妓高尾が焚いた伽羅などいふ様なものは、珍奇家は嬉しがるけれども皆質造のものである。併し珍奇は必ずしも此類のみでなく、時代の若いものには假託でなく珍奇とさる、ものもある。例へば定遠、鎮遠の支那軍艦に用ゐた食器とか、日本最初の汽車に彫りつけある製造會社の商標の拓本、旅順の沈没船の材料で作つた器物、幾百萬圓の紙幣を焼いた灰で製した器具や像や、有名な人に投じた爆彈の破片、大バニツクでモラトリウムを行つた折、一夜作りで十一億圓を發行した、片面摺りの二百圓紙幣などの類を珍重するのは皆此道樂に屬する。

**七三 冒険** は學術研究の爲めにするものは道樂とも云へぬが、冒険そのものを趣味とするものがいくらかもある。乃ち先天的に冒険が好きで、人の危むことをやつて興とするものがある。南北兩極の探險を始めとし、不毛の蠻地を跋涉したり、飛行機に乗つたり、猛獸狩をしたり、直立の山嶽に登攀したりすることなどは、壯烈痛快の事として神馳魂飛、亦安危を思ふの違ないものがある。但だ此の趣味はありながら果し得ないのは、探險などは頗る多費を要し、

併せて大規模の設備を要する爲めに制さる、のであるが、追々此の方面の道樂が開拓されつ、あるのは事實である。

**七四 探奇** 人には秘密を知りたがる本能がある。秘密の物が必らずしも奇でないが、秘密にさる、とそれが奇となり、兎もすると探奇の道樂が起る。世の中に秘密となつて内容の知れない者が少なからずある。牢屋、鑛山のドン底、顛狂院、癩病院、潜水夫のみ知る水底、火薬庫、貧民窟、貨幣を作るミント、貨幣を收藏する銀行の地下金庫、アトリエの裸女モデル、乞食生活、昔し大阪に行はれた男女構引の場所ボン屋と云つたやうな所は、其悉くが出入を禁じてゐる處でもないが、容易に入り難い爲めに種々の想像を馳せて、其の秘密を知りたがり、種々の面倒と危険を侵して探るものがある。従軍の冀望を起したり、探偵の眞似をしたりするものも皆探奇道樂の一端であり、各種職業の秘密を知ることとも矢張り同じ脈に屬する。今日は社會問題が重要視され、社會局なども出來、社會の暗黒面が研究さる、やうになつたので、探奇道樂に相當理窟も附いてきた。又這般の道樂で獲た材料を新聞紙が掲載するやうになつたから、此種の道樂者流は凱歌を奏してゐるであらう。

七五 登山 も旅行部類のものであるが、近頃の登山は昔しとは趣を異にして、アルパインストに倣つて、これまで人の登攀を絶対不可能とした、直立の岩壁に攀ち登ることが行はれ出した。それには本場のアルプスに實驗を経た専門家もあつて、宮様までが此の冒険をやるるやうになつた。又雪中高山にスキーを試みることも起つた。山岳登攀は餘程進んで來た。

七六 探勝 昔しから風景鑑賞の素養のある邦人は、交通の便利が開けてから、一層観光旅行が廣く行はれ、觀光團などが各地に組織されて、便利に目的を達し得ることになつた。勿論内地に止まらず、世界各國に踏み出すことも頻繁となつた。併し道樂に旅行を事としてゐるものがある。それは聞さへあれば出かけて歩き、或は温泉廻りをしたり、未だ経過しない處を、遠近を論ぜず、交通の不便に關せず、訪ねることを興としてゐる人がいくらかもある。内地の旅行家には坪谷水哉氏があり、世界の觀光家には志賀重昂氏があつた。

七七 掃墓 名家の墳墓を尋ね廻り隠れた墓を搜索するを以て趣味とする一脈が昔からある。掃墓會といふ様なものが此等の趣味家に由つて起され、互ひに各々の發見を持寄り、交換するやうなことは今でもある。此の趣味に附隨するのは碑面を撫して拓本を取ることである。

これも亦一種の道樂である。

七八 漁撈 は昔しから冷熱なく行はれてゐる道樂である。大公望を氣取つての釣りも行はれてゐるが、投網トアミも盛んである。岩崎久彌男が投網の名人と云はれ、幸田露伴氏は隠れもない釣客である。

七九 狩獵 此道樂は維新後特に盛んになつた。今は蠻地へ出かけて虎や象を狩ることまで行はれて來た。斯様な狩獵は大袈裟の仕掛と多費を要するから、ブルジョアでなければ企てられない。併し狩獵の極致と云つたら此等であらう。皇室には鹿狩といふがあつて、外賓を饗應する一端にも供されてゐるし、獵期になると、何事も差措いて山野に出かけるものが少なからずある。中には一羽の鳥も射當てぬ族ヤカラもあるが、それ等の人に云はせると、興は獲物にあるのでなく、獲物があらうといふ望ホッにあるなど、負け惜しみを云うてゐる。狩獵に伴うて獵犬が必要であるから、随つて獵犬を擇ぶ道樂も勢ひ起る筈である。

八〇 相撲 昔しは各藩の諸侯に相撲道樂があつて、屈竟の力士は抱へられ保護されて、互ひに雄を競つた。今はそれが無くなつていくらか衰運に向つてゐるが、好角道樂は不相變盛



んで、木戸御免に値する熱心家が頗る多い。殊に最近ラヂオを應用して、相撲の取組から其の取口まで仔細に放送することになつて、好角家は居ながら相撲見物をしてゐる思を爲す便利も開けたので、此道樂は益々鼓舞されてゐる。

八一 劇 觀劇が道樂の一であることは言ふまでもないが、劇の趣味からしてそれに關係あるいろ／＼のものを集める道樂が昔しからある。俳優の似顔繪、番附、脚本、評判記、繪看板、衣裳、カヅラ、俳優の墨蹟などの蒐集をやるのがこれである。日本ほど劇の資料に富んでゐる國は世界に無いと云はれてゐる。随つて蒐集の範圍も廣く、數も夥しいものである。早稲田大學で坪内逍遙博士の記念の爲めにと計畫しつゝ、ある演劇博物館は斯道の研究に資せんとするものであるけれども、劇道樂の人には此上ない閱覽場である。

八二 音曲 此の道樂も昔しからある。古いことの多く棄てらるゝ世の中に謠曲が流行して、これを道樂とするものが多く、長唄其他の俗曲が眞面目な士林の間に行はれてゐるのも一奇觀である。一方には西洋音樂が日々に昌つて來て、歐西の大家も時々乗り込み、其演奏はいつも満員の盛況を呈する。活動寫眞には此の奏樂が常に添物となつて入場者に喜ばれ、恰かも

昔し撫箏を上流女子の大切の藝として訓練したやうに、ピアノを彈ずることが相當の階級の女子の大切の藝となつた。

八三 假面 を蒐集する道樂は能の趣味から來てゐる。しかし假面は能に用ゐるものばかりでなく、種々のものがある。手廣く集めるものは、外國のものまでも漁る。能の假面には、新古を問はず多きを食ふものもあり、名作のみを漁るものもある。一時能の廢つた頃、名家の所藏品が二束三文に賣られたこともあつたが、今は不廉な道樂である。勿論假面を趣味とする因縁から、能裝束にまで手を延ばすものもある。

八四 出版 出版された書物を買ひ集める道樂は別に掲げたが、自から書物を出版するのを道樂としてゐるものがある。それは必らずしも賣るを目的とするのではない。娛樂に出版するので、出版其物が趣味であるのだ。昔しから好事家が凝つた本を出版して同人の間に頒つことが行はれてゐるが、乃ちそれは此類に屬するもので、今でも自家の隨筆などを家藏版で折節刷りする人がある。大きな物を愛する人に對抗して皮肉に豆本などを作る人や、公刊の出來ない性質のものを自版で發行して興がるなどは皆此部類に屬し、其物は多く流布はしないが、ヒネ

リ物が往々にしてある。

八五 番附 は芝居と相撲のとが通例であるが、その流行時代には何もかも番附の式に作つたことがある。學者、僧侶、文人、墨客は勿論、藝者、變童、娼妓、私娼、茶屋女に至るまで番附があり、人格のない寺、宮、橋、樹木などにも番附があつて、それ等が相應に玩ばれ、時代を経ると、それらの變遷なども窺はれて興味もある所から、分類的に或は時代順に番附蒐集を道樂とするものが今でも可なりにあるから一類として擧げる。

八六 手工 自からいろいろの物を製作する道樂がある。手づくねで種々の器物を作り、竈に入れて焼くものもあり、大工道具をつかつて箱などを作るものもある。紙捻や竹などで器物を編んで作るものもある。表具屋の仕事で自から營み、表装をするものもある。或は製本をしたり、野版を摺つて界紙を作つたり、或は版木を彫つたりする者もあるが、皆手工道樂で、終日これに没頭し、何寄りの慰としてゐるものがある。今飛行機などを小形に試作するのは矢張り同じ脈から來てゐる。平賀源内の種々な文明的工夫も、恐らく手工道樂の結果であらう。

八七 十二支 に因んだ物を集める道樂が可なり廣く行はれてゐる。これは自分若しくは

家族の生れ年に當る干支の獸類を愛玩するのであつて、馬牛虎兎猿鳥などを何に依らず廣く集めることが一種の道樂となつてゐる。俗説にこれを携帯すれば魔を除けるなど云うて、例へば虎年に生れたものは、其の持物に虎の金具をつけたり虎の根付をつけたりすることが流行つたこともあつた。併し骨董趣味から此道樂をやるものが多く、買物でも圖書でも書畫でも、例へば午年と云へば、あらゆる馬に因んだものを集める。終にはそれに附屬する馬具、馬蹄にも及び、馬に關する詩や歌や療馬の醫書などまでも網羅する。現に巖谷小波氏は午年に生れたもので此道樂を以て聞こえてゐる。千馬の所藏があるので、それを納める厩を作るに、千馬行の詩を詠じたり、自から馬を畫してそれを同好に頒つて建築費を募つたりした。

八八 福神 幸福を祈り長壽を冀ひ富貴を望むの心から、幸ひを齎すと傳へらるゝ七福神を始め高砂の尉姥などの繪畫や器物を寄せ集める道樂もある。七福神の中にも大黒と惠比須が最も人氣があつて、此の二者を蒐集の中心とするものが多い。此の趣味は低級に屬し、下町邊に多くある。オカメの繪畫や玩具などを集めるのも笑門福來の趣意から來るので、迷信の行はるゝ所には御弊を擔ぐ者が多いが、投機を業とするもの、冒險を職とするものに殊に多くあつ

て、此等の範圍に此道樂が行はる、西洋でも幸ひの神と名を命じたピリケン始め種々の玩具がある。福神の蒐集家は此等をも羅致する。

**八九 生殖研究** 淫猥のものを集める道樂は各時代にある。春畫の事は別に擧げたが、此方面にはいろいろのものがある。例へば四ツ目屋に賣つた媚藥や猥器などを始めとして、陰器、陽器に擬した種々の作品、喇嘛の歡喜佛などを集める卑猥の道樂もあつた。それは勿論内密に行はれてゐるのだが、近世性の研究といふが始まつてから、古い傳來の玩具などに學術的見解を附して生殖に關係ありとなし、どれ此れの別なく公然蒐集することになつた。其道の研究家は別として單に道樂とする側には、云ふに忍びないものまでも集めてゐる。

**九〇 遊里物** の蒐集は白粉臭い道樂である。例へば遊女の枕や、髮具や、衣裳や、名妓手澤の品や、其の穿てる木屐や、さし傘に至るまで、すべて花街に用ゐるものを集める道樂を、假りに遊里物道樂と云ふ。

**九一 春畫** 風紀の取締が嚴であるから、表面知れないが、春畫を集める道樂は意外に多くある。古來畫界の名人は必らず此の方面に筆を弄して居るから、珍しい物が澤山ある。昔し

大名で此の道樂をやつたものも相當にあり、故人中上川彦次郎氏は此道の數寄者として評判があつた。堅くるしい意外の人で、内々此の道樂をやつてゐる人が少くない。

**九二 浮世繪** 此の蒐集の道樂は餘りに知れ渡つてゐるから、爰に註するに及ぶまい。此繪も畫の一類であるけれども、手廣く行はれてゐるから、特に一類としたのである。

**九三 勝負事** 社會の或る階級を支配してゐるものは射倖心である。勝負事と云へば何に寄らず熱中するものがある。碁將碁に凝つてあたら時間を潰し、夜深しをするもの、競馬と聽けば百里を遠しとせず、出かけて輸贏を争ふもの、富籤若しくはそれに類似のものに手出しを禁じ得ないもの、株や米穀の相場に精神を勞するもの、等、等、男子に限らず婦人にも少からずあるが、これも亦道樂である。

**九四 惡喰ひ** 喰ひ道樂の内にかもの喰ひ道樂といふがある。毒ありとされてゐる河豚のごとき、其他常に食料にされないものを好んで喰ふのが此の道樂である。兩國橋の一端に昔しからモモンジ屋といふがあつて、種々の獸肉を賣つてゐるが、猿や兎や猪の類は必らずしも常食外れのものともされないが、蛇や鼠や熊蜂などを喰ふのは惡喰ひと云はねばならぬ。今で

は所在蛇を割烹する家もあつて、人に精分をつけるといふので、野球家などは好んで食し、又珍味として道樂に食ふものがいくらかもある。イナゴや蠶の蛹サナギは昔しから田舎で喰ふものであるが、熊蜂や鼠や鳥などを喰ふのは悪喰ひに屬する。此等にはそれ〴〵調理法があり、これを好む人は如何にもうまさうにいうてゐる。此部に屬する著名の例としては大阪動物園の園長林佐市氏を挙げねばならぬ。先頃「食道樂」(雜誌)に就て見ると、氏は園中飼養の動物が斃る、毎に其の肉を喰ひ、其數二百種に及んでると自白し、犀などは五萬圓の價があるから、其の一切りの肉が七十五圓に當ると書いてあつた。

**九五 飲料** 近年都下に激増したものは、カフェー・ハウスである。大震災前には飲料と云へば珈琲、紅茶、ラムネ、サイダー、平野水位に過ぎなかつたが、今は頗る多種で、銀座邊の可なりの店のメニューを見ると、數十種の飲料が行列をしてゐる。夏向のもあれば冬向のもあつて、其の發展に驚かざるを得ない。大體酒を取扱はないが、簡単なランチが取れ、菓子も果物もある。尙ほ酒類を取扱ふビヤ・ハウスも昔しの銘酒屋の如くに殖えて、西洋に於けると同様、東家にビールを傾けて西家にランチを取ることの出来るやうになつた。眞面目なカフ

エーのウエーターは男子であるが、ビヤ・ハウスには女給がある。それが若い人達を惹きつけて、毎夜出かける者が少なくない。眞面目なカフェーへは外人や紳士も立寄るが、女學生、藝妓などが繁々足を運んで一種の道樂となつた。

**九六 飼禽** 小禽を飼養する道樂は、昔しからあつて冷熱が無い。是には流行があつて、ある物が莫迦モカに珍重される。往々所有地まで賣却して禽を購ふものすらある。近年流行のものは十姉妹シシイメと胡錦鳥などである。十姉妹は古く支那から渡つたもので、是まで等閑に附されてゐたが、近年大いに流行し出した。此禽は三寸五六分の身長で、羽色は概ね白で、茶褐色或は柿色の斑がある。相互極めて仲のよい所から此名がある。胡錦鳥は濠洲に産し、近年渡つたものである。これも可愛らしい小禽で、其の最も美麗なるものは頭部が赤で、胸が紫、腹部が純白である。濠洲では此禽の絶えんことを慮つて、輸出を制限してゐるために、一層珍重がられてゐる。此等の小禽は相當の價があるので、其の蕃殖を圖つて家計を補ふものもあるが、趣味本位で飼養するものも少なくない。そして現今小禽道樂のオーソリティーは鷹司公であるといふも一奇だ。公は鷹を司る家筋であるから禽を趣味とするのも偶然でない。公は小禽の視察と研究

で近年世界を漫遊し、獲る所少なくないと云はれてゐる。

**九七 園藝** 是も手廣く行はれてゐる道樂である。家庭經濟の爲めにやるのは必らずしも道樂と云へないが、賣るを目的とせず、娛樂本位でやるのが此筋の道樂である。抵ね大なる邸宅、別荘、田園を有する者に此道樂がある。花卉ばかりでなく、果物も蔬菜も栽培する。そして花卉で多く道樂となるものは菊、朝顔、牡丹、躑躅などいろ／＼あるが、追々西洋花卉が盛んになつて、薔薇、スウキートビー、ダリヤ、フロックス・ドラモンド、チューリップ、アネモネ、百合などが喜ばる、様になり、園藝に一段の殷賑を來し、これに伴うて温室やグリーン・ハウスを要し、道樂は一層濃厚になつた。昔しから此道の道樂者流は儂指に違ないほどあるが、「菊經」の著者として有名であつた水戸支藩の守山侯モリヤマは餘りに菊の道樂に没頭したので、幕府の譴責を受けたこともある。近年では大隈侯が菊の道樂を以てひところ第一人者に數へられたが、それよりも蘭の道樂の方であつた。果樹に就ては田中伯の經營が盛んで、岩淵の別荘地の大部分幾萬坪は果樹園である。

**九八 盆栽** 作庭に要する庭樹に物數寄を凝らすと昔しと異なる所ないが、盆栽に多少

の面目を改めたのは西洋の花卉の盛んに行はる、ことである。それから高山植物の採集道樂が起つて來たり、雜草に興味を有つ人も出來て來た。故徳川頼倫侯は、大磯の別荘に、附近三十里内の雜草を千種も集められた。昔しから風流人に珍とさる、蘭や菊や梅などの類も不相變持てはやさる、が、蘭は取りわけ世界の各種を集めることを道樂としてゐる人がいくらかもある。故大隈侯なども其一人であつた。又時々の流行物に熱中する道樂者流もある。萬年青や萬兩に熱中したごとくに。

**九九 寄席見世物** 寄席に毎夕通うて講談や落語や義太夫、物真似を聴く道樂もあつた。概してコンナ事に興を有つ道樂者流は、聴く計りでは満足せず、みづからやつて見たくなり、往々黑人に近いものも出で、壇に登るまでに至つたものもある。見せものも、曲馬や球乗り、其他洋風の種々新奇のものも行はれてゐるが、昔しは頗る種類が多く、中にはたわいもないものや、猥褻、風紀を紊すものもあつたが、それを婦人子供のみでなく、有鬚の男子までが其の見物を道樂にしたもの、あることは、觀劇を道樂にしたと甚しい違ひはなかつたのである。

**一〇〇 病的道樂** 道樂を數へれば、百に及んでも尙ほ盡きたとは云へぬ。最後に雜類の

一項を設けて、前に洩らしたものを書けばいくらかもあるが、爰に漏らし難いものが一つある。それは私が假りに名づけて病的道樂といふ一種變態のものである。支那日本に癖頭といふ語があるが、其の頭は病的で、西洋で所謂マニヤに當るのである。此のマニヤは軽いのと重いのとある。軽いのは大抵の蒐集家にある。唯軽いから目立たず、蒐集家自身も自覺しない位だが、實はマニヤに罹つてゐるのである。世の中の流行に雷同して一概にそれに倣ふなどもマニヤの作用である事は言ふ迄もない。此の病的作用の甚しいものになると、理性は其働きを失つて、趣味も鑑賞もなく、蒐集が全然盲目的となる。斯くの如き者が所謂癖頭の範疇に入るのだ。さて此種の例は私の知る所では二つある。さる知人の家の婢女に新聞の反故を意んで集める奇癖のあるものがある。其の反故は決して保存を要する意味のあるものでもなく、面白い記事や繪があるでもない。唯新聞とし云へば、斷片と雖も紙屑籠に葬むるを惜んで、必らず拾ひ上げて自分の行李に收める。その女の荷物は、衣類などは幾許もなく、累々たる反故が其の財産となつてゐる。主人が怪んで、何故にそんなものを寄せ集めるかと聞いても、本人も何故かわからん。唯好むからと云ふのみである。甲府の或る富豪の夫人に反物を集める習癖のあるものがある。

聞いた。年々歳々其の買ひ集めるものは夥しいもので、藏に一杯積んである。さてそれを何うするかといふに、敢て仕立て、みづから着るでもなく、これを親族や使用人に頒つでもなく、勿論これを賣るやうのことはない。唯集めて藏に満ちてゐるのを時折見て悦に入つてゐるといふなどは、どう考へても病的の範圍に屬すると思はる。これも一種の道樂であるけれども、斯くの如き極端で變態のものは、或は除外するが妥當であるかも知れぬが、此類のものは世間決して少なくないから、百道樂の末に添附して置く。

## 春城筆語終



市島春城著

# 隨筆春城六種

趣味讀本たると同時に人生哲學

いかさま隨筆、ゴシップ雜文の横行する現代に於て、正に著者の隨筆は卓拔。著者は稀有の人情通、藝苑通、史實通、圖書通、政治通、等々であり而も縦横透徹の見識を語るに圓熟玲瓏の藝術を以てする所、眞に天下獨歩である。銷夏新秋の高級讀物とのみ見るは當らず、就いて無盡の教養、趣味の啓發を享け給へ。

目次大要 (一) 感興深き追憶 (二) 檀窓舊夢談 (三) 圖書その折々 (四) 趣味談採餘 (五) 意外録 (六) 衝口發

大隈侯一言一行 市島春城著

三六判五四〇頁 價 二・三〇  
寫眞版多數入 稅 二二

藝苑一夕話 市島春城著

三六判全九〇〇頁 價各二・三〇  
總布函入美裝 稅 二二

東牛 京込

早稲田大學出版部發行

振替 東大 京阪 一六八 二〇〇

市島春城著

# 春城隨筆

面白い隨筆を讀みたい人は先づ第一に本書を讀め!

讀書界の人氣を沸騰させ、幾萬の讀書子に深い感銘を與へた『隨筆頼山陽』の著者、春城先生が現代隨筆界の最大權威たることはいふ迄もない。事實、著者ほど博覽にして多方面の趣味に通じた者は尠かろう、本書はこの多方面の趣味を最もよく表現したもので、機智縦横、諷諭百出、筆鋒愈冴えて讀者をして酔へるが如くならしめる。眞に天下一品の隨筆集である。

目次大要

上篇 雅俗相半録——婦人の決闘——元祿義舉の隠れた後援者、切支丹珍話、掏摸の著述、金貸し東叡山、縁切寺、以下百十數項。  
下篇 趣味談叢——寺は趣味の淵藪、茶人の趣味教育、反古趣味書簡の區趣味、豆本蒐集談、酒趣百則、以下十數項。

東牛 京込

早稲田大學出版部發行

振替 東大 京阪 一六八 二〇〇



市島春城著

# 隨筆賴山陽

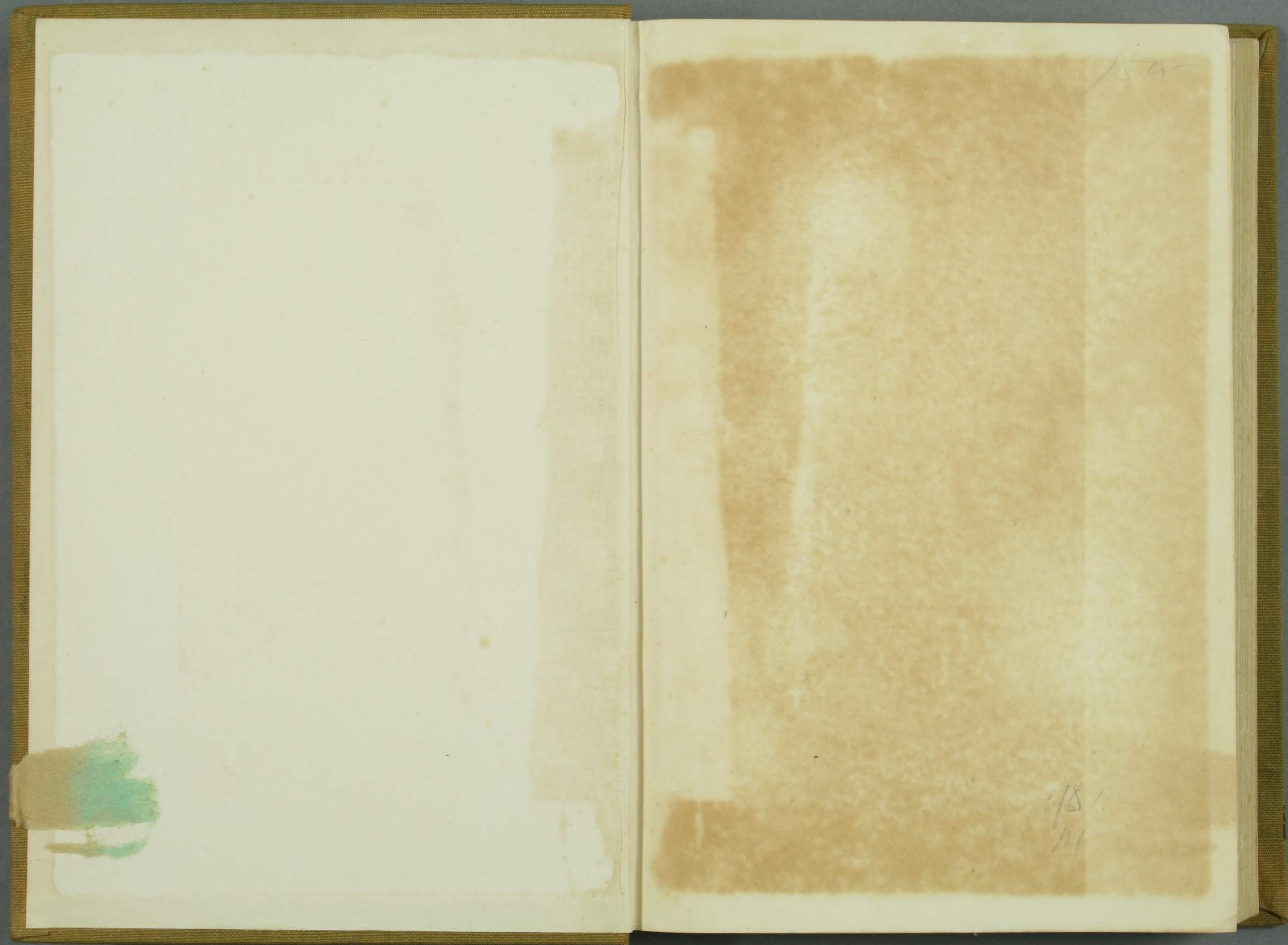
三六判七二〇頁  
口繪多數入美裝  
定價 參圓  
郵稅拾貳錢

## 增訂新版

▼本書は何故、無際限に賣れる？

(一)材料は著者が四拾年間苦心蒐集したもの、而も從來の著述中に漏れた斬新な材料を網羅したこと(二)山陽に對する褒貶的態度を超越して其人間味を赤裸々に表したること(三)隨筆體に面白く描き、どの頁を讀んでも趣味津津たること、などが主なる理由であらう。今回更に新發見の材料に依る記事八十餘頁及珍奇な寫真數葉を添加した。殊に竹田が寫生した山陽竹田對座の圖は山陽の肖像畫として眞に天下一品である。

東京 早稲田大學出版部發行 振替 東京 一六一三  
大阪 六八九〇



159

1/8  
11